熊本県文化財調査報告　第141集

深水谷川遺跡

－広域営農団地農道整備事業にかかる埋蔵文化財の調査－

1994

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第141集

－球磨郡相良村所在－

深水谷川遺跡

－広域営農団地農道整備事業にかかる埋蔵文化財の調査－

1994

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県では、農業の振興をはかるため、以前より広域にわたる農業用道路の整備を進めてきております。球磨郡内においても年々整備を進め、いくつかの路線はすでに完成しているものもあります。

整備事業の進展に伴い、埋蔵文化財包蔵地もその対象となる状況が現れています。本県としましては、文化財保護の立場から、遺跡本来の姿を残す努力に努めてまいっております。しかし、路線変更などの措置がとりえない場合は、やむをえず発掘調査をし、記録保存に留めることになります。この遺跡も諸般の事情からこの措置を取ることになりました。この間、農地整備課、球磨事務所耕地課との協議をもとに調査をすすめました。

その結果、昭和63年度の調査においては、前年度調査の古墳時代前期の住居跡群に続く住居跡を確認し、当地における古墳時代の住居のあり方を解明する手掛りをつかむことができました。また、先土器時代、縄文時代の豊富な遺物、さらには平安時代の掘立柱建物の確認などこの地が、遠い過去から人の居住する豊かな土地であったことを改めて知ることができました。この報告書が文化財の保護と研究の一助となれば幸いです。

最後に、この調査をするに当たり、関係各位・機関におかれましては、快く調査にご協力をいただきました。心から深く感謝の意を表したいと思います。

平成６年３月31日

熊本県教育長　　道　越　　温

例　言

1．本書は、球磨郡広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．熊本県耕地課から依頼を受け、熊本県教育庁文化課が発掘調査を行ったものである。

3．この遺跡は、球磨郡相良村大字深水字谷川に所在する。遺跡名は、その大字と字名から、深水谷川遺跡とした。

4．発掘現場における遺構の実測・写真撮影は、各調査員で行った。遺物の実測は、光永美栄・吉内素子・髙宮京子・坂田和弘が行った。遺構・遺物実測図の製図、遺構・遺物分布図の作成・製図は、瀬丸延子・加来恭子・木下春千代・渕上真由美・森裕子・徳丸郁代・連河由紀が行い、久保田真・山隈誠の協力があった。

5．石材の鑑定は、熊本大学教養部地学教室の髙橋俊正教授に依頼した。

6．本書の執筆は、坂田があたり、一部を古森（第II章第１節）が担当した。

7．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、坂田、古森が担当した。

凡　例

1．本書に示した方位は、全て磁北である。

2．本書に使用したレベル高(L＝)は、球磨事務所耕地課が設置したKBMNo.2（L＝160.463m）を基にしたものである。

3．遺構の深さは、特に断わりがないものは、検出面からの深さである。

4．土器の図については、復元図及び完形の図については、中心線より右に断面及び内部を、左に表面を表現する。復元不可能なもは、断面及び拓本を添えた。

5．石器の図については、基本的に第三角図法を使用した。石器の表現では、磨研された部分は破線で囲み、白抜きで表現した。特に、磨研方向がはっきりするものは、細線で表現した。

本　文　目　次

序文
例言・凡例
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
　第1節　遺跡の位置と地理的環境……1
　第2節　遺跡の歴史的環境……4
第Ⅱ章　調査に至る経緯
　第1節　調査の経緯……7
　第2節　調査の組織……8
第Ⅲ章　調査の経過
　第1節　調査の方法……9
　第2節　調査の経過……9
第Ⅳ章　深水小園遺跡谷川地区の調査の成果
　第1節　調査の概要……13
　第2節　深水小園遺跡谷川地区の層序……14
　第3節　遺構と遺物……14
　第4節　小結……33
第Ⅴ章　深水谷川遺跡の調査の成果
　第1節　遺跡の層序と包含層……34
　第2節　旧石器時代の遺物……36
　第3節　縄文時代の遺構と遺物……36
　第4節　弥生時代の遺物……135
　第5節　古墳時代の遺物……135
　第6節　歴史時代の遺構と遺物……138
　第7節　小結……145
第Ⅵ章　まとめ……146
土器・石器観察表……151

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　道路計画図 …… 7
第３図　調査区位置関係図 …… 9
第４図　小園遺跡遺構配置図 …… 13
第５図　深水小園遺跡谷川地区住居跡配置図 …… 14
第６図　１号住居跡実測図 …… 15
第７図　１号住居跡内出土遺物実測図 …… 16
第８図　２号住居跡実測図（１）…… 18
第９図　２号住居跡実測図（２）…… 19
第10図　２号住居跡内出土遺物実測図（１）…… 20
第11図　２号住居跡内出土遺物実測図（２）…… 21
第12図　２号住居跡内出土遺物実測図（３）…… 22
第13図　２号住居跡内出土遺物実測図（４）…… 23
第14図　２号住居跡内出土遺物実測図（５）…… 24
第15図　２号住居跡内出土遺物実測図（６）…… 25
第16図　２号住居跡内出土遺物実測図（７）…… 26
第17図　２号住居跡内出土遺物実測図（８）…… 27
第18図　２号住居跡内出土遺物実測図（９）…… 27
第19図　４号・５号住居跡実測図 …… 28
第20図　５号住居跡内出土遺物実測図 … 29
第21図　包含層中出土遺物実測図（土器）…… 30
第22図　包含層中出土遺物実測図（石器）…… 31
第23図　包含層中出土遺物実測図（鉄器）…… 32
第24図　深水谷川遺跡土層模式図 …… 34
第25図　深水谷川遺跡遺構配置図（おり込み）…… 37
第26図　旧石器時代石器実測図 …… 36
第27図　縄文土器片集中部実測図（１）…… 39
第28図　縄文土器片集中部実測図（２）…… 39
第29図　１号・２号・３号集石実測図 …… 40
第30図　４号集石実測図 …… 41
第31図　縄文土器実測図（１）…… 43
第32図　縄文土器実測図（２）…… 44
第33図　縄文土器実測図（３）…… 45
第34図　縄文土器実測図（４）…… 46
第35図　縄文土器実測図（５）…… 49
第36図　縄文土器実測図（６）…… 50
第37図　縄文土器実測図（７）…… 52
第38図　縄文土器実測図（８）…… 53
第39図　縄文土器実測図（９）…… 54
第40図　縄文土器実測図（10）…… 55
第41図　縄文土器実測図（11）…… 57
第42図　縄文土器実測図（12）…… 58

第43図　縄文土器実測図（13）…… 59
第44図　縄文土器実測図（14）…… 60
第45図　縄文土器実測図（15）…… 61
第46図　縄文土器実測図（16）…… 62
第47図　縄文土器実測図（17）…… 63
第48図　縄文土器実測図（18）…… 64
第49図　縄文土器実測図（19）…… 65
第50図　縄文土器実測図（20）…… 66
第51図　縄文土器実測図（21）…… 67
第52図　縄文土器実測図（22）…… 70
第53図　土製品実測図 …… 71
第54図　石鏃実測図 …… 72
第55図　磨製石斧実測図 …… 74
第56図　打製石斧実測図（1）…… 76
第57図　打製石斧実測図（2）…… 77
第58図　打製石斧実測図（3）…… 78
第59図　打製石斧実測図（4）…… 79
第60図　打製石斧実測図（5）…… 80
第61図　打製石斧実測図（6）…… 81
第62図　打製石斧実測図（7）…… 82
第63図　打製石斧実測図（8）…… 84
第64図　打製石斧実測図（9）…… 85
第65図　打製石斧実測図（10）…… 86
第66図　打製石斧実測図（11）…… 87
第67図　打製石斧実測図（12）…… 88
第68図　打製石斧実測図（13）…… 89
第69図　打製石斧実測図（14）…… 90
第70図　打製石斧実測図（15）…… 91
第71図　打製石斧実測図（16）…… 92
第72図　磨石実測図（1）…… 94
第73図　磨石実測図（2）…… 95
第74図　磨石実測図（3）…… 96
第75図　磨石実測図（4）…… 97
第76図　磨石実測図（5）…… 98
第77図　磨石実測図（6）…… 99
第78図　石匙実測図 …… 101
第79図　石錐実測図 …… 102
第80図　石核実測図（1）…… 104
第81図　石核実測図（2）…… 105
第82図　石核実測図（3）…… 106
第83図　加工痕のある剝片実測図 …… 108
第84図　使用痕のある剝片
実測図（1）…… 109
第85図　使用痕のある剝片
実測図（2）…… 110
第86図　使用痕のある剝片
実測図（3）…… 111
第87図　使用痕のある剝片
実測図（4）…… 112
第88図　敲石実測図（1）…… 114
第89図　敲石実測図（2）…… 115
第90図　敲石実測図（3）…… 116
第91図　敲石実測図（4）…… 117
第92図　敲石実測図（5）…… 118
第93図　礫器実測図（1）…… 120
第94図　礫器実測図（2）…… 121
第95図　礫器実測図（3）…… 122
第96図　礫器実測図（4）…… 123
第97図　礫器実測図（5）…… 124
第98図　石錘実測図（1）…… 125
第99図　石錘実測図（2）…… 126
第100図　石皿実測図（1）…… 128
第101図　石皿実測図（2）…… 129
第102図　石皿・砥石・台石・不明石器

実測図 …… 130
第103図 石皿実測図（３）…… 131
第104図 その他の石器実測図（１）…… 132
第105図 その他の石器実測図（２）…… 133
第106図 弥生時代及び古墳時代土器
実測図 …… 136
第107図 古墳時代須恵器実測図 …… 137
第108図 １号掘立柱建物跡
実測図（１）…… 139
第109図 １号掘立柱建物跡
実測図（２）…… 140
第110図 平安時代土師器実測図（１）… 141
第111図 平安時代土師器実測図（２）… 142
第112図 平安時代土師器実測図（３）… 143
第113図 青磁実測図 …… 145

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表 …… 3
土器・石器観察表 …… 151

図　版　目　次

PL１　遺跡遠景（南より）
PL２　遺跡遠景（東より）
PL３　深水谷川地区近景（調査前）
PL４　深水谷川地区近景（調査後）
PL５　深水谷川地区調査風景
PL６　深水谷川地区５－Ｂ区縄文土器集中部調査風景
PL７　深水谷川地区５－Ｂ区縄文土器集中部出土状態
PL８　深水谷川地区５－Ｂ区縄文土器集中部出土状態
PL９　深水谷川地区９－Ａ区縄文晩期土器出土状態
PL10　深水谷川地区１号集石出土状態（北より）
PL11　深水谷川地区１号集石出土状態（西より）
PL12　深水谷川地区３号集石出土状態
PL13　深水谷川地区４号集石出土状態
PL14　小園遺跡谷川地区全景（調査後西より）
PL15　小園遺跡谷川地区全景（調査後東より）
PL16　小園遺跡谷川地区１号住居跡遺物出土状態
PL17　小園遺跡谷川地区１号住居跡完掘状態
PL18　小園遺跡谷川地区１号住居跡炉跡検出状況
PL19　小園遺跡谷川地区２号住居跡(調査前)
PL20　小園遺跡谷川地区２号住居跡遺物出土状態
PL21　小園遺跡谷川地区２号住居跡完掘状態
PL22　小園遺跡谷川地区２号住居跡遺物出土状態
PL23　小園遺跡谷川地区２号住居跡遺物出土状態
PL24　小園遺跡谷川地区２号住居跡遺物出土状態
PL25　小園遺跡谷川地区４・５号住居遺物出土状態
PL26　小園遺跡谷川地区４号住居跡完掘状態
PL27　小園遺跡谷川地区５号住居跡完掘状態
PL28　深水谷川地区１号掘立柱建物検出状況
PL29　深水谷川地区１号掘立柱建物完掘状態(東より)
PL30　深水谷川地区１号掘立柱建物完掘状態(南より)

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

遺跡の所在地：熊本県球磨郡相良村大字深水字谷川

熊本県は、阿蘇の大火山を含む九州脊陵山地をその東部に有する。この山地地帯は、祖母・国見・市房などの1700m級の山々が連なる高山地帯である。人吉・球磨地方は、この山地の一角である球磨盆地に中心を置く。

相良村は、その球磨盆地の北西部に位置する。東は多良木町・須恵村・深田村、南は錦町、西は人吉市・山江村、北は五木村に接する。東西約９km、南北約24km の村域を占め、南に狭く北に広い扇形である。

球磨盆地中央には、日本三急流の一つにはいる球磨川が西から東へと流れている。盆地内では、球磨川は、緩やかな流れを見せるが、盆地を抜けると急流の名に恥じず、中部山地の谷間を流れ、八代海へと注ぐ。この球磨川が人吉盆地の地形に大きな影響を与えている。球磨川沿いには、沖積平野が広がり、球磨川の支流である川辺川の下流でもみられる。川辺川は、五木村に流れを発し、谷間の急流となり流れ、南進して相良村の中央を縦断し、錦町との境で球磨川に合流する。相良村は、この川辺川の影響を大きく受けており、この地域の主要河川として大きな役割を担ってきた。

遺跡は、この川辺川が急峻な流れが山間を縫ってきて盆地の中へ入ろうとするところにある。ここは、いわゆる「深水原」といわれる一帯で、川辺川の河岸段丘上として形成されたようである。相良村の中でもかなり広い平坦地を形成する。

次にこの遺跡周辺の地質的な様子を見てみよう。球磨川の北岸では、川辺川の形勢した広大な扇状地がある。また、それ以外に阿蘇の未固結堆積物及び入戸火砕流の堆積物よりなる小起伏丘陵地が発達している。遺跡の位置する付近は、火砕流堆積物よりなる小起伏丘陵地と河岸段丘の境界付近である。

本遺跡では、石器時代の遺物に多量の石器類がある。それらに使用されたのは、黒曜石・安山岩・砂岩・千枚岩などがある。いずれの石材も盆地内で入手が可能なものである。黒曜石は、人吉市桑ノ木鶴と球磨村黒白で、珪岩・安山岩は、人吉盆地の山地地帯やそれに発する河川の礫層・転石中に、また、砂岩・千枚岩なども球磨の山中にみられ、河川の転石にみられるものである。特にこの遺跡で多量に出土した砂岩製の石器類は、川辺川の転石を持ってきたものと思われる。このようにこの遺跡でみられる石器に使用された石材は、球磨郡内で十分供給可能なものばかりである。

遺跡周辺の土壌は、黒ボクである。その下部には、イモゴ層がある。本遺跡内では表層の黒

第１図　周辺遺跡分布図(縮尺２万５千分の１図)

第１表　周辺遺跡地名表

1	深水谷川遺跡	縄晩　平	土器廃棄場　掘立柱建物　昭和63年度県文化課調査
2	俣石遺跡	旧　縄	
3	井沢権現社遺跡	旧	剝片尖頭器
4	狸谷遺跡	旧　縄	
5	鼓ケ峯遺跡	旧　縄　歴	
6	一本松遺跡	旧	
7	天道ケ尾遺跡	旧～歴	
8	湯免遺跡	縄早	条痕文土器
9	新造遺跡	縄	
10	井沢遺跡	縄　弥	
11	大王原遺跡	縄早・中	
12	庚申遺跡	縄	
13	山渋遺跡	縄	
14	鍋ノ平遺跡	縄	
15	段岡Ａ遺跡	縄	
16	段岡Ｂ遺跡	縄	
17	段岡Ｃ遺跡	縄	
18	又ケ野遺跡	縄	
19	中野遺跡	縄	
20	山江中学校遺跡	縄	
21	内角遺跡	縄	
22	東中原遺跡	縄	
23	一丸遺跡	縄	
24	京塚遺跡	縄	
25	屋敷下遺跡	縄	
26	手石方遺跡	縄	
27	長ケ峯遺跡	縄	
28	別府遺跡	縄	
29	塚原遺跡	縄	
30	取越遺跡	縄後・晩	御領式　夜臼式土器出土
31	蓑原遺跡	縄	
32	大丸・藤ノ迫遺跡	旧・縄・弥・歴	
33	石清水遺跡	縄	
34	平家城原跡	縄	
35	十島遺跡	縄	
36	人吉ゴルフクラブ遺跡	縄	
37	三石遺跡	縄・弥	
38	京ケ峯遺跡	縄	
39	一丸遺跡	縄	
40	雨宮遺跡	弥後	弥生後期土器
41	高原遺跡	弥	散布地
42	亀塚遺跡	弥後	弥生後期土器
43	人吉高校校庭遺跡	弥	
44	平家城原跡	弥	
45	石坂古墳群	古	20数基の小円墳散在
46	深水小園遺跡	古中	集落跡　昭和62年度県文化課調査
47	人吉農芸学院地下式板石積石室墳	古	
48	吉野尾古墳	古	数10基の小円墳　消滅
49	瀬戸山古墳群	古	
50	智法寺横穴群	古	
51	城ケ峰横穴群	古	横穴
52	小原横穴	古	横穴（装飾）
53	湯の原古墳群	縄・古	
54	油免古墳群	縄・古	
55	東浦古墳群	縄・古	
56	京塚古墳	古	
57	別府古墳群	古	
58	鬼木古墳	古	
59	覚井古墳	古	
60	陣の内横穴群	古	十島、柳瀬間の道路両側に開口
61	三石横穴群	古	
62	京ケ峰横穴群	古	
63	尾丸横穴群	古	
64	柳瀬の城ケ峰	中	城跡
65	井沢埋蔵銭発見地	中	唐、宗貨銭982枚土師器碗多数
66	尼ケ土手中世屋敷跡	中	屋敷跡
67	尼ケ土手の古塔	中	
68	佐無田の館	中	
69	大村平家城跡	中	
70	平家城原跡	中	
71	蔵城跡	中	
72	七地遺跡	縄・中	
73	高城跡	旧・縄・中	
74	柴五地蔵	近	
75	味園遺跡		
76	原城跡	中	

ボクと混じった分布を示しており、単一の堆積状況にはなかった。そのさらに下層には、シラスが存在しているようであるが、明確な確認はできなかった。それよりもこの付近の段丘堆積物である砂礫が部分的な褶曲によって現れていた。本遺跡でもこの堆積物の層は見られ、集石遺構と混同させられた。

第２節　遺跡の歴史的環境

相良村は、藩政時代には、旧川村が柳瀬・深水・川辺でそれぞれ一村を形成していた。後に旧四浦と合併し、相良村を形成した。深水谷川遺跡の位置する相良村深水の周辺には、多くの遺跡が存在する。ここでは、この遺跡の周辺ならびに球磨郡内の遺跡の分布状況をみていきたい。

相良村には、これまで多くの遺跡が知られ、調査されたものも幾つかある。遺跡は、多くが川辺川に沿って分布する。平地が少ない川辺川の上流でも急斜面を形成する一帯では、どうしてもやや狭いながらも平地を遺跡の立地場所としているようである。

(1)旧石器時代

本遺跡からも旧石器時代と思われる遺物が２点出土している。他に前年度調査の小園遺跡でも１点表採されている。球磨郡内でもこの時代の遺跡は、20ヵ所以上で確認されている。特に近年九州縦貫道の関係で調査されている人吉・山江では、層位的に遺物が捉えられ、旧石器時代の石器文化を考える上で大きな成果をあげている。

(2)縄文時代

本遺跡では、縄文時代の早期・前期・後期・晩期の各時期の遺物が出土している。中でも晩期の土器・石器の出土量は多くこの遺跡の特徴をしめす。

早期の遺跡としては、狸谷遺跡、山村遺跡、山村闇谷遺跡、石清水遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、城馬場遺跡、天道ヶ尾遺跡などがある。狸谷遺跡では、押型文土器の時期の住居跡と石組炉が確認されている。山村闇谷遺跡は山村遺跡などとともに山村台地の上にあり、一帯に多くの遺跡が存在し、山村遺跡群を形成する。ここでは、集石・炉跡とともに円筒土器・押型文土器・塞ノ神式土器などが出土し、この地における早期の生活状況をしるうえで重要な遺跡である。また、大丸・藤ノ迫遺跡では、塞の神式土器が大量に出土し、キャンプサイト的な様相をしめす。この他にも鹿児島系統の土器が出土し、球磨郡と鹿児島地区との関係を考えさせるものである。

前期の遺跡としては、鼓ガ峰遺跡・湯前町米山遺跡などがあるが、全体的に出土点数も少なく、主体的な遺跡としては、まだよく分からない。鼓ヶ峰遺跡では、曾畑式土器・船元式土器が僅かに出土している。湯前町の米山遺跡は、Ⅰ区において、数十点出土している。いずれも遺構などの確認はなく、その性格は不明である。

球磨郡内における縄文時代中期の実態は、まだ不明である。先に挙げた米山遺跡では、阿高系統の土器が数点出土しており、中には完形に近いものもある。しかし、遺跡の中心時期は、後期である。出水式・南福寺式・鐘ケ崎式土器などが出土している。遺構としては、不明土坑のみであった。

続く後晩期の遺跡が、球磨郡内で現在注目を浴び始めている。特に後期の後半から晩期末は、多くの遺物を出土する。立地の上でも興味深い傾向を示している。それは、丘陵地・台地上に位置するものと、その下の低地部分に位置するものである。前者の例としては、天道カ尾遺跡・木上龍口遺跡・大原天子遺跡などがある。後者には、アンモン山遺跡・七地遺跡・中神遺跡などがある。中でも人吉市調査の中神遺跡では、数十軒の円形住居跡、埋め甕、装飾品などが出土し、球磨郡内で始めてこの時期の遺構を確認したことで意義の大きい遺跡である。集落の構成面でも多くの事がつかめている。

(3)弥生時代

弥生時代前期の遺跡は球磨郡内で確認されていない。中期の遺跡も確認されてはいないが、遺物としては、幾つかの場所で確認されている。弥生時代後期になると確認されている遺跡もずっと多くなる。特に免田式土器の遺跡は、この時期の特徴的な土器として郡内でも多く出土している。大丸藤ノ迫遺跡・本目遺跡・荒毛遺跡・夏女遺跡などでも出土している。大丸藤ノ迫遺跡では、竪穴式住居跡が10基ほど、土坑・穴類が確認されている。夏女遺跡では、やはり台地上であるが、数十基の住居跡が確認されている。住居跡は、円形のものと方形のものの２種類があり、いずれにもベッド状の高まりをもつ。弥生時代後期から古墳時代の前期にかけてのものと思われる。出土遺物のうち土器の多様さは、時代の変化のようすを示すものであろう。鏡が２面出土した点でも大きな意義を持つ。

(4)古墳時代

古墳時代における中心は、球磨川の南側である人吉盆地の中央部にある。亀塚古墳群・四塚古墳群・才園古墳群・鬼ノ釜古墳群などの大型の墳丘をもつ古墳が分布するものもその証左である。これに対して、球磨川の北岸には、小型石室墳や横穴などが存在し、そのあり方に大きな差異がある。本遺跡周辺の瀬戸山古墳群・石坂古墳群も小型の石室墳であり、墳丘をあまり持たないものである。また群集墳的な性格を持つものである。瀬戸山古墳群は調査がなされ、多くの鉄器類が出土し、古墳時代の後期前半のものであるとされている。また、石坂古墳群は、現在18基ほどを数えるが、破壊されたものも考えれば数はさらに多くなろう。調査はなされていないが、これも古墳時代後期のものと思われる。

この様な古墳時代の状況の中で、生活跡の調査はまだ数が少ない。人吉市のアンモン山遺跡では、成川式土器を伴った住居跡が確認されている。また、本遺跡の内小園遺跡でも前年度調査の分とあわせて、20基ほどの成川式土器を伴う住居跡が確認されている。須恵器も出土して

いるが、出土点数も少なくまた、住居跡と完全に伴うか分からないが、近接する石坂古墳群との関係を伺わせるものである。この他、同時期と思われるが、城馬場遺跡でも古墳時代の住居跡が2基確認されている。

(5)歴史時代

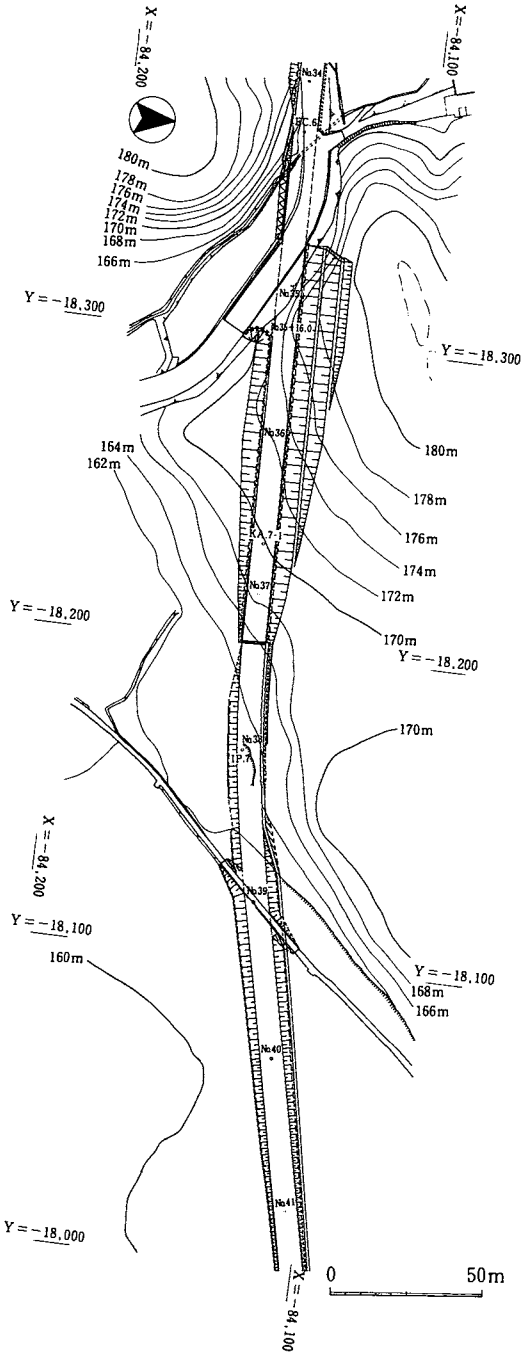
古代においても、やはり現在判明している遺跡の分布から盆地の中央部がその中心であろう。ただ、平安時代にはいると徐々に周辺へと拡大していく傾向がある。荘園などの発展過程においても球磨郡中央部から周辺地域へと広がる傾向がそれを示す。特に寺院などの造営では、有力氏族によるものがあったと思われる。平安時代の研究は、まだ十分進展しているとはいえず、この寺院の造営についてもその成立ちなどは、文献からの史料はほとんど期待できない状況である。ただ、鎌倉期における文献から、前代の寺院造営のあったことを伺うことができる。文献以外には、遺物としての仏像から僅かに平安時代のようすを伺うことができる。その仏像では、天台宗を中心とする山岳仏教がまず浸透してきたような痕跡がある。天台宗の進展を示す物としては、荒田観音堂の保延七年銘の釈迦如来座像がある。その胎内銘に天台僧林与なるものの名が記されている。まだ、この一体のみのことであるため、球磨郡内に天台宗の浸透が真言宗の浸透に先立ってあったということはできない。しかし、これからその証左が発見される可能性はある。

一方、この時期の人々の生活に関係する遺構はまだ確認されていない。しかし、精神活動に関係するような遺構は確認されている。錦町のトビラ山遺跡では、多量の土師器の坏・高台付坏・皿が廃棄された状態で見つかっている。また、天道ガ尾遺跡においても多量の土師器が掘立柱建物に伴って出土している。いずれも調査者により、祭祀に伴うものとの見解がしめされている。遺物の中には、本遺跡出土の土師器に共通するものがみられ、時期と遺跡の性格について示唆を与えるものである。

中世になると史料がそろってくるため、その方面からの歴史は良く分かってくるようになる。しかし、いざ地域の歴史を明らかにしようとすると史料的制約が大きい。この深水地区においても、史料の中に地頭として深水氏の名がみられ、深水の名が登場するが、その生活実態などになると正確なところはつかめない。城郭の調査も球磨郡内は、県下でもかなりなされた状況であり、居館跡の調査も今後なされていけば、この時期の歴史もより明らかになろう。

第II章　調査に至る経緯

第１節　調査の経緯



第２図　道路計画図

昭和53年、農業基盤整備の一環として、広域営農団地農道整備事業が球磨郡内に広く計画された。相良村を南北に貫く今回の農道もその一つである。

文化課では、昭和61年、建設予定地区内についてくまなく踏査と試掘を行った。その結果、大字深水字谷川と小園に縄文時代から中世にかけての遺跡が存在することが判明した。

その後、県農政部、県文化課、相良村関係当局との協議の結果、遺跡の現状保存は現段階では不可能であるとし、工事着工前に緊急発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、本来地元教育委員会が実施することが望ましいが、調査体制が整っていないため、県文化課が国庫補助を受け実施することになった。

字小園地区には古墳時代の集落を中心とした遺跡があり、昭和62年度に発掘調査（未報告）された。今回の調査は、これに引き続いて字谷川地区にある遺跡についての発掘調査である。字谷川地区には遺跡が２ヵ所存在する。１ヵ所は小園遺跡に続いていると考えられる遺跡である。もう１ヵ所はより西側にあり、丘陵の斜面上に位置している。

発掘調査は道路建設がさしせまっていたこともあり、２ヵ所同時に進行することになった。

第２節　調査の組織

〔発掘調査〕

昭和63年度（現地調査）

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　江崎　正（文化課長）

隈　昭志（文化課課長補佐）

松本健郎（文化課調査第一係長）

調査担当　浦田信智（嘱託、現西合志町教育委員会）

坂田和弘（文化財保護主事、現玉名市立玉名中学校）

調査事務　林田敏嗣（文化課課長補佐）

松崎厚生（文化課主幹・経理係長）

上村祐司（文化課主事）　泉野順子（文化課主事）

調査参加者　田頭一義、西和子、上村信子、丸尾栄子、山内孝子、中村三香、溝口クニ子、森口オエカ、中村恵、高田ユリ子、平山妙子、前田筆子、山本せい子、米良和子、阿川きゆき

調査協力者　松舟博満

溝下昌美（湯前町教育委員会）

鶴島俊彦・和田好史（人吉市教育委員会）

原田正史（人吉市文化財保護委員）

相良村役場、相良村教育委員会

球磨事務所耕地課、熊本県耕地建設課

〔整理・報告書作成〕

総　括　隈　昭志（文化課課長補佐、現県立荒尾養護学校校長）

松本健郎（文化課調査第一係長、現文化課主幹・調査第二係長）

島津義昭（文化課主幹・調査第一係長）

担　当　坂田和弘（文化財保護主事、現玉名中学校教諭）

実測担当　坂田和弘　吉内素子（嘱託）　光永美栄（大学生）　高宮京子（大学生）

製図担当　瀬丸延子（臨時職員）　加来恭子（臨時職員）　木下春千代（嘱託）　淵上真由美（臨時職員）　森　裕子（臨時職員）　徳丸郁代（臨時職員）　連河由紀（臨時職員）

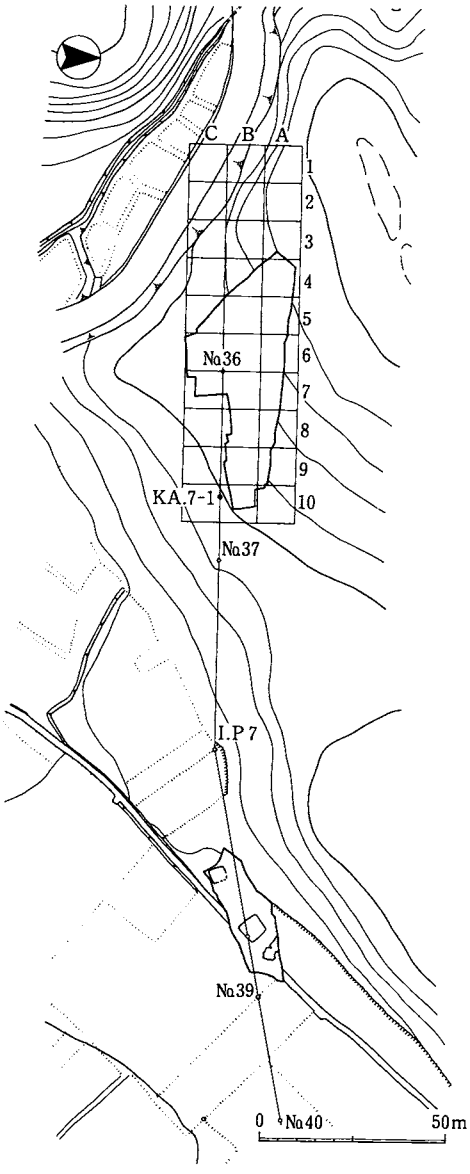
第Ⅲ章　調査の経過

第１節　調査の方法

調査は、試掘調査を通して、２地区になった。そこで、前年度調査との続き方から、東側の丘陵地裾部を深水小園遺跡の谷川地区とし、丘陵地斜面を深水谷川遺跡とした。

深水小園遺跡谷川地区では、前年度との整合性を考え、共通点をもとにグリッド設定をすべきであったが、前年度調査者との連絡がうまくできなかったため、独自に基準点を設け、調査に取り掛かった。その基準点は、道路建設における基準杭であるＩＰ．７を利用した。

深水谷川遺跡では、道路の基準起点となる№６とＫＡ7-1を結ぶ線を東西に延長し、№６の杭を中心として、10m×10mのグリッドを設定し北西側から１～10、北からＡＢＣの順にグリッド番号をふった（第３図）。



第３図　調査区位置関係図

第２節　調査の経過

調査は、昭和63年７月11日に開始した。調査地は樹木の伐採が終わったのみで竹類や草類が繁茂していたため、当初伐採から始まった。まだ暑さ酷しい時期であった。遺物は、伐採作業中にも数多く見られた。

伐採作業の落ち着いた後に、調査区の絞り込みを行うために試掘を行った。その結果、字谷川のうち斜面状の地点に加えて、前年度調査の深水小園遺跡に続く下方の平坦地点も調査地になった。そこで、斜面地の遺跡を「深水谷川遺跡」とし、下方地点を仮に「深水谷川遺跡小園地区」の名で呼んだ。後に「深水谷川遺跡小園地区」の方は、「小園遺跡谷川地区」と名称を変更した。

調査は、調査の日程の関係もあり、この

二つの地区を同時に進行させることにし、「深水谷川遺跡」の方を主に坂田が、「小園遺跡谷川地区」を主に浦田が調査を進めた。

「小園遺跡谷川地区」の調査では、８月９日から重機による表土の除去を行った。除去後の時点で、５軒の竪穴式住居跡を確認した。南側から順に１号から５号までの住居跡番号をふった。このうち２号と３号は、２軒の住居跡の切り合いと捉えた。また、４号と５号は、一部切り合っていた。８月末から、１号の発掘調査に取り掛かった。その結果、１号住居跡は、削平を受け、ほとんど壁面は残っていなかった。２・３号は、当初の予想と異なり、一軒の住居跡であった。遺物の出土量もこの調査区内で一番多く、器種も多様であった。４号と５号住居跡が最後に発掘したものである。共に遺物の出土が少なかった。遺構も小振りのものであった。５号住居跡は、一部が路線内に掛かったものである。出土遺物は少なく、大部分が埋土の上層でみられた。ただ、一点炉跡の中央部に高坏が立った状態で出土した。５号住居跡までの調査を終え、完掘写真を取り、仕上げとした。９月30日までに終了した。

谷川遺跡の調査は、小園遺跡の調査と並行して進めた。遺物の出土する範囲について調査を進め、10cm毎に剝ぎながら遺物の検出に努めた。ここは、調査前は雑木林であったため、伐採していたものの伐根していなかったため樹根が残っており、それを手作業で除去しながら調査を進めた。そのため、調査の進行はかなり遅れた。

〔調査経過概要〕

・雑木、竹林の伐採・焼却（７／11～７／26）
・プレハブ建設（７／22）
・両地区遺跡範囲確認のための試掘（７／27～７／29）

（深水谷川地区）	（小園谷川地区）
・表土剝ぎ（８／１～８／25）	・表土剝ぎ（８／９～８／10）
	・遺構検出（８／10～８／19）
・遺構検出開始（８／25～９／５）	・住居跡発掘開始（８／24～）
・包含層掘り下げ開始（９／６～）	・住居跡実測開始（８／26～）
	・住居跡発掘終了（９／10）
	・住居跡実測終了（９／29）
	・全体仕上げ写真・遺構配置測量図作成 小園地区終了（９／30）
・Ｂ－５区縄文土器集中部及び１～３号集石調査開始（10／19～）	
・各グリッド遺物出土状態調査及びドット図作成開始（10／26～）	

・Ｂ－５区縄文土器集中部実測終了 ・１号掘立建物調査開始(11／30) ・１～３号集石実測終了(12／２) ・１号掘立建物実測開始(12／６) ・１号掘立建物実測終了(12／14) ・人吉新聞取材（月足記者） ・４号集石発掘(12／16) ・４号集石実測終了(12／22) ・各グリッド遺物出土状態調査及びドット図作成終了(12／23) ・プレハブ後かたずけ、機材撤収(12／23) ・全ての図面終了、調査終了(12／24)	

最初から多くの土器片、石器、石片などが出土していた。遺物の出土する層は、あまり締まりがなく、露出させ原位置にとどめたものも僅かな衝撃で移動してしまう事が多かった。条件は、この様にあまりよくなかったが、０層からＩ層へと掘り進めていくに連れて、遺物の出土も増えてきた。出土した遺物は、グリッドごとに平板で点を落としレベルを記入し、取り上げた。その間、移動したと認められた遺物は、一括遺物として取り上げ、出土したグリッドのみを記入した。さらに、遺物はII層、III層へと調査を進めるにつれて遺物は相対的により古いものが出土した。縄文時代前期、早期の土器も確認できた。しかし、傾斜地という条件のなかで、層序の反転も見られ、弥生土器と縄文時代早期の土器が同レベルに出土する状況も見られた。また、いわゆる「風倒木」といわれる横転層が十数カ所で確認され、層位が不明確になる部分も多かった。そのような中で、Ｂ－５区とＢ－６区において土器の集中する部分がみられた。いずれも遺物は、縄文時代晩期のものであった。精査したが掘り込みなどの遺構は確認できなかった。

調査も半ばを過ぎた頃に集石らしきものがＢ－５区に２カ所、Ｂ－６に１カ所確認された。実測し、取り上げると明確な掘り込みはなく、広がり方もやや散漫気味であった。遺物も縄文時代晩期の土器が含まれていた。しかし、最後に確認された４号集石は、明らかな掘り込みをもつもので、石自体も焼けていた。

調査も終盤を迎えた12月に入って、掘立柱建物跡が一棟確認できた。これは、柱の掘方痕跡は一部確認していたものの、その形状からイモ穴と勘違いしていたものである。周囲にあった硬化面を精査していて確認したものである。最終的には、三間×三間の総柱の建物であった。調査初期にすでに多量に出土していた平安時代の土師器が出土したレベルがその整地面であっ

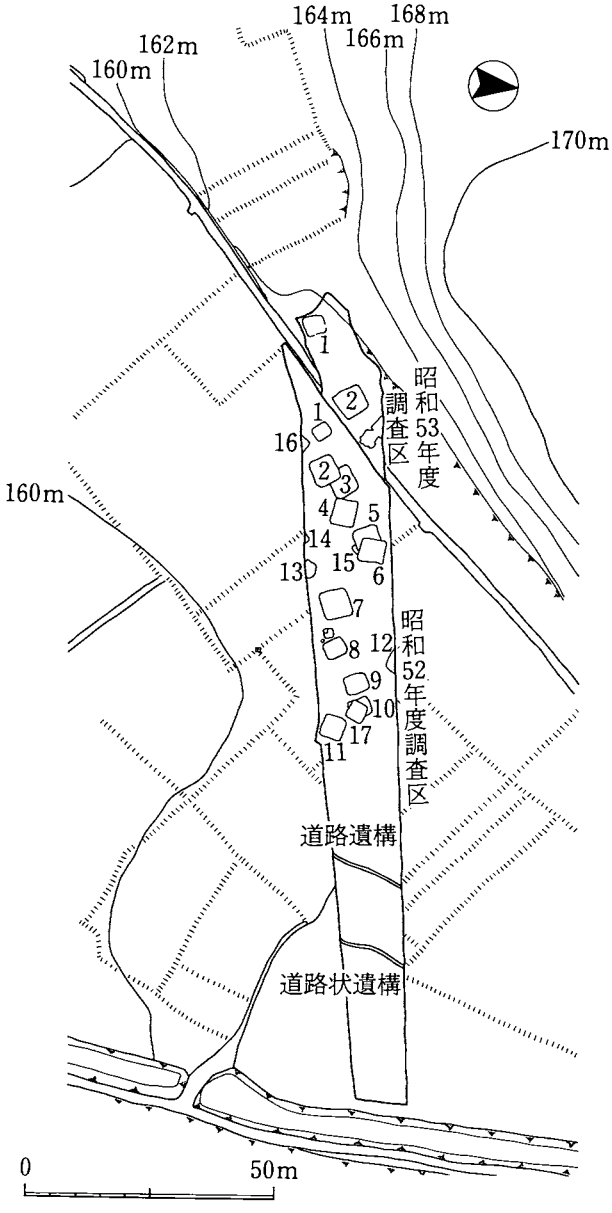
たように思われる。この遺構の写真撮影は高さを十分採ることができず、かなり斜めからのものとなった。

調査は調査区全体を最終的に図化し、遠景写真を撮り終わった。12月24日のことであった。

第Ⅳ章　深水小園遺跡谷川地区の調査の成果

第１節　調査の概要

昭和62年度に同じ広域農道における調査で、深水小園遺跡が調査された。その調査では、古墳時代の17軒の竪穴式住居跡が確認されている。また、中世の道路なども確認されている。昭和63年度の調査即ち今回調査ではその続き部分である。ここでも、住居跡が確認された。時期はほぼ同じであると考えられ、一連の遺跡であるのは間違いない。調査期間中は、字を「小園」と勘違いしていたため、当初は深水谷川遺跡の中の「小園地区」の名称で呼び、深水谷川遺跡の一地区に含めていた。ところが、整理段階で字切り図で再確認すると、この調査地区の字名も「谷川」の中に入るため、「深水小園遺跡の谷川地区」という呼び方に整理の段階で改名した。



第４図　小園遺跡遺構配置図

この調査区は、63年度の調査区には、当初含まれていなかった。前年度調査の際にこの部分にはプレハブの仮設小屋が立てられていたため、今回調査に際して、この部分まで遺跡が広がるか再確認してみた。見たところ丘陵の緩斜面を農地とするため、斜面を削り平らにしたように思われた。しかし、試掘坑を４本入れてみると、そのうちの２本で遺物が出土した。中には、多量の遺物が出土する一方で礫層にあたった部分もあったため、判断しにくかったが、遺構の存在が十分に予想されたので、表土剝ぎを重機で行い、調査を開始した。

この小園遺跡が一連の遺跡である点

を考えれば、前年度62年度の調査と63年度の調査との整合を考えるべきであったが、調査者間の十分な連絡ができなかったため、独自の調査となった。特に前回の調査と対応する基準点が分からなかったのは、遺跡のあり方を考える上では大きな失点である。ただ、前回調査部分と今回調査部分とに掛かる遺構がなかったのは幸いであった。

第２節　深水小園遺跡谷川地区の層序

この地区では、試掘調査を行った段階で大まかな層序は確認していた。調査段階でもさらに層の確認を行っていった。以下、それらの結果を踏まえて層の状態を述べていくことにする。

Ⅰ層　表土。

Ⅱ層　遺物包含層。暗褐色を呈し、小さい砂礫を多く含む。Ⅲ層の崩壊による混入であろう。

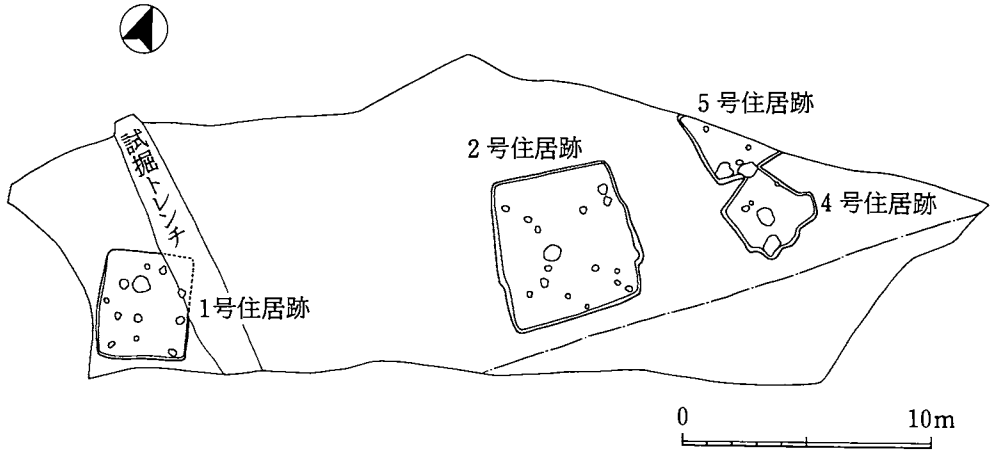
Ⅲ層　地山で、ローム層で暗黄褐色を呈する。部分的にはひどく風化した火山性の砂礫のみの場所もある。このⅢ層は谷川遺跡の方では地山でもかなり下層のほうでみられたものである。

このようにおおまかにとらえたが、部分的には褶曲や「風倒木」による横転層によって下層が上に上がってきたり、斜面の裾であるため上方から流れてきた土砂の堆積による層もあった。

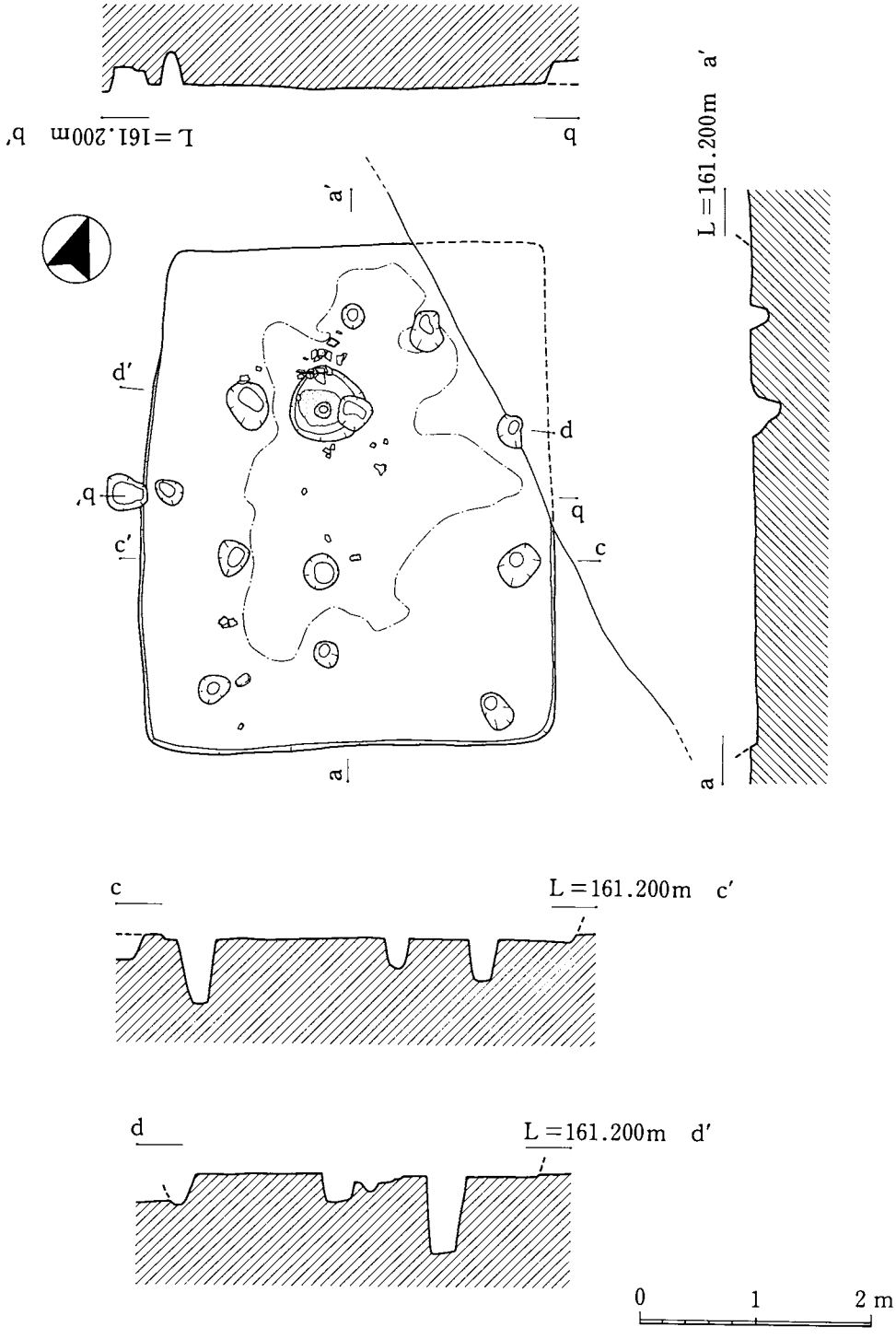
第３節　遺構と遺物

住居跡

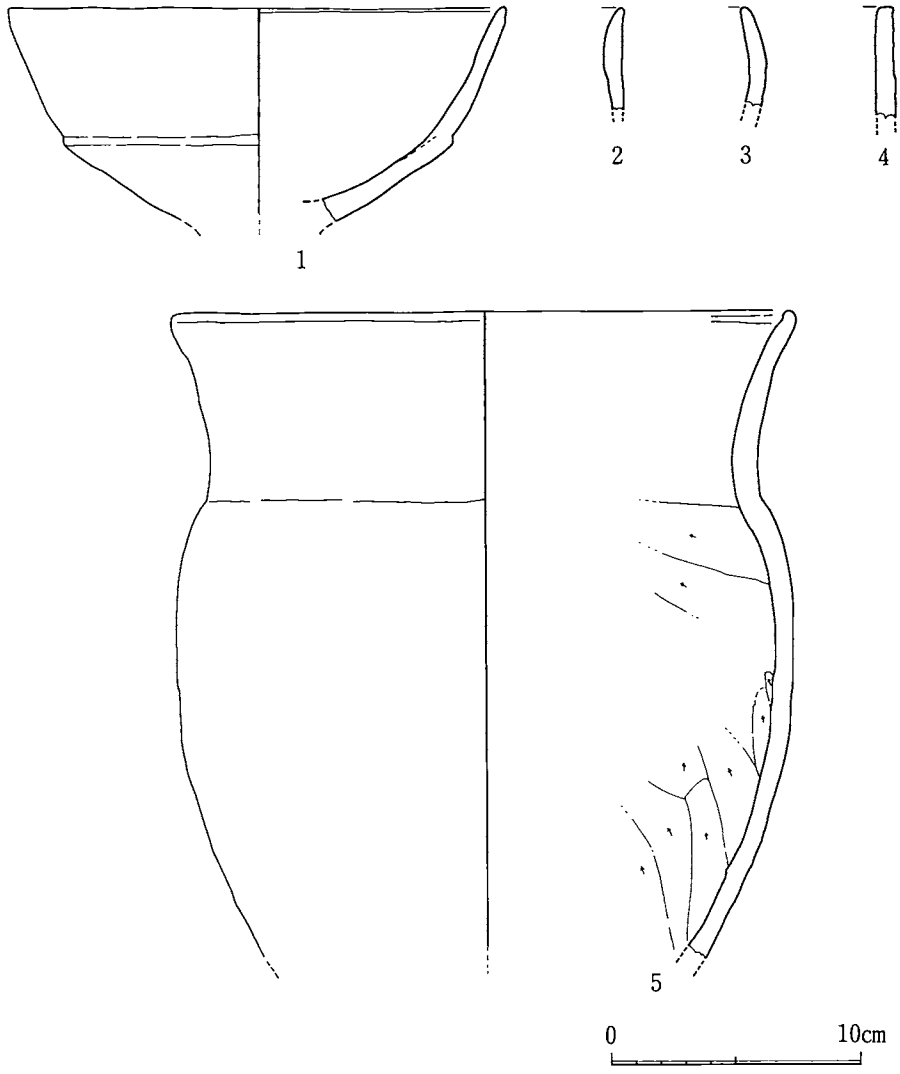
ここでは、４軒の竪穴式住居を確認した。ただ、住居跡番号において２号住居跡を当初２軒の住居跡の切り合い関係と考えたため、番号を２号・３号としてしまった。ところが、その後



第５図　深水小園遺跡谷川地区住居跡配置図



第6図　1号住居跡実測図



第７図　１号住居跡内出土遺物実測図

２軒の住居跡の切り合い関係にあるのではなく、一軒の住居跡であった。そのため、３号住居跡は後に欠番となった。整理段階で住居跡番号の打ち直しをするべきであったが、そのままになっている。そこで、住居跡番号は、１号から５号までとなっているが、実際は４軒である。

では、以下に番号の順に住居跡の概要を述べる。

１号住居跡【第６図】

試掘の際にこの住居跡の一部を掘削し、遺物の出土があったためここまで調査範囲に加えたものである。しかし、包含層と勘違いしていたため、住居跡の隅を一部削平してしまい欠損し

た状態となっている。表土を除去し遺構確認をするため精査したところ、床の硬化面がすでに出ていた。早い時期にかなりの削平を受けていたようで辛うじて壁面の立ち上がりを確認できた。しかし、住居跡のうち北西の丘陵側は削平のため壁はほとんどなく床面もなかった。このため住居跡の範囲は、ある程度想定の域をでない。南側は、僅かに壁が残り、埋土も認められた。埋土は暗褐色を呈し、カーボンを多く含んでいた。分層は不可能であった。また、遺物もわずかであった。

規模は、長軸が4.35m、短軸が3.64mで隅丸長方形を呈する。立上りは、先にも述べたようにほとんどない。主柱は、これに伴うと思われるものは、はっきりとしなかった。炉が、住居跡の中央よりもやや北よりに設けられていた。深さ17cmほどの掘りこみがあり、中に焼土が認められた。住居跡中央部には、硬化面が炉を取り巻くように広がり、硬く締まっていた。

出土遺物

遺物は、かなり削平を受けていたため出土点数が少ない。そのため、図化できる遺物も少ない。

高坏【第７図１】

図化したものは、高坏の坏部のみである。口径19.8cmを測り、体部に明瞭な稜線をもつ。断面観察によると、その稜線のある部分に繋ぎ目があり、坏部底と口縁部の組み合わせによるものと思われる。脚部は、欠け方からこれに接合されている。外にも数点の高坏の一部とみられるものがあった。内器面、外器面共にナデによる調整が施されている。

埦【第７図２・３・４】

ごく一部の破片であり、全体は分からない。やや内傾するもの（２・３）と、直になるもの（４）に分けられそうである。

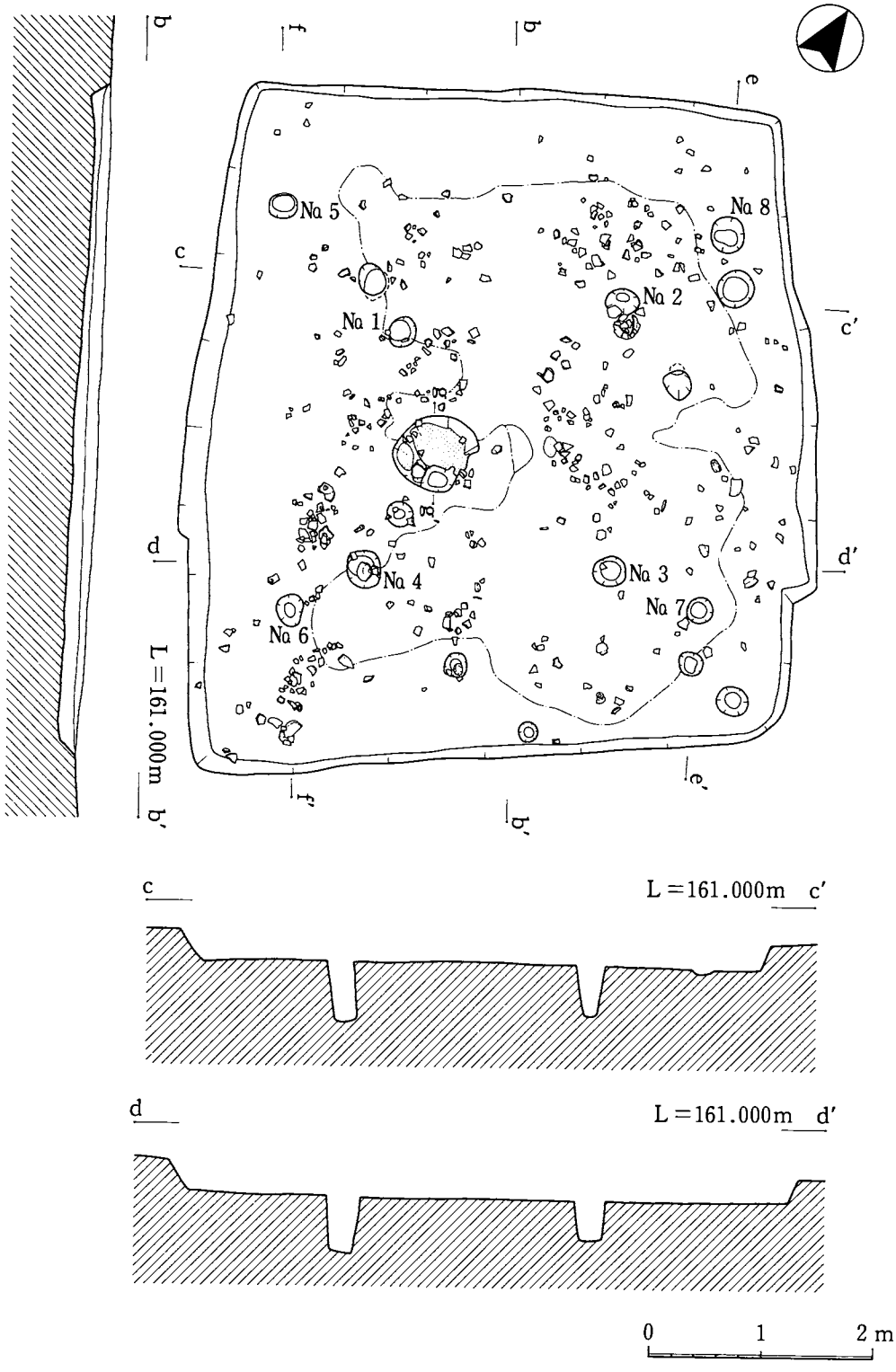
甕【第７図５】

図上復元により、ほぼ全体の３分の２ほどがわかる。口径が25cmを測り、口唇が丸く体部よりも広がる。頸部までの長さが 7.5cmあり、頸部でかなり窄まる。頸部の直下で急にふくらみ、そこが体部の最大径となる。あとは、緩やかに底部へ向けて窄まっていく。底部の形状は不明であるが、丸底と思われる。外器面は、ナデによる調整が施される。内器面は、口縁部がナデで、体部は、縦方向のケズリがなされている。

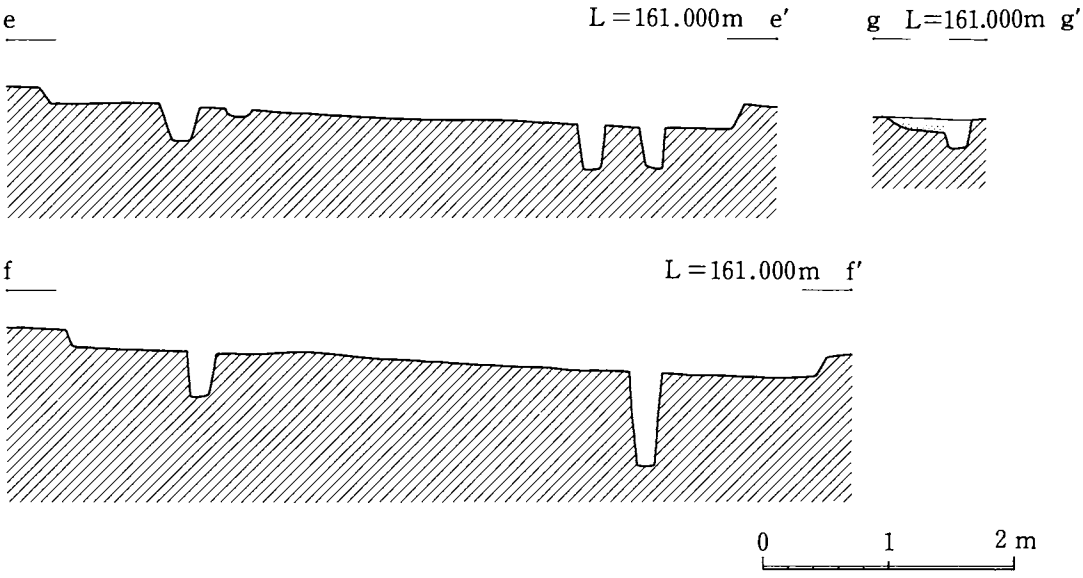
２号住居跡【第８図・第９図】

この住居跡は、先にも述べたように当初２軒の住居跡の切り合いと捉えたため番号を２・３号住居跡とした。調査の結果、床の硬化面に途切れる部分がなく一面に広がることや炉跡がほぼ中央部に一ヵ所であること、柱穴は４本で確実におさえられることなどから、一軒の住居跡と断定した。そこで住居跡番号も２号住居跡のみとした。

この住居跡内には多量の遺物が流入した状況で出土した。多量の遺物は、出土状況より、住



第８図　２号住居跡実測図(1)



第９図　２号住居跡実測図(2)

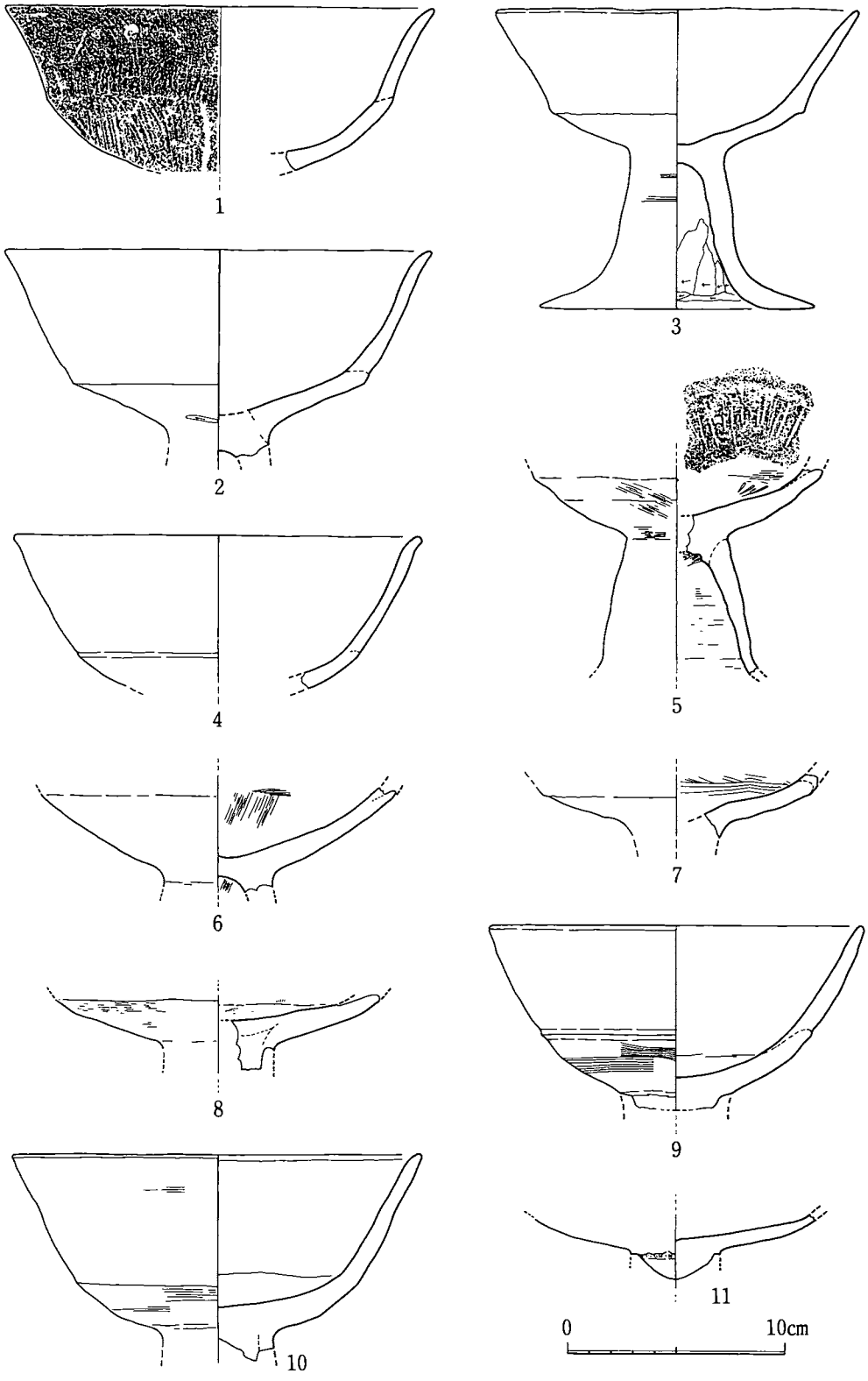
居跡内に廃棄したものに加えて、流入したものも多かったようである。というのは、遺跡のあるこの地点には、礫層が露出したところであり、その礫がかなり埋土中に混入していたためである。また、遺物も完形に近く復元できる物が出土量に比べて少なく、破片の大きさも小さく摩耗したものもあった。

住居跡の規模は、長辺が5.62～6.24m、短辺が4.86～5.66m、床からの立上りの深さが22cmであった。平面形はやや不定形である。中央に径約70cmほどの焼土の詰まった深さ10cmほどの掘り込みがあり、これがこの住居跡の炉穴と思われる。ピットはいくつか確認されるが、No.１、No.２、No.３、No.４の４本が主柱穴かと考えられるが、No.５、No.６、No.７、No.８も並び方が似通うため、主柱穴かそれの補助かとも考えられる。また、住居跡自体を拡張した際に新たに立て直した可能性もある。炉跡の埋土は、暗褐色でカーボン粒、焼土粒を含む。硬化面内にも焼土が見られたが、踏み固められて堅く硬化していた。おそらく炉跡内の焼土を取り出したものの、屋外に出さずにそのままにしていたため踏まれたものであろう。

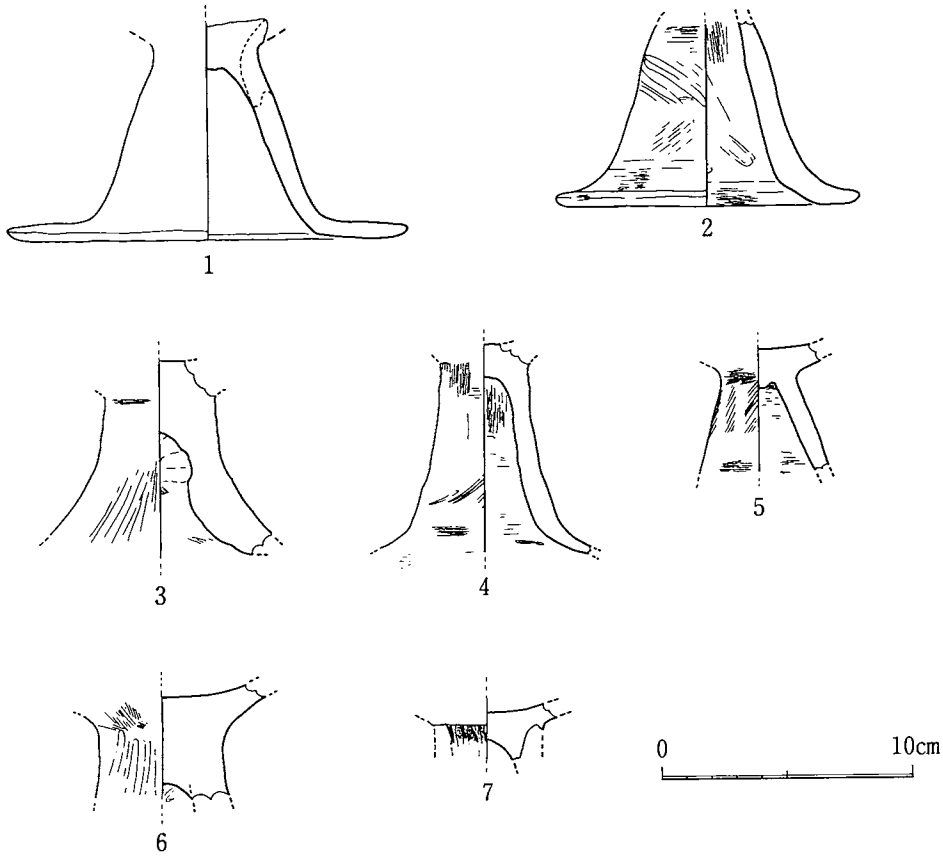
出土遺物

高坏【第10図・第11図】

出土しているのは、３０点以上であるが、図化したのはそのうちの１８点である。破損状況と断面の観察により、坏部と脚部は別々に作られ、接合されたものと思われる。坏部の形態は、大きく２種に分けられる。坏部が接合部を境として屈曲の度合の強いもの（第10図１・２・３・４・５）と、やや曖昧なもの（第10図９・10・11）である。どちらも接合部に稜線は残るが、



第10図　2号住居跡内出土遺物実測図(1)

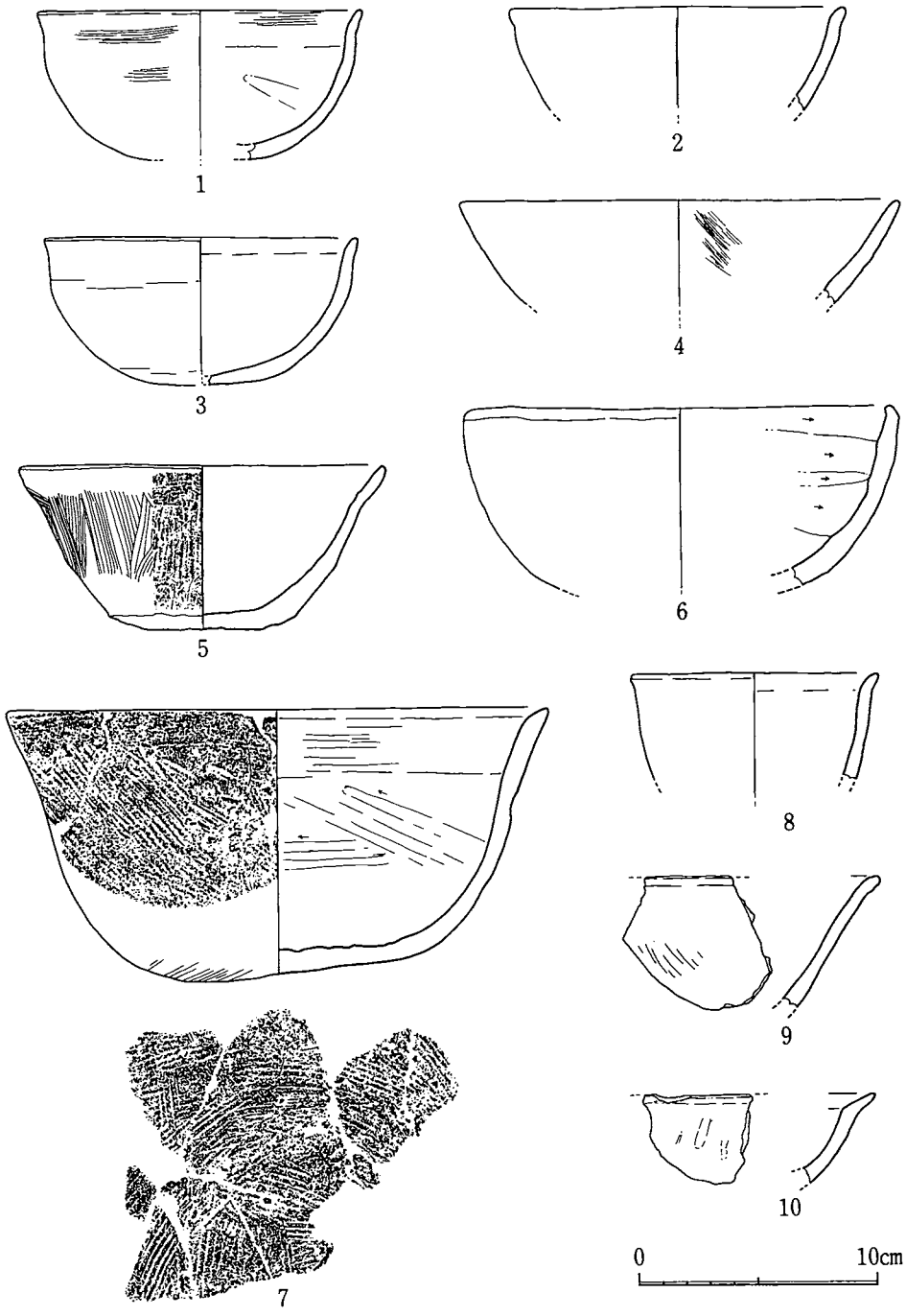


第11図　２号住居跡内出土遺物実測図(2)

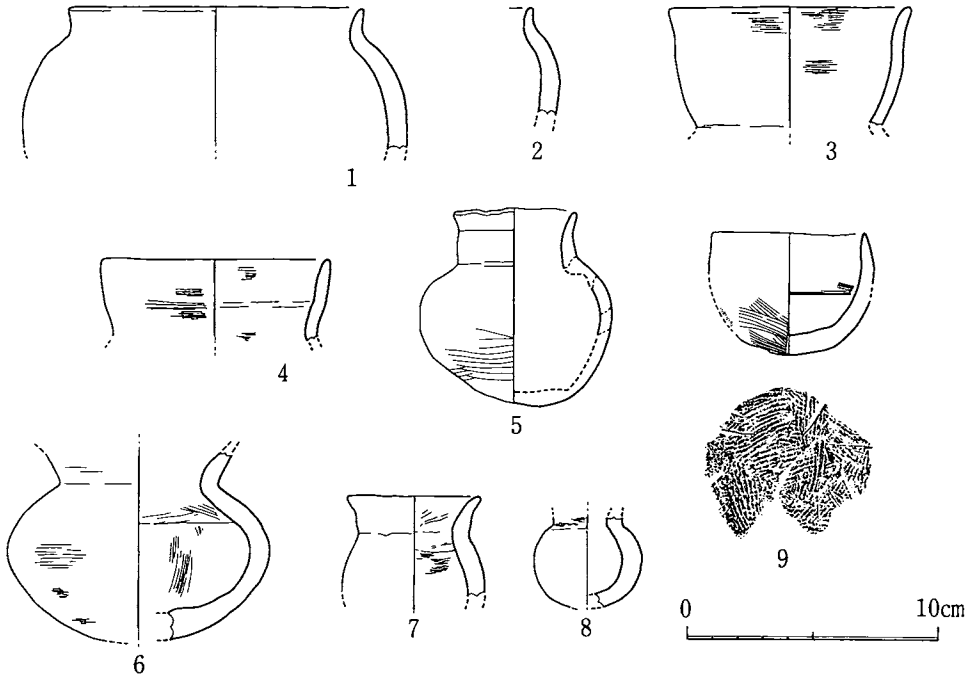
屈曲の度合が異なり、坏部の深さの差となって表れる。脚部は、残っているものが少ないので形態がはっきりしないので、明確ではないが接地部分が非常に平たくなるもの（第11図１）と、あまり屈曲せず接地が少ないもの（第11図２）とに分けられそうである。この脚部と坏部の組み合わせは、完形になるものが少ないので明確ではないが、完形出土の一点（第10図３）をみると、坏部の屈曲の大きいものが、脚部の屈曲のやや大きいものと組み合わさっている。

椀【第12図・第13図９】

１～３は、口径が約13～14cm、高さが約６cmのもので口縁でやや窄まり弱い屈曲から外へ開く。４は、高さは不明であるが、口径が18cmでかなり外に開くもので、椀というより、坏を思わせるものである。５は、口径が15cm、高さが約７cmのもので底部から口縁に向けて直線的に伸び、口縁付近で外に屈曲し、広く開くものである。６は、高さは不明、口径が18cmのもので、内部をケズリによる調節を施し、やや胴が張り、口縁が内側に入り込む。この土器は鉢の形態に近い。次に７は、口径が23cm、高さが約11cmのもので外器面はハケによる調整、内器面はナデとハケによる調整である。口縁付近で外に反るものである。８は口縁が10cmの



第12図　2号住居跡内出土遺物実測図(3)



第13図　２号住居跡内出土遺物実測図（4）

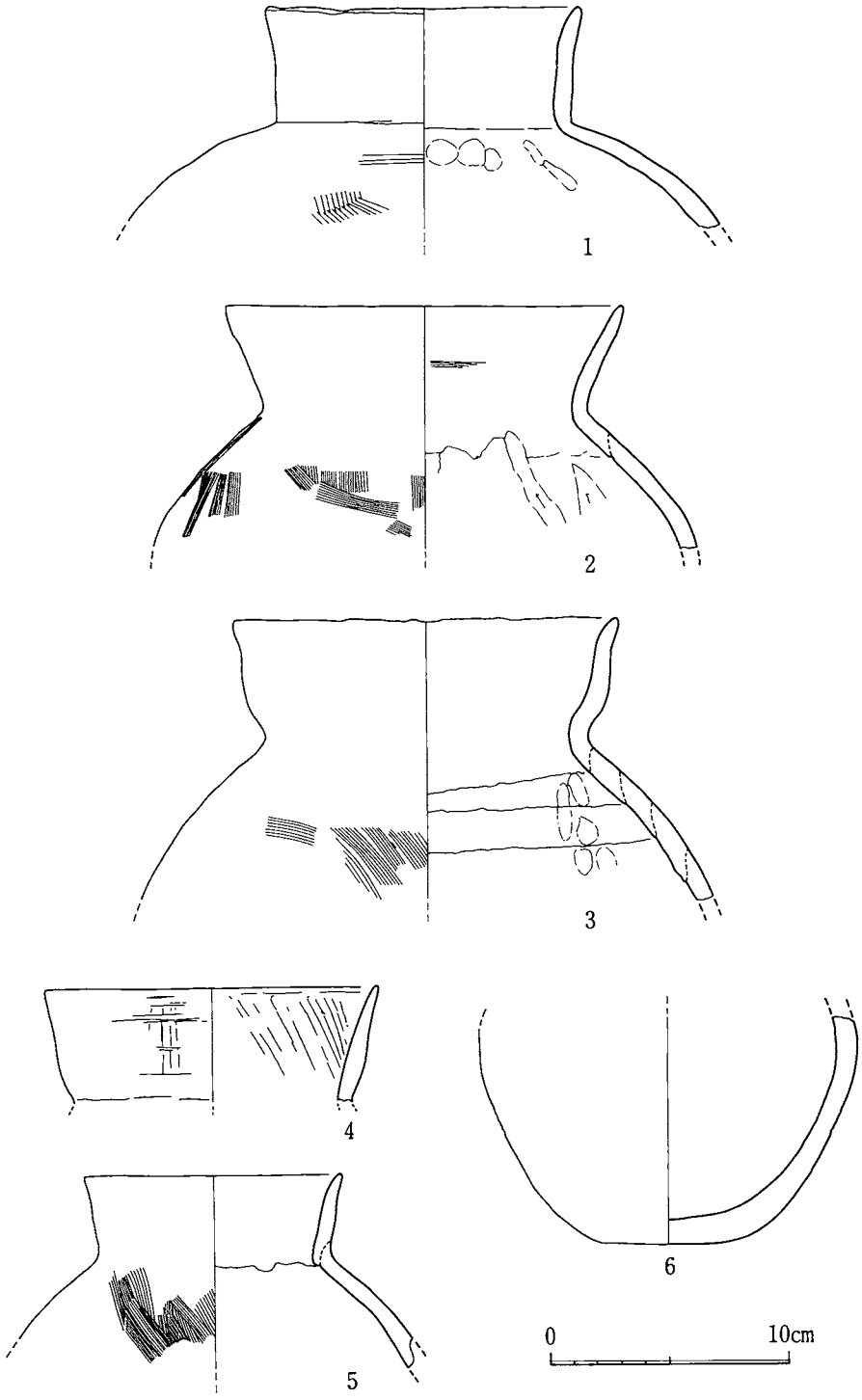
もので、高さは不明である。口縁付近で弱い屈曲があり外反する。９・10は破片のためよく分からない。第13図の９は、小型のもので椀の中に入れたが、盃様の使用があったものかもしれない。

小型壺【第13図１～８】

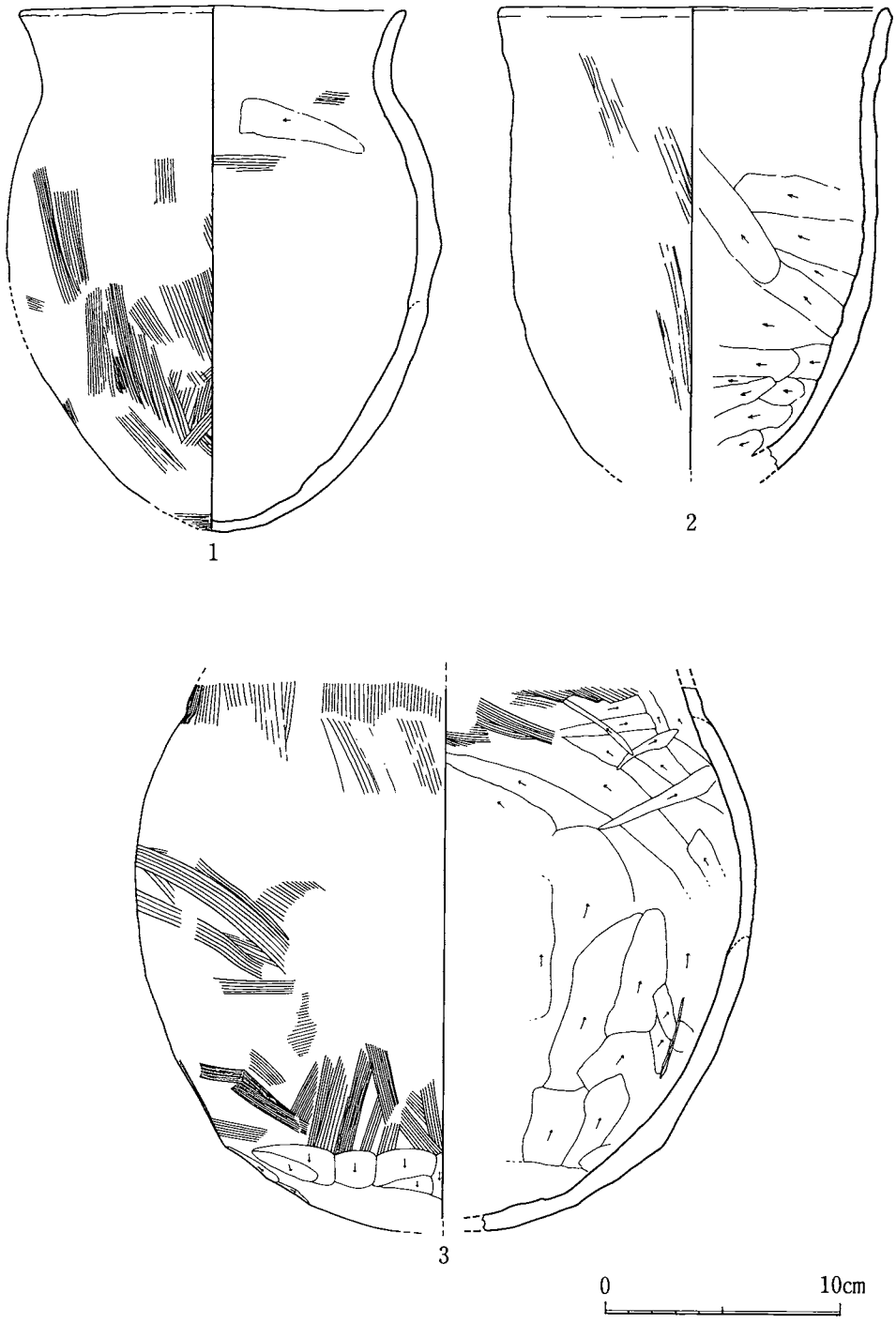
１・２は、頸部から口縁部までが約１cmほどの短頸壷である。３・４は、弱い二重口縁の壷で、口径は約９cmほどを計る。５は、完形品で口径約５cm、高さ８cmの小型壷である。６は、口縁と底部が欠けているため全体は不明であるが、口が広く開くもののようである。７・８は、いわゆる「小型の手捏ね」土器である。７は壷というより甕に含まれるかもしれない。口径5.3cmを計る。８は５に似たものであろうか。

壺【第14図・第16図１～５】

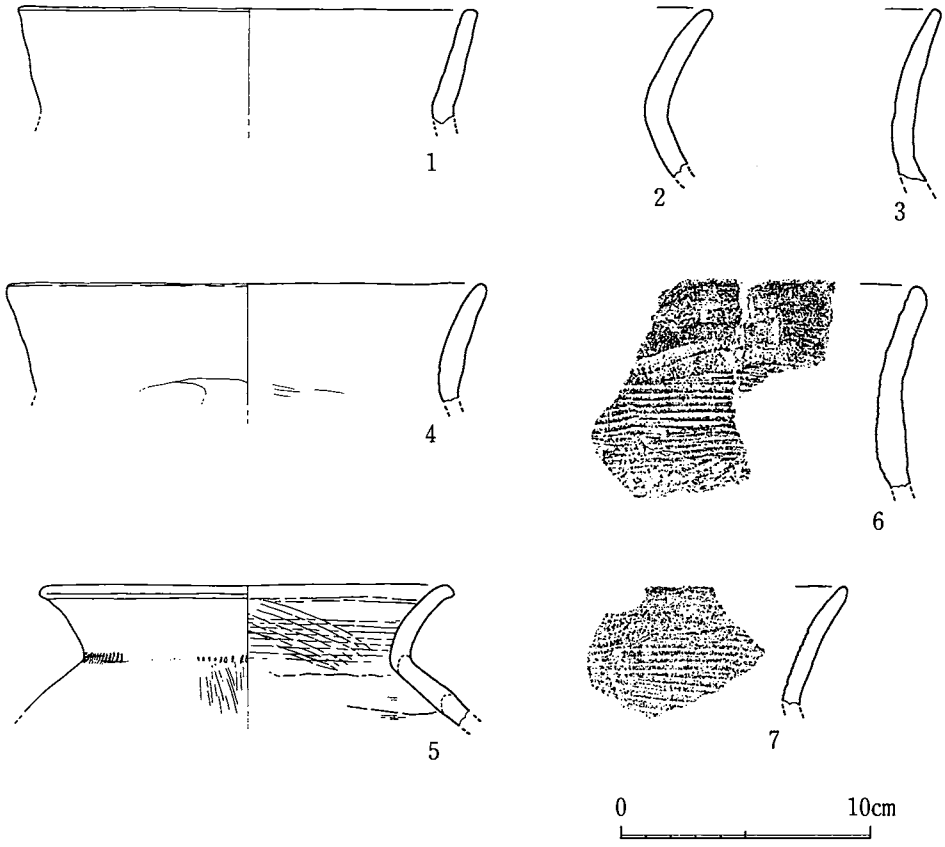
完形のものがないため、全体的な特徴は分からない。口縁部では、二重口縁を意識した緩やかな屈曲のあるもの（第14図１・３・４）と、直線的なもの（第14図２・５、第16図１～５）がある。外器面は、ハケによる調整を施した後にナデを行っている。内器面は、縦方向のケズリが明らかに残るもの（第14図２）とナデによりケズリの不明瞭なもの（１・３）の二つに分かれる。底部は、平底気味の丸底が多い。



第14図　2号住居跡内出土遺物実測図(5)



第15図　２号住居跡内出土遺物実測図(6)



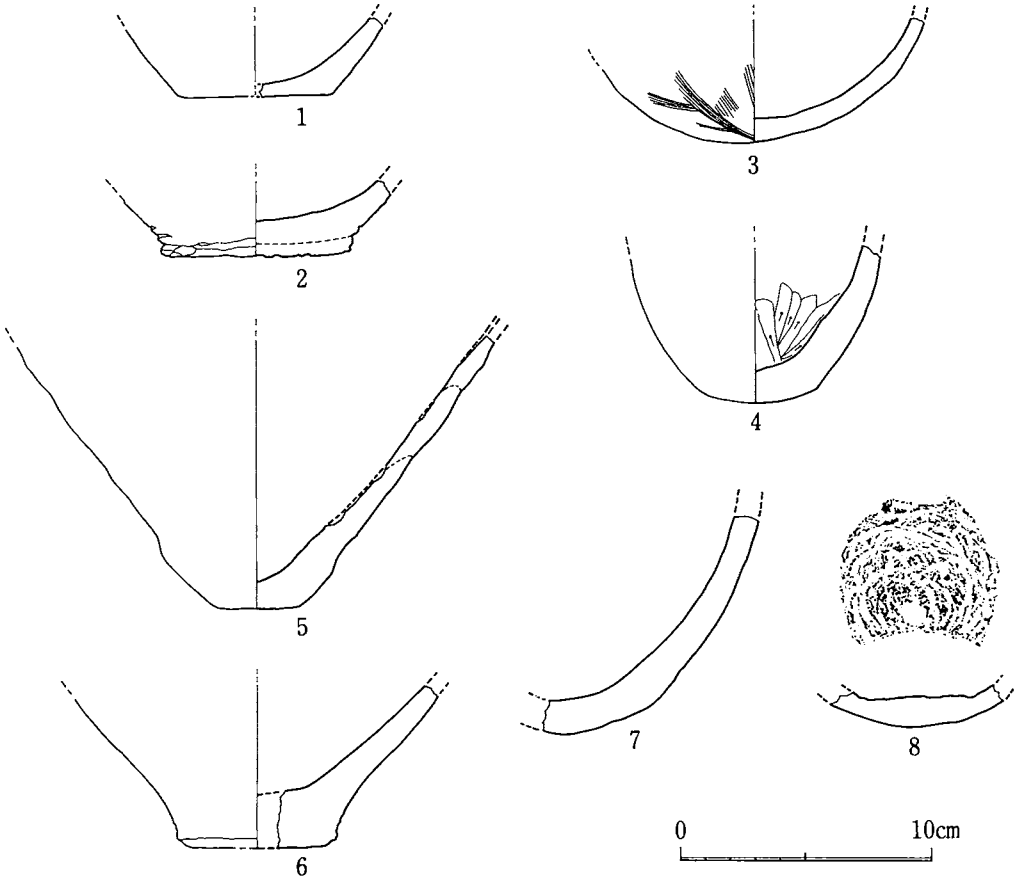
第16図　2号住居跡内出土遺物実測図(7)

甕【第16図6・7、第15図】

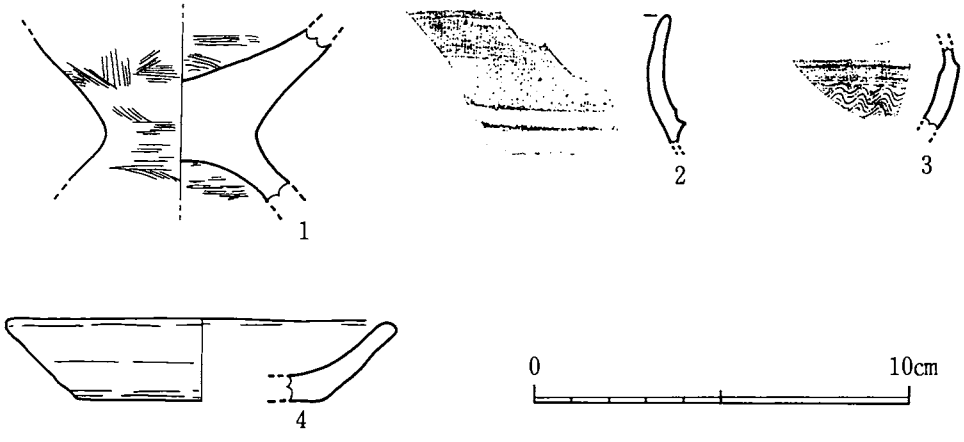
大きくは2種ある。口縁部の屈曲が明瞭であるもの（第16図7・第15図1）と不明瞭なもの（第16図6・第15図2）である。完形になるものは少ないが、内器面のケズリのはっきりするもの（第15図2・3）とナデによりはっきりわからないもの（第15図1）がある。外器面は、ハケによる調整が残るもの（第15図1・3）とナデにより部分的に消されているもの（第15図2）がある。底部は、平底かやや平底気味の丸底である。ただ、1例においては、底部外器面にケズリを施すもの（第15図3）がある。

その他【第17図・第18図】

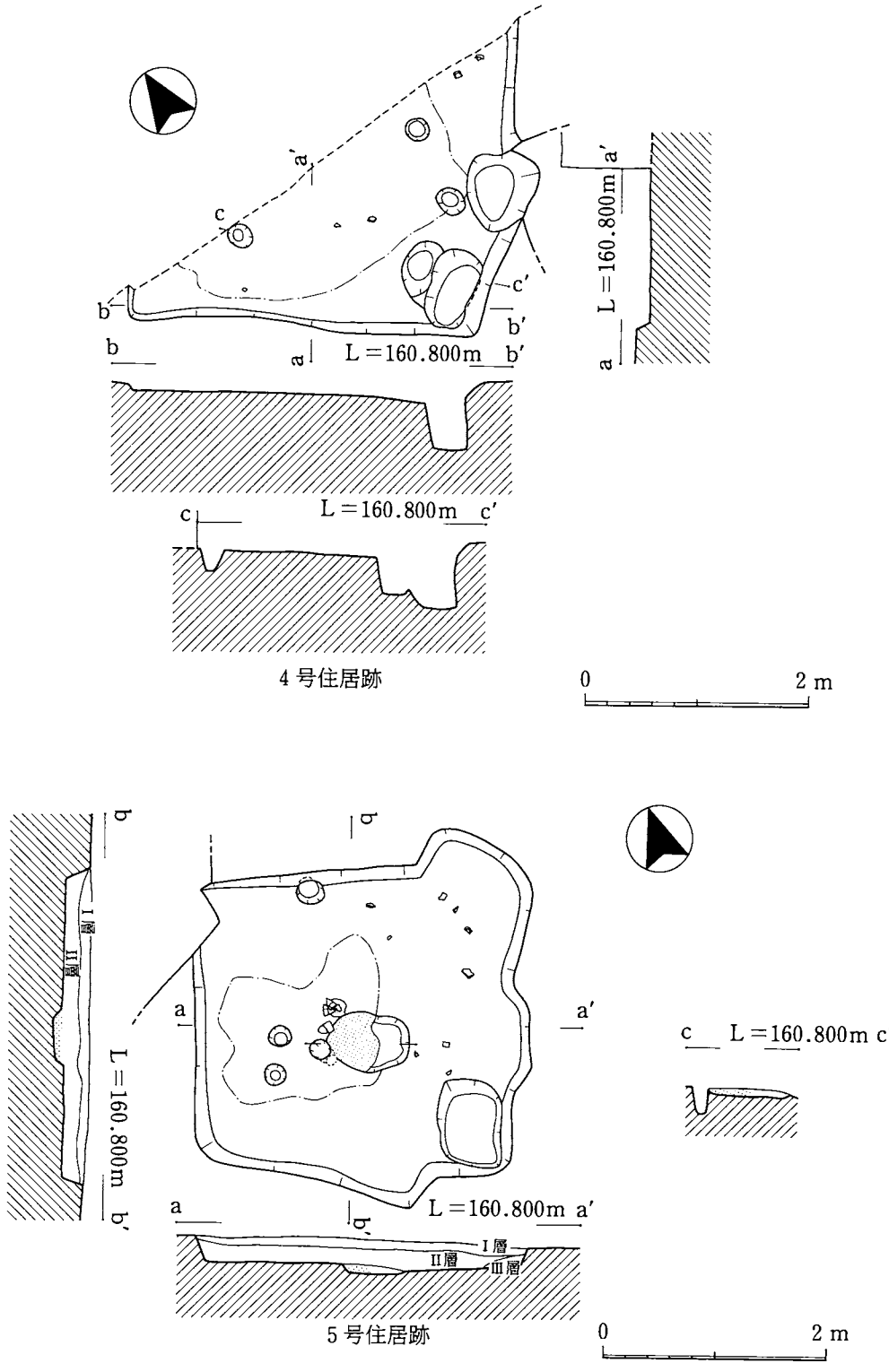
その他に、須恵器が3点（第18図2・3）出土している。いずれも住居跡埋土の中程度より上から出土したものである。この住居跡の時期に伴うかどうかは不明である。器形は、いずれも破片のため不明である。ただ、瑞（はそう）の一部と思われるもの（第18図3）もある。また、脚台付きの甕の一部と思われるもの（第18図1）もある。歴史時代の土師器（第17図1・2）もある。小型の坏皿であろう。底部は、ヘラ切りである。第17図の3～8は壷か甕の底部



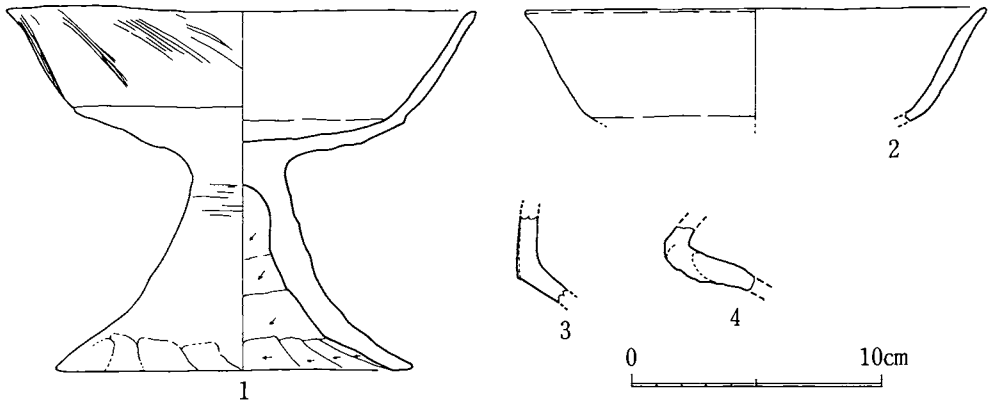
第17図　２号住居跡内出土遺物実測図(8)



第18図　２号住居跡内出土遺物実測図(9)



第19図　4号・5号住居跡実測図



第20図　５号住居跡内出土遺物実測図

であろう。丸底と平底気味の丸底がある。この８は、この形ではずれたような印象を受けるものである。内器面に円弧を描くような沈線がはいる。

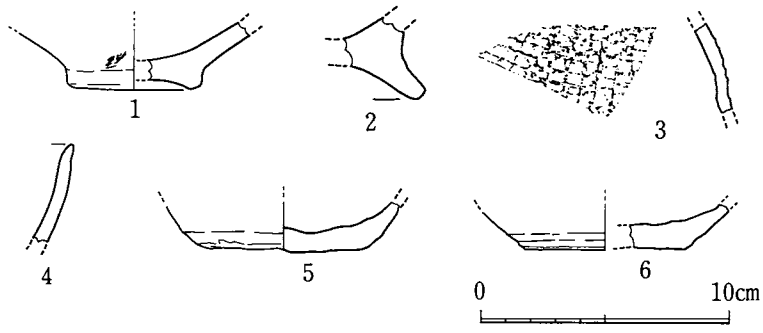
４号住居跡【第19図】

５号住居跡との切り合い関係である。新旧関係は、切り合う位置でピットがちょうど掘り込まれているため、不明である。住居跡は非常に小形のものと思われるが、半分ほどが調査区外に広がるため詳細は分からない。一辺が確認できたので計測すると長さ3.18mであった。炉跡及び明確な柱穴は確認していない。硬化面は、部分的には壁面近くまで広がっていた。埋土は暗褐色土のみの単一層であった。Pit ６は貯蔵穴であろう。Pit ５は住居跡より後の時代に掘り込まれたものであるが、埋土が住居跡埋土と同色であることから、時期差はそう開かないものと考えられる。出土遺物は少なく、図示できなかった。

５号住居跡【第19図】

４号住居跡との切り合いである。４号住居跡にきられており、こちらの方が古いものと思われる。住居跡の規模は長径3.00m、短径2.80mを計るが、不整形を呈している。中央に炉跡があり、長軸70cm、短軸50cm、深さ６cmの掘り込みがあり、中に焼土と炭化物がある。この住居跡も遺物は少なく、図示できたのは４点であった。柱穴として明確なものはない。遺物の内、炉跡の直ぐ横にあった１の高坏は、床に立った状態で出土しており、やや特殊な状態を呈する。

埋土は３層に分割される。Ⅰ層は、やや砂質の暗褐色土。Ⅱ層は、色・質ともにⅠ層に同じであるが、中に黄色土粒（アカホヤか）を少量含む土である。Ⅲ層は、暗褐色土に黄色土粒を



第21図　包含層中出土遺物実測図(土器)

多量に含む土である。炉跡の埋土は、暗褐色土で焼土粒・カーボン粒を含む。

出土遺物【第20図】

出土遺物は少なく、4点が実測できた。高坏が2点、壷の頸部が2点である。

高坏

1の高坏は、炉跡の周囲に床直で、垂直に立った状態で出土している。坏部が欠けて床に落ちていたが、完形であった。脚部は、裾部との境が明瞭でなく、末広がりに広がる。内器面は、横方向のケズリが施される。端部に小刻みなケズリが施され、外器面端部の指による押さえと共に緩やかな段を形成する。坏部は、体部に明瞭な屈曲部が稜線となってあらわれている。坏部の口径17.7cm、全体の高さ18.2cmを計る。2は1よりも坏部の屈曲が弱い。口径18.3cmを計る。

壺

3・4ともに一部であり、全体は不明である。

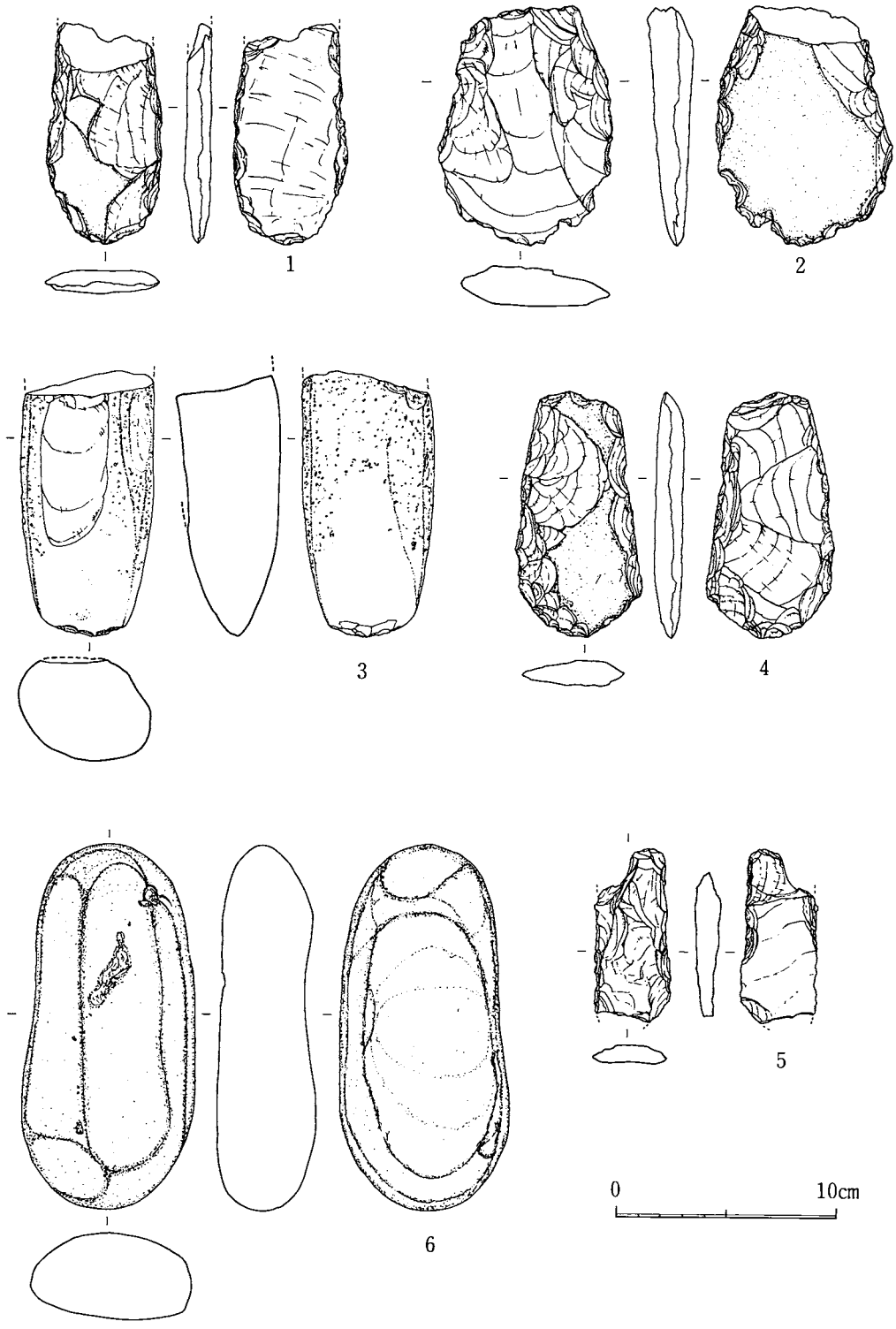
包含層の遺物

土器【第21図】

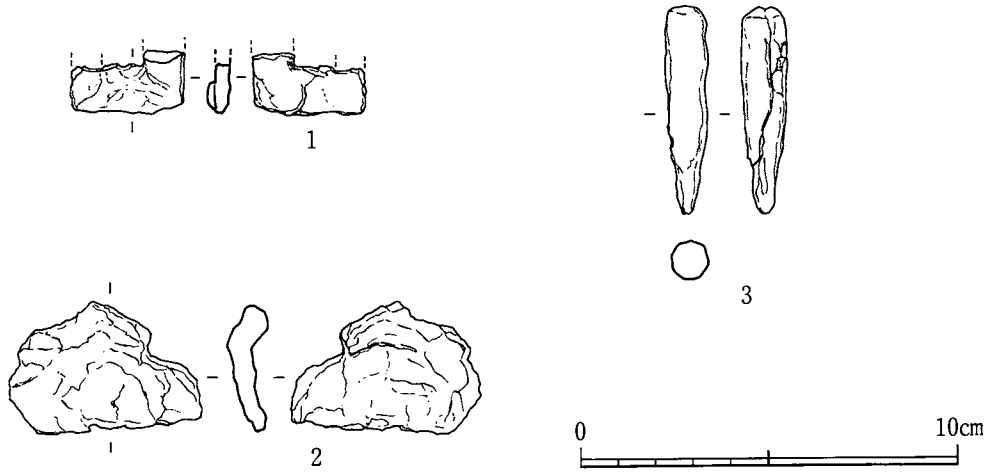
試掘坑などからの出土遺物をあげる。1・2は、古墳時代の遺物である。1は、浅鉢の底部、2は、脚付きの甕の一部であろうか。3は、須恵器で大甕の一部であろう。4・5・6は、歴史時代の土師器である。4は、椀の口縁部である。5・6は、坏の底部である。底部はヘラケズリである。

石器【第22図】

本遺跡では、包含層中から数点の石器が出土している。打製石斧が3点、磨製石斧が1点、磨石が1点、加工痕のある石が1点ある。



第22図　包含層中出土遺物実測図(石器)



第23図　包含層中出土遺物実測図(鉄器)

打製石斧は、深水谷川遺跡で出土したものと同じものである。1は、刃部を丸くしたもので側面が平行なものである。厚みも一様でわりと薄手のものである。自然面を片面に、その裏側が主要剝離面となっている。2は、刃部が広がり薄くなるものである。基部の方は厚みが増していくもので、側面も絞り込まれてくる。片面に自然面を残す。刃部の切先に僅かに使用痕が認められる。4は、1に似るが、やや基部の方が刃部よりも窄まってくるものである。片面に自然面、その裏側に主要剝離面が残る。完形品である。これらの石斧類は、いずれも砂岩製である。

磨製石斧は、3である。体部途中から欠損したものである。シルトに近い砂岩製であろう。かなり表面が風化している。刃部近くまで、調整痕としての敲打のあとが残る。刃部付近は、丁寧な磨研がなされているようである。刃部は、体部より窄まっている。切先に使用による刃こぼれがみられる。

磨石として、5があげられるが、あまり明確には、痕跡が残っていない。一面は、緩やかな凹みがあり、ここが磨石か、あるいは、砥石としての使用があったと思われる。また、もう一方の面には、敲打のあとが僅かにみられる。

6は、加工痕が施されたものである。ヘン岩の剝片を側面から打ちかいている。偏平で細長いものを利用している。打製石斧とは異なるようであるが、製品として何になるのか不明である。

これらの石器類は、竪穴式住居跡にともなうものではなく、縄文時代のものである。

鉄器【第23図】

いずれも包含層中で発見されたものである。1は、小型の鉄斧の刃部のようである。真ん中

に抉りが入る。幅３cmを計る。２は、鉄であるのは分かるが器種などは不明である。３は、やや太目の釘の先のようなものである。長さ５．４cmで太さ１cm程である。

第４節　小結

この調査区においては、以下のことが確認できた。

１）古墳時代前期の竪穴式住居跡が４棟あった。このうち２号住居跡はこの調査区中最も大きく、長軸が約６ｍ、短軸が約５ｍの長方形をなしていた。また、ここからは、おびただしい数の遺物が出土した。１号は中型、４号と５号は小型のもので出土遺物は少なかった。

２）前年度調査された小園遺跡の範囲が、丘陵地のすぐ裾近くまで広がっていた。

３）この住居跡群の成立年代は、須恵器が入る直前もしくは入って間もない頃とみたい。それは、２号住居跡の埋土上部に２点須恵器が含まれていたからである。しかし、確実にこれらの住居跡とこの須恵器が伴うとは言えない。したがって、５世紀末から６世紀前半ととらえておく。

４）遺跡北東にある石坂古墳群と本遺跡との関係が課題である。ただし、この古墳群は確実に須恵器を伴い、小園遺跡より後代になると思われる。２つの遺跡の間の関係は今後検討が必要であろう。

第Ⅴ章　深水谷川遺跡の調査の成果

第１節　遺跡の層位と包含層

本遺跡は、丘陵地斜面に形成された遺跡であるため、調査の過程で層位の確認を常に行っていた。最初、２グリッドおきに土層観察用のベルトを残していた。また、調査途中に下部の層位まで確認するため３カ所トレンチを掘ってもいる。以下は、それらの知見をもとにまとめたものである。(各地点は第25図を参照)

第０層　流入土層。

調査区の北側、斜面の上方では、土地の造成が行われている。その工事の際に、土砂が調査地に流入してきたものと思われる。

第Ⅰ層　本来の表土層。ふかふかした黒褐色土。

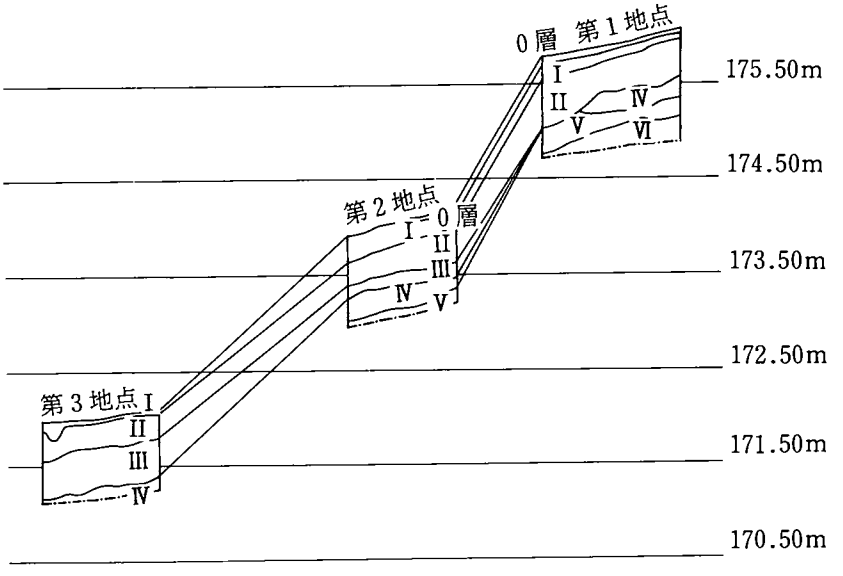
縄文時代晩期の土器片、石器類を含む。

第Ⅱ層　暗褐色土。

アカホヤ火山灰の二次堆積土を含む。縄文時代晩期の土器片、一部には、縄文時代早期の土器片を含み、石器類も含む。

第Ⅲ層　黄褐色土。

アカホヤ火山灰の土層である。この層は、土の状態と性質により、二つの層、Ⅲａ層とⅢｂ層に分けられる。



第24図　深水谷川遺跡土層模式図

第Ⅳａ層

アカホヤの二次堆積層で、しまりはほとんどなく、場所によっては、第Ⅲ層と分離の難しいところもある。遺物は、縄文時代後晩期の土器類がある。

第Ⅳｂ層

遺跡の南側、斜面の下方でみられる。下方では、ブロック状に現われ、よくしまる。縄文時代前期の土器を含む。

第Ⅴ層　黒褐色土。

この層も部分的に現われるもので、遺跡の南側特に、C—5・６・７区でみられる。粘性が強く、よくしまった層である。縄文時代土器を僅かに含む。

第Ⅵ層　暗黄褐色土。

シラスの二次堆積。しまりはあるが、粒子は砂質である。無遺物層。

第Ⅶ層　緑黄褐色土。

シラス層で、キメの細かい粒子で、よくしまっている。無遺物層である。

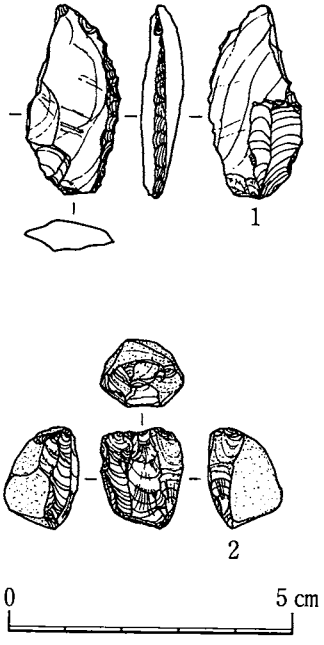
この他に第Ⅶ層の下に、礫を多量に含む赤褐色土がある。この層は、斜面の上方、遺跡の北側で顕著にみられ、集石のような印象を受けた。

遺跡の中には、いわゆる「倒木痕」が10数ヵ所にみられた。円形ないしは楕円形に土層が順に並んだ状態で露出しているものである。この痕跡の状態から層序の推定ができるようになった。いずれも表土を除去する段階で現われ、遺構と混同する場合もあった。層序の状態から、この痕跡の形成された時期の推定がなされてきているが、この遺跡でみられるものは、遺物の混入や、層の含まれかたなどから、アカホヤ層形成後長くない時期と思われる。それは、遺跡の中では、流出が著しく、あまり明確なアカホヤ層を形成していないのに対して、この痕跡内に認められるアカホヤ火山灰層は、はっきりとしており、層がまだ流出する以前にこの状態になったものと思われるからである。遺物からみると、縄文時代前期とされる轟Ａ式の土器片が出土しているが、縄文時代晩期の土器は含まれないことから、縄文時代前期から後期の間に形成されている可能性がある。ただ、層の状態から考えると、縄文時代中期としておきたい。また、倒れた方向については、層位の状態より、北方から北東にかけてと思われる。この痕跡によって、出土層がかなり撹乱されている場合があった。

第２節　旧石器時代の遺物

本遺跡では、２点の旧石器時代の遺物を確認している。出土層は、いずれも０層ないしはⅠ層である。これらの層は確定した層序ではなく、上からの流入により形勢されてきたものであるため、多分本来の位置をとどめるものではなく、土の流れによって移動してきたものと思われる。ちなみに、トレンチの中でこの時期の遺物を含む層を確認できなかった。しかし、地形的なことを考えると、調査区の上の丘陵上に旧石器時代の遺跡が存在する可能性がある。しかし、現在、その丘陵は、昭和40年代の造成工事により、牧草地となっている。かなりの地形改変が行われたようである。その際に、遺跡も破壊されたのではないかと思われる。

１は、掻器であろう。緑色片岩の細剝片を利用したもので、側片の一方に細かい押圧剝離が施されている。そこを刃部として利用したものと思われる。２は、細石核と思われる。細かい乳白色の黒曜石を加工せずそのまま利用したものである。わずか１cmほどの剝片を剝いだ跡が残る。剝片は、実際の製品として後に利用できたかは不明である。



第26図　旧石器時代石器実測図

前年度調査時にも小園遺跡において、細石刃が見つかっており、この外に旧石器時代の遺物が存在した可能性があるが、一応確認できたものだけをあげるにとどめる。

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構

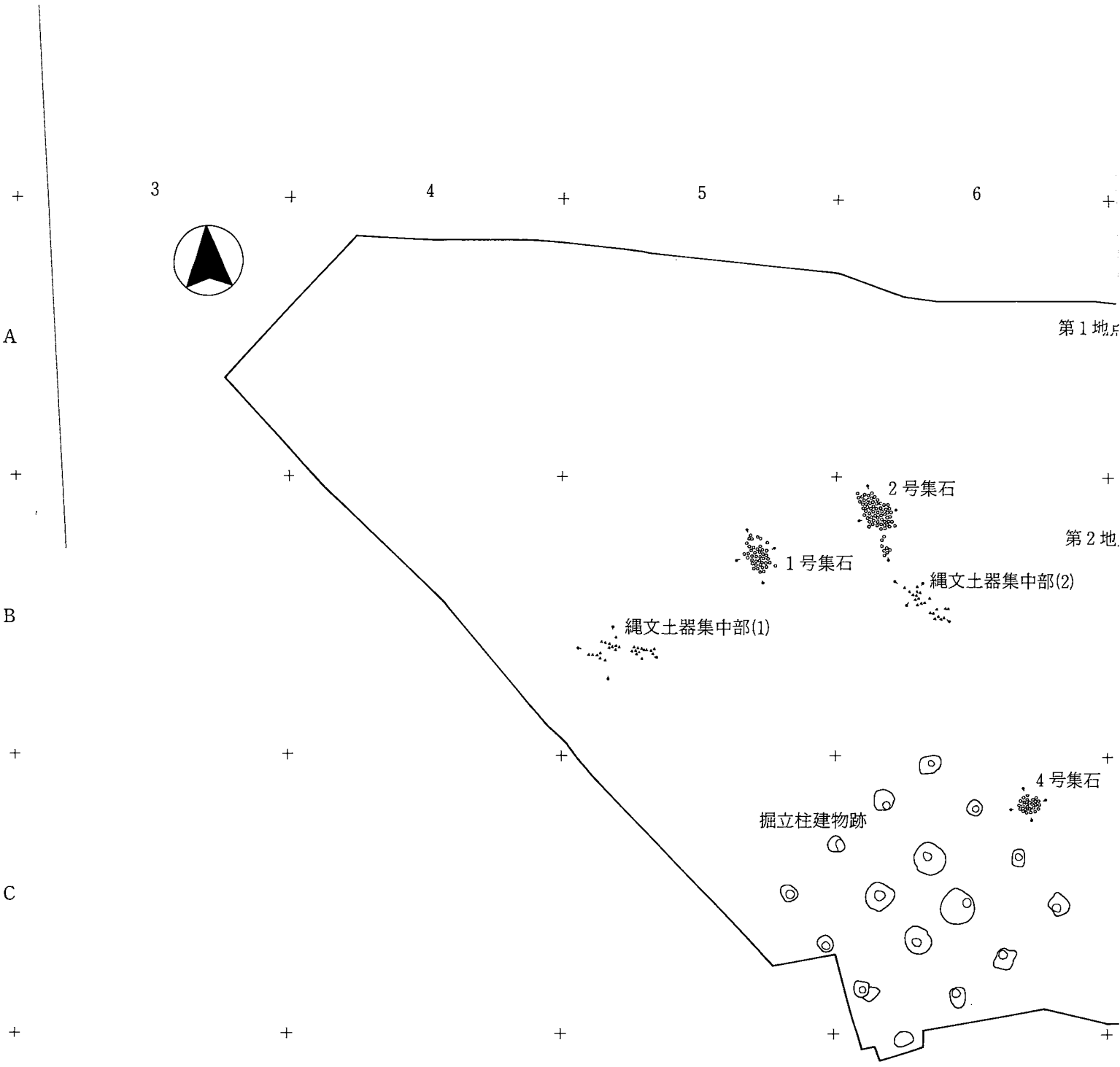
縄文土器集中部【第27図・第28図】

本遺跡内の２カ所で土器の集中部が見られた、それぞれについて以下に記す。

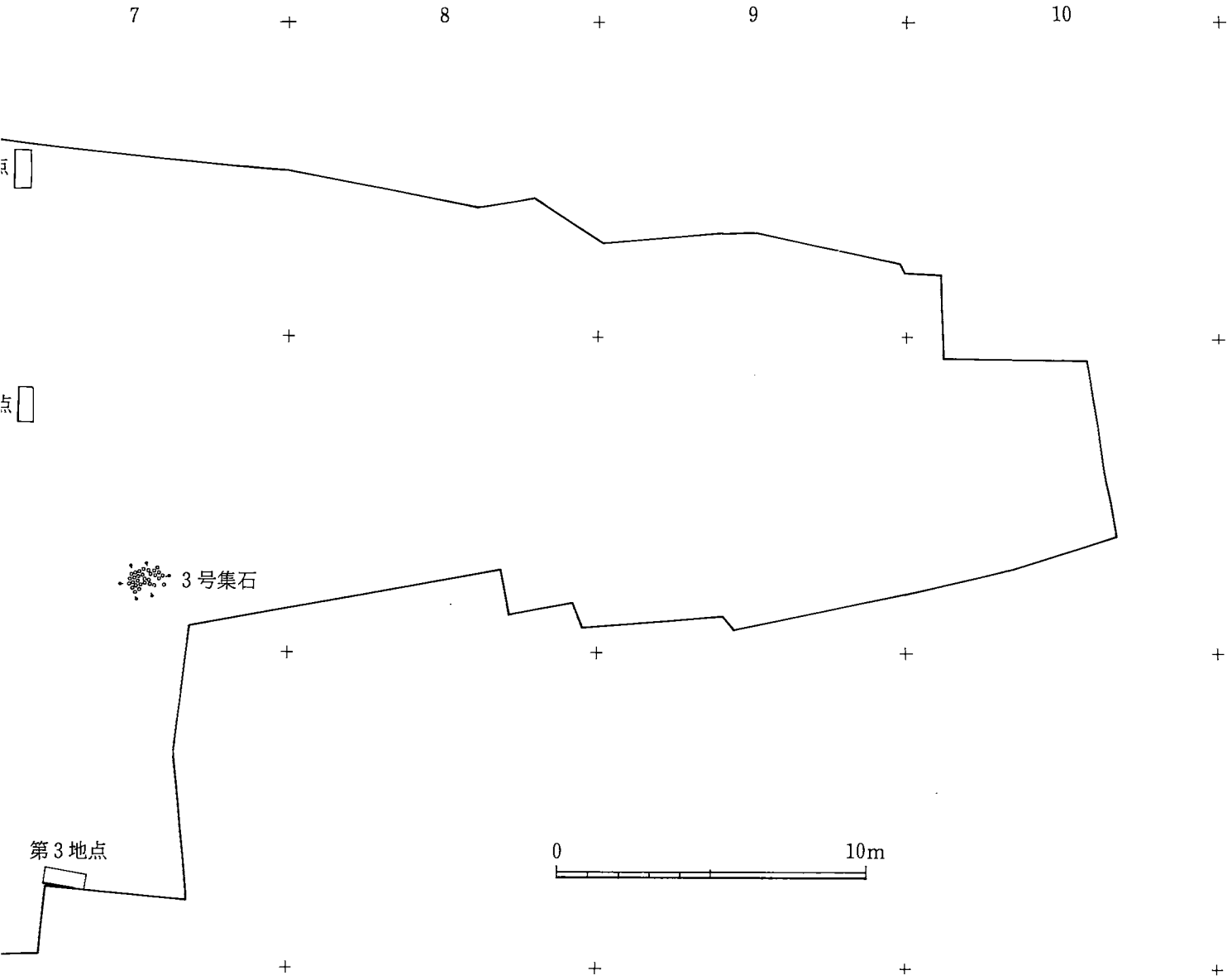
Ｂ５区のものは、掘り込みが不明である。若干黒っぽい黄褐色土（Ⅱ層）に埋もれていた。出土した縄文土器は縄文時代晩期の土器であり、３～５個体分あるようである。おそらく上方からアカホヤの土と共に流れてきて、凹地に堆積したものであろう。

Ｂ６区のものも、掘り込みと認められるものはなかった。傾斜地の凹地に堆積したもののようである。あまり接合のできる物はないようである。何れも縄文時代晩期の土器片である。

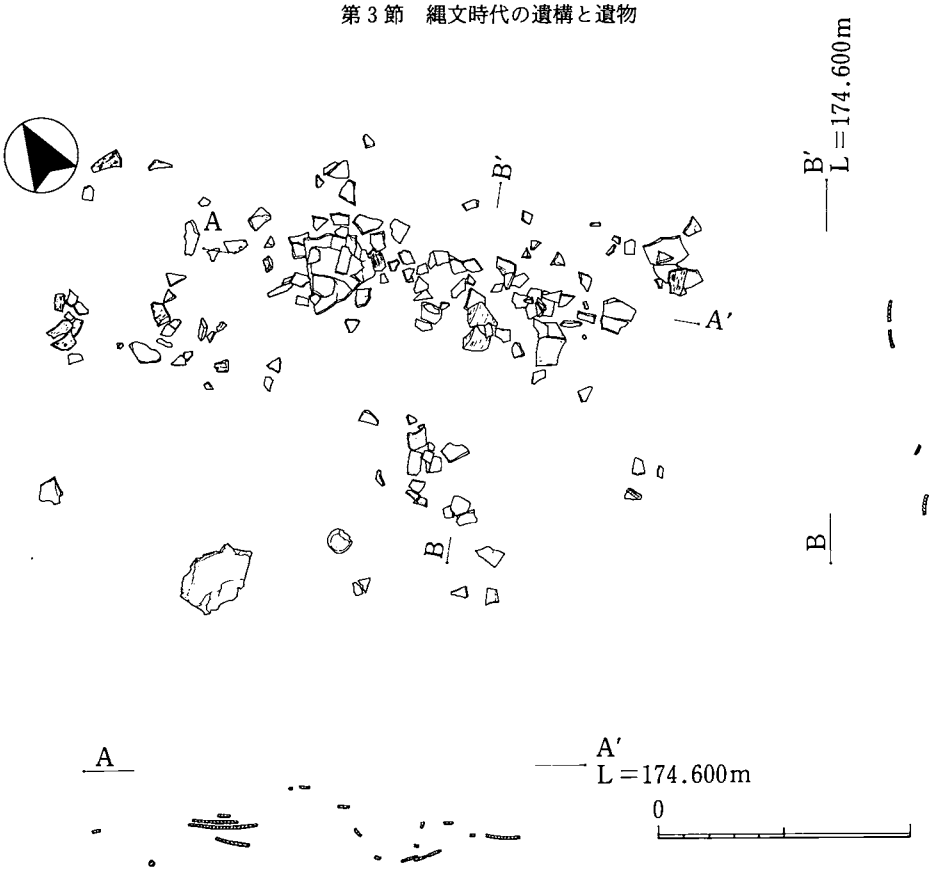
集石【第29図・30図】



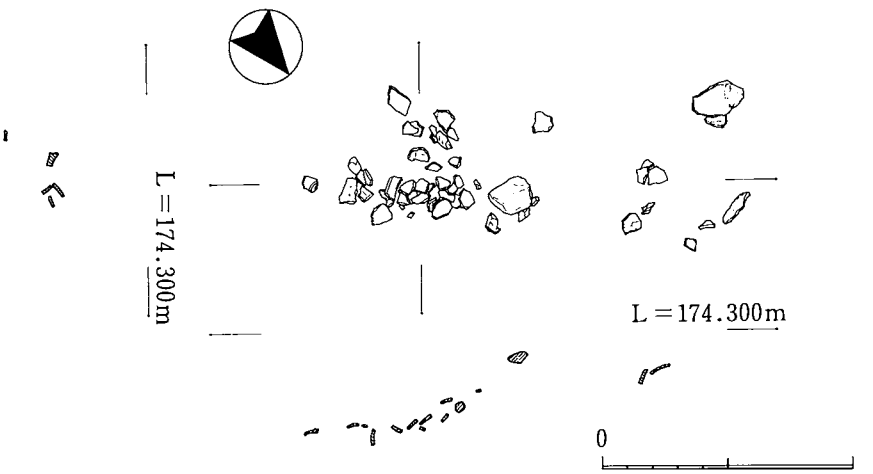
第25図　深水谷川



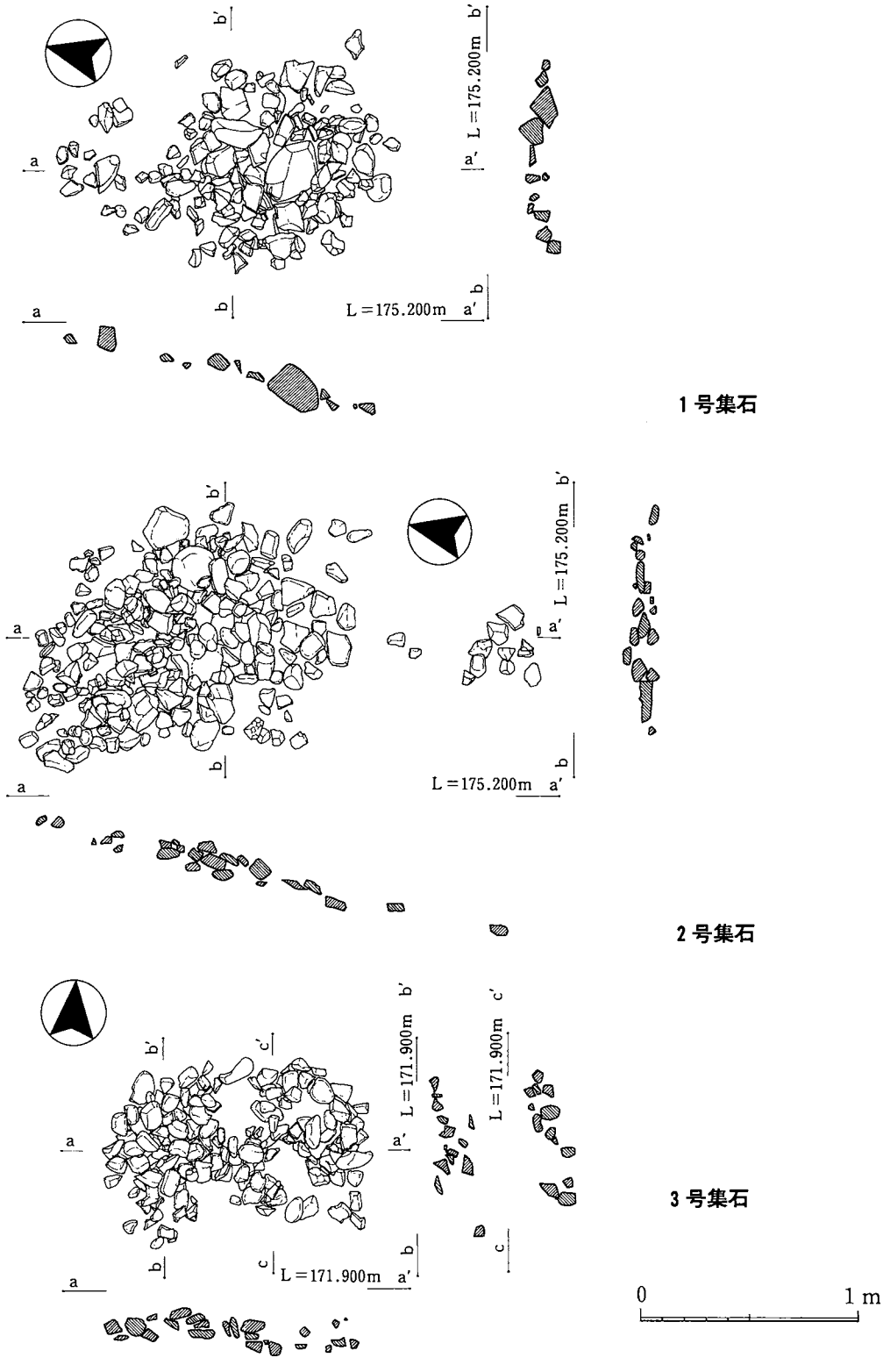
遺跡遺構配置図



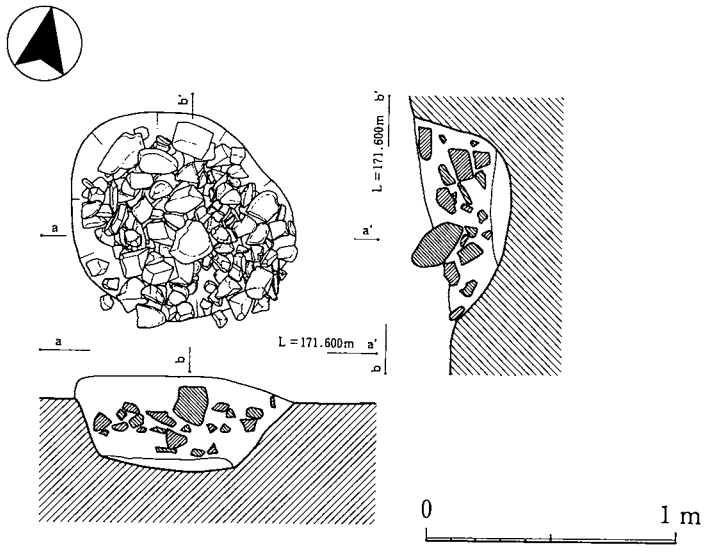
第27図　縄文土器片集中部(1)



第28図　縄文土器片集中部(2)



第29図　1号・2号・3号集石実測図



第30図　４号集石実測図

本遺跡では、四つの集石を確認した。形態と層位の違いから大きく二つのタイプに分けられよう。１号から３号までと４号である。

１号集石【第27図】

掘り込みは不明。検出面は、Ⅰ層内である。時期は不明であるが、出土遺物より縄文時代晩期であろうか。集石は一段であり、中央付近に二段認められた。石は小さく、掘り込みも検出できなかった。集石内からは、焼土・炭化物は全く認められなかった。また、石も焼けているのは認められなかった。

２号集石【第28図】

Ⅰ層中に検出されたもので、掘り込みは不明である。時期は１号と同じく不明である。ここからは土器が出土している。出土している土器の内、大半は縄文土器の中であるが、須恵器片が１点含まれている。混入の可能性はあるが、時期の目安になるかもしれない。

３号集石【第29図】

集石下面は黒ニガである。集石の掘り込みは不明確である。時期は、集石内より遺物の出土が全くないため不明である。

４号集石【第30図】

明確な掘り込みを持つ。掘り込みは、長径89cm、短径82cm の不整円形で、深さが約40cm～25cm を計る。掘り込み面は小石を多量に含むⅦ層下層の赤橙色土である。埋土は黒褐色土の単一層である。埋土中には多量のカーボンを含む。しかし、焼土は全く含まれない。掘り込みの床面から壁の中位面付近は、熱を受けて淡い黄灰色に全体が変色している。また、石も下

面付近はほとんどが熱を受けて脆くなり、亀裂が入っている。この石の脆くなっていく傾向は、上面にいくに従い割合が少なくなる。この集石は、穴の中で火を焚いたのは明らかであるが、穴の中に焼土が全くない。石の入り方は特別な傾向は認められない。穴の中に石を投げ込んだ感じである。

2　遺物

本遺跡では、多量の土器、石器などの遺物が出土した。斜面地という地形的な条件のもとに、縄文時代から歴史時代に到る数千年に渡る遺物が出土いている。斜面であるため、層位的に出土土器の分類が十分行える状態ではなかったが、多様な遺物は、この遺跡における一つの特色である。

また、地形的条件ゆえに遺物の移動も大きいと思われたが、遺物取り上げに際しては、できる限り遺物の出土原位置の記録に努めた。十分な成果は得られなかったが、出土傾向はとらえられるので、遺物観察表のところに参考として記載しておく。

（1）土器

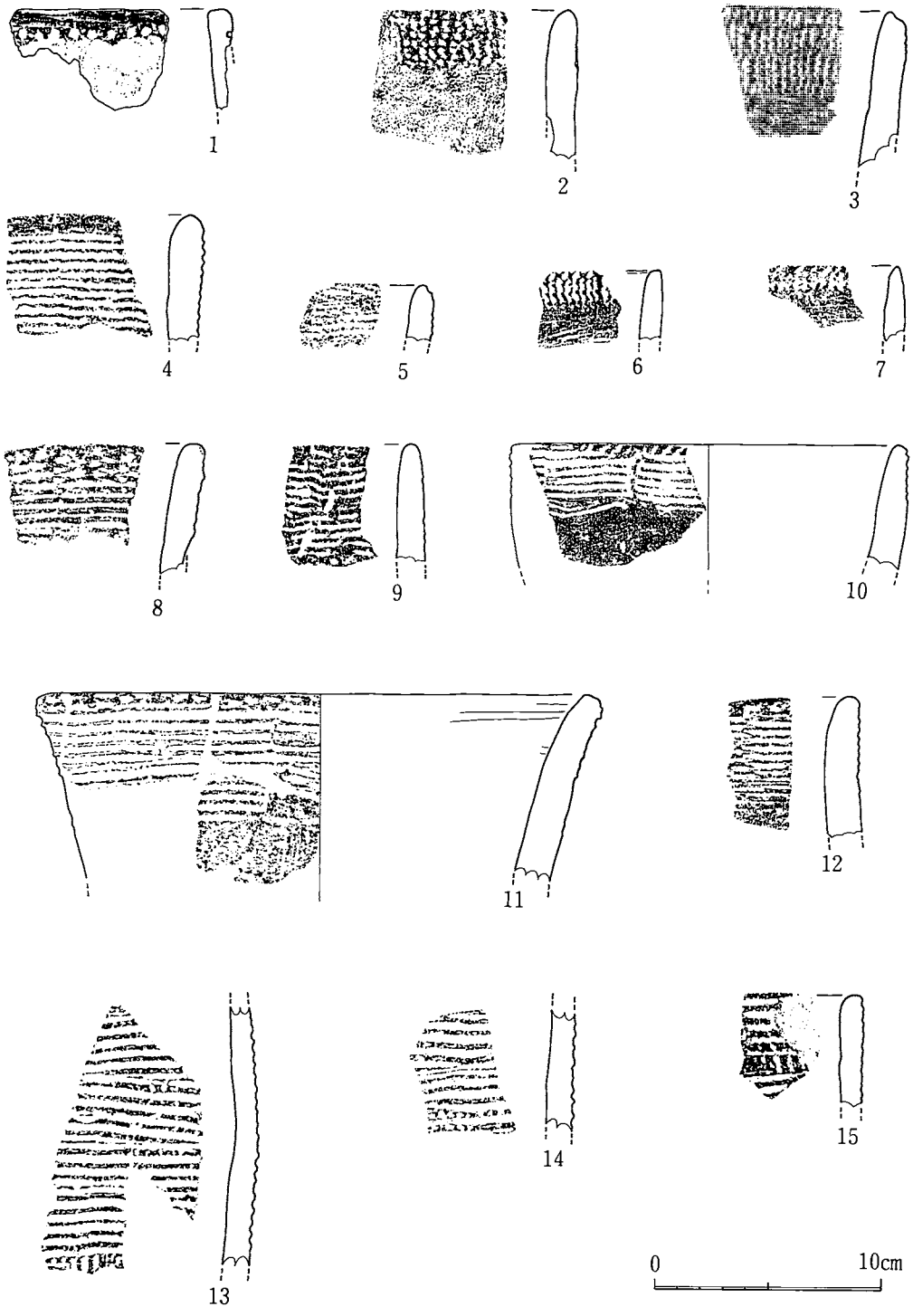
出土した土器をここでは、これまでの土器研究の成果を踏まえて一応時代ごとに分けることにする。縄文時代・弥生時代・古墳時代・歴史時代に分けて扱う。まず、縄文時代の土器からである。以下順に記録していく。

縄文時代の土器としてとらえたものは、分類の結果、第Ⅰ類から第XII類までみられた。縄文時代早期から晩期まで幅広く時代を通して遺物が出土している。

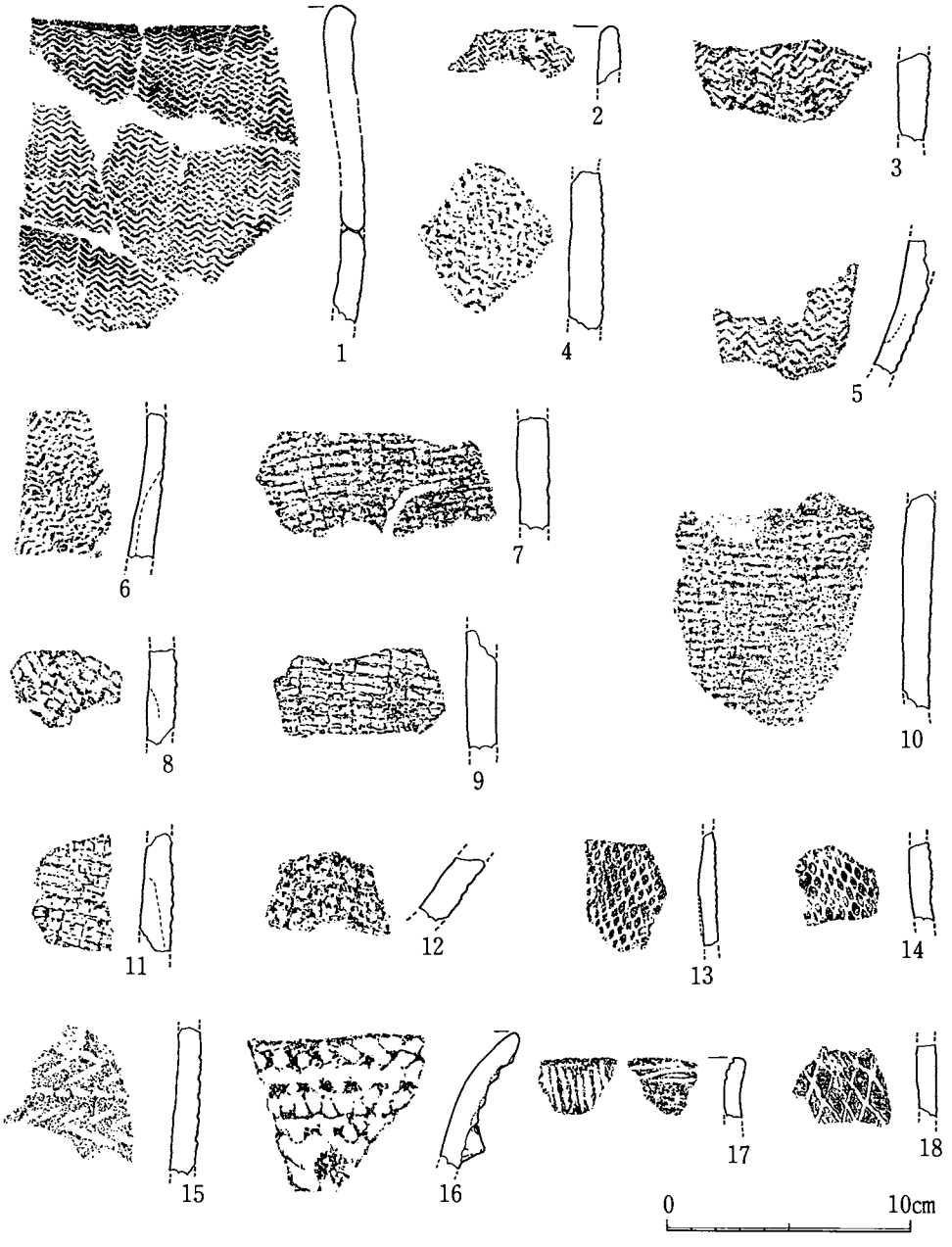
第Ⅰ類（円筒土器）【第31図】

出土地点は、A・B・C—5・6・7であった。出土点数は少なく、15点である。器形は、部分的な出土であるため全体の形態は不明である。口縁部が直行かもしくはやや外反し、口唇部は丸みをもって終る。器壁は、いずれも1cmほどの厚みがあり、内器面は、丁寧はヘラ研きで仕上げられている。焼成は、ほとんどのものが良好であり、胎土は、長石や石英などの砂粒を混入する。

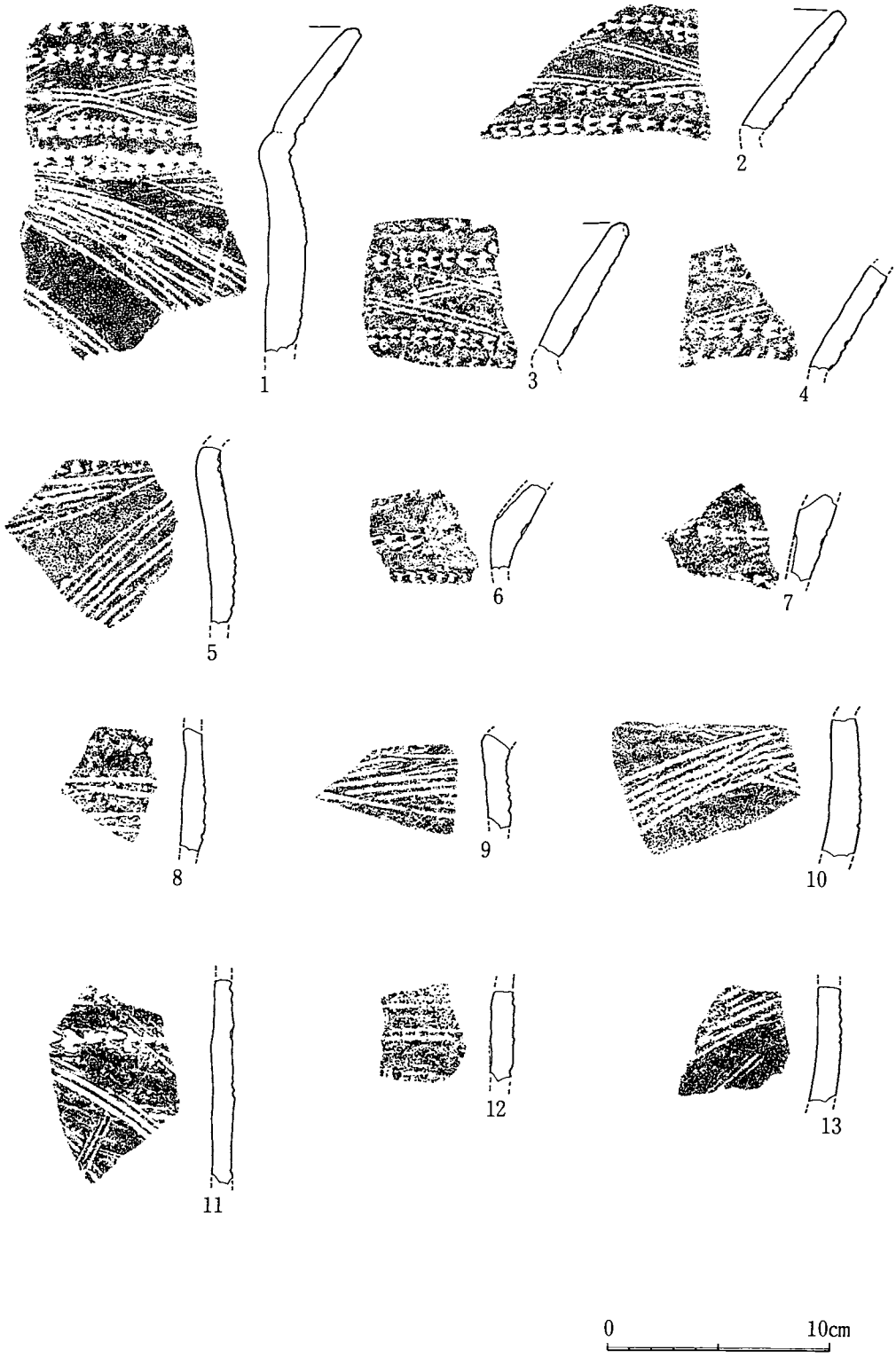
文様は口縁の上部に貝殻腹縁に施文するものが中心であるが、胴部にかけてひろがるものもある。文様のあり方から更にⅠa類からⅠf類の5類に分けられる。Ⅰa類は、1の1点のみであるが、口縁に径3mm前後の円形の工具で刺突を連続して施すものである。一列のみしか残っていないため、文様全体は不明である。Ⅰb類は2で、口縁部に貝殻腹縁による連続刺突を施すものである。施文具の違いにより、やや大きさの違いがある。Ⅰc類は3・6・7で、口唇部に貝殻による刺突をもち、口縁にも数状の貝殻による刺突文を施す。Ⅰd類は4・9で、口縁外面に貝殻による連続刺突押し引き文をもつ。Ⅰe類は、口唇部に刺突をもち、口縁に数状



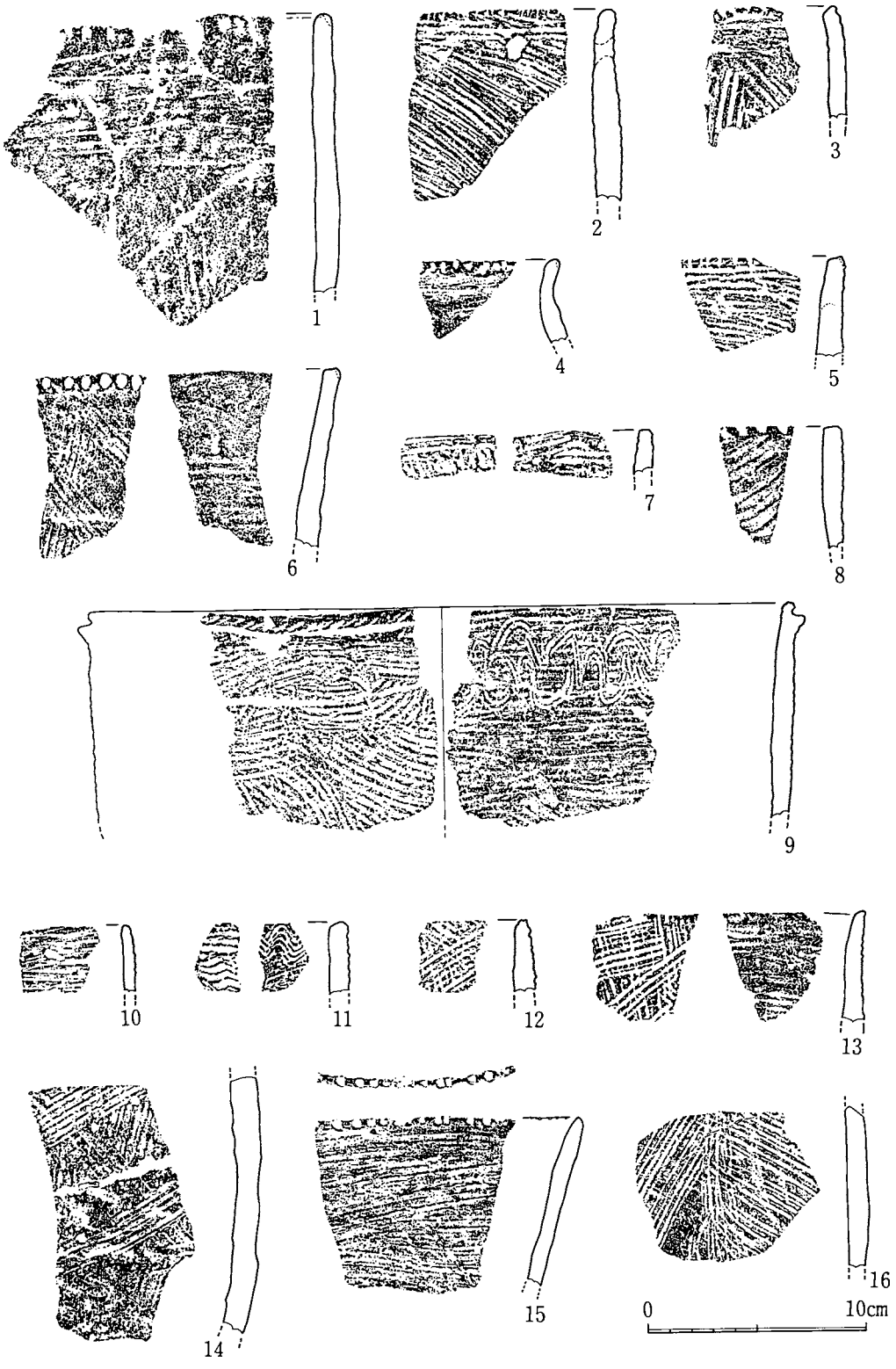
第31図　縄文土器実測図(1)



第32図　縄文土器実測図(2)



第33図　縄文土器実測図(3)



第34図　縄文土器実測図(4)

の貝殻による条痕文を施す。８・11・12がそれにあたる。

Ｉｆ類は、Ｉｅ類の文様帯を胴部まで広げるものである。13・14がそれにあたる。この２片は同一個体の可能性がある。15もこの中に入ろう。これらの土器は、文様や形態などからみて、鹿児島県内を中心として分布する円筒土器のうち貝殻条痕文とされるものに近い。この系統の中に含まれよう。

第II類（押型文系土器）【第32図１～15、17・18】

土器の外面に回転による型押しを施し文様にしたものである。18点以上出土している。文様と形態により３類に分けられる。

IIａ類は、山型の文様を施すもので、分布は、A―4・５、B―5・７に集中する。破片がほとんどである。その中で１は、口縁部から胴部までみられるもので、口縁が丸くなりややふくらむ。胴部の器壁は、約１cmほどである。山型文が幅10mmの３単位で10本ないし９本を１本の原体に深く彫り込んでいたものと思われる。かなり精緻に作られた文様をもつ。胎土、焼成も良い。やや胴のはった器形である。２も１に近い原体によるものと思われる。山型文の土器は、もう一つ異なるパターンをもつものがある。３・４・５・６は、山型の幅1.2～1.4mmのもので、１・２より文様が間のびした観があるものである。こちらは、焼成･胎土がやや劣る。

IIｂ類は、格子文様を施すもので、いずれも胴部片のみである。７・８・９・10・11がそれである。器壁は、１cmほどである。胎土はかなり砂粒を含み、焼成もあまり良くない。格子の間は、４mmほどで、文様の残りが悪い。７・９・11は、同一個体の可能性がある。

IIｃ類は、出土点数は、13・14の２点で、ともにB―5区からの出土である。５mm×２mmの長粒の豆粒状の楕円文を施文したもので、かなり精緻である。胎土・焼成はやや良好である。小破片のため、形態などは不明である。この外に、17は、口縁部で、口径が小さく、外器面に撚糸文を縦走させ、内器面口唇部には、横方向に撚糸文を施す。18は、胴部片で網目の押型文を施したものである。小破片のため全体は不明である。17・18の土器は、押型文土器の系統にいれられるもので、いわゆる「手向山式土器」であろう。15は、胴部破片である。押型文系の土器に入れるのかよく分からないのであるが、文様の繰返しを考えここに入れる。砂粒を多く含み、あまり焼成も良くない。文様は、沈線もしくは押し引きのようでもある。

第III類【第32図16】

１点だけの出土である。16は、口縁部の破片で、ラッパ状に開く。三条の凸帯を貼り付け、その上に刺突を施す。凸帯の下には、瘤状突起を貼付ている。この土器は、類とするには、ためらわれたが、外にいれられるものではないため、あえてここで分けた。平栫式土器と塞の神式土器の中間形態の土器として、「天道ガ尾遺跡」の報告で触れられている。調査者は、新たに「天道ガ尾式土器」の名を提唱している。

第IV類（塞の神式土器）【第33図】

破片数で20点ほど出土しているが、文様・器形とも類似するものが多く同一個体と思われるものも多い。A—4・5・6、B—5・6、C—5の各区に出土している。

土器の形態は、口縁部が頸部に屈曲し、大きく外側にラッパ状に開く。胴部は、ややふくらむか、直行する。文様は、口縁部に貝殻腹縁を加工し、3本の腹縁による平行押し引き文を横位に数条施す。胴部には、同じ貝殻腹縁の原体かやや異なるもので、沈線による区画のなかに条痕文を施して、充填している。胎土はやや良好であるが、焼成はあまりよくない。1・2・3・4・5・8・9・10・13は、同一個体の可能性が高い。6・11も同一個体であろう。

第Ⅴ類（条痕文土器）【第34図、第36図10・11・15】

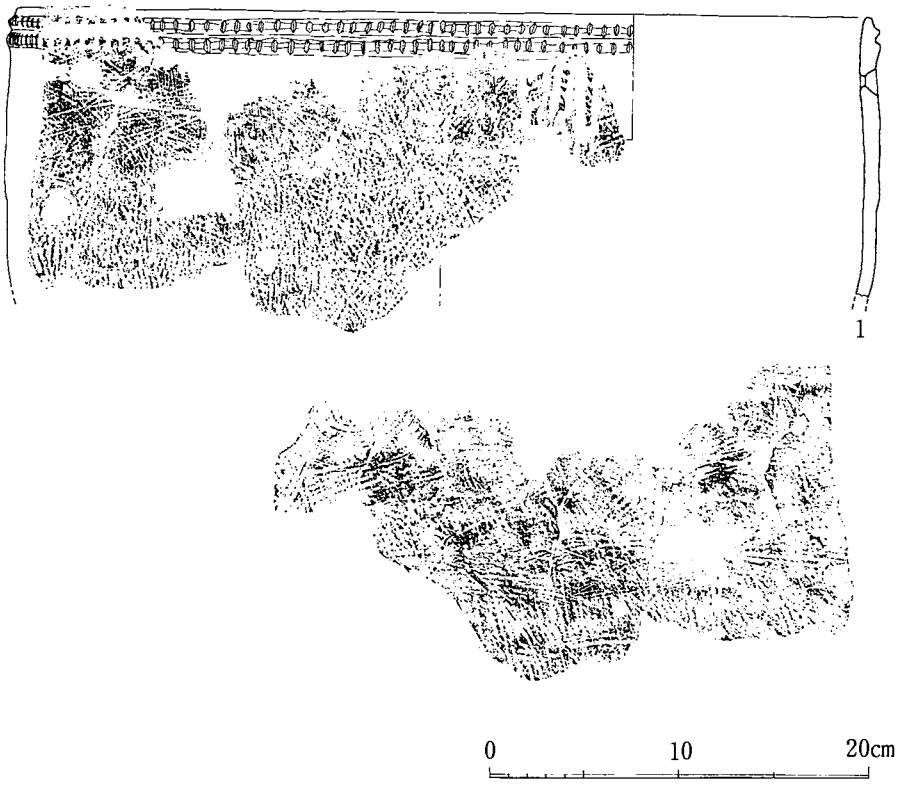
内外面に条痕文を施したものである。C—5・6・7区で大部分出土している。出土層位は、基本層序の4・5層であり、アカホヤ層の前後に集中する傾向がある。出土点数は、かなり多い。完形となるものはなく全体の器形はつかめないが、砲弾型で底部が丸くなるか、尖底になるのではないかと思われる。これも分化が可能で、ⅤaからⅤdの4類に分けられる。

Ⅴa類は、口唇部に貝殻腹縁による刺突または刻み目をいれ、その下を横方向の条痕文または、斜方向の条痕文を施す。更に下方に斜方向の条痕文を施すものがある（第34図1・2・3・5、第38図15）。条痕文の方向の異なりは、条痕文を文様帯として意識しているものと思われる。深鉢状のものが多いが、4は、やや口が窄まり壷のようである。

Ⅴb類は、口唇部に貝殻腹縁による刺突または刻み目をいれ、その下に斜方向の条痕文を施す。これが胴部まで斜方向もしくは、条痕文を交差させたものを施す（第34図6・8・14・15・16）。中でも6・14は、同一個体と思われるが、外器面では底部近くになると、ナデにより条痕文を消すか、条痕文を下まで付けず無文化しているようである。

Ⅴc類は、口縁部から貝殻腹縁による条痕文を施すものである（第34図10・11・12・13）。11には、内器面の口縁部近くに貝殻腹縁で波状に文様をほどこしている。

Ⅴd類は、口唇部に突帯を貼り付け、刻み目をいれたものである（第34図9、第36図10・11）。9は、突帯を貼り付け、斜めの刻みをいれている。突帯の下部には横方向の条痕文を施し、更にその下を斜方向の条痕文を付けている。第36図11は、やや内傾し、貼り付けた凸帯が口唇部に会わさり、その上に貝殻腹縁による刺突が連続して施される。外器面は、細かい条痕文が施される。第36図10は、口唇部外面に貼り付け突帯を設け、刻みがまばらにはいる。その下部は、条痕文が施される。これらの土器は、さらに細分可能なものも含まれていると思われるが、いわゆる「轟A式土器」の範疇で捉えておく。



第35図　縄文土器実測図(5)

第Ⅵ類【第35図】

一点のみの出土であるが、他の土器類の中に入れるのがためらわれたので、一類を設ける。口縁部近くの破片であるが、口径の復元が可能であった。復元口径は45cmあり、かなり大型の土器である。口唇部近くに２条の突帯を回らし、それに0.5mm間隔で刻み目を入れる。その下部には、内外面ともに条痕文が施される。縦方向のものが中心であるが、斜方向のものもはいり、複雑である。外器面は、この条痕文を突帯下部付近では、ナデ消しをしているようでやや曖昧となる。突帯は、横に巡るものと、部分的であるが、縦方向に三条（一本は、剝落）貼り付けられ、これにも刻み目が付けられる。内器面の口縁部付近では、条痕文を横方向に施す。また、部分的に波状の沈線がある。器壁は薄く、７mmほどである。また、器面には、外器面から穴があけられ、補修孔を作っており、５穴確認される。一つは対応する。

条痕文を持つものとしては、類の中に含めても良いようであるが、器壁の厚さが類に比べかなり薄く、焼成もよく堅緻である。出土層位は明確にはつかめないが、アカホヤ層のやや上部のようである。この土器は、轟のＢ式の範疇にはいるものであろうか。

第36図　縄文土器実測図(6)

第Ⅶ類（春日式系土器）【第36図１～９、12・13・14・第37図１・２・４・５・８・９・10】

内外面に条痕による調整がなされる。口縁部がキャリパー形を呈するもの、細かい波状口縁で真っ直なものを併せて、ここに入れる。器壁が６mm前後と薄く、焼成も良い。点数はそれほど多くはない。ここでは、Ⅶａ類からⅦｄ類の４類に細分する。

Ⅶａ類は、口唇部が連続押圧文で、外器面の下部には、押し引きの連点を二条を施す。やや口縁の窄まる深鉢である。外器面は細かい貝殻腹縁による条痕文が施されるが、内器面は、ナデによる調整が施される。第36図の１・14がそれに当たる。

Ⅶｂ類は、キャリパー形を呈し、口唇部に連続押圧文を施し、その下部に押し引きの連続沈線を２条ないし３条施す２・５がある。

Ⅶｃ類は、口縁が広く開き、屈曲部を持つ。３は、口唇部に連続する刻み目を持ち、屈曲部にも刻み目を持つ。その間には、３条の沈線を施す。４は、３に似るが、口唇部と屈曲部の刻み目がない。また、その間は、貝殻腹縁による押し引き文が施される。何れも内外面ともに条痕文による調整が施される。７・12は、同一個体のようであるが接合しない。波状口縁で口縁に３条の沈線を持ち、その間に刺突を２列施す。焼成はよいが、胎土中に砂粒が多くはいるため、破損した口がぽろぽろ崩れる。調整は、ナデにより丁寧に仕上げられる。

Ⅶｄ類

口唇部に突帯を貼付るものである。６は、口縁が開き、口唇部に突帯を貼り付ける。貼り付けた突帯の上部に連続押し引き文を施す。さらに口唇部内部には、刺突文を連続させる。内器面は、条痕文による器面調整が明確に残る。外器面は、条痕文による器面調整の後にナデにより消されている。８は、口唇にくねらせた貼り付け突帯を設け小さい貝殻腹縁による刺突を行う。さらに下は、刻み目がつけられる。９は、８に似るが、貼り付け突帯の上に径５mmほど円形工具による刺突が連続している。その下に条痕文がはいる。８・９ともに破片が小さいため、その詳しい様子はつかめない。

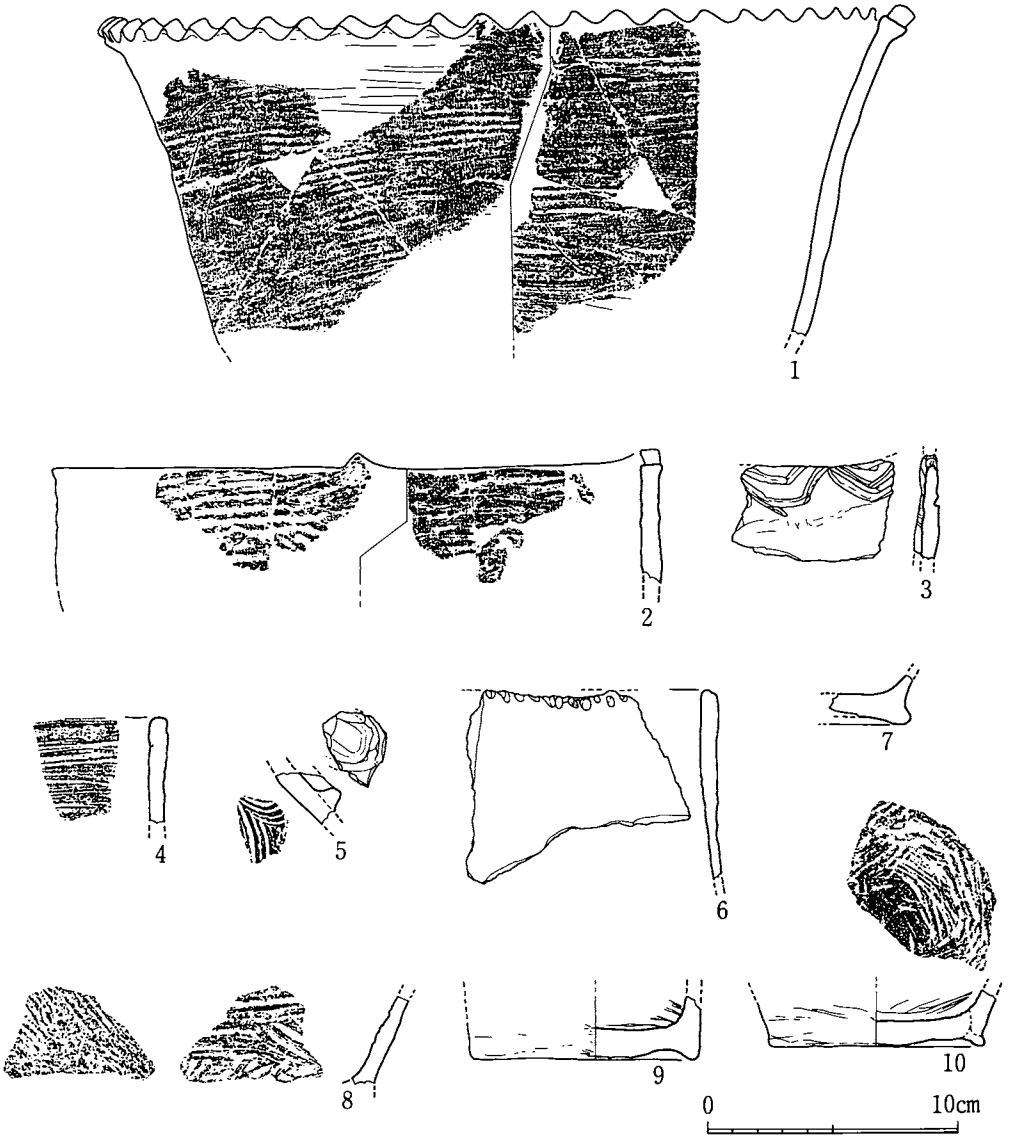
以上の土器は、口縁部から胴部に限られている。そのため、底部との関係は、明確ではないが、第37図の８・９・10などのようなやや上げ底気味の平底であろう。底部内面にも条痕がある。

Ⅶｅ類

内外面とも条痕文のみである。第37図の１は、口縁が開き、連続押圧による波状の口唇部を持つ。２は、破片の一部であるが、口唇に一つの突起を作り出す。調整は、１の工具に比べ、粗く浅い。

第Ⅷ類（野口式土器）【第37図３・６・７】

３は、口縁部に半円状の２本の沈線を持つものである。一点のみの出土である。滑石を多く含み表面がつるつるしている。６は、やや波状気味の口縁で、口唇部に連続刺突を施す。これも滑石を多く含み、滑石製のようである。７は、底部でやや上げ底気味である。かなり多くの

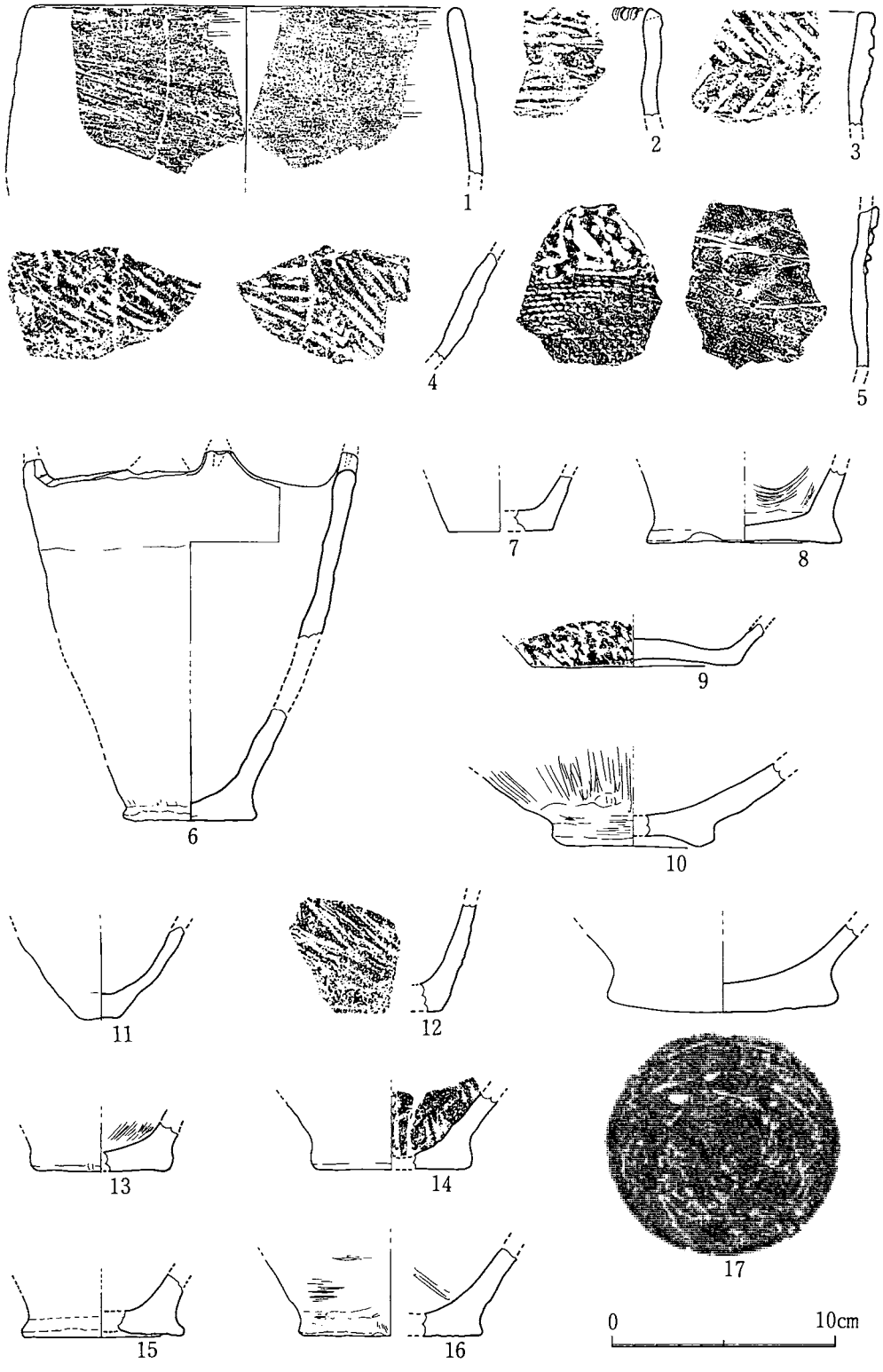


第37図　縄文土器実測図(7)

滑石を含む。底部は必ずしも３と同一とは限らないが、出土層位や胎土が似ているためここにあげた。

第Ⅸ類（船元式系土器）【第38図５・９】

第38図の５は、口縁部に貼付突帯を蛇行させて貼り付ける。その突帯のうえに円形工具によって、刺突文を施す。外器面には、地文として撚り糸を転がしている。内器面は、ナデによる調整を施す。破片のため、全体は、つかめないが、いわゆる「船元式系土器」にこれと似るものがある。一点のみの出土である。９は、底部である。やや上げ底気味である。器壁は薄く、焼成は良好である。外器面に縄文を施している。５と同じものにはいるかどうかは難しい。



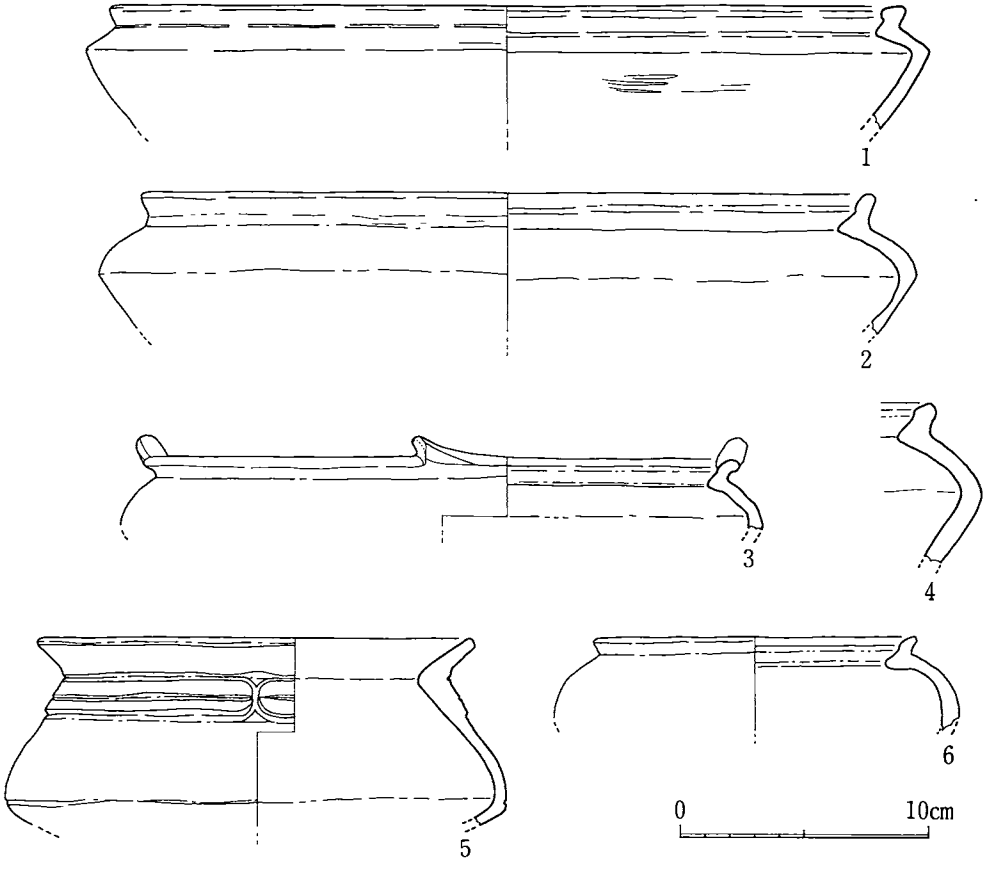
第38図　縄文土器実測図(8)

第Ⅹ類【第38図１・６～８・10～17】

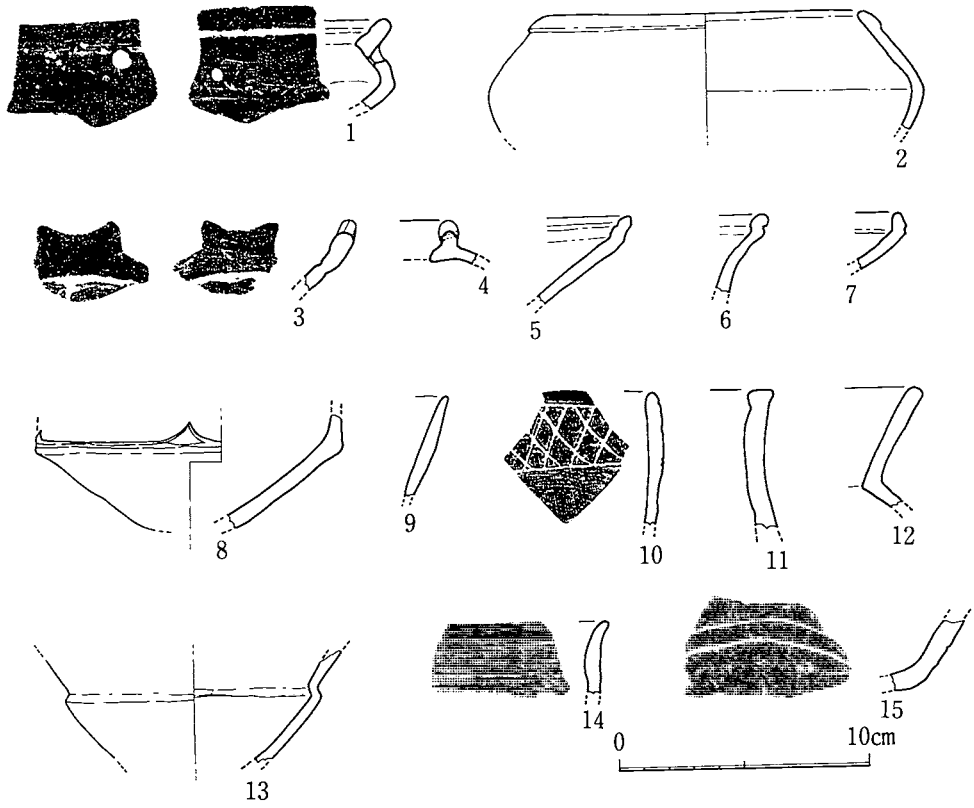
無文の土器である。第38図の１は、図上復元であるが、口縁が直行し、深鉢で内外面ともに細かい条痕文が施される。６は、口縁に幾つかの立上りを持ち、上から穴があけられているようで、この部分に装飾があったのかも知れない。口縁はやや開いている。底部は、平底である。器面は、ナデにより仕上られ、滑らかで堅く焼かれている。しかし、胎土中に多くの砂粒を含むため、かえって破損し易くなっている。この土器に類似するものとして、７・11があり、器形は異なるものの同じ類の中にいれられよう。底部は、10のように他に上げ底気味のものもある。外に無文ではないが、口縁部に綾杉文を施す３のような土器や２のような押圧波状口縁の土器がある。底部は、他に８・12・13・14・15・16・17のようなものもある。ただ、全体として点数も少なく、見分けることは難しいので、細かく類別はしない。

第Ⅺ類（黒色磨研土器）【第39図、第40図】

黒褐色を呈し、器表面を磨きあげた精製土器である。器形としては、浅鉢がほとんどである。器形から幾つかに分類できる。



第39図　縄文土器実測図(9)



第40図　縄文土器実測図(10)

XI a 類【第39図１～４・６、第40図１・４】

第39図の１・２・３・４・６、第40図の１・４である。口縁部は、頸部から急角度に開き、僅かの長さをもって終る。口縁内部に一条の浅い沈線を持つ。中には、第39図の３や第40図の４のような口唇部に鰭状の突起やリボン状の突起を付けるものがある。胴部は、屈曲が強く１のように尖り気味になるものからやや丸みを帯びるものまである。この屈曲部が最大径を計る。

XI b 類【第40図２】

口縁部の外器面に帯状の突帯をつけたものである。胴部は、大きく屈曲部が張り出す。器壁は、５mm前後をはかり、かなり薄手である。ここでは、第40図の２のみである。

XI c 類【第39図５、第40図12】

口縁は、頸部から急角度に広がるが、XI a 類よりも長く伸びる。内外器面ともに沈線などは施さない。第39図の５と第40図の12がこれに含まれる。中でも５は、頸部付近で、器壁がやや厚くなり、そこに削り込むように３条の沈線が廻されている。沈線は、途中で上下２本の沈線が丸くなって繋がり、対する沈線と共にＸ字型の文様を作り出す。胴部は、強く張りだすが、XI a・XI b 類に比べ、その位置が低くなっている。また、胴部には、一番径の張り出した位地

に沈線が薄く廻る。頸部の沈線にも胴部の沈線にも出土した当初から赤色顔料が残っており、胴部にも部分的に付着しており、器面全体を赤く塗っていた可能性がある。

XⅠd類【第39図３・５～８・13】

口縁が広く開き、土器の最大径となるもので、第40図の３・５・６・７・８・13などがこれに含まれる。口縁部は、内器面に弱い沈線を１本廻らすか弱く内傾させる。外器面にも弱い沈線を廻らせる。また、３のようにリボン条の突起をつけるものもある。口縁部から急激に窄まっていき、胴部途中で屈曲を設ける。屈曲部は、８のように単に曲げるものと、13のように２段の屈曲にするものがある。８は、屈曲部に沈線を彫り込み山型の文様をつける。削り込むように作られる。底部は、残るものがないが、窄まり方から丸底に近い平底で、狭いものであろう。

XⅠe類【第39図９～11・14・15、第40図７～13】

以上の他をこの中に含める。細分が可能である。第39図の９・10は、鉢と思われる。10は、口縁外器面に２本の沈線を区画として、間に斜格子の沈線を施す。11は、他の土器に比べ器壁が厚く、土器自体も大型のものになりそうである。やや内傾気味で直に立ち上がる。口唇部は丸みを帯びながらも平坦になって終る。14は、外器面に条痕文の残るものである。口唇部でやや外反する。かなり堅く焼かれているもので、この中に含めたが、別の時期の土器の可能性もある。15は、底部である。再下部に２本の沈線を廻らし、緩やかな屈曲で底になる。平底である。第40図の７は、口唇部内部にやや張り出しを持ち内傾する土器である。８は、やや内傾する小型の深鉢か。９は、小型の皿状を呈する。10も小形の深鉢であろうか、口縁がやや外反する。11は、鉢型のものである。内外器面ともに磨研される。12は、底部であるが、器種については、よく分からない。底部外面はよく使用されているものと思われ、擦れている。13は、ほぼ直に降りるもので底部である。外器面には、たてに撚り糸状の圧痕が残る。器種は不明である。別時期の遺物の可能性も有ったが、焼成や調整が黒色磨研土器によく似ていたのでここで取り上げた。

第XⅡ類【第41図】

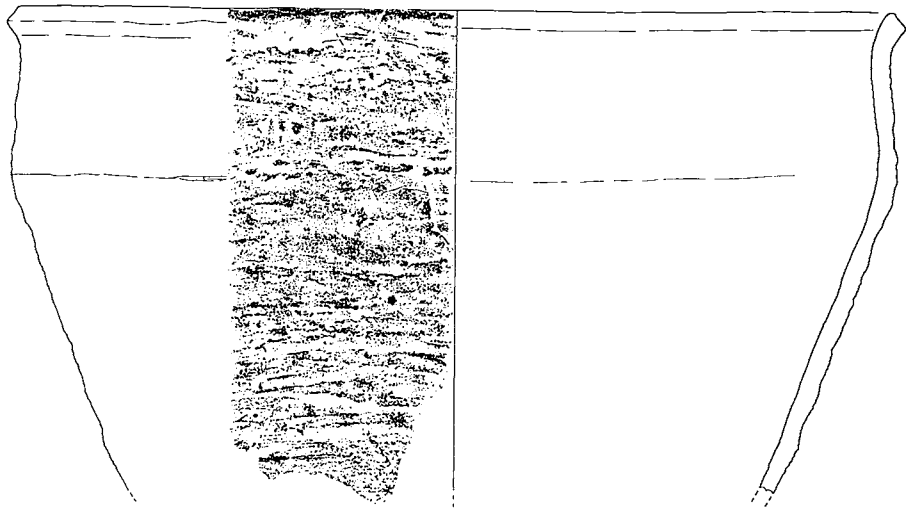
器面調整の条痕文をそのまま残すもので粗製土器である。器形により幾つかに分類される。

XⅡa類【第41図２】

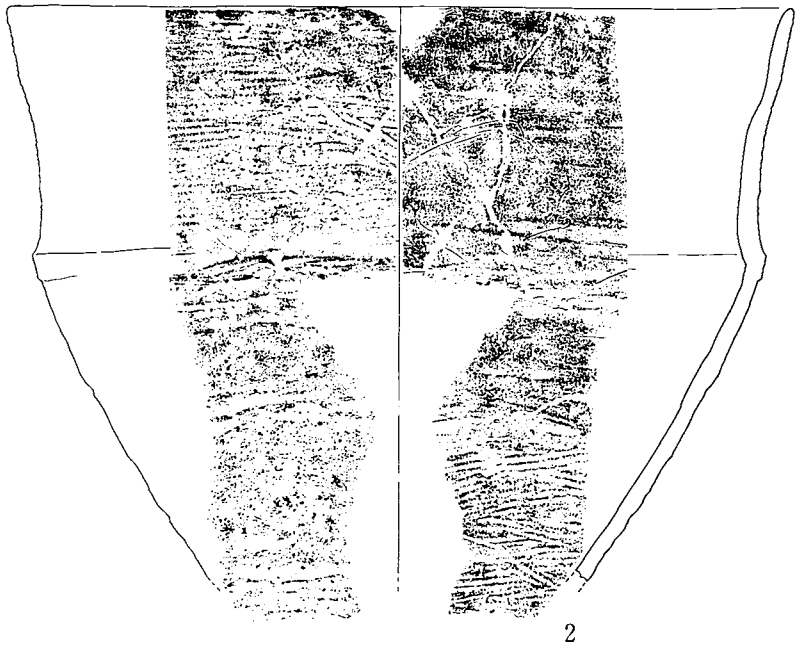
大型の深鉢である。胴部に屈曲部を持ち、ここが肩部となり、口縁まで長く徐々に外反していく。内外器面とも貝殻による条痕文が明確に残る。内器面がややナデによる調整を加えるものもある。ここでは、第41図の２、第42図の１・３、第44図の５、第43図の１などが当たる。

XⅡb類

XⅡa類に似るが、胴部の屈曲から口縁にかけて直に延びていく大型の深鉢である。同じく内外面ともに条痕文による器面調整がされる。第41図の２、第44図の１・９・７・８・10・11、第43図の２・４・６・３・５、第45図の１などがある。ただし、第44図の７・８・10・11、第



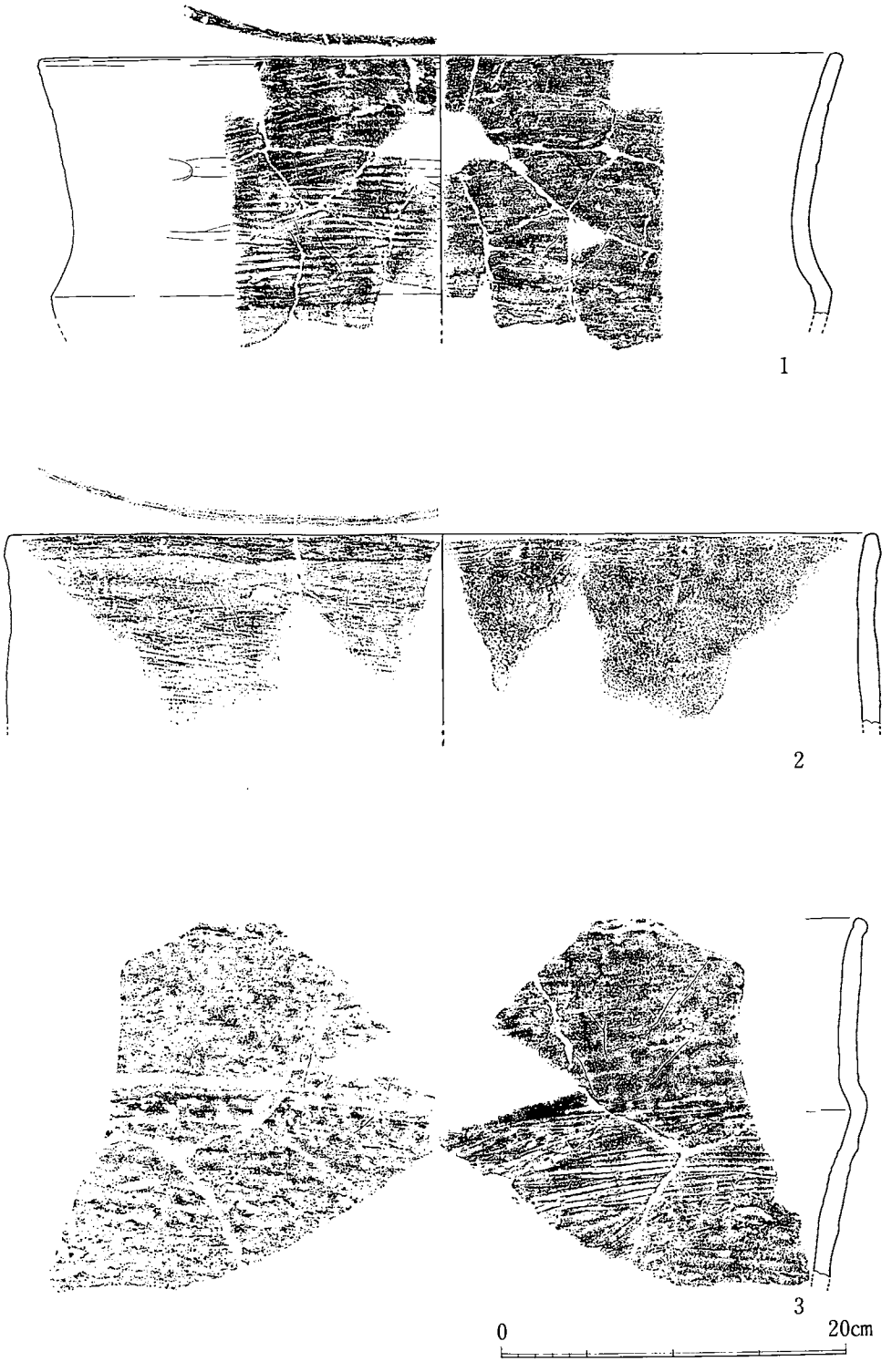
1



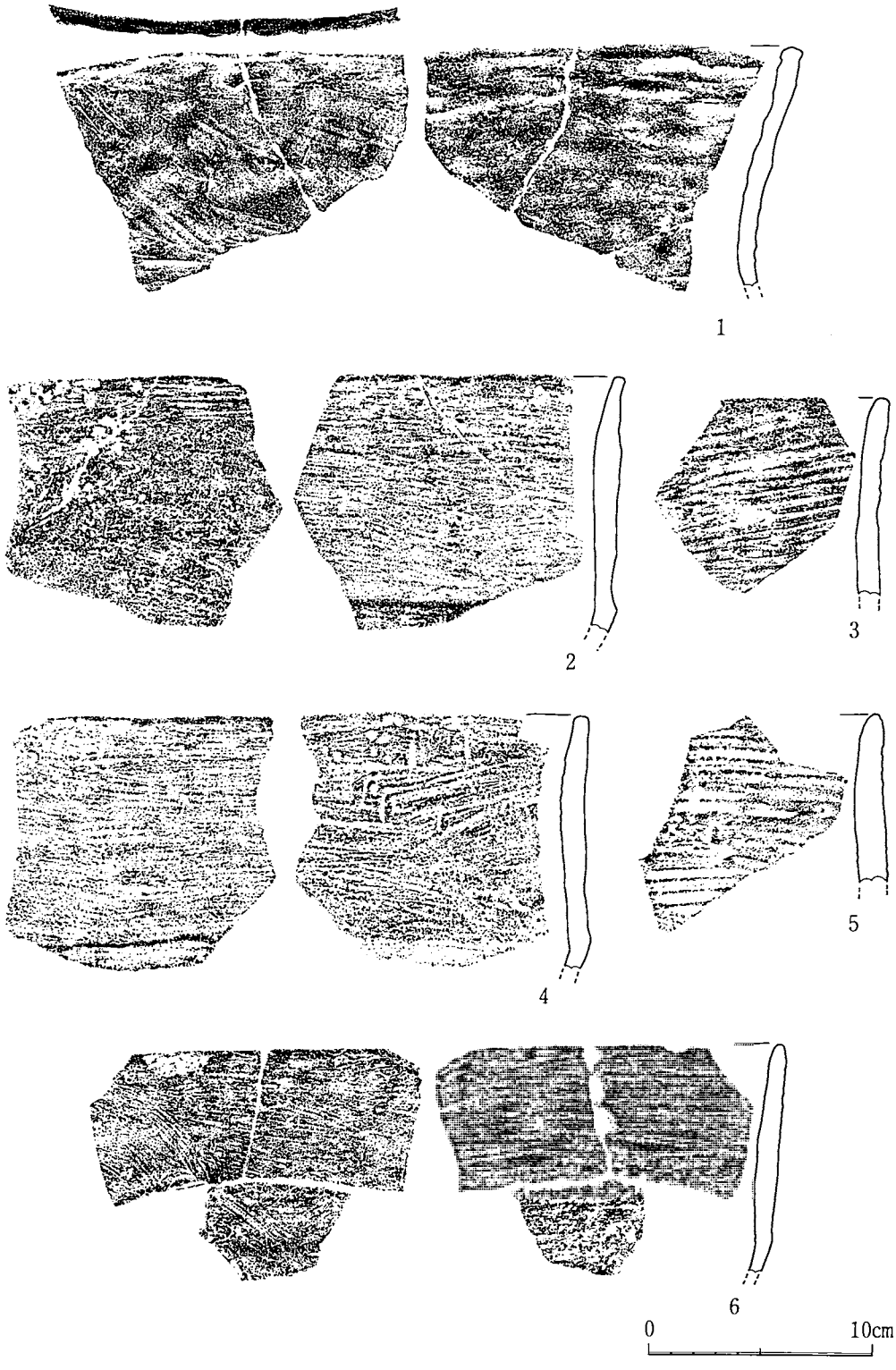
2

0　20cm

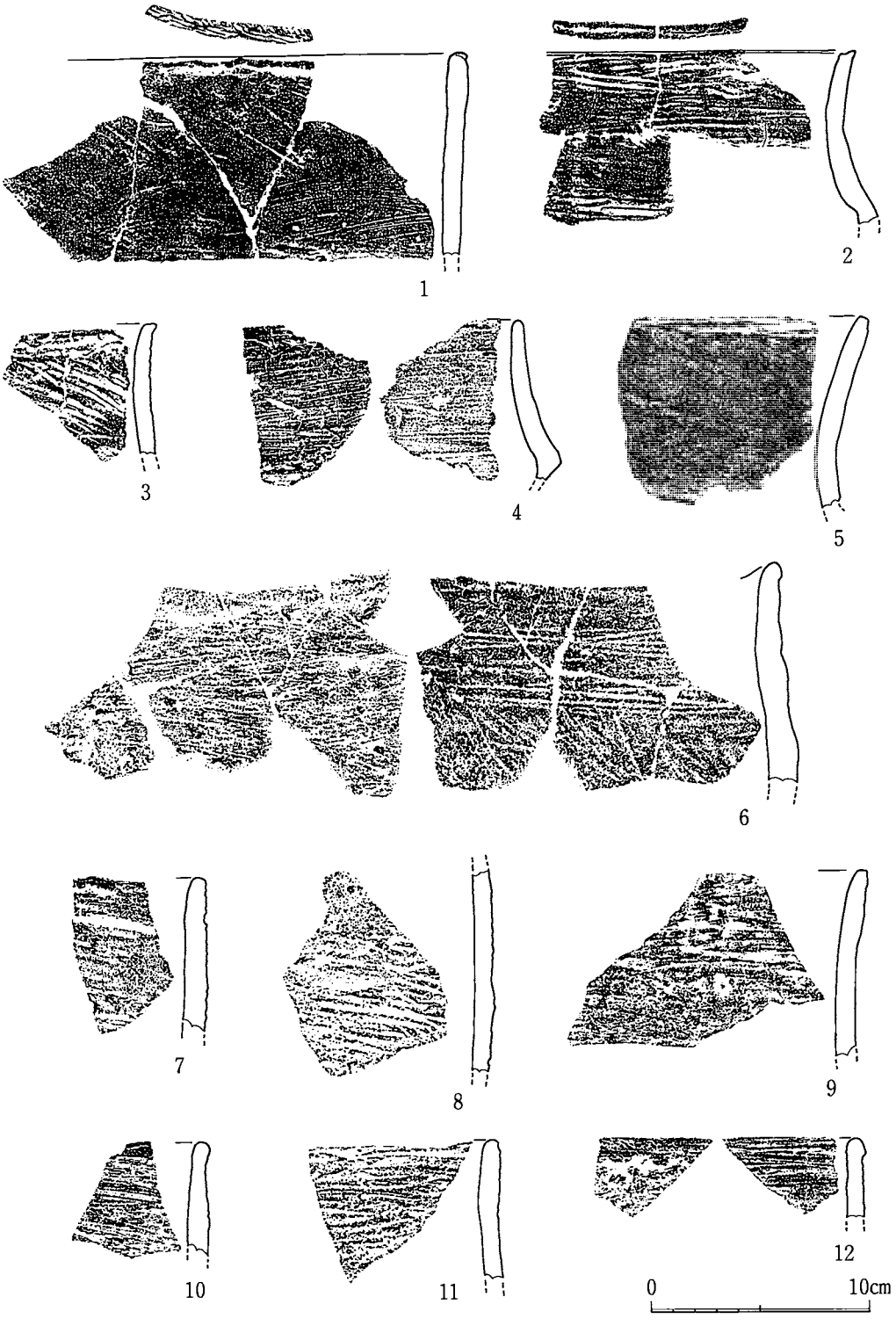
第41図　縄文土器実測図(11)



第42図　縄文土器実測図(12)



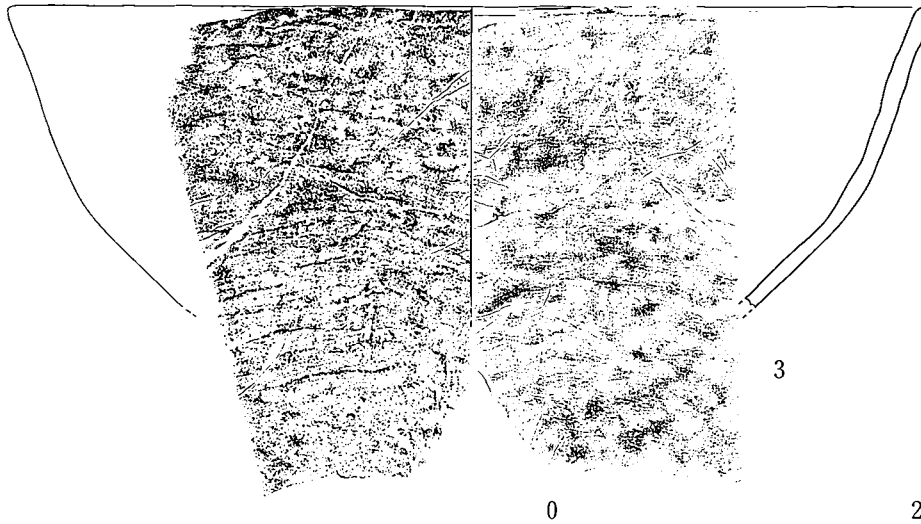
第43図　縄文土器実測図(13)



第44図　縄文土器実測図(14)

1

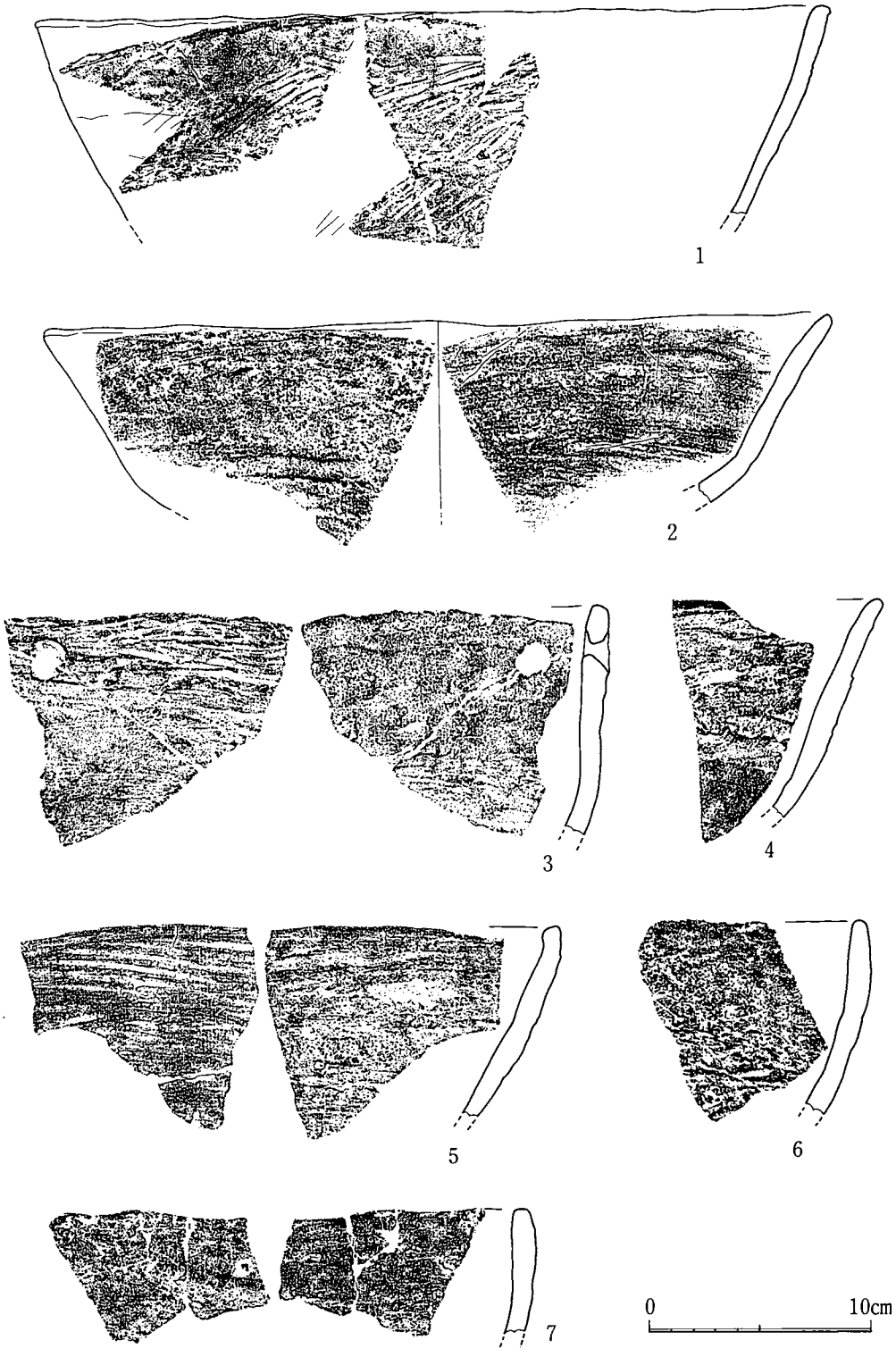
2



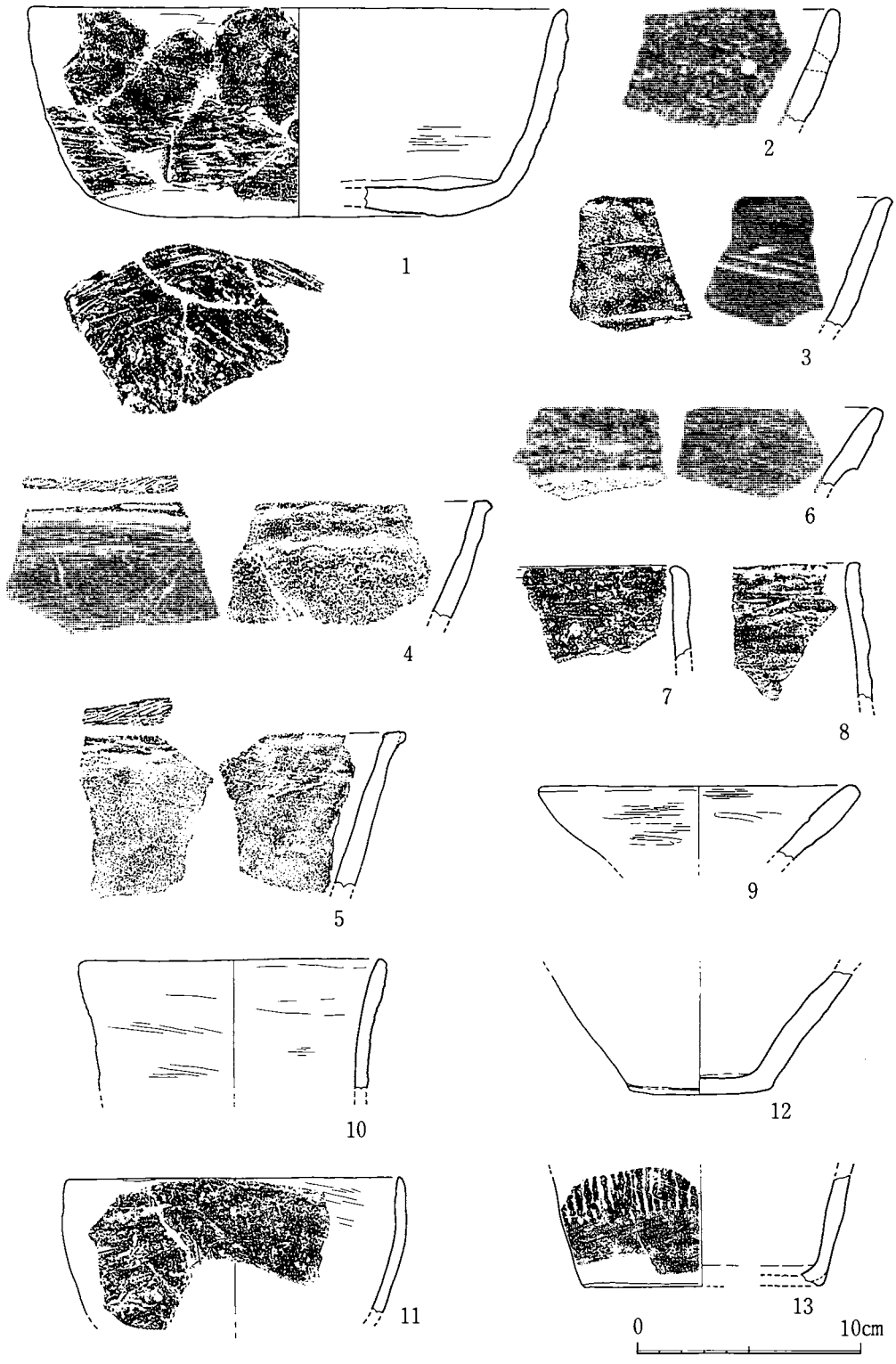
3

0　　20cm

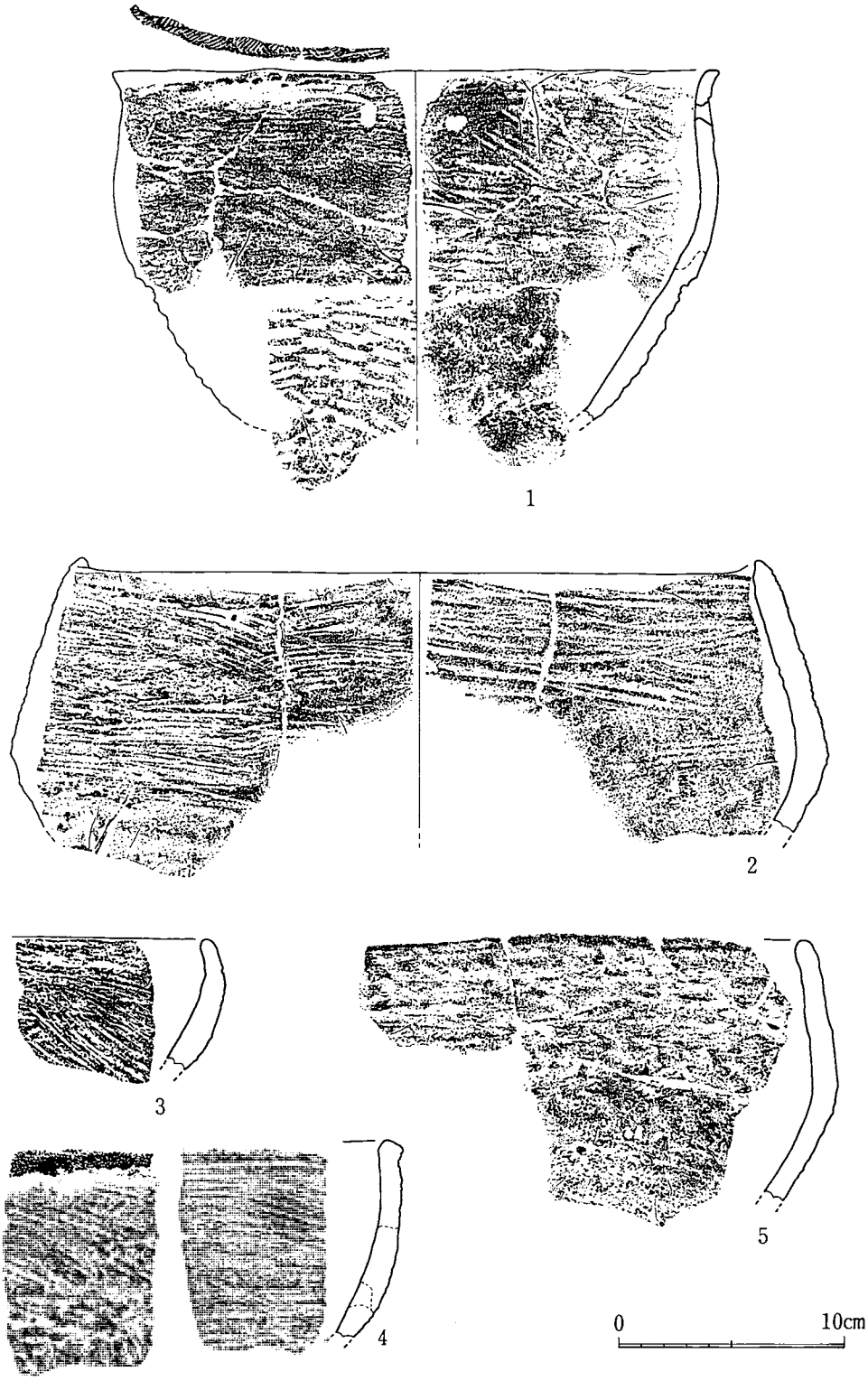
第45図　縄文土器実測図(15)



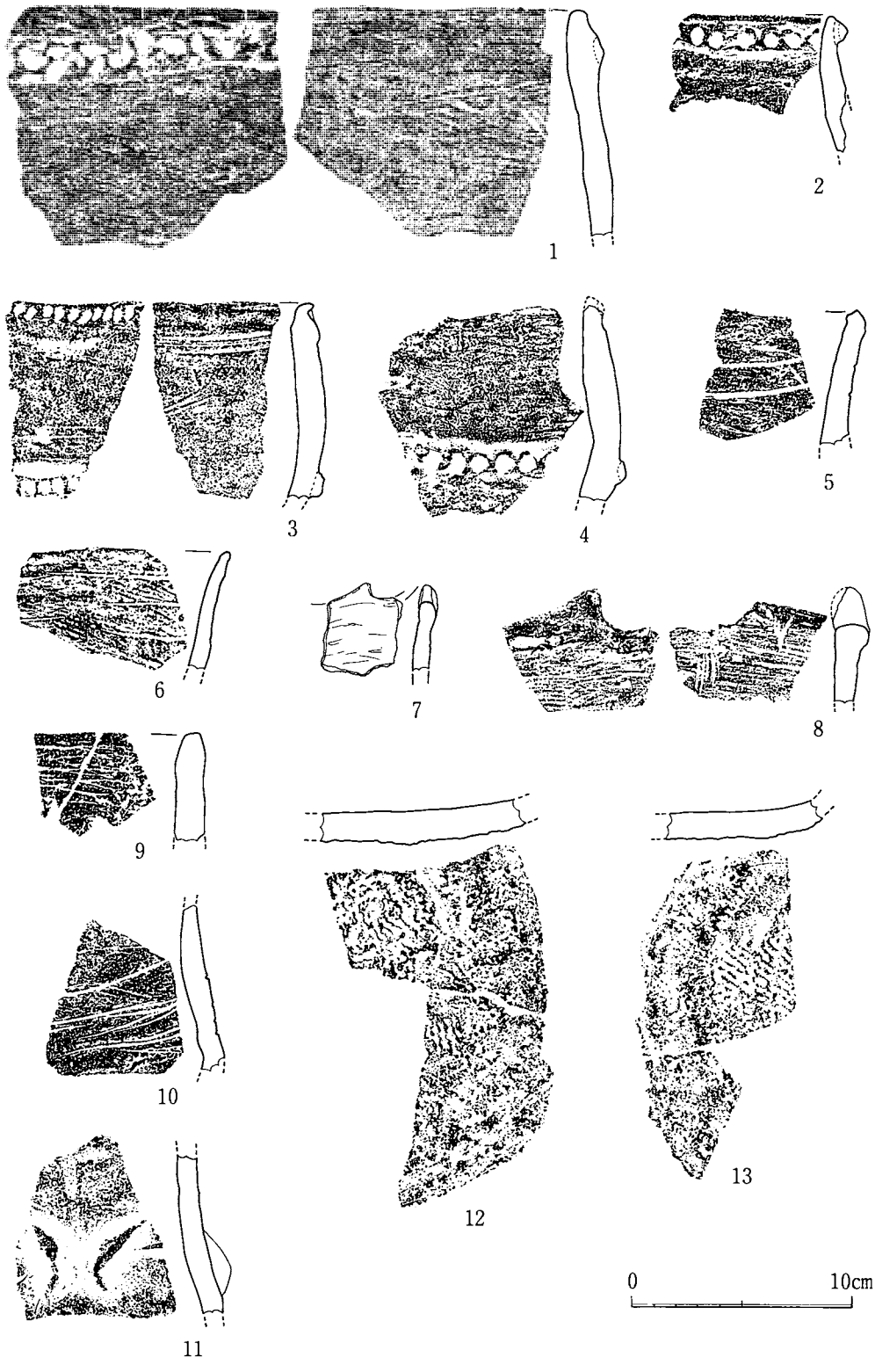
第46図　縄文土器実測図(16)



第47図　縄文土器実測図(17)



第48図　縄文土器実測図(18)



第49図　縄文土器実測図(19)

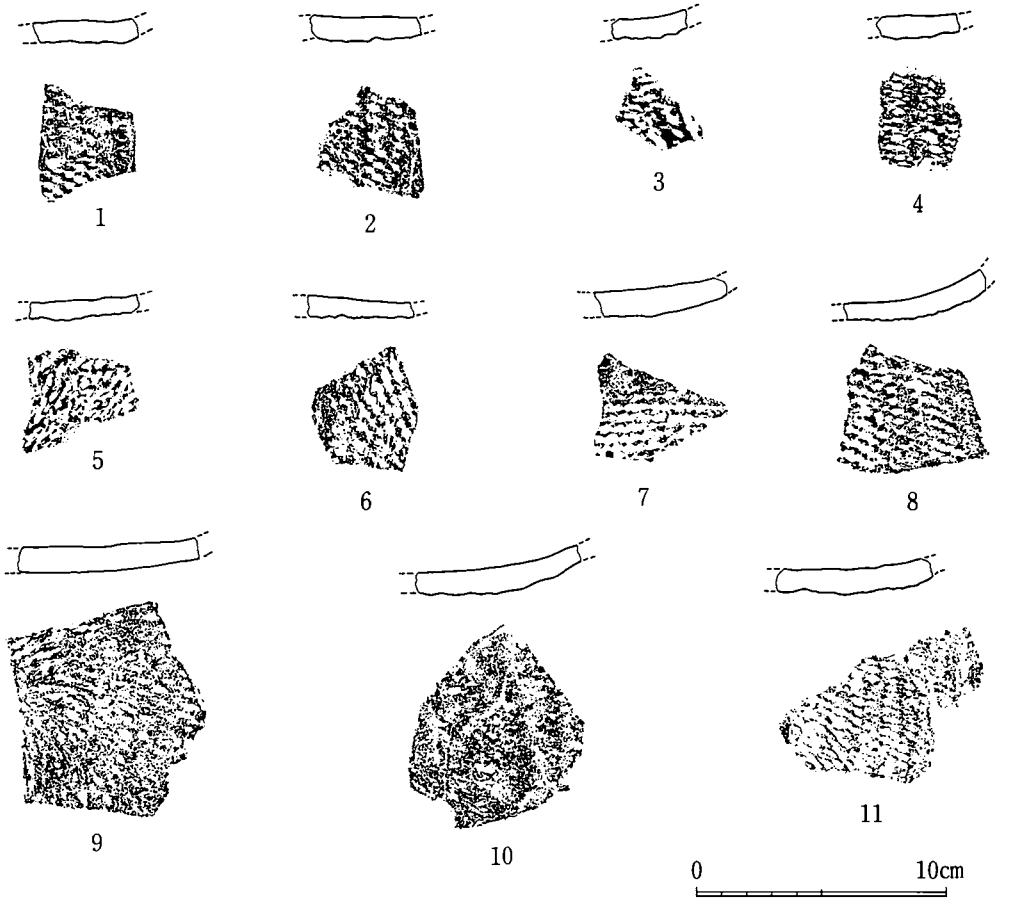
43図の３・５などは一部分のためこの中に含められるかどうかは不明である。

XⅡｃ類

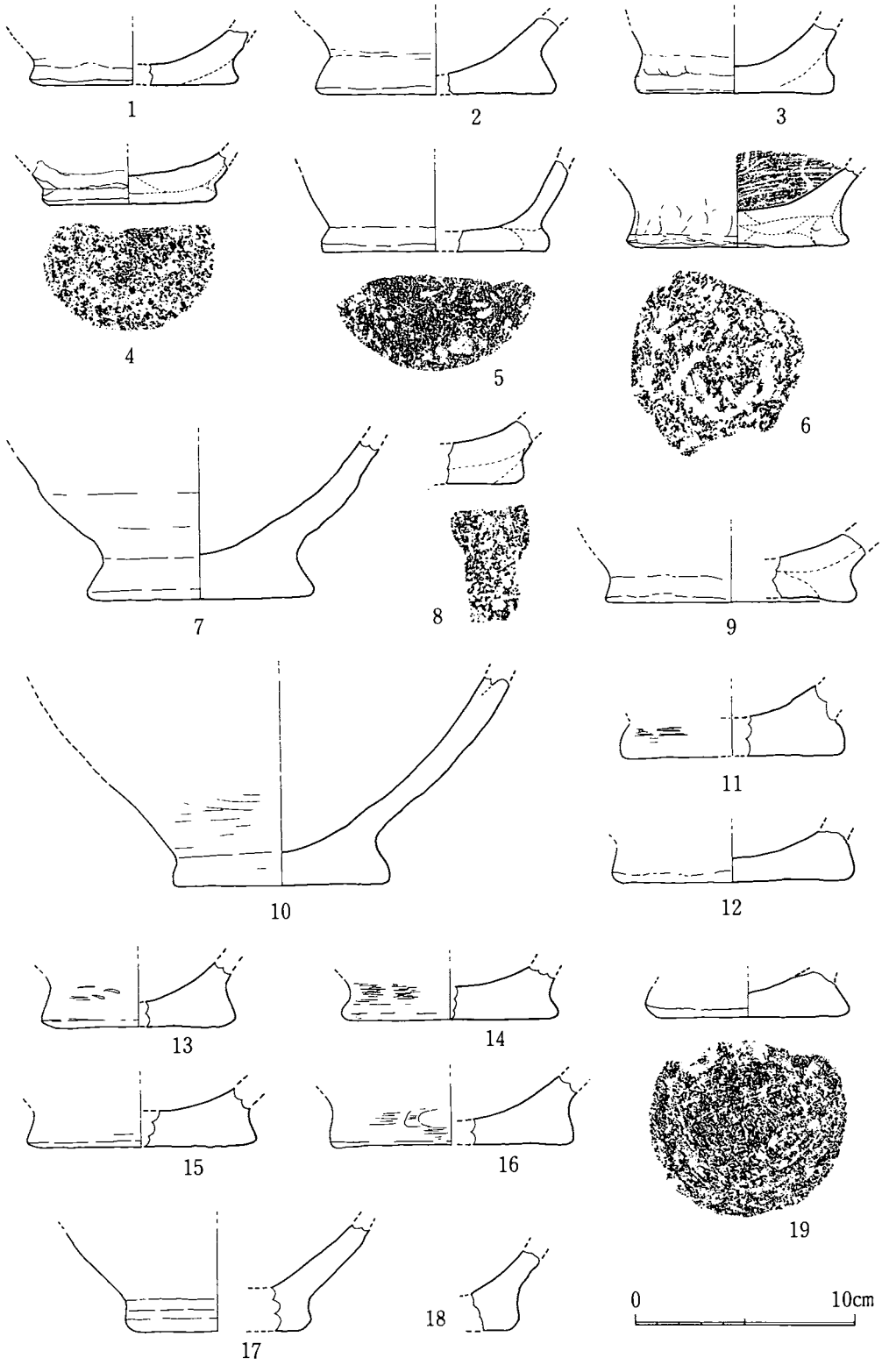
やはり、大型の深鉢土器である。胴部にやはり屈曲を持つが、屈曲部からの立ち上がる長さが短い。屈曲部から内径し口唇部近くで外反する。器面調整は、やはり上に同じくしてよいかいささか曖昧である。第42図の１、第44図の２がそれに当たる。

XⅡｄ類

胴部の屈曲がもっとも径の大きいところとなり、口縁部が内傾するものである。口縁部付近の出土が多く、大型の深鉢になるかと思われるが、明確でない。XⅡｃ類に似るが、口唇近くで外半せず、そのまま延びて終るものである。出土点数は少ない。第44図の４・６、第38図の２がそれに当たる。



第50図　縄文土器実測図(20)



第51図　縄文土器実測図(21)

XⅡe類

大型の浅鉢土器である。内器面は、丁寧に磨研もしくはナデによって調整されている。外器面は、条痕文による調整がそのまま残るものと、上部をややナデて薄く消しているものがある。第46図の２・３、第47図の２・３は、径の復元ができたもので、径36～49cmあり、大きさにやや異なりがあるようである。口縁から緩やかカーブを描きながら底部に延びていくもの、途中で緩い屈曲を持つものがある（第46図の２・４）。また、第47図の６は、口縁外側に帯状の突帯をもっている。第47図の４・５のように口唇部上部にアンペラ状の圧痕があるものもある。他に第46図の１・４・５・６・７もこの中にはいる。

この種の土器には、底部に組織痕を持つものがある。第49図の12・13及び組織痕集成（第50図）のように底部の外面に網目の圧痕がつくものである。底部中心から放射条に網目が延びるようで土器製作の際に、土器の底にアンペラ状の編み物を敷いたものと思われる。

XⅡf類

第47図の１に代表される浅鉢土器である。口縁からほぼ直に底部に向かって延び、やや上げ底気味の広い底部を持つものである。内外面とも粗い条痕文で調整されている。ただし、ここでは、この一点しか確認していない。この器種は、口縁だけではよく分からないので、破片のなかにこれに類するものがある可能性がある。

XⅡg類

中形の浅鉢で、胴部で屈曲し、口縁がやや内傾するか直になる。内外面とも条痕文により調整され、そのまま痕跡が残る。第48図の２・３・４・５がそれに当たる。

XⅡh類

刻み目突帯文を有する甕形土器である。出土点数は、少なく、図示したものだけである。第49図の１は、口縁部の口唇部近くに太い突帯を貼り付け、太い刻みを入れるものでやや荒らさを感じるものである。２は、やや小型のものと思われ、器面調整も条痕文の後をナデにより丁寧に消している。口唇部に突帯を貼り付け、太めの刻み目を入れる。３は、口唇部で、そのまま刻みというより刺突を施し、胴部では刻み目突帯を有するものである。４も３と同じものと思われるが、胴部の突帯の刻みが大きい。これらの土器は、２を除いて何れも内外器面とも条痕文による調整がなされている。その後緩いナデを行っているようである。

XⅡi類

第48図の１は、一点のみの出土で、中形の深鉢土器である。口縁部は胴部の屈曲部から内径しながら口縁近くに至り急激に外反する。胴部の屈曲部より下部に編み篭状の圧痕が残る。痕跡を観察すると、縦の骨組に交互にひごを交差させている。底部は残っていないため、不明であるが、平底にはならないようである。器壁もこの部分では、薄くなっているため、使用に際しても特別の使われ方をされたと思われる。

XⅡｊ類

口縁部に薄い沈線を施すものである。器形は、ほとんど深鉢であるが、浅鉢もあるようである。第49図の５・６・10は、数条の沈線を緩やかなカーブで描くものである。６は、薄い器壁の土器で小型の浅鉢であるが、その外器面に３条の沈線を描く。

XⅡｋ類

鰭条の突起を口縁部につけるものである。第49図の７は、小型の深鉢であろうか。８は、大型の深鉢であろう。内外器面とも条痕文が残る。

XⅡｌ類

一点のみであるが、第49図の11は、胴部の屈曲部上面に逆八の字状の突帯をつけるものである。外器面は、ナデにより調整されているが、内器面は、条痕文が残る。

XⅡ類の底部

第51図は、ＸⅡ類土器に伴う底部である。何れも平たい盤状の粘土を作り、その上にやや円周よりも縮めて粘土を積み上げて作ったものと思われる。そのため、その接合部から欠けるものが多い。また、底部面の盤状のものは、粘土紐を巴状に巻きながら丸めたもののようである。底部製作時に、下に何か敷いたものがあったようであるが、ナデにより消されているためはっきりしない。

ＸⅣ類【第52図１～３】

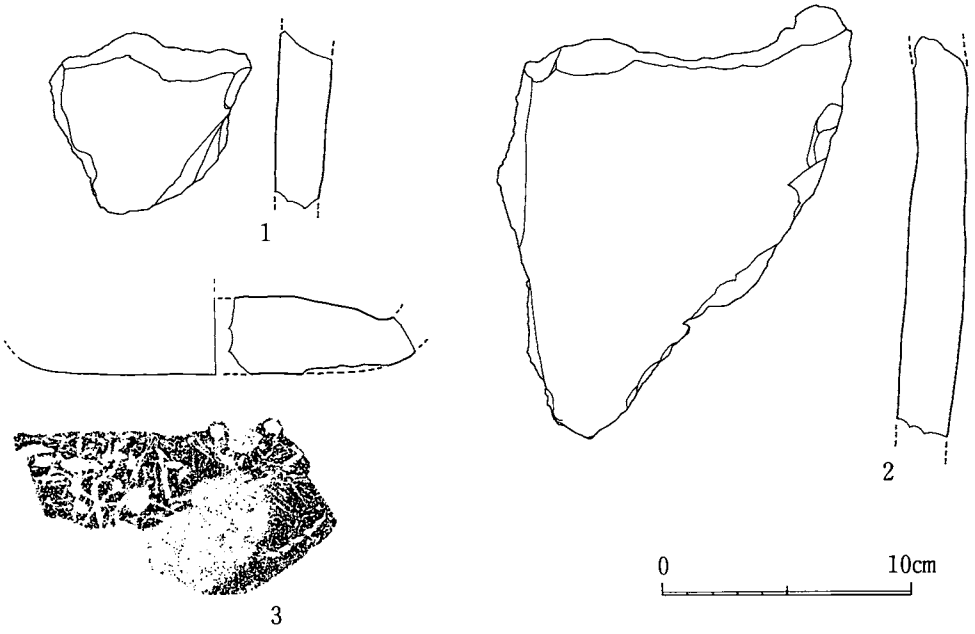
第52図１の１・２は、同一個体と思われ、同じＣ―6区から出土したものである。器壁が２cm前後を計る厚手の土器である。ほぼ直に上部から降りていくもので、この残存部分だけからみると無文の円筒形の土器のようである。径の復元は困難であるが、残された部分のカーブから考えるとかなり大きなものとなりそうである。焼成はあまりよくないが、外器面は良くナデによる調整が施されている。３は、Ａ―4区出土の土器で、器壁の厚さ３cmほどの底部片である。外器面には、製作時の植物の葉の圧痕が残る。復元径は、14.5cmほどである。

土製品【第53図】

土製品として出土したのは、円板状のものが４点、土錘が１点、土偶片のようなもの１点である。１は、土偶の一部と思われるものである。上下が欠けており、一方の欠けた面に径５mmほどの穴があく。やや楕円状の断面で指で形を整えたものと思われる。土偶とすれば、腕か足にでもなろうか。

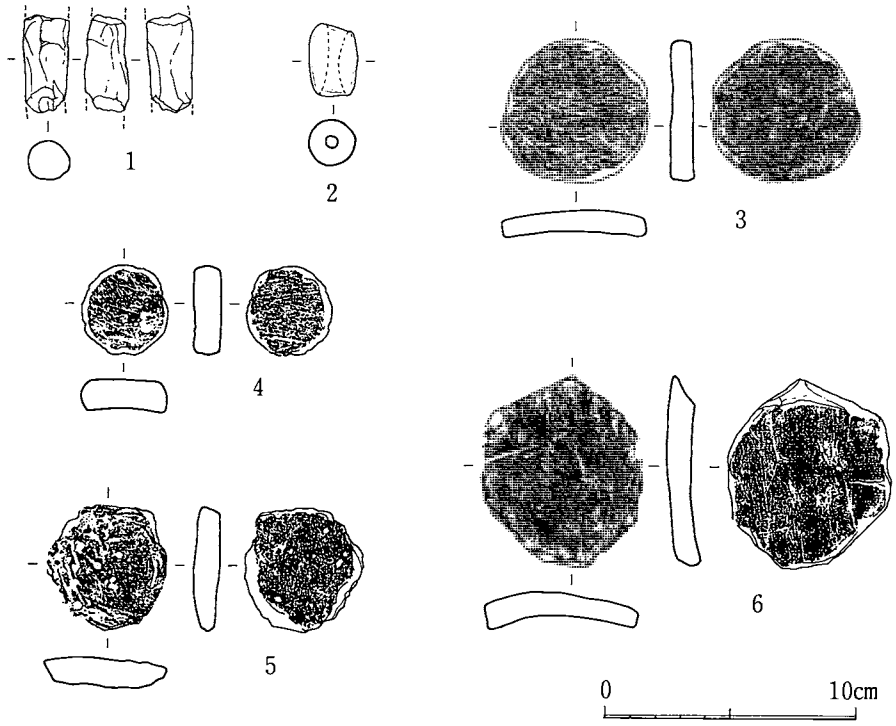
２は、土錘である。細長の団子状のものに両側から穴を通している。

３・４・５・６は、円板状の土製品で、いわゆる「メンコ」とよばれるものである。大小の差はあるが、いずれも先に取り上げた土器類を利用して作っている。３・４は、特に作りが丁寧で、縁を研いて調整している。これらの遺物は、所属時期がはっきりしないが、利用されている土器や製作されたものが縄文時代の物であったためここで取り上げた。



第52図　縄文土器実測図(22)

以上が縄文時代の土器および関連する遺物である。この中では、特に晩期のものの出土量は多かった。他の類の土器は、出土量はまちまちで数点から数10点までと差が大きい。ただ、斜面状に形成された遺跡のため、出土層位を明確にすることができなかった。出土レベルの低いものほど古くなる傾向はあるが、早期の土器は、斜面の途中からの出土であり、晩期の土器との差はほとんどない。前期の土器は、谷部の黒色土からの出土であり、これもやや流れ込んだという印象があるが、ほぼ層位的にはよいと思われる。ただ、調査者の計画が甘かったため、途中で調査を打ち切ることになり、完全に掘り切ったとはいえない。調査者として深く責任を感じている。

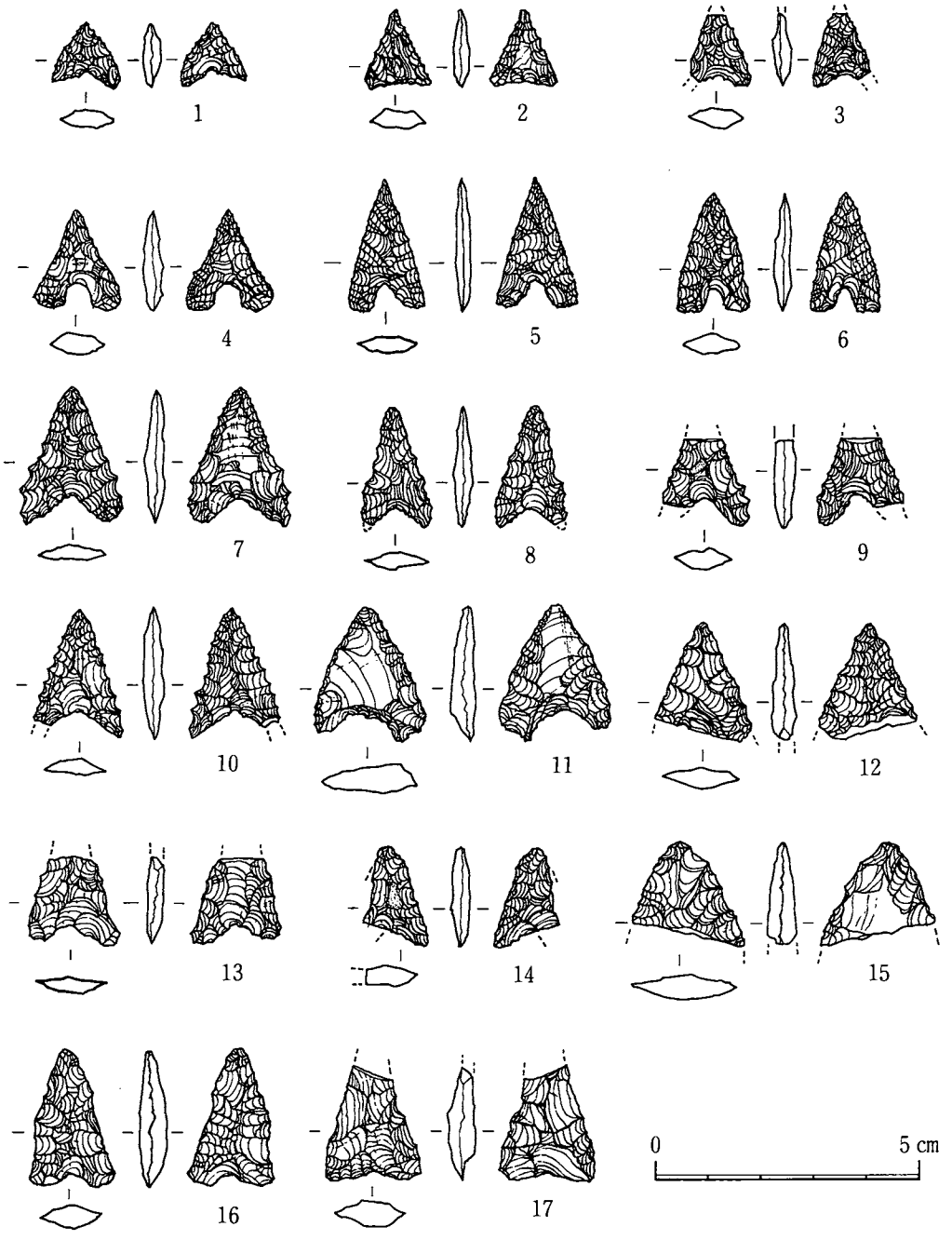


第53図　土製品実測図

（２）石器

本遺跡で出土した縄文時代の石器は、優に100点を越える。出土状況をみると、ほとんど遺構に伴うものはなく、０層からIII層までの各層に出土した。特に０層とＩ層における出土点数は相当なものである。その主な内訳をみると、石鏃17点、石匙４点、石錐６点、石錘14点、加工痕のある剝片10点、使用痕のある剝片37点、打製石斧 114点、磨製石斧５点、磨石28点、石皿６点、砥石１点、敲石32点、石核10点である。その他に分類のはっきりしないものや多くの黒曜石・砂岩などの剝片や石核が出土している。中でも打製石器類はその半数以上を占める。剝片は、各種とも石器類の製作に伴って廃棄されたものと思われる。これらの遺物は、遺構に伴うものはなく、また、斜面上に出土しているため、出土層位も明確に確定できない状態である。したがって、各石器の帰属時代を十分に決められない。そこで分類した各石器について、時代毎に記述することはせずに石器の分類項目毎に、この中で扱うことにする。

石器の分類については、様々な観点からこれまで論じられてきている。それらの考え方を参考にし、分類を試みた。これまでの分類をもとに本遺跡で出土した石器類を分けると、磨製石斧・打製石斧・石鏃・石錐・石錘・石匙・磨石・石皿・砥石・加工痕のある剝片・使用痕のある剝片などがある。特に分布の上で特徴らしきものはみられないが、レベルによる差が若干あるようでもある。



第54図　石鏃実測図

石鏃【第54図】

石鏃は、17点出土した。様々なタイプに類別ができる。分布状況は、A－5・7区、B－4・5・6・7区、C－6・7区に出土し、特にB・C区に多く出土している。これは、縄文土器の出土地点とさほど違わない。これは、斜面地の内でも傾斜の緩やかになる部分とも一致する。

出土層位は、１層から２層にかけてである。石材は、黒曜石とチャートが利用される。黒曜石は、姫島産と桑木鶴産かと思われ、かなり質の良いものもある。

出土した石鏃は、A類：平基無茎鏃、B類：凹基無茎鏃に分類される。B類は、さらにａ～ｆの５類に細分できる。

A類

A類の石鏃は、１点のみの出土である。２は、黒曜石製で、平面形が二等辺三角形を呈するが、正三角形により近い形である。片面に主要剥離面を一部残す。

B－ａ類

B－ａ類は、正三角形を呈し、長さ 1.5㎜ほどの小型のものである。１点のみの出土である。１は、黒曜石製である。

B－ｂ類

B－ｂ類は、抉りがU字形を呈し、切先に対して基部の大きさが大きい。いわゆる「鍬形鏃」とよばれるものである。４の１点のみの出土である。４は、黒曜石製である。

B－ｃ類

B－ｃ類は、二等辺三角形を呈し、底辺に比して高さの高いものである。抉りは、U字形を呈する。５・６の２点が出土している。

B－ｄ類

B－ｄ類は、二等辺三角形を呈し、抉りがV字形で基部が尖るものである。３・７・８・９10の５点出土している。３は、やや小振りのもので３号集石内で出土している。

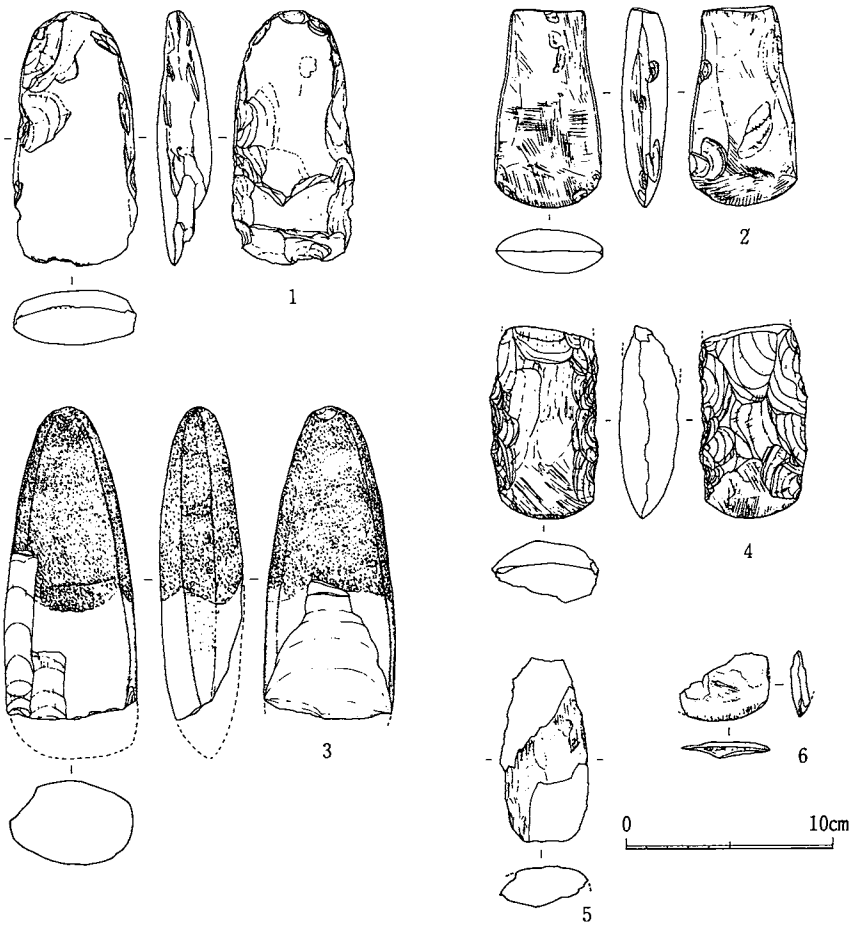
B－ｅ類

B－ｅ類は、正三角形に近いもので、抉りが緩やかなカーブを描く。11・12・15の３点が出土している。黒曜石・チャートなどが使用される。11は、両面に主要剥離面を広く残し、側面を僅かに剥離する技法で製作している。12は、両面の剥離で丁寧に作っている。15は、片面に主要剥離面を残す。

B－ｆ類

B－ｆ類は、上の分類以外のものを入れている。13は、刃部が欠けている。基部の作りがあまり丁寧でなく、抉りも浅い。14は、半分にかけているもので、片面に自然面を残す。形態的には、B－ｄ類に含まれるかも知れない。16・17は、基部の抉りの浅いもので、形の歪みの大きいものである。技法的に他のものに比べ劣るようである。形態的には、縦の長い二等辺三角形を呈する。

石鏃の時代的な差異は、層的にあまり明確な出土がないため、特定できない。形態的には、１・２・４の石鏃は、縄文時代早前期のものの可能性がある。他のものは、縄文時代後期以降のものであろう。



第55図　磨製石斧実測図

磨製石斧【第55図】

出土点数は6点と少ない。石材としては、流紋岩・安山岩・頁岩などが利用される。1は、流紋岩製で、表面がかなり風化している。敲打により器形を整え、刃部をごくわずかに磨研して成形している。風化の度合いが大きいため、磨研の実際は良く分からない。出土地点は、C－5区で、II層の一括取り上げである。2は、安山岩製で、非常に良く磨研されている。やや片刃気味である。出土地点は、A・B－5・6区で、II層の一括取り上げである。3は、頁岩により作られており、啄彫による調整痕が残る。刃部は欠けている。太型の蛤刃であろうか。出土地点は、C－7区である。4は、安山製で、体部は、打ち欠いた跡が残り、刃部が磨研されている。これは、本来そういうふうに作られたものか、作りかけのものか良く分からないが、使用痕の存在を考えると本来局部磨製的に作られていた可能性がある。5は、体部のごく一部であるが、形態的に磨製石斧と考えられたのでここにいれた。表面は、打ち欠いて形態を整えた後に、磨研を加えている。安山岩製であろう。6は、刃の先のみである。使用により刃の部分が剝落したものであろう。丁寧に研磨され、表面には光沢がある。一方使用痕が切先部に刃

に対して垂直に残る。流紋岩製であろう。これらの石斧は、それぞれに形態的に異なるもので、一点ごとに分類されよう。

打製石斧【第56図～第71図】

打製石斧として、認められたものは、114点あり、石器の中ではもっとも多い。石材としては、砂岩がほとんどで、数点粘板岩のものもある。

出土層位は、大部分が０層とＩ層であり、縄文時代晩期の土器の出土に重なる。また、分布範囲も調査区の大部分に渡るが、特にＢ・Ｃ－６・７に集中する傾向がある。

形態上の特徴により分類したが、その基準として、打製石斧の大きさ、刃部の形態、頭部の形態を利用した。実物と実測図を見比べながら分類したが、必ずしも完形品ばかりではないので不正確なものもある。石器の観察表においては、さらに残存した部分の分類や石斧の反りを載せている。

なお、第71図は形態の分かりにくいものが多かったので、分類からはずしている。

形態分類では大きくはＩ類からⅣ類の４つに分けた。中をさらに細分し、12形態となった。以下にその概要を述べる。

Ｉ類

いわゆる短冊型といわれるもので、頭部幅と刃部幅がほぼ同じ、両側縁にえぐりが入らないものである。頭部の形態、刃部の形態、横断面の厚さなどからＡからＥまでの５類に分けられる。

Ｉ－Ａ類【第56図～第58図、第60図１・２、第61図８】

長さに比べて幅がＩ－Ｂ類より広く、厚さの薄いもので、横断面が薄いレンズ状をなす。頭部はやや丸みを帯び、刃部は先がとがり気味の弧状を呈するものである。長さが約9.8cm～約13.5cm、厚さが約1.0cm～約2.0cmのものがある。大きさに幅があり、さらに細分可能かも知れない。

Ｉ－Ｂ類【第59図～第60図３・６・７・８、第62図４】

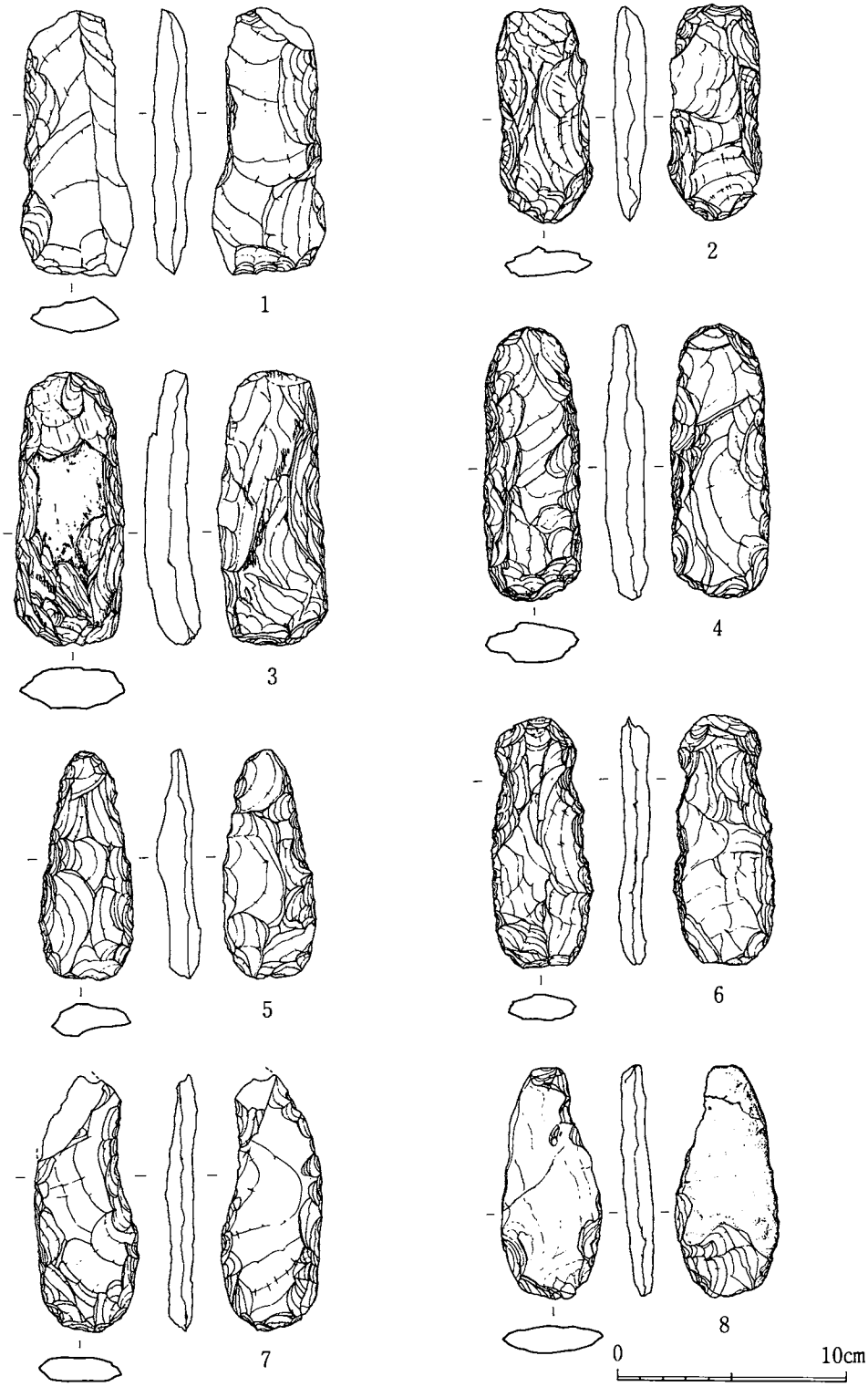
長さに比べて幅が狭く、厚さの厚いものである。横断面は厚いレンズ状をなす。頭部は弧状のものもあるが、やや角ばるものが多い。刃部は完形のものがほとんどないのでよく分からないが、弧状を呈するようである。長さは推定で約13.0cm～約15.0cm、厚さは約2.0cm～約2.6cmのものがある。

Ｉ－Ｃ類【第60図４・５～第61図１～４・６】

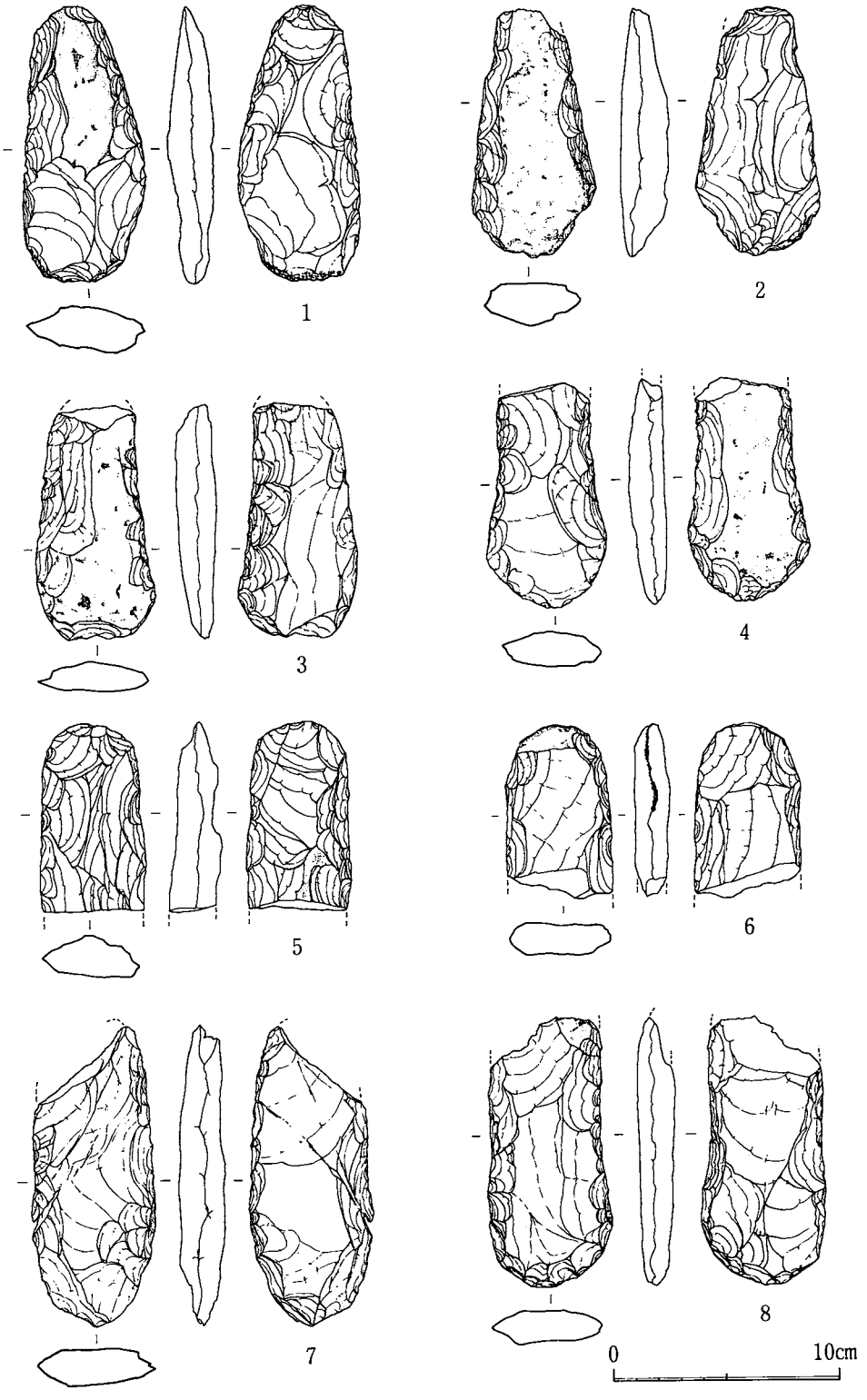
長さに比べて幅が広いものである。刃部が弧状を呈し、頭部は角ばるものである。長さは推定で約16.0cm前後であろう。厚さは約2.7cm～約2.8cm、幅が7.0cm前後である。

Ｉ－Ｄ類【第61図５・７～第62図２・５～９】

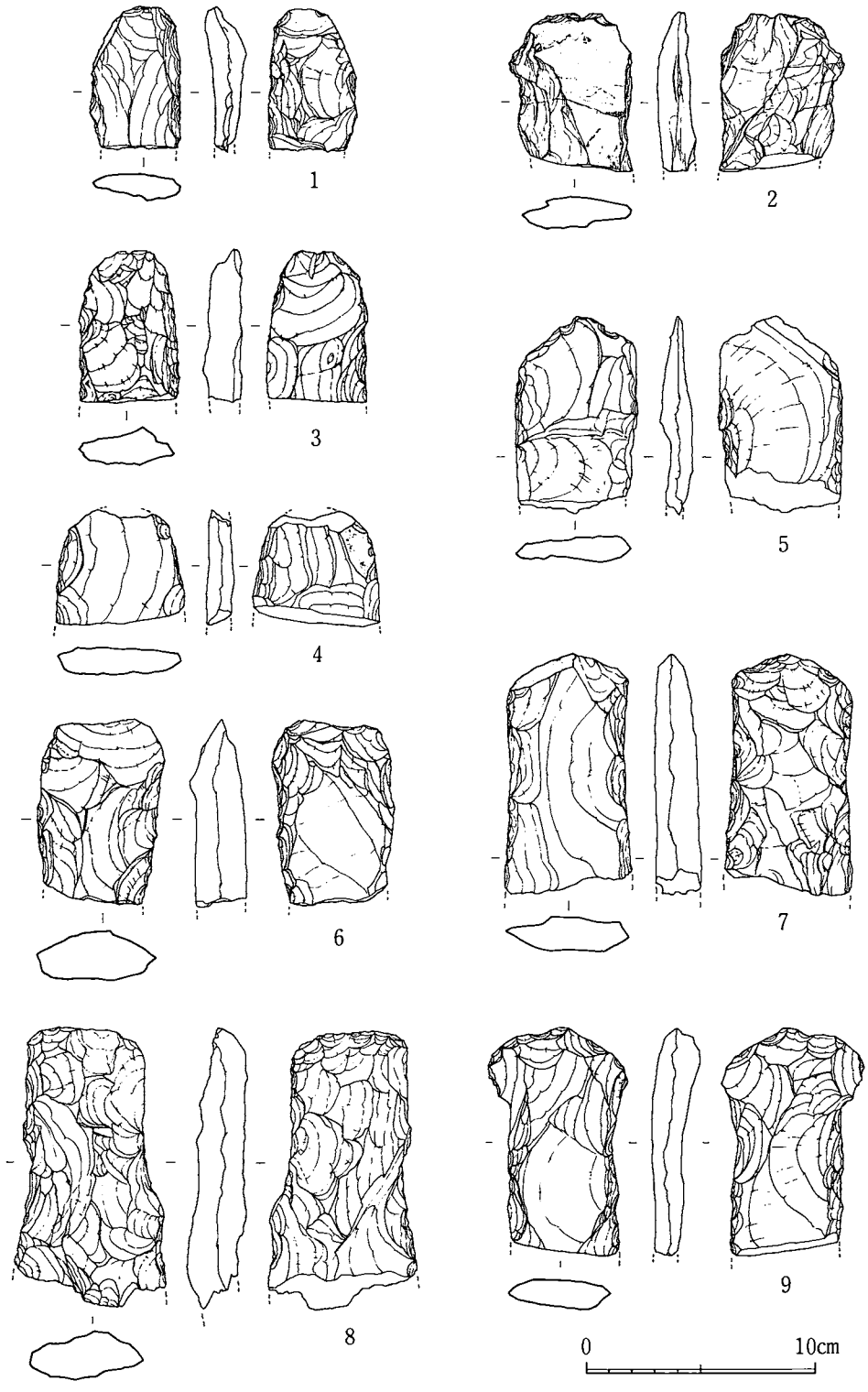
第56図　打製石斧実測図(1)



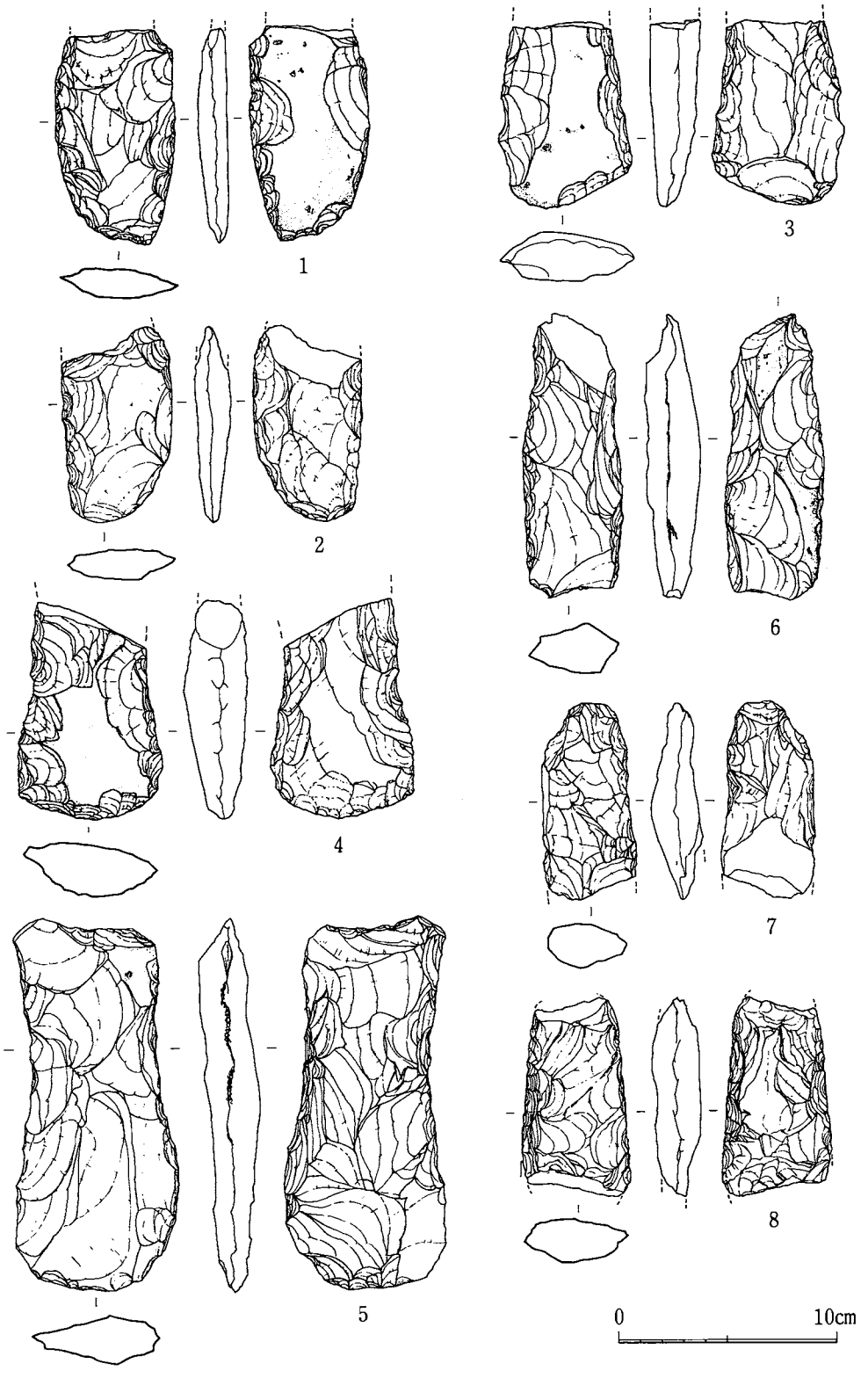
第57図　打製石斧実測図(2)



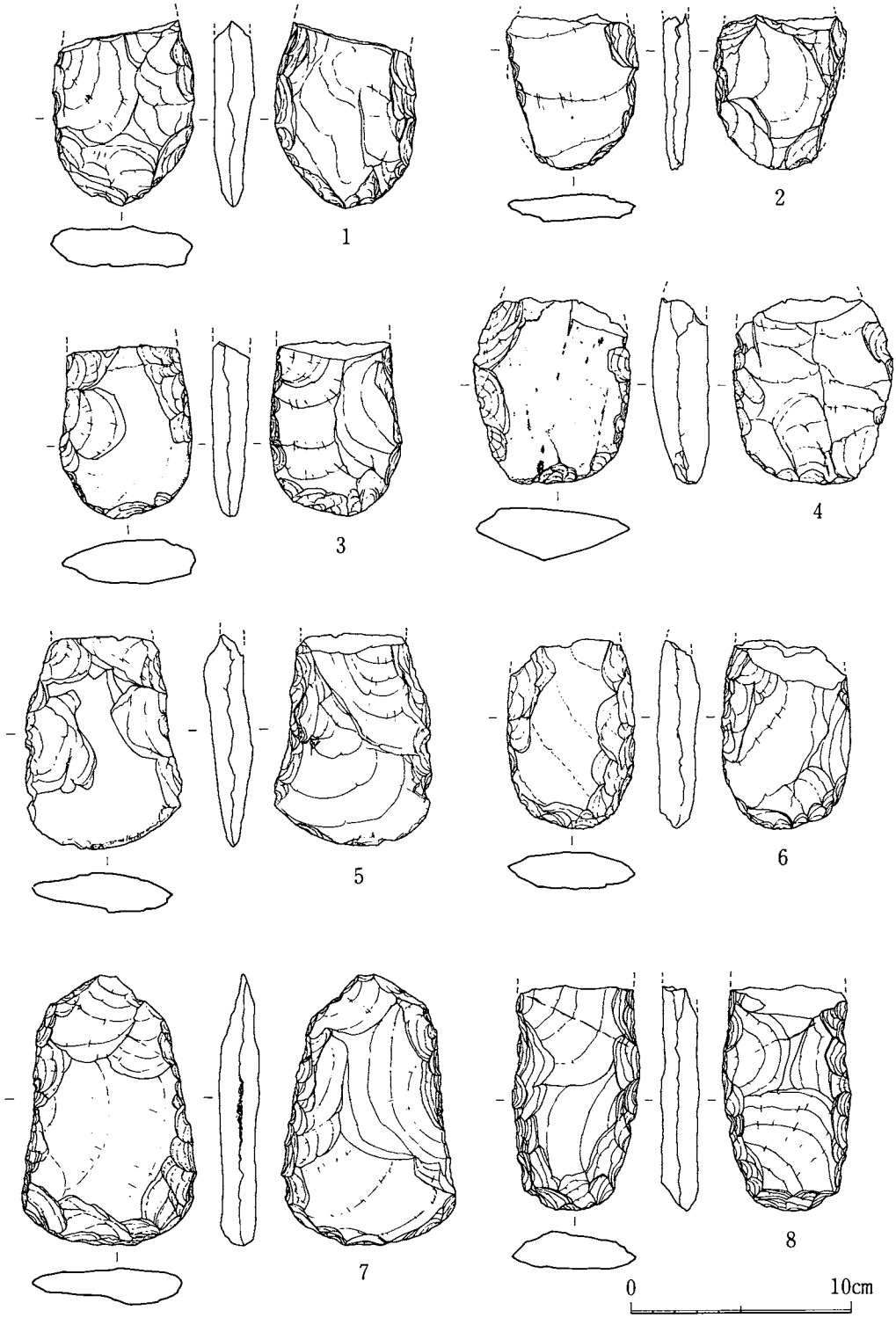
第58図　打製石斧実測図(3)



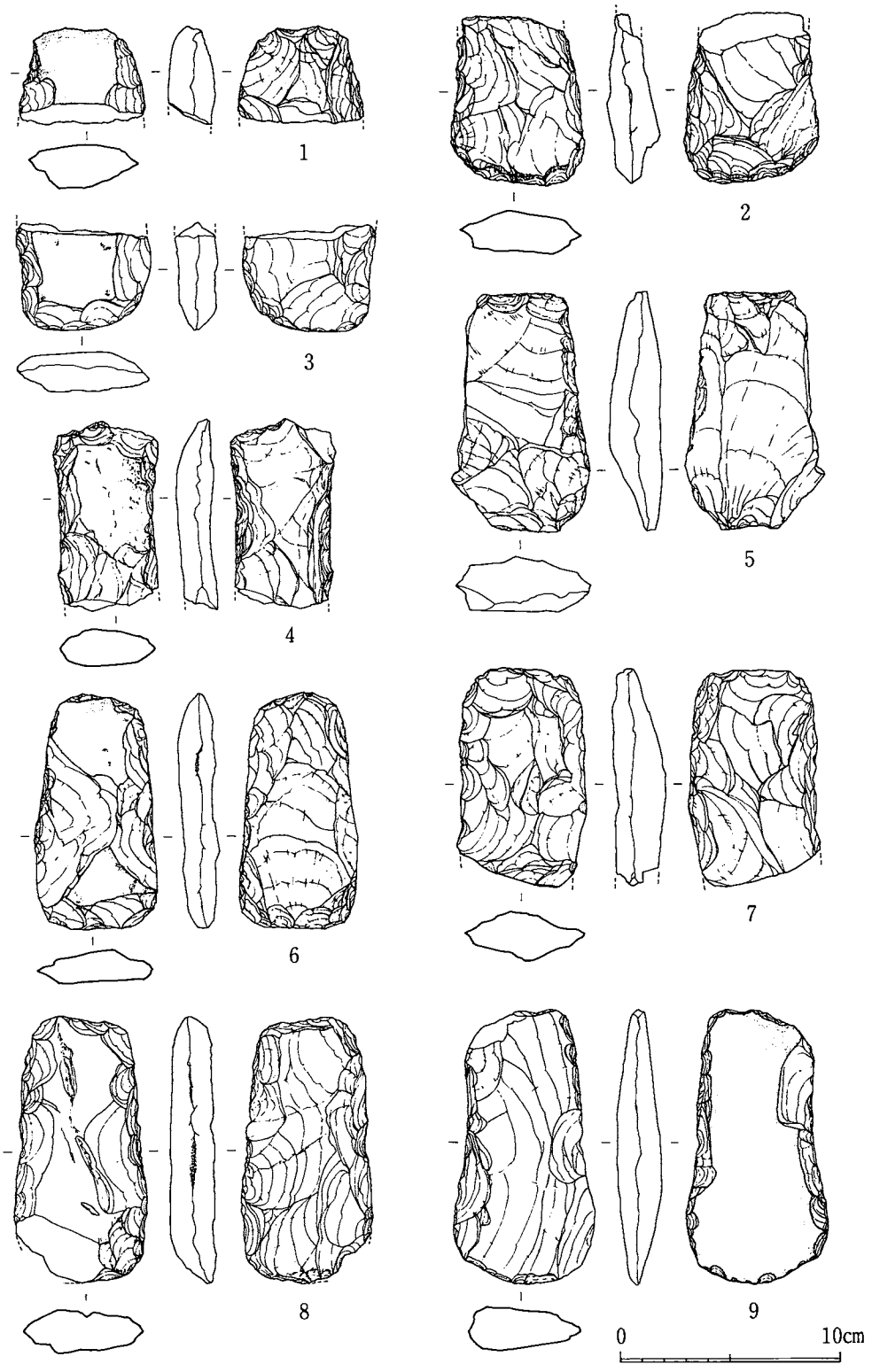
第59図　打製石斧実測図(4)



第60図　打製石斧実測図(5)



第61図　打製石斧実測図(6)



第62図　打製石斧実測図(7)

長さに比べて幅の広いもので、全体的にずんぐりした平面形を呈する。頭部、刃部ともに弧状を呈する。頭部は場より刃部幅が広がる。長さが10.6cm～12.3cm、幅が5.4cm～6.4cmのものである。

Ｉ－Ｅ類【第63図１～６】

頭部が直線的に角張るもので側縁部も直線的なものである。厚さも約1.0cm～約1.5cmとかなり薄く作られている。刃部は確認できなかったので不明であるが、多分角張ると思われる。特に第63図の１は、非常に丁寧に成形されたもので石材も他と異なり、粘板岩が使用されている。

II類

分銅型ではないが、頭部側に抉りを入れるものである。抉りの入り方からＡ・Ｂの２類に分けられる。

II－Ａ類【第63図７～10、第64図１～４】

かなり深く両側縁に抉りの入ったものである。頭部は丸みを持ち、刃部は欠損しているものが多いが、しゃもじ状になると思われる。最大幅はこの刃部の方で、約7.0cm～約8.0cmになろう。抉り部は柄を装着するために作っているものと思われ、この抉り部で折れているものが多い。

II－Ｂ類【第64図５～10、第65図１～３・６、第68図５～８】

頭部に弱い抉りを入れるもので、頭部が弧状または直線状を呈する。刃部は完形が少ないが、II－Ａ類と同じく、しゃもじ状を呈している。厚さが1.5cm前後のものが多い。

III類

頭部幅が刃部幅に比べて小さく、場合によっては尖るものである。横幅と刃の形からＡからＣの３類に分けられる。

III－Ａ類【第66図、第67図１～５】

頭部が尖るか、僅かの平坦面を持つものである。刃部幅に比べ長さの長いものである。刃部は直線に近い弧状を呈している。長さは、約15.0cm～約17.0cmと大きいものと約11.0cmと小振りのものがある。幅は約6.5cm～約7.0cm程である。

III－Ｂ類【第67図６・７】

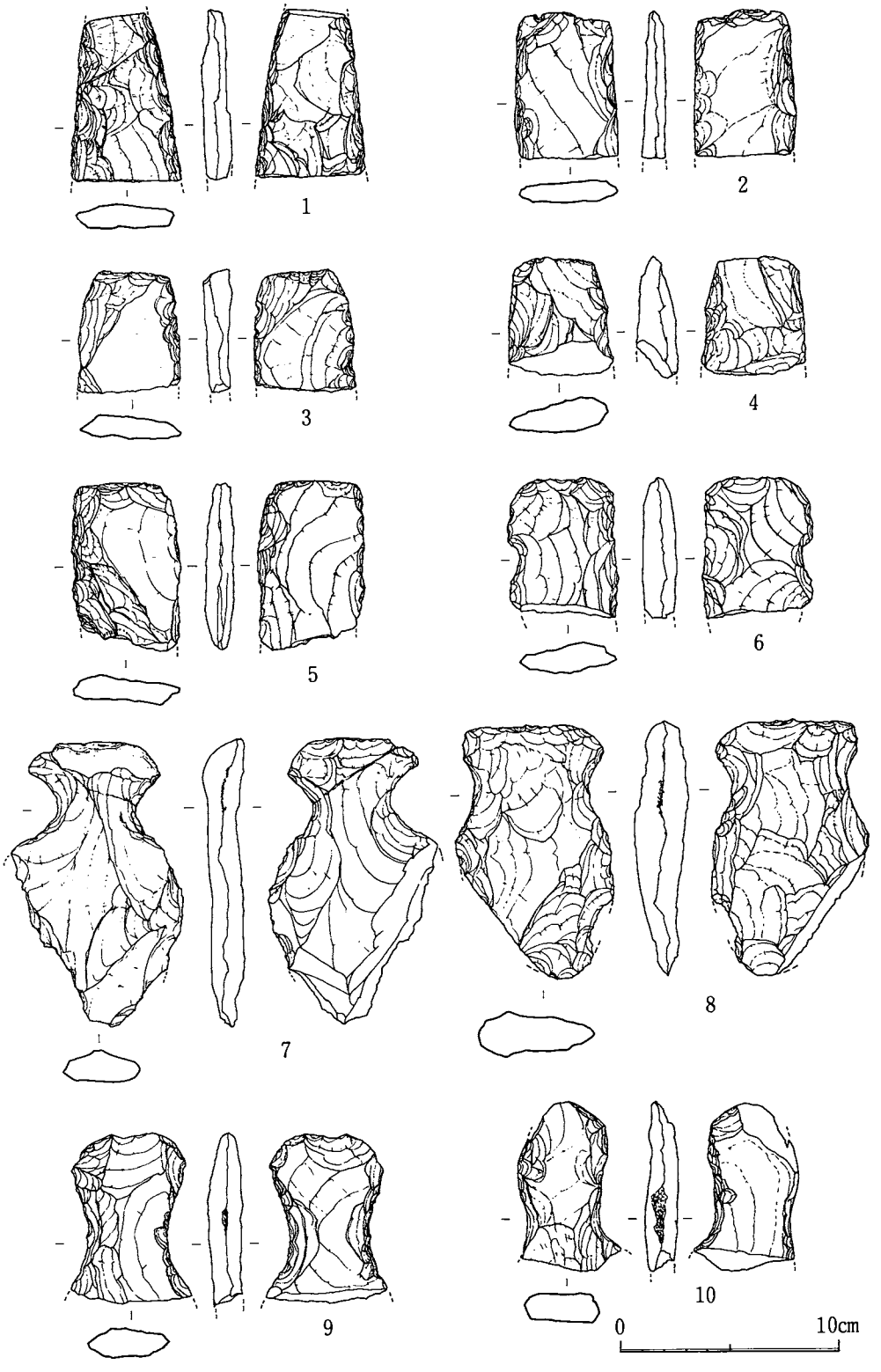
III－Ａ類よりも長さに比べて幅が大きいもので、刃部が直線となっている。長さが10.8cm～12.2cm、刃部幅が6.5cm～6.9cmとなるものである。

III－Ｃ類【第68図１～３】

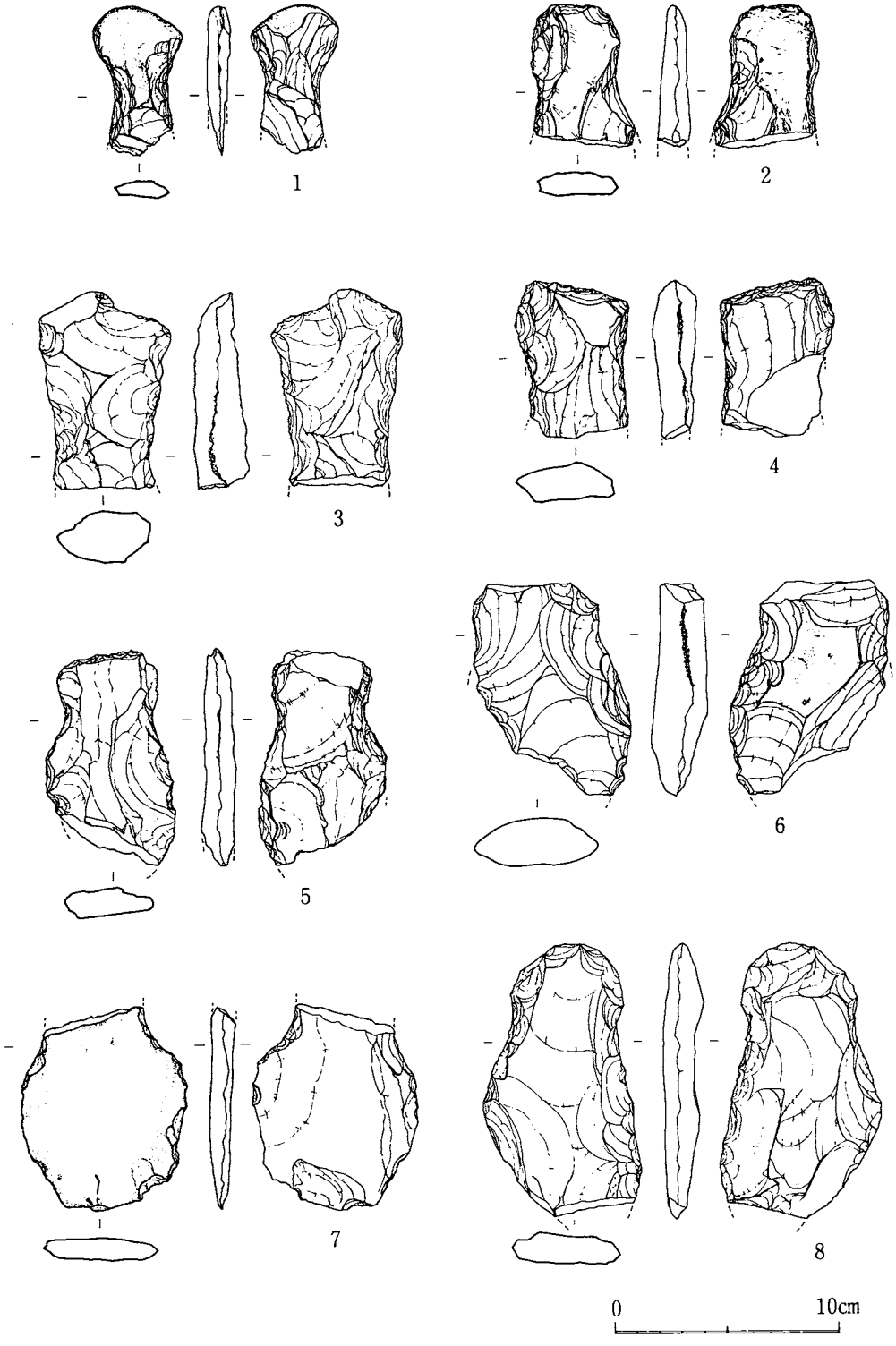
II－Ｂ類に似るが、頭部が尖っている。刃部はしゃもじ状になっている。長さが約10.0cm～約11.0cm、幅が約4.0cm～約5.0cmとなっている。

IV類【第69図、第70図】

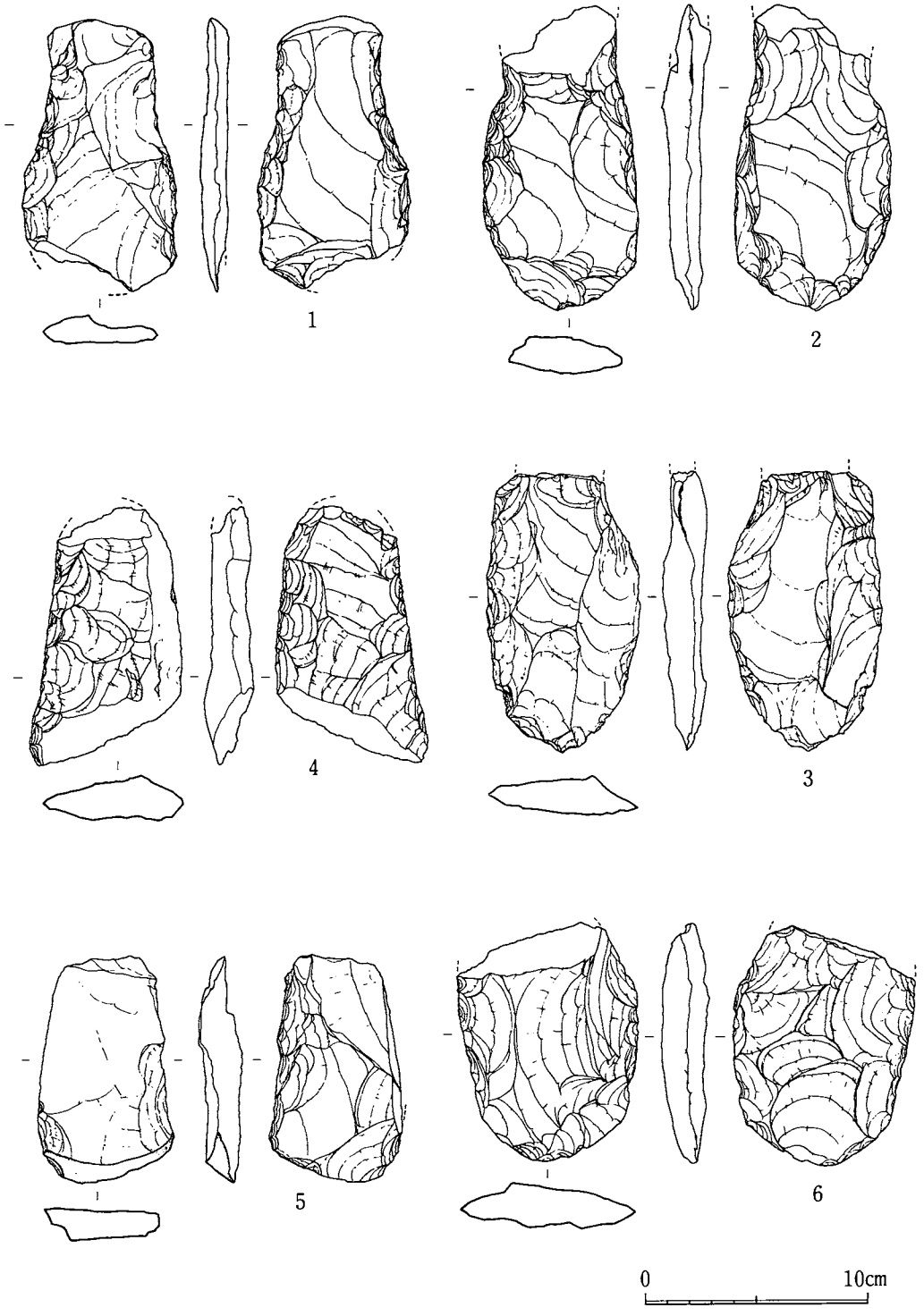
これは、形態的にはこれまで述べたものに似るものもあるが、大きさの違いから分けた。ここではさらに２類に分ける。



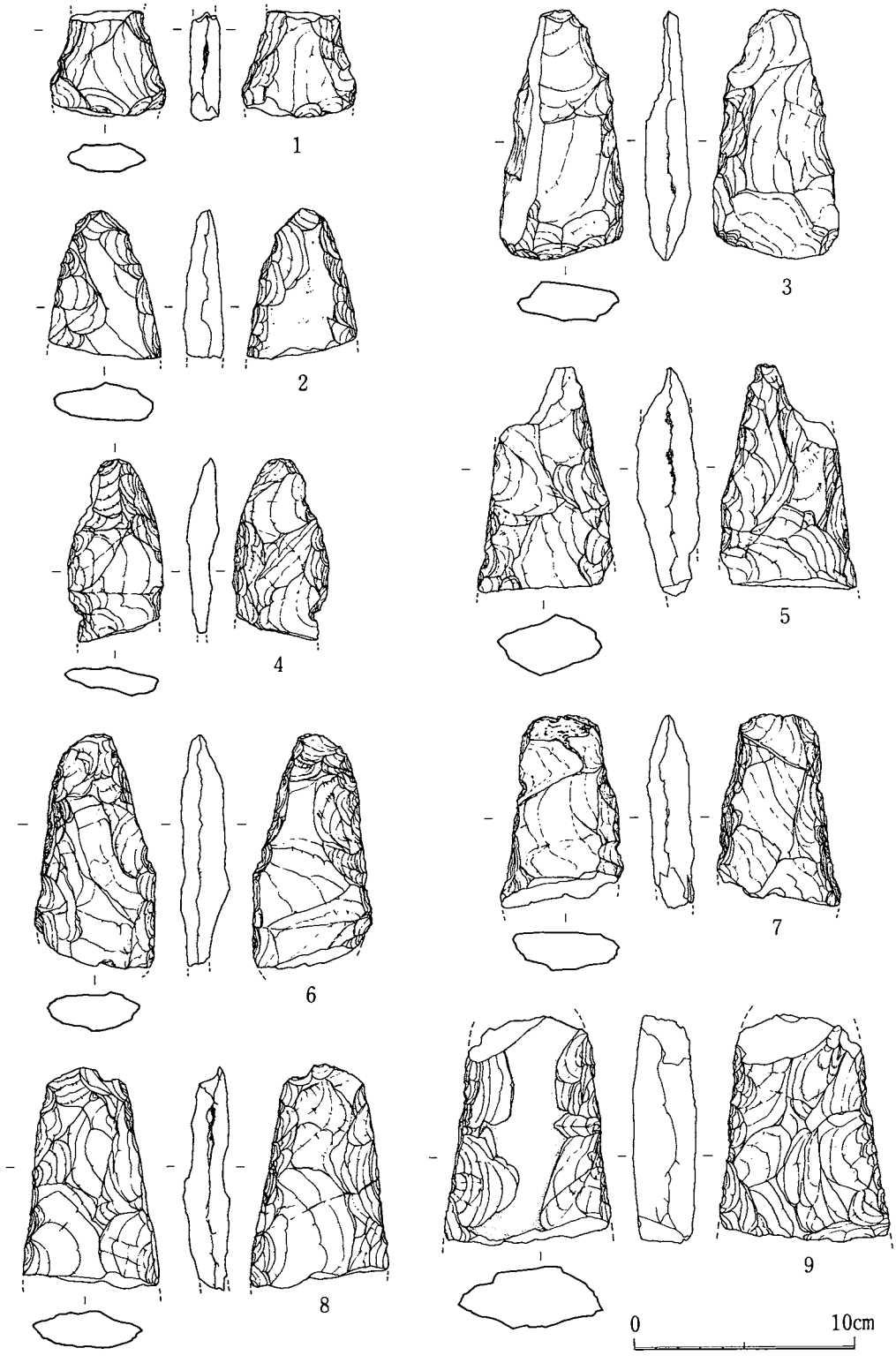
第63図　打製石斧実測図(8)



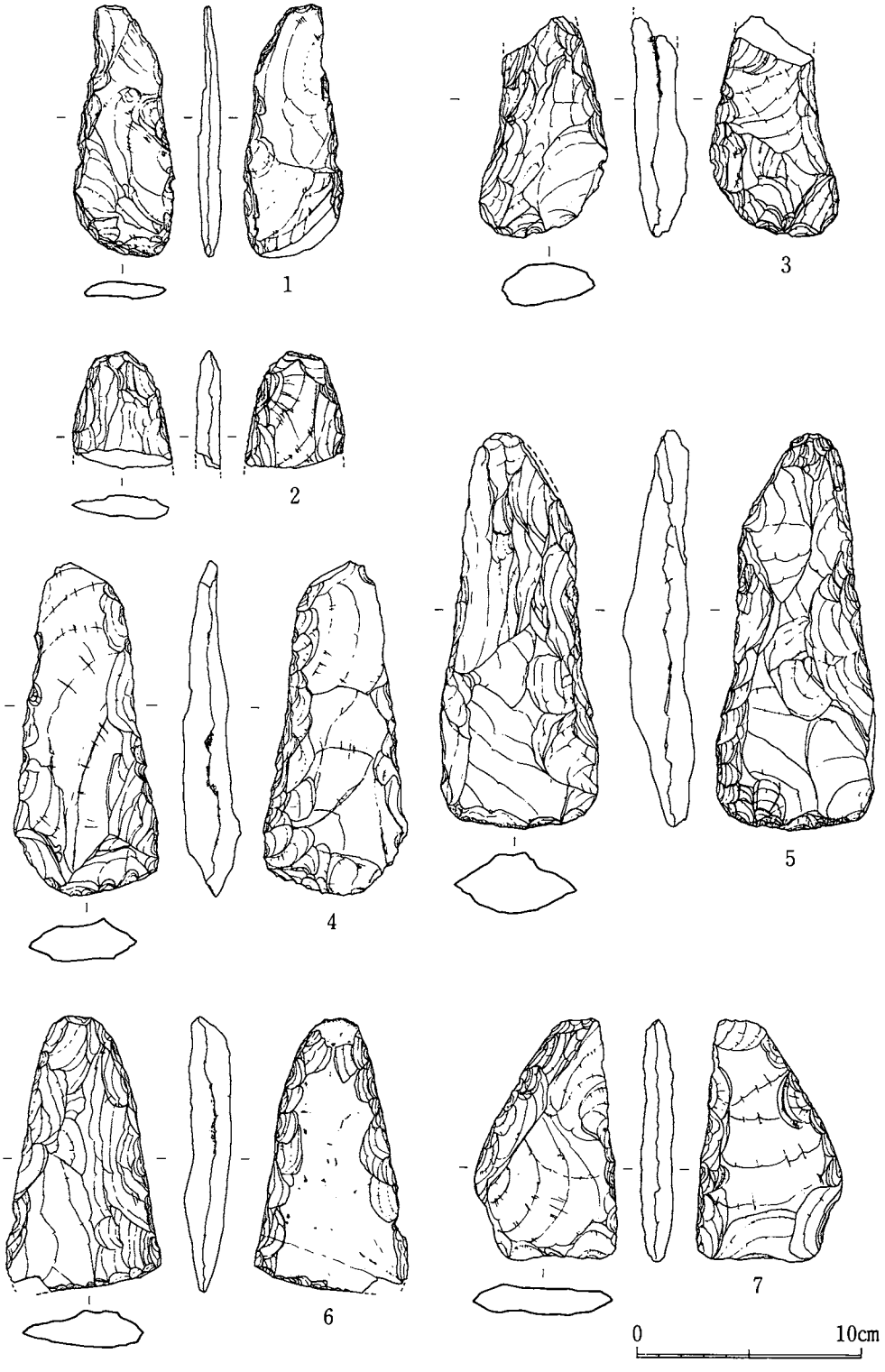
第64図　打製石斧実測図(9)



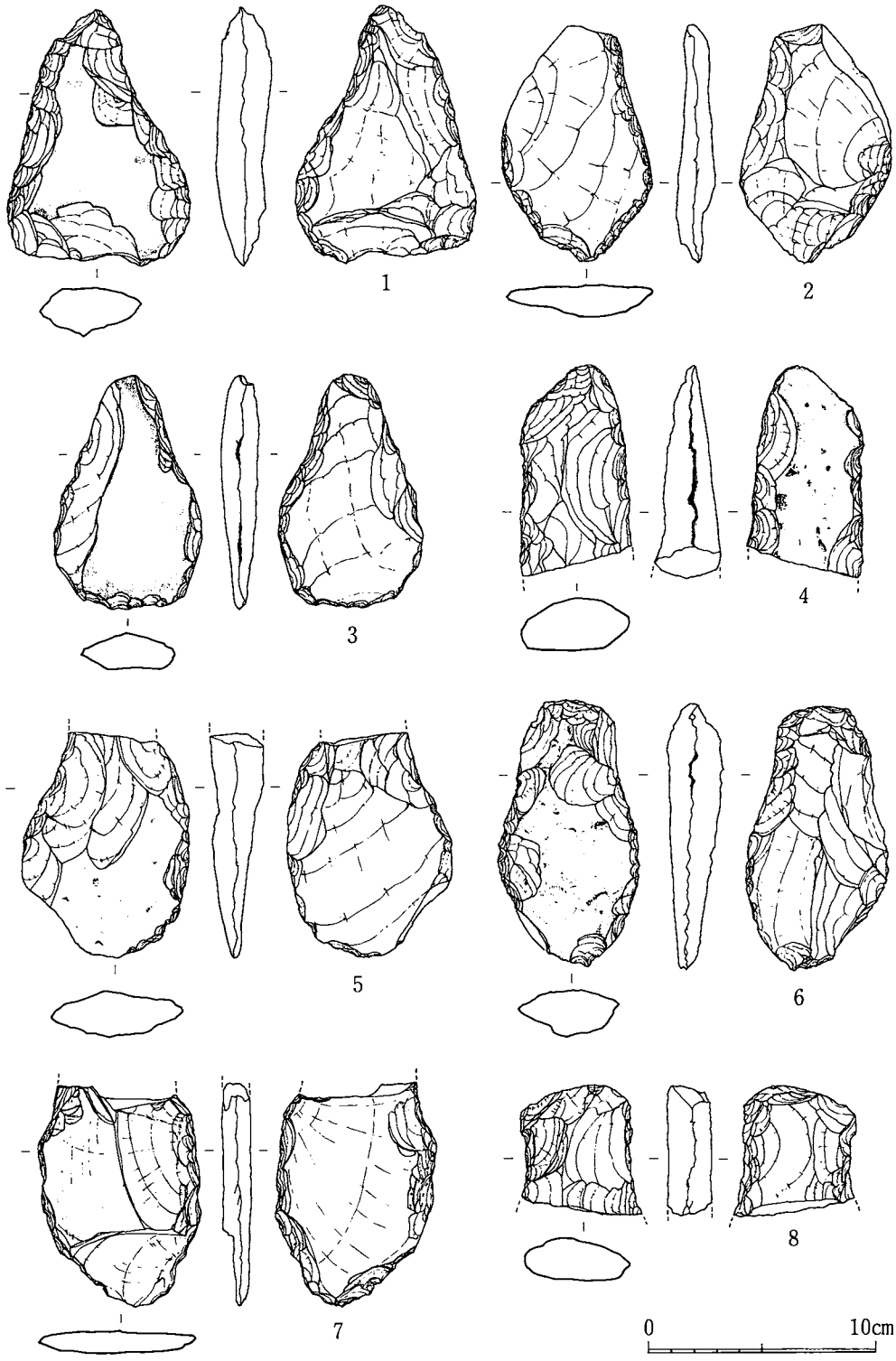
第65図　打製石斧実測図(10)



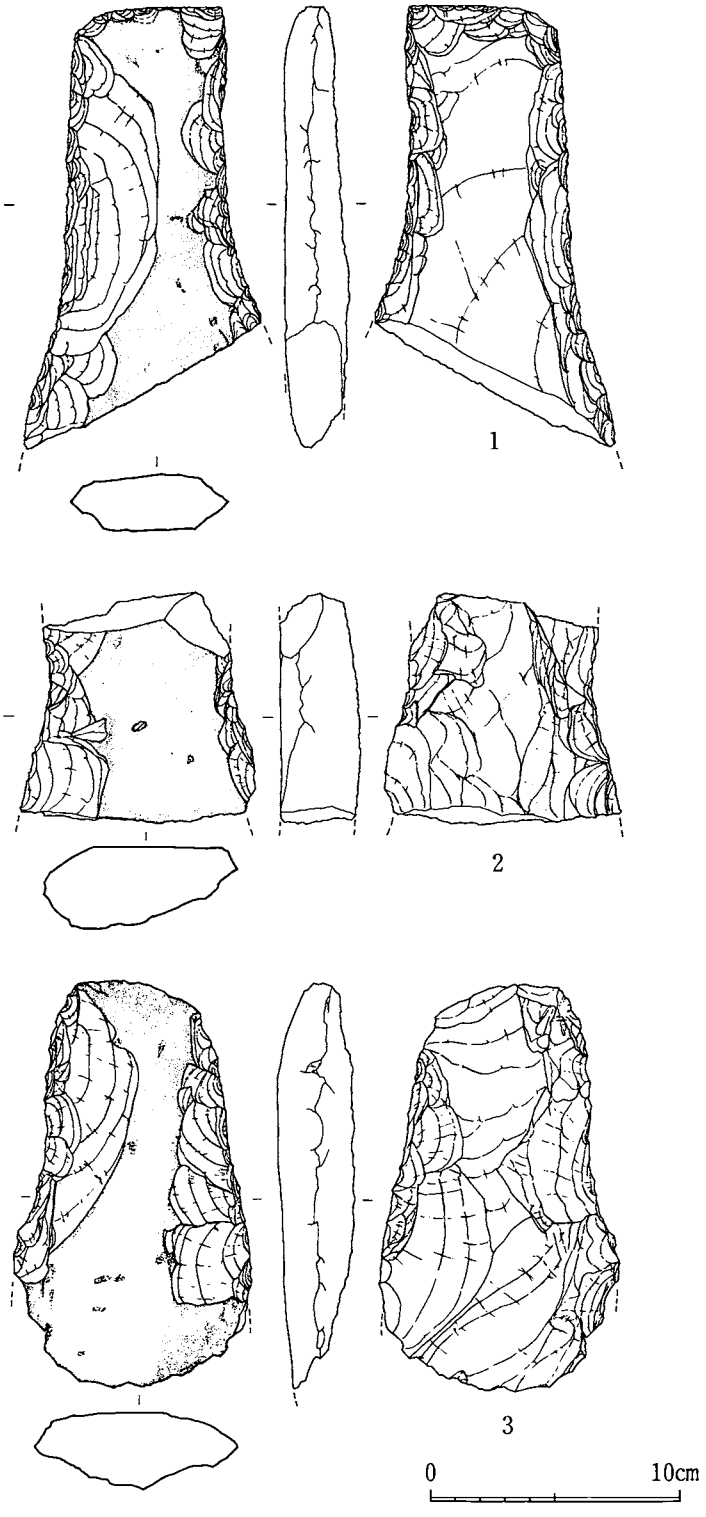
第66図　打製石斧実測図(11)



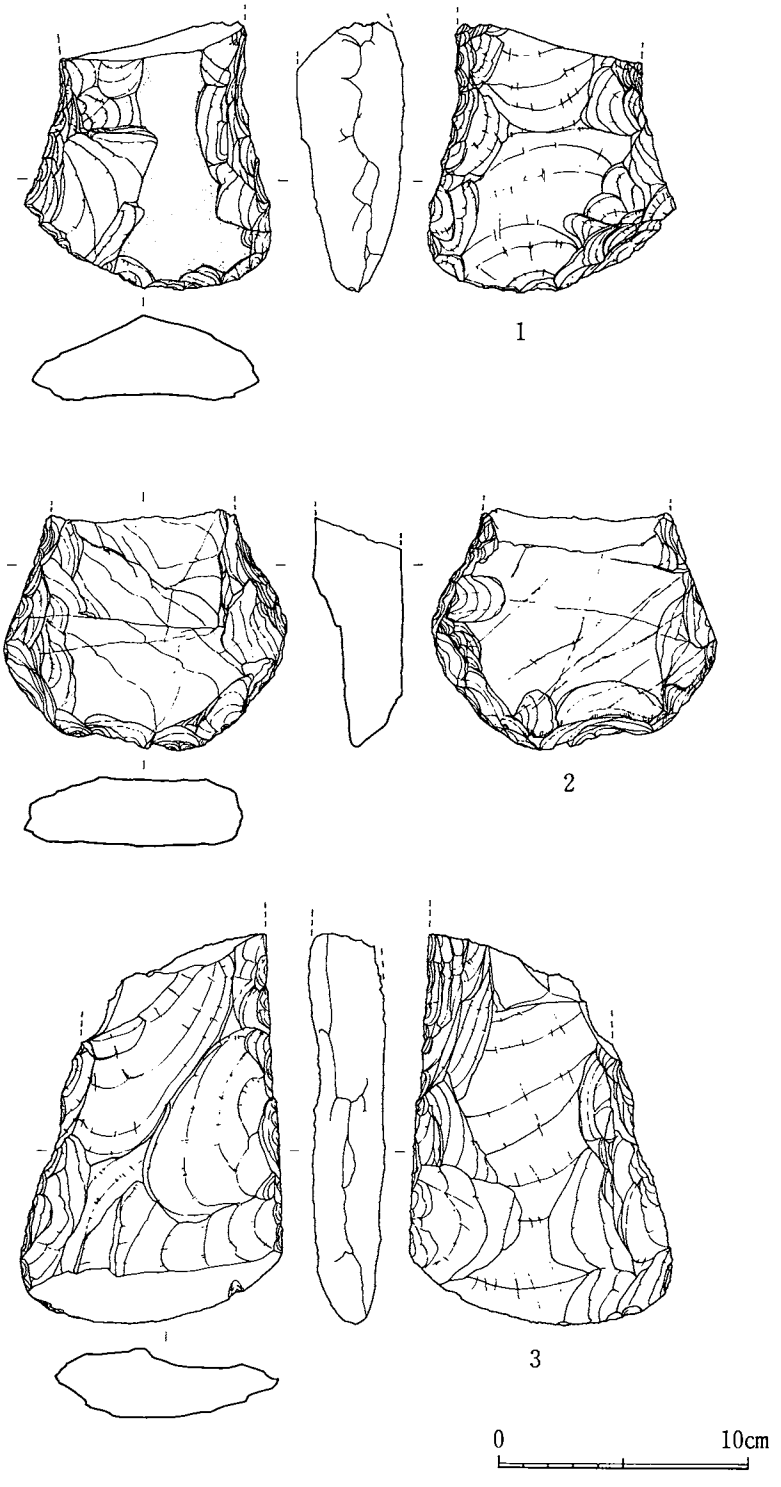
第67図　打製石斧実測図(12)



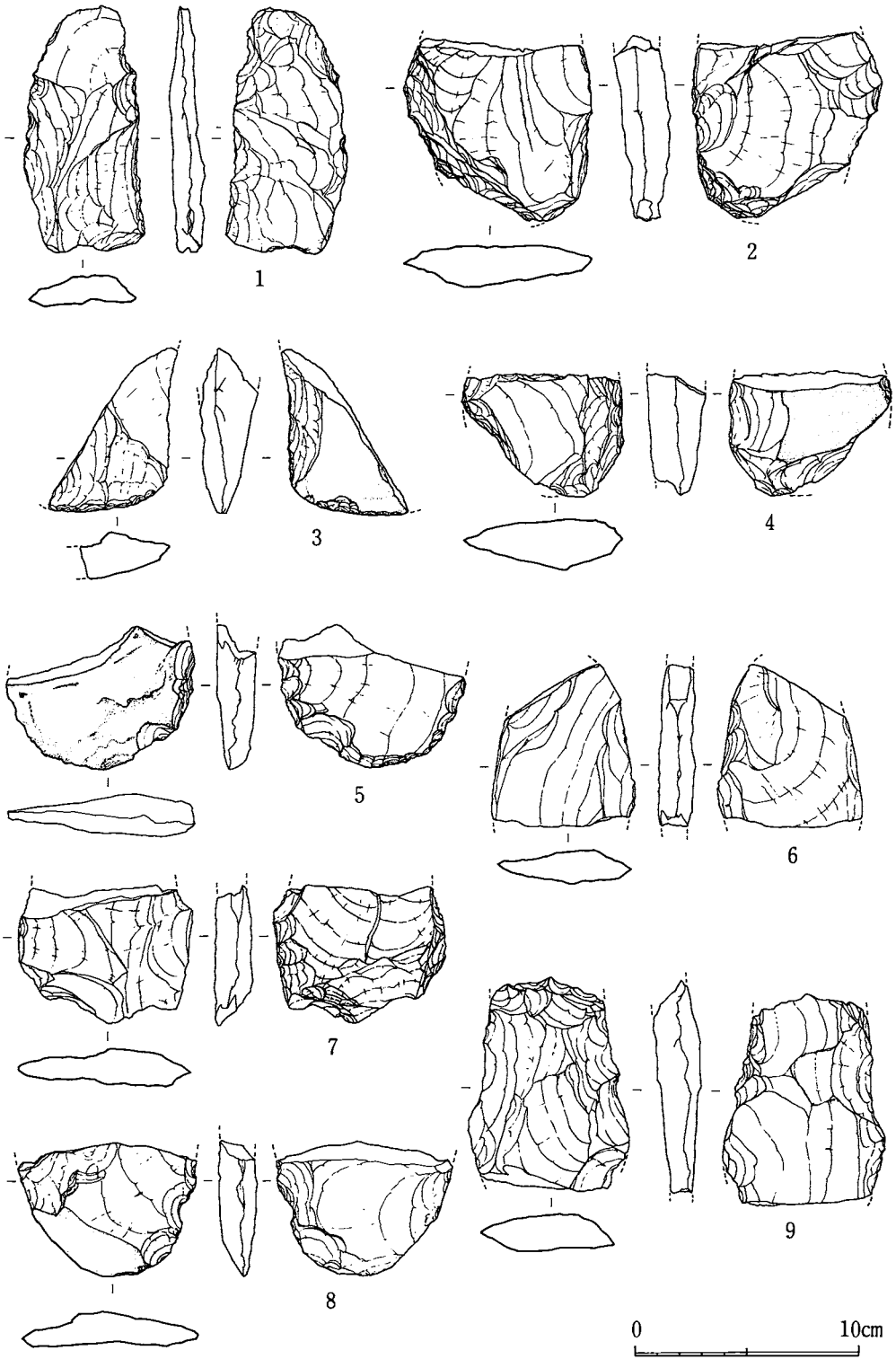
第68図　打製石斧実測図(13)



第69図　打製石斧実測図⑭



第70図　打製石斧実測図(15)



第71図　打製石斧実測図(16)

Ⅳ－Ａ類【第69図１、第70図２】

いわゆる撥形のものである。頭部は角張り両側から敲打を加え柄の部分を造り出している。そこからほぼ直線状に伸び、刃部にいたると急激に膨らみ、正しくしゃもじ状になる。図化した中で特に第69図１と第70図の２はその典型である。長さに比べて厚さが薄い傾向にあるようである。

Ⅳ－Ｂ類【第69図２・３、第70図１・３】

大型の剝片をを利用しているものである。長さが約16.0cm を越え、厚さも約 3.0cm ほどとかなり大きい。形態的にはＩ－Ｄ類に似るが、長さに対する厚さの比がやや大きいようである。

磨石【第72図～第77図】

この種の石器もかなり点数が多く、２２点であった。ほとんどが砂岩であるが、中には、ヒン岩・流紋岩なども含まれる。これもその形態から大きくは、Ｉ類とII類の２類に分かれそうである。

Ｉ類【第72図、第77図３】

Ｉ類は、いわゆる「石鹸石」と呼ばれる定形化しているものである。表裏を両面使用したもので、使用頻度が高かったため摩耗しており、平らでつるつるしたものが主である。第72図、第77図の３などがそれにはいる。第72図の１は、片側面に敲打痕があり、片方の平面にも僅かに敲打痕がある。２は、左右側面に加えて下の方にも敲打痕がある。破損品であるため、上にも敲打痕があったかどうか不明である。破損部分の観察によると、側面からの敲打が加えられたことにより破損したと思われる。３は、側面全体が敲打されている。石材は脆いが、そのための破損ではなく、意図的に敲打を加えたものである。これが成形のためか使用によるかは不明である。

II類【第73図～第77図２】

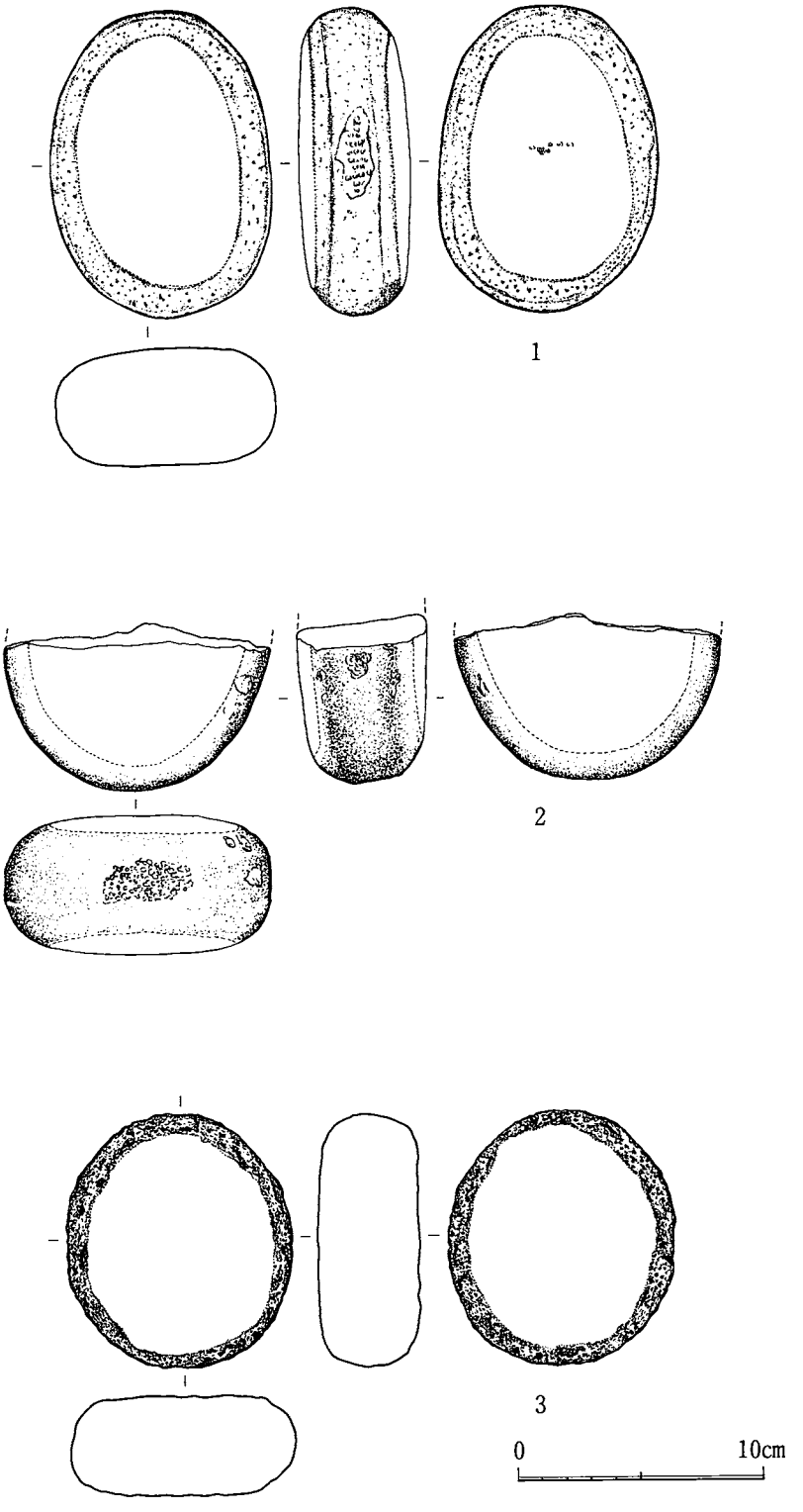
II類は、自然の転石の中から、やや平面があればそれを利用したもので、決まった場所を使用しないものである。簡便的に使用したのであろうか。かなり使い込んだものもあるが、大部分は摩耗の度合いの少ないものである。大きさによりさらに細分できる。

II－ａ類

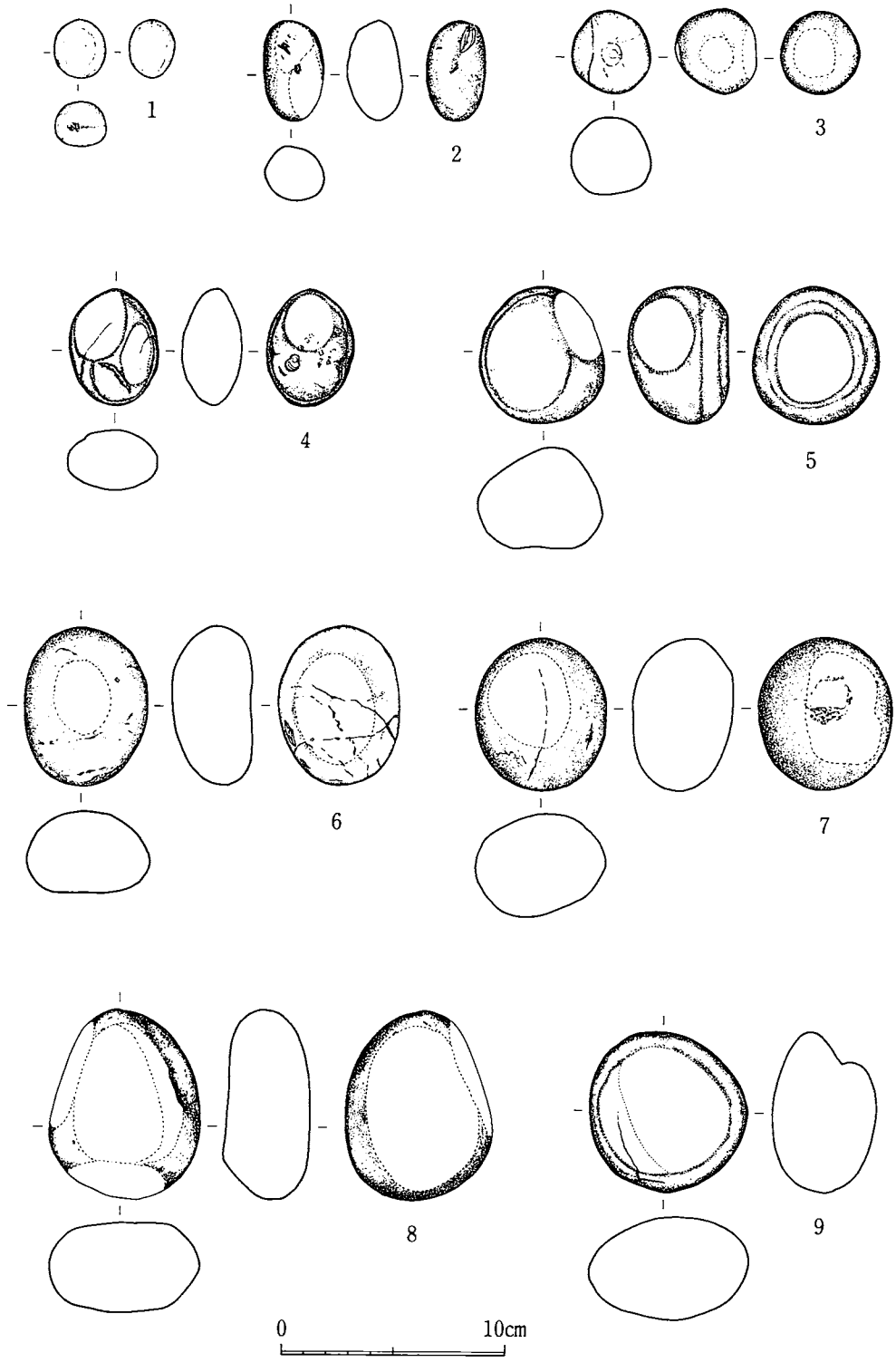
小円礫を中心としたものである。第73図の１は、径が２cmほどのもので、磨研の跡が明確ではない。磨石としたがよいかやや不安である。２は、やや縦長の小円礫を利用したもので、表面の凸部分を磨研に利用している。３は、径3.5cmの球に近いものである。僅かずつ３面が使用され磨痕が残る。４は、やや偏平な小円礫を利用し、３ヵ所ほどに磨痕が残る。

II－ｂ類

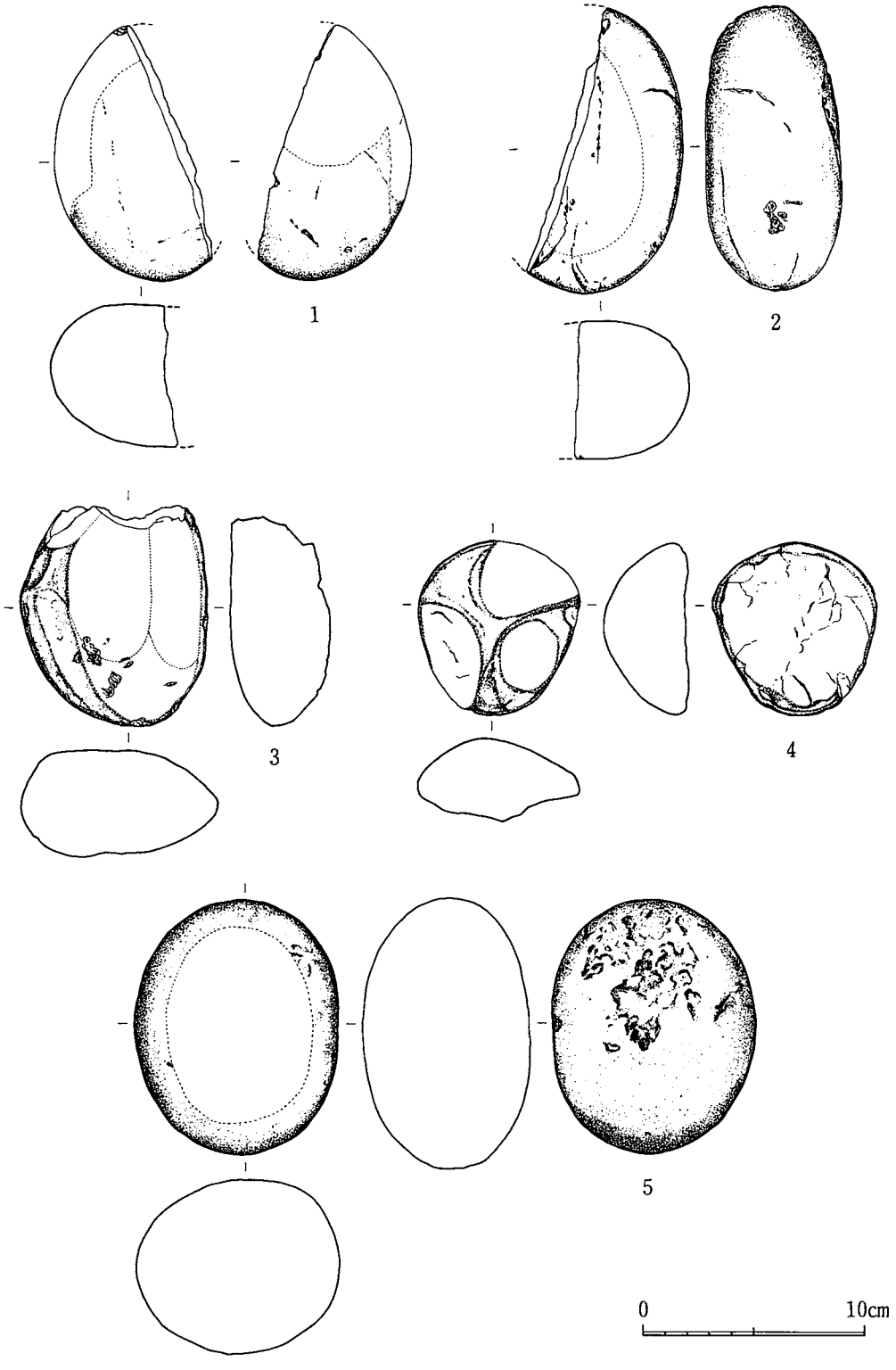
中形の不整円形の円礫を利用したものである。中形としたがその範囲は、径が６cm以上10cm



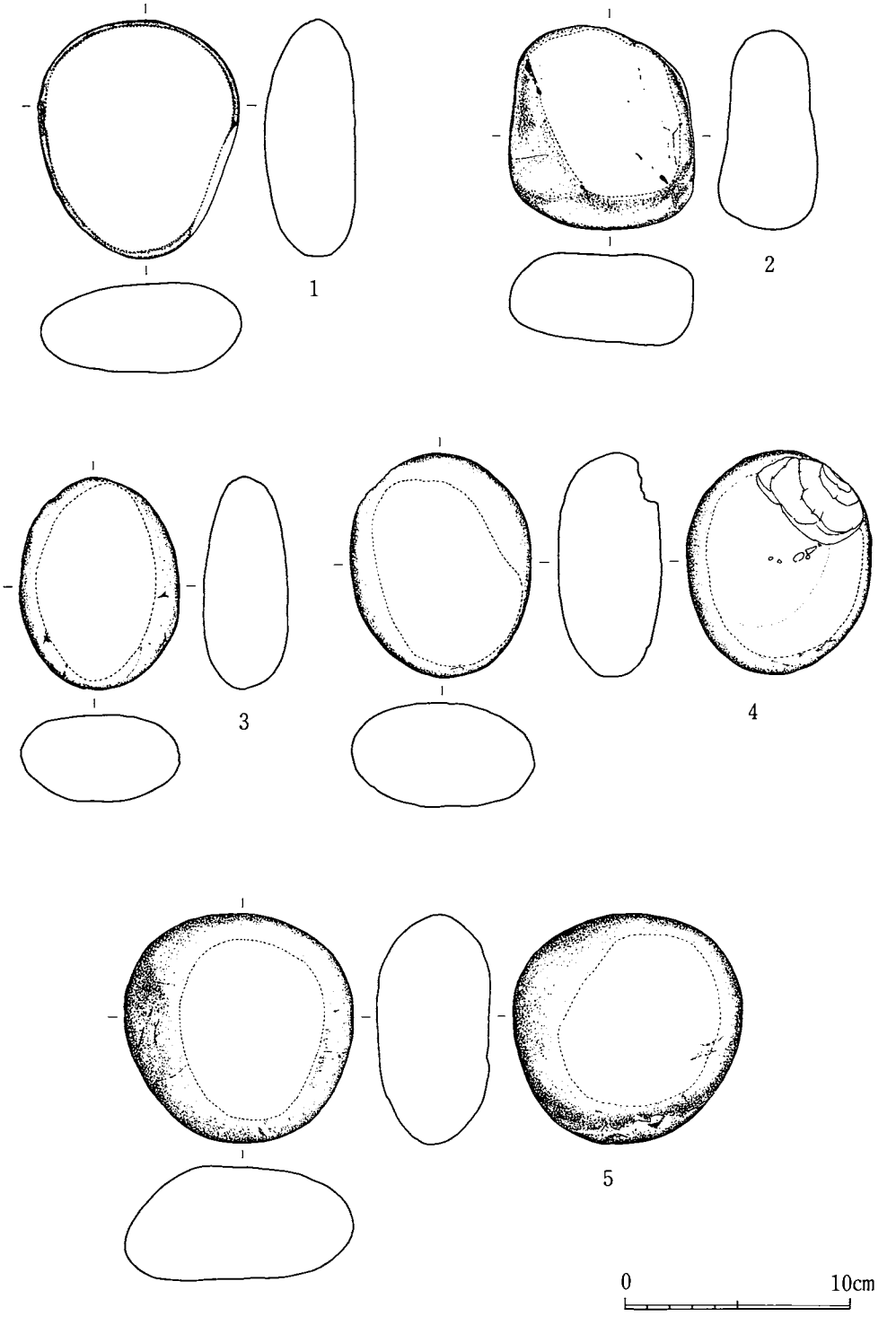
第72図　磨石実測図(1)



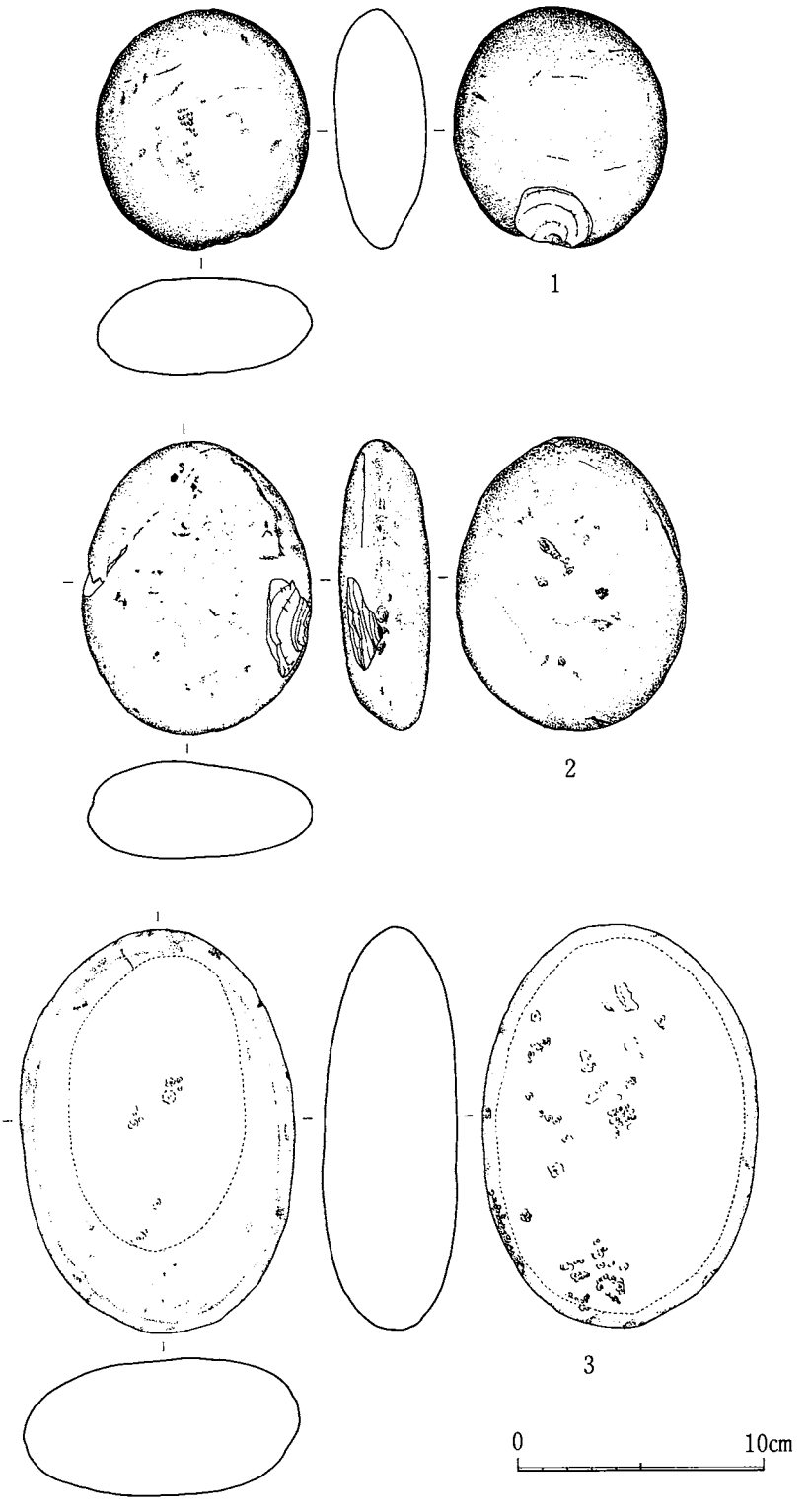
第73図　磨石実測図(2)



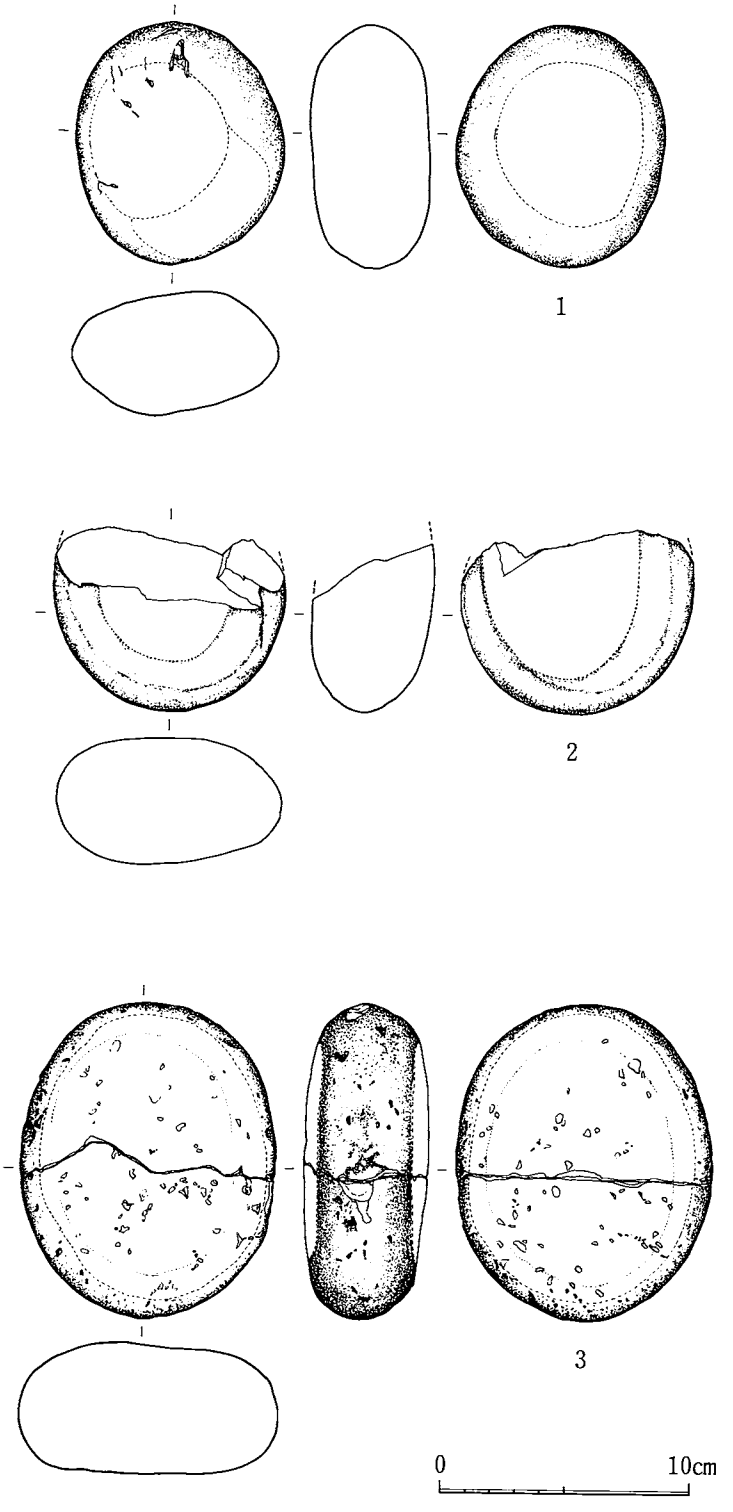
第74図　磨石実測図(3)



第75図　磨石実測図(4)



第76図　磨石実測図(5)



第77図　磨石実測図(6)

未満のものである。ただ、この数値は、長径を計測したものであり、何ら機能的な差異を考えたものでなく、任意の区分に過ぎない。第73図の５は、Ⅱ－ａ類と、さほど違いはない。続く６・７・８・９も同様に一つの石の中に数ヵ所の使用痕跡を持つものである。第74図の４は、破損した剝片を利用したものである。破損面まで磨研が加わり、他の面も３ヵ所利用される。やや、他のものとは、趣を異にする。

Ⅱ－ｃ類

大型のやや偏平な円礫を使用したもの。長径が10cm以上のものである。第74図の１・２・３は、破損したものである。１・２は、Ⅰ類に含まれるようでもある。破損は、敲打によるものであろう。３は、１面だけ使用される。第74図５・第75図・第76図・第77図１は、いずれも両面もしくは、片面の使用がなされている。

石匙【第78図】

出土したものは、数量的には５点と少ない。B・C－６・７より出土している。使用された石材は、頁岩・チャートが主である。形態的には横型のものと縦型のものに大きく分けられる。

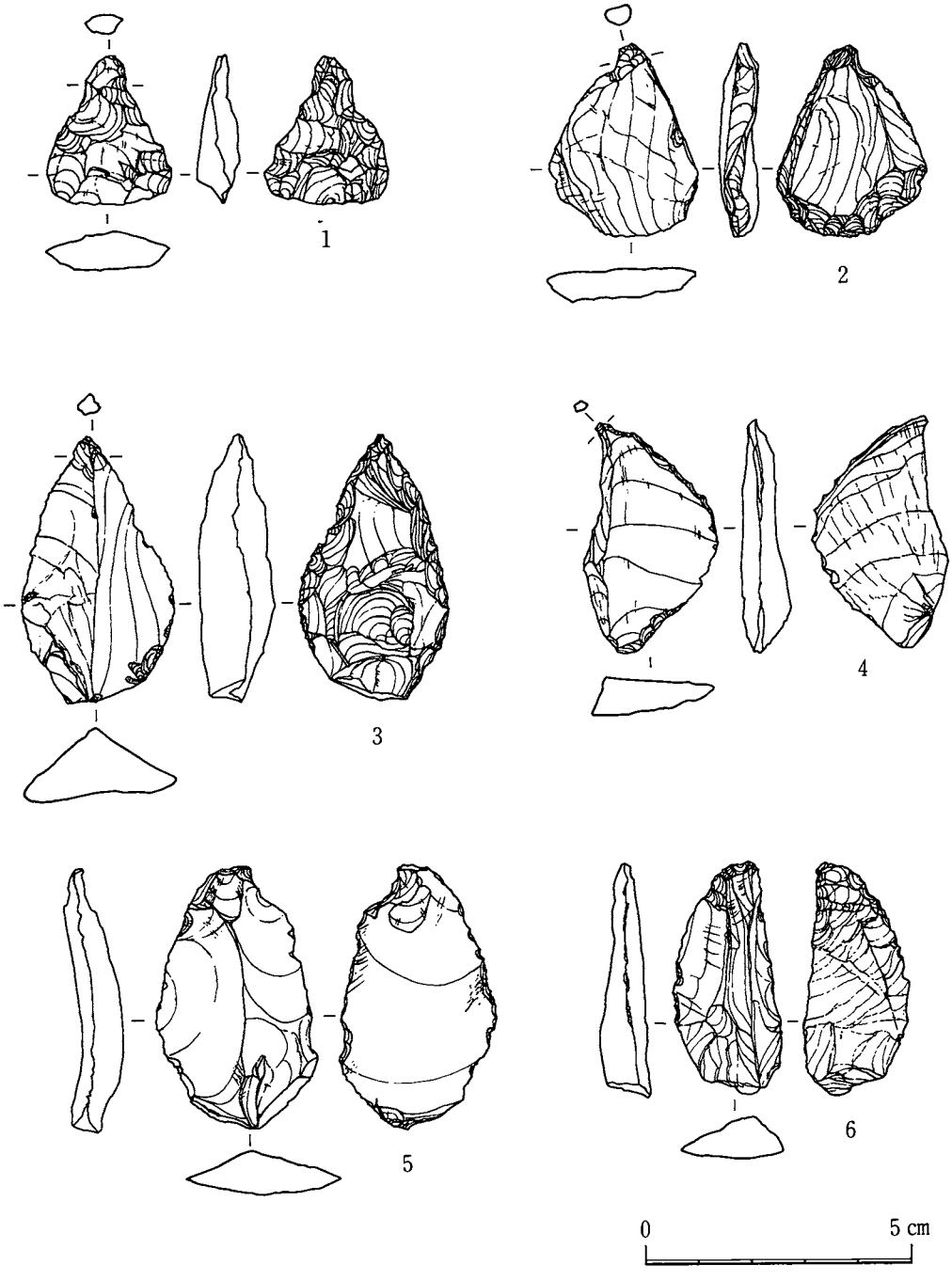
横型石匙は、１・２である。１は、縦長の剝片の側部に上下から剝離を行いつまみを作り出している。つまみの長さはあまり大きくはない。刃部は、両面からの押圧剝離により作り出されている。刃部には、使用による剝離も認められる。２は、１に比較して作りが雑である。小剝片の一部につまみを作り出すため、押圧剝離を加えている。

縦型石匙としては、３・４・５があげられる。３は、横型の剝片の短辺の一方に加工を加え、つまみを作り出している。刃部は、一方の側片に限られ、片面からのみの調整が加えられている。４は、片面に自然面を残す剝片を利用して作られている。バルブの部分をつまみ部にしている。これは、縦長にしたが、刃部は、片面に限られていた。５は、かなり大型のもので作りもやや他の石匙と異なるようである。薄い縦長の剝片を利用している。剝離面が両面ともにみられ、バルブのある方をつまみとしている。刃部は、つまみの方向に斜めに交わるようにつく。刃部には、使用痕が少し残る。

石錐【第79図】

ここでいう石錐は、回転によって、穴をあける用途・機能を持つものと捉えた剝片の石器である。出土点数は、６点である。１は、押圧剝離により調整し、錐部の部分に抉りを僅かにいれる。２は、剝片を加工したものである。握りの部分は、片面からの押圧剝離を行っている。錐部は、尖った部分を使用したものでそこが使用により、抉りがはいっている。３も剝片を利用したもので側辺に細かい剝離を施し、先の尖った部分を錐部として利用する。４は、剝片をほとんど加工せず、尖った部分を錐部として利用している。５・６は、石錐とするにはやや不

第78図　石匙実測図



第79図　石錐実測図

安がある。５は、剝片をほとんど加工しないで、尖った部分を錐部としたようである。そこが使用により剝離しているようである。６は、尖った部分がやや剝離している。錐部として使用したものであろう。石材は、チャートが主である。いずれも縄文時代のものである。

石核【第80図～第82図】

石核として確認した遺物は、１２点ある。形態的な違いより２つに分類できる。

Ｉ類

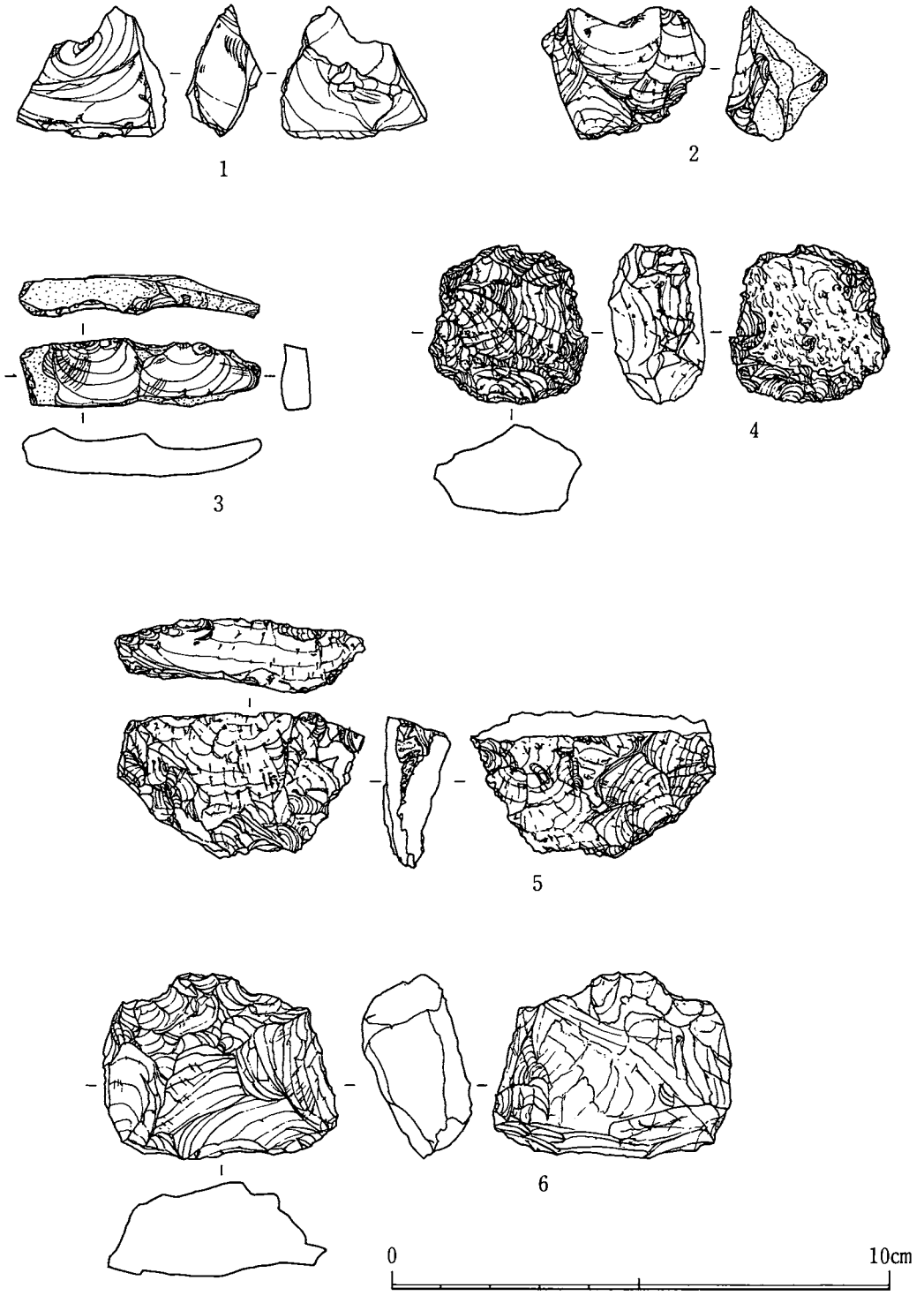
Ｉ類は、石材の剝ぎ取りにおいて、１面もしくは２面を中心とするものである。第80図の１は、淡灰色を呈する硬質の凝灰岩で上部から剝ぎ取られている。剝片は、幅広のものであろう。２は、黒曜石を使用している。片面に自然面を多く残すので、小さい黒曜石の岩塊を母岩としたようである。これは、上下からの剝離がなされている。幅広の短い剝片が剝離されたようである。３は、棒状の黒曜石から直接剝ぎとりを行っている。上から２ヵ所の横幅の広い剝離痕がある。４は、片面に自然面、片方に主要剝離面を残す。剝ぎ取りは、側辺から中心へ向けて、ほぼ全方向からなされている。剝片は、やや幅広の短いものであるようである。５は、薄型のもので、破損したことも分かる。母岩から剝片として剝ぎ取られたもので、剝離面が両面に残る。剝ぎ取りは、両面からなされ、横幅の広い短い剝片をとっている。方向は特に一定していない。

II類

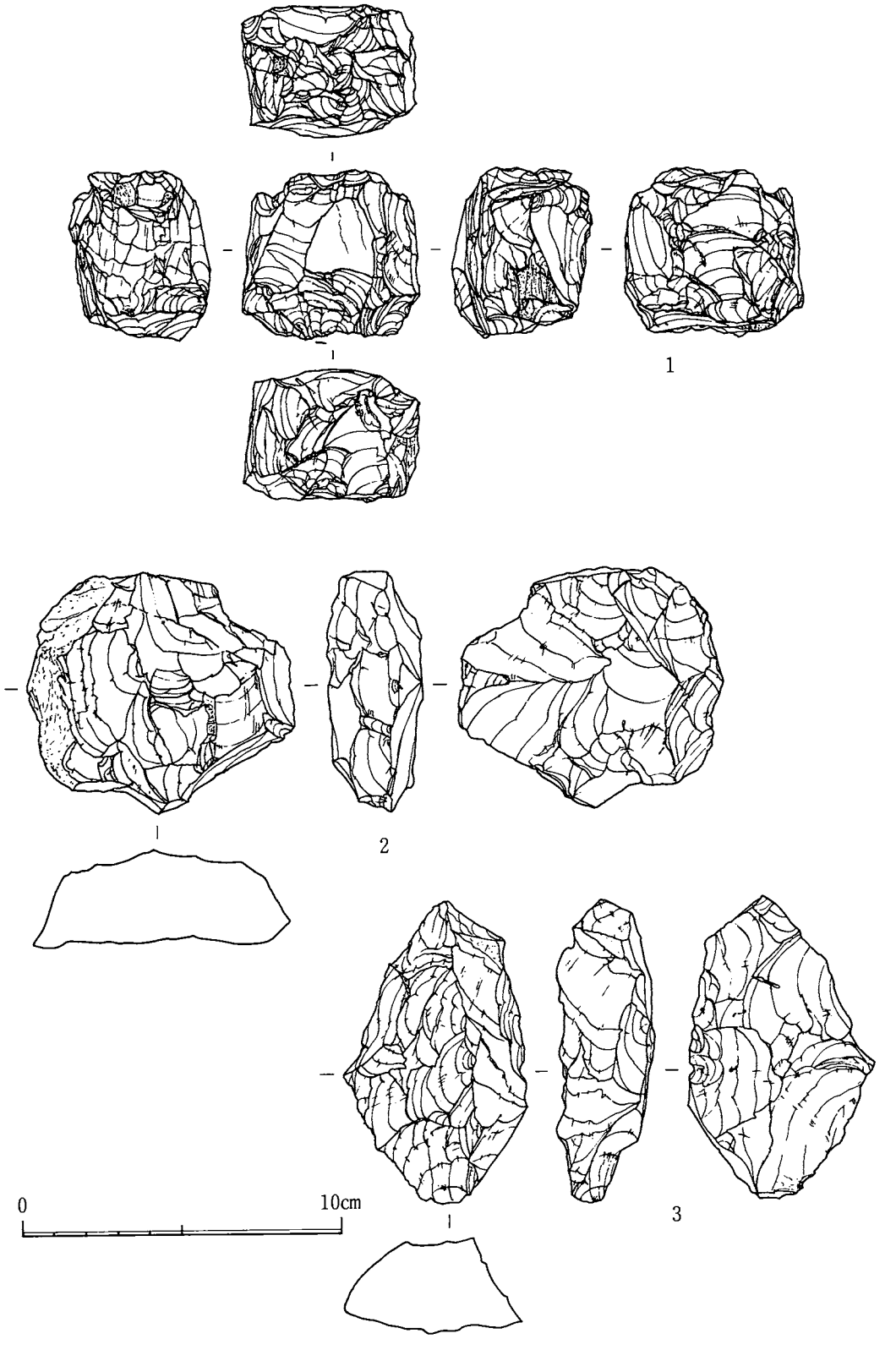
II類は、断面が台形や四角柱状になるものである。第80図の６は、片面に主要剝離面が残る。主要剝離面を打面として剝離を行っている。剝片は、幅広のものである。第81図の２は、やはり断面が台形である。剝離は、平らに近い方では、剝離角度が大きく、側面では、平らな面から角度を浅く剝がれている。横幅の広い剝片がとられたようである。３は、やはり断面が台形に近く、剝離は、平らに近い方では、側辺の両方向から横幅の広い大型の剝片がとられている。その裏側では、縦長のものと横広のものの２種類の剝片がとられている。第81図の１は、断面が四角柱のものである。剝片は、短い横長のものと、やや幅広いが縦に長いものがとられている。第82図の１は、断面が菱形を側面から中心に向かって横幅の広い剝片が多くとられる。２は、岩塊を加工せず直接剝離を行っている。やや縦長の剝片をはいでいる。自然面が一部に残る。剝離方向は様々である。３は、自然の岩塊の一部を打ちかいて剝片をとっている。剝片は、やや縦長のものと細かいものがとられているようである。以上の石器の石材としては、チャートが使用されている。

加工痕のある剝片【第83図】

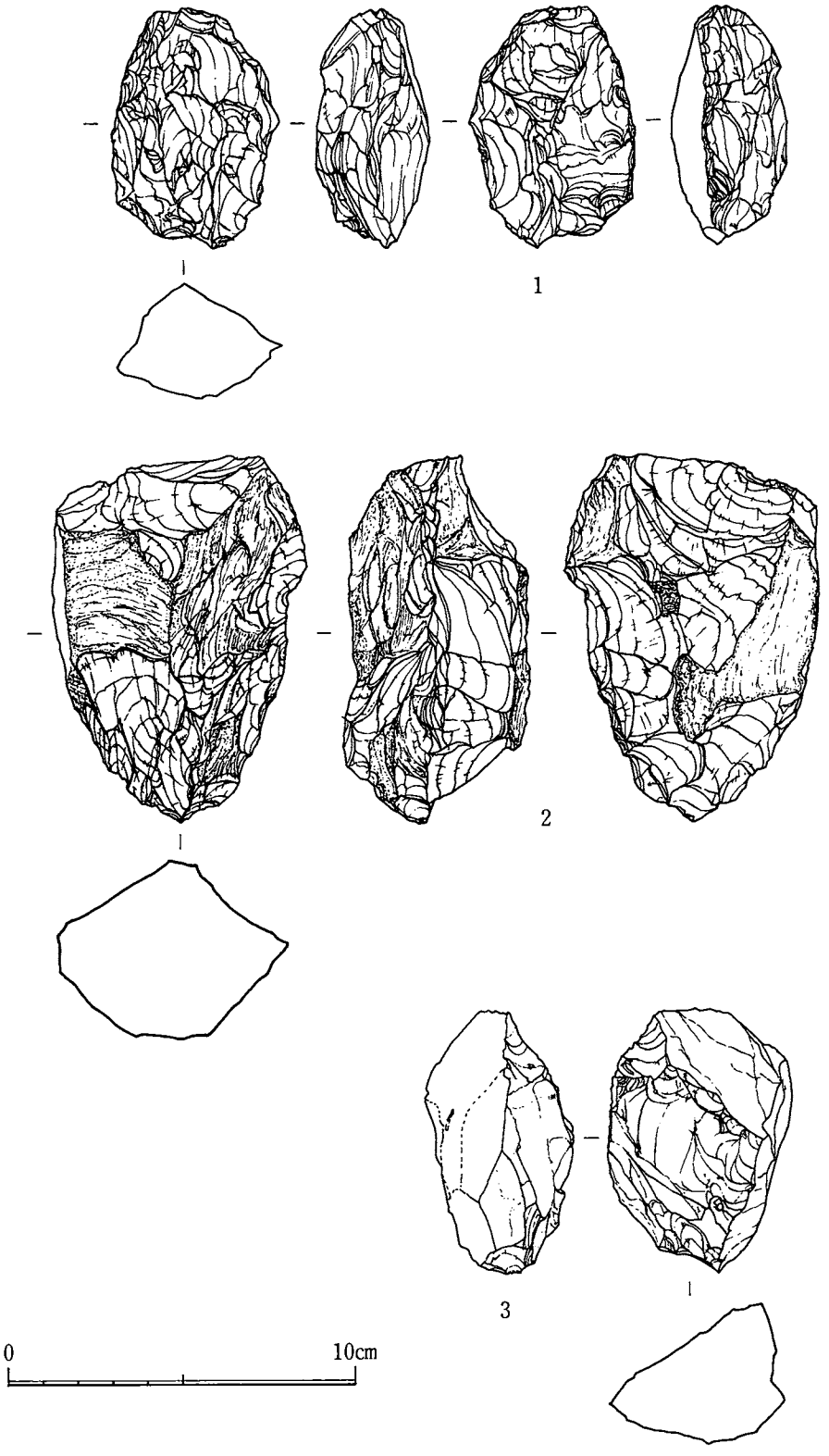
加工痕のある剝片としては、第83図１～６、８があげられる。１は、薄い剝片を片面から押



第80図　石核実測図(1)



第81図　石核実測図(2)



第82図　石核実測図(3)

圧剝離を加えて石鏃状の形にしている。しかし、刃部として十分整ってはいない。剝片鏃の未製品の可能性がある。２は、主要剝離面を残し、その裏を押圧剝離により調整しようとしている。製品として完成したものかは不明である。３は、１と同じように刃部を作ろうとしたようである。途中まで作りかけ、下部が欠損したため、放棄したものであろうか。４も同じく石鏃を調整途中にかけたような感じである。ただ、刃部の剝離が片方だけに限る点から、石鏃とは、別のものかも知れない。５は、側辺の一方に剝離を施したもので、使用等は不明である。６は、細かな剝離を一部に施し形成し終わったのか、使用したものか不明である。８は、かなり両面からの調整が施されている。これは、あまり整ってはいないが、横長の石匙の可能性もある。

彫器【第83図７・９・10】

３点のみ確認した。第83図の７・９・10がそれに当たる。７は、縦長の小破片の下部に細かい押圧剝離を加え、刃部としている。剝離は片面からのみである。やや刃部が縦に対して傾斜している。９は、やはり縦長の剝片を利用したもので、下の大きくなる部分に縦と直角に刃を設ける。10は、逆に狭い方に刃をつける。縦方向と直角になる。剝離の方向が一方向に限られることから、細かい部分の削りが使われたのであろう。

使用痕のある剝片【第84図～第87図】

使用痕のある剝片は、数多く出土している。確認し、図化したものだけでも33点ある。使用痕のあり方から３類に分けられる。

Ⅰ類

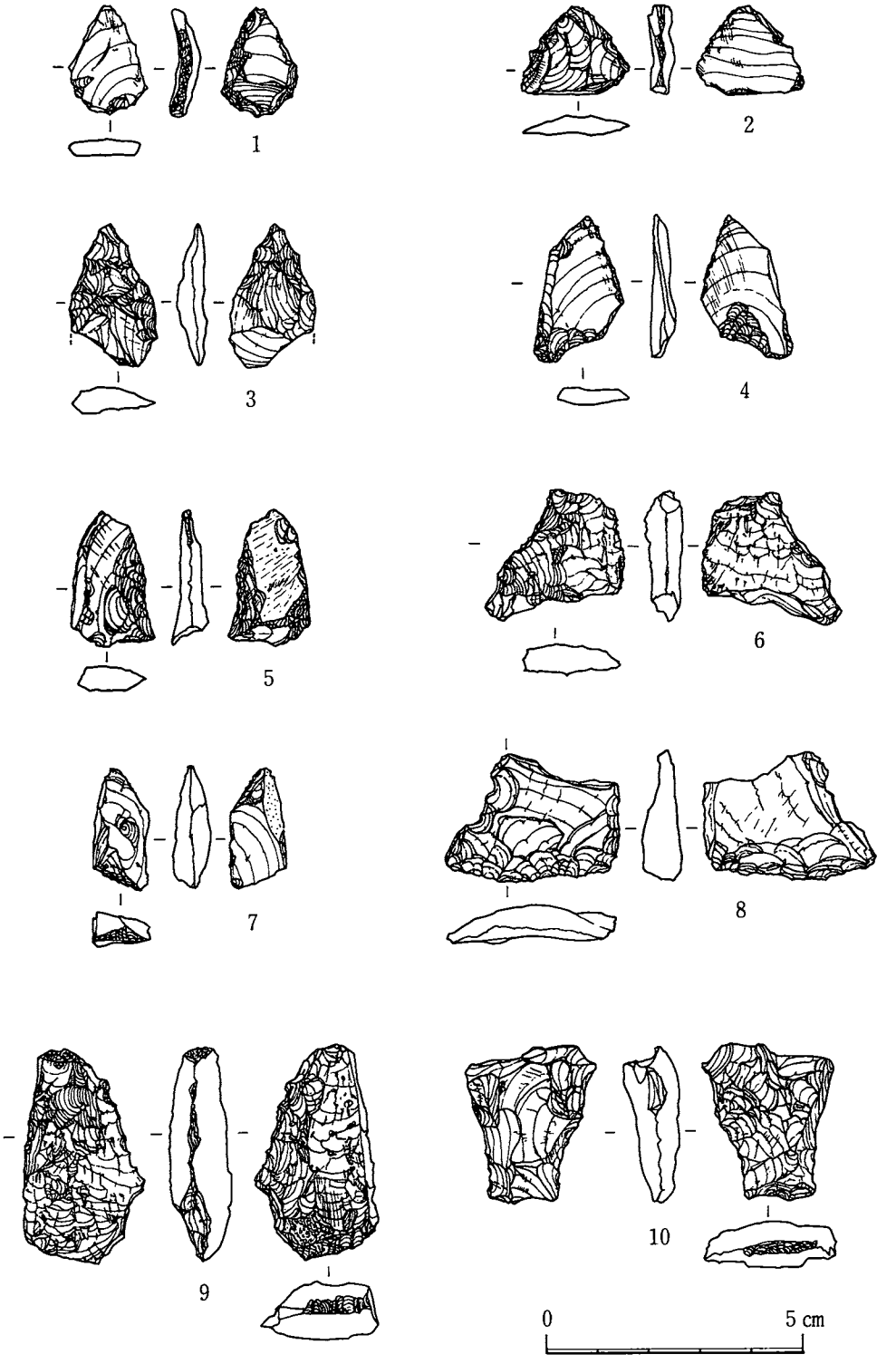
Ⅰ類は、縦長の剝片の側辺を一部使用したものである。使用による細かい剝離がみられる。第85図の１～６、第84図の５・６・７、第86図の３・４・６・８、第87図がこれに入る。石材としては、黒曜石、チャートなどが利用されている。

Ⅱ類

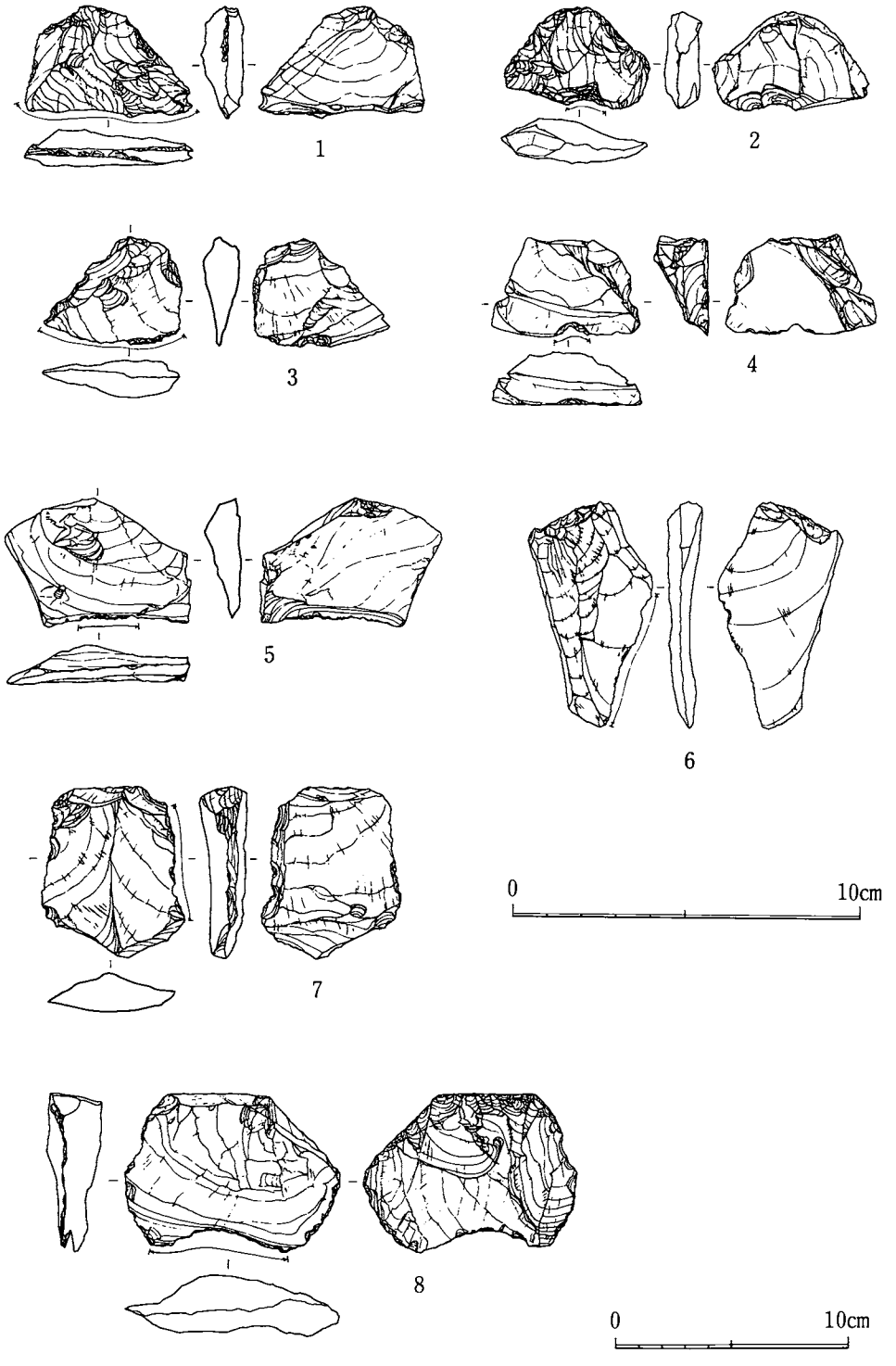
Ⅱ類は、狭いノッチの入るものである。第84図の２・４がそれに当たる。ノッチの狭さなどから小さいものもしくは棒状のものに対しての削る作業が想定される。

Ⅲ類

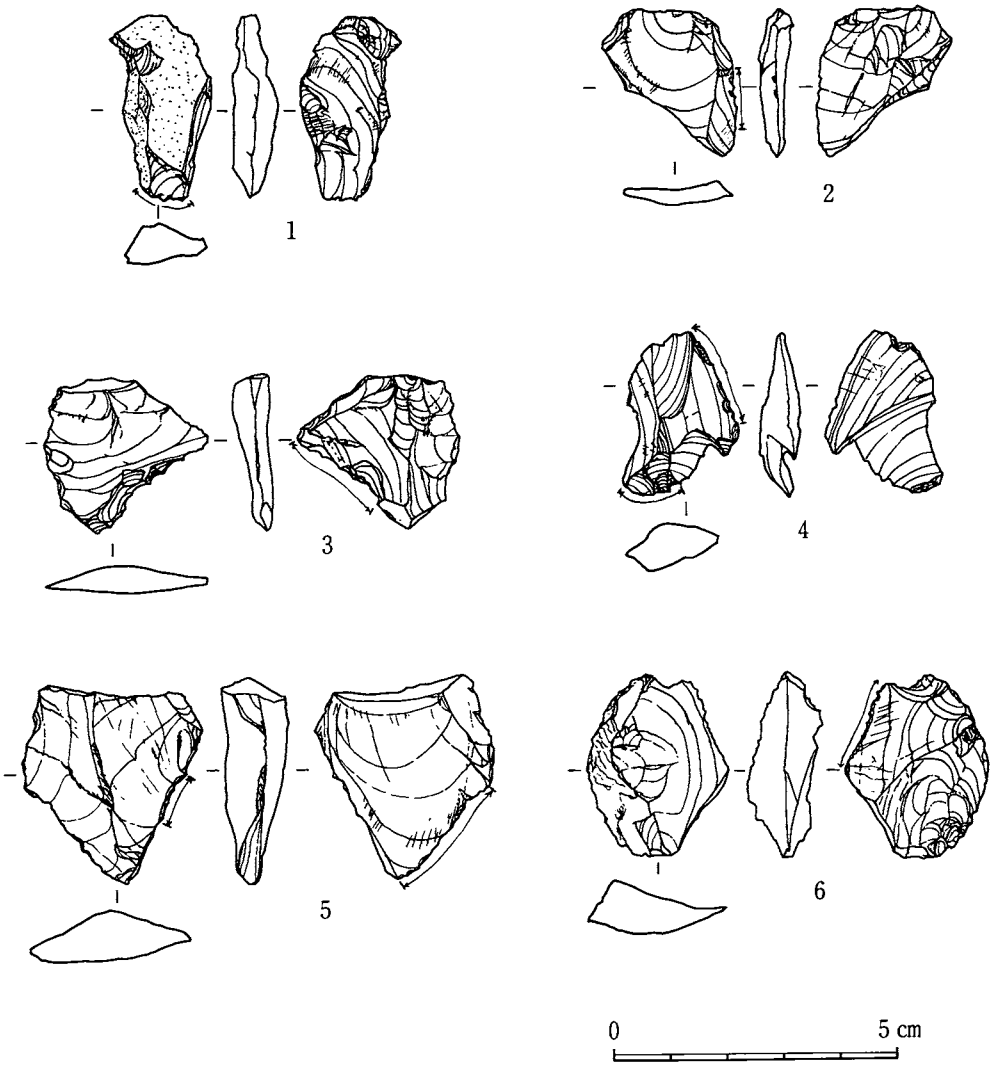
Ⅲ類は、横長の剝片のうち上部がやや厚く、下部が薄くなって刃部として利用可能なものを使用したものである。第84図の１・３・５・８、第86図の１・２・５・７・９などがそれである。特に第86図の１・２・５は、調整はしてないものの石匙に近いものと思われる。いずれも使用による刃としての破損がみられる。破損の仕方を仔細に観察すると、一面の側にだけ刃潰れがみられ、使用に際しての方向性が見られる。



第83図　加工痕のある剝片実測図



第84図　使用痕のある剝片実測図(1)



第85図　使用痕のある剝片実測図(2)

敲石【第88図～第92図】

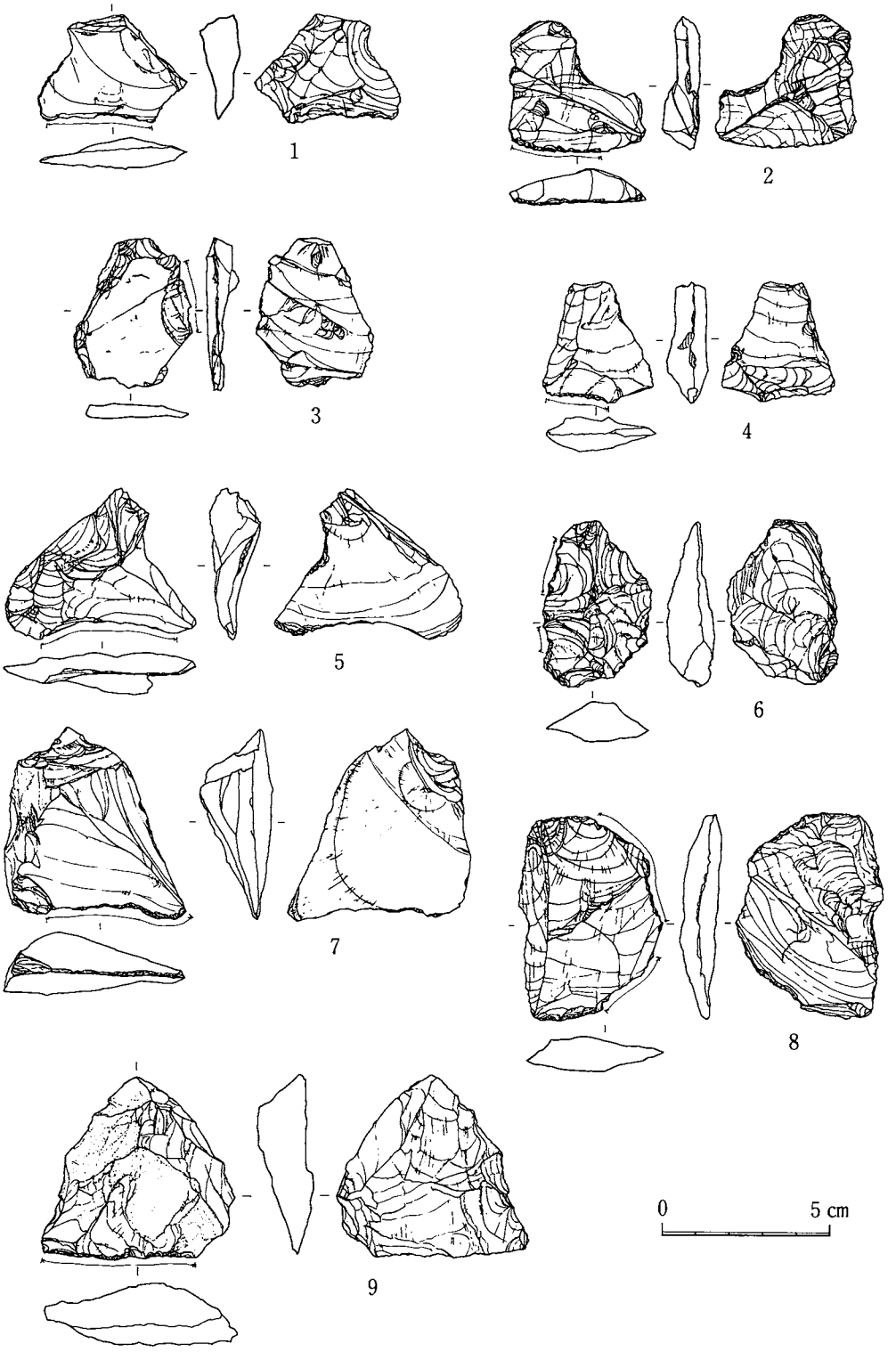
ここで敲石としたものには、形態上からⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類の３類に分類できる。

Ⅰ類

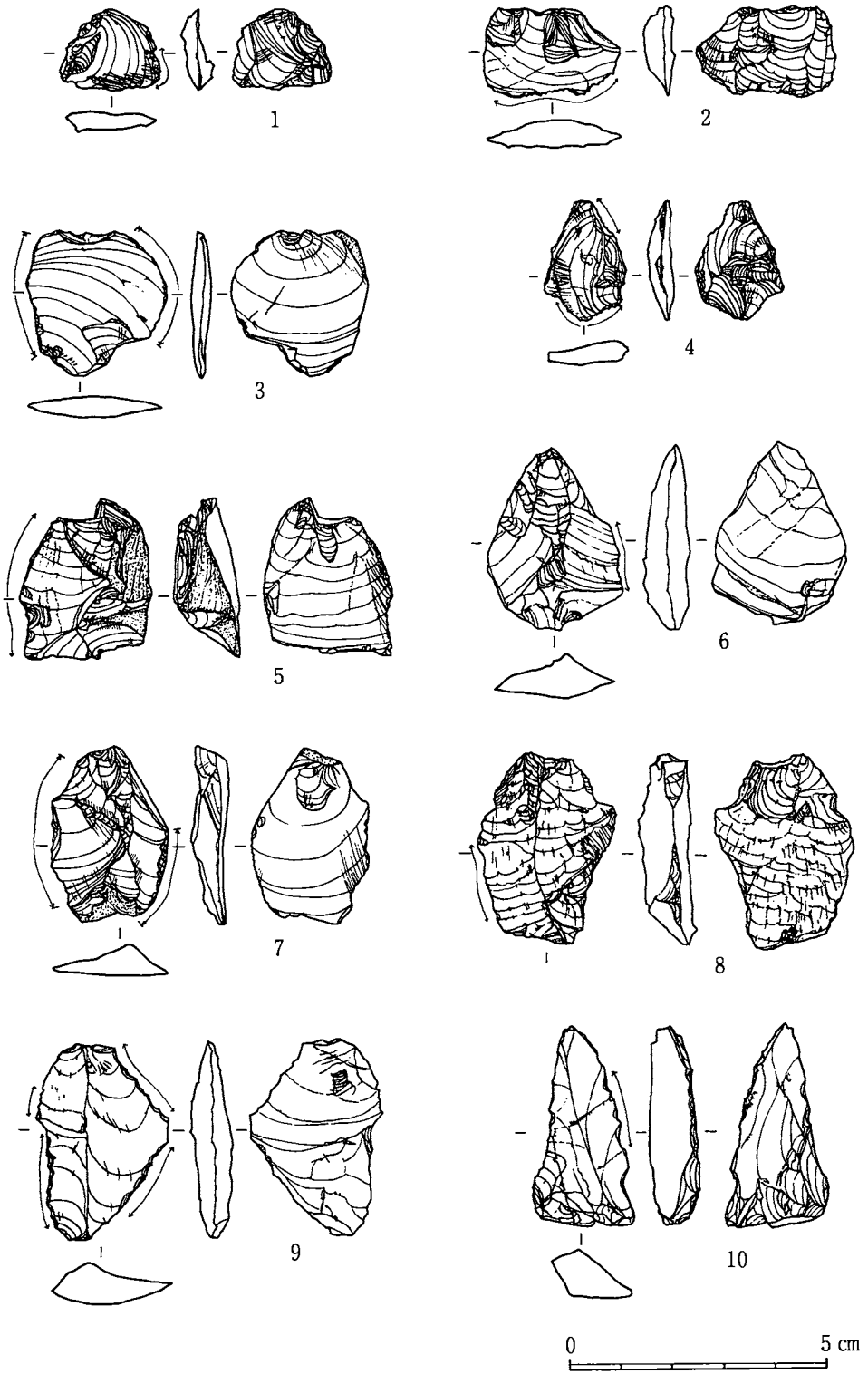
Ⅰ類は、自然礫を加工をあまり加えず、１～２ヵ所利用したものである。決まった地点のみに敲打の跡が残るものである。すべて砂岩を利用したものである。さらに、使用された状況より、４類に分けられる。

Ⅰ－１類【第88図２・５】

Ⅰ－１類は、棒状の自然礫を利用したものである。第88図の２は、偏平気味の縦長の上下に敲打の跡が残るものである。表面に磨研された後が薄く残る。５は、下の方にのみ敲打の跡が



第86図　使用痕のある剝片実測図(3)



第87図　使用痕のある剝片実測図(4)

残るものである。

Ⅰ－２類【第88図１・３・４・第90図３】

Ⅰ－２類は、偏平な円形の自然礫を利用したものである。表面に磨痕の残るものもある。第88図の１は、側辺にも細かい敲打の跡が残り、一ヵ所は、打ち欠いた状態である。平面の部分には、両面に細かい敲打の跡が残っている。側辺の状態からみて、石錘として利用されていた可能性もある。３は、側辺に垂直な細かい敲打の跡が残っている。これは、かなりしつこくたたいた跡であろうか。４も３に似たものである。第90図の３は、側辺に２ヵ所の細かい敲打の跡が残っている。

Ⅰ－３類【第88図６・第89図１・２】

Ⅰ－３類は、中形の自然礫を利用したものである。第88図の６は、一面に磨研の跡が残る。細かい敲打の跡が自然礫より尖る部分に残っている。第89図の１は、片面に磨研の跡、その裏に敲打の跡が僅かに残る。２は、偏平の円形礫を使用している。一方の面に線状の敲打の跡が僅かに残る。石の形からして、この石より硬質の石の尖った部分をたたいたのであろうか。

Ⅱ類

Ⅱ類は、さらに利用の状況から３類に細分できる。

Ⅱ－１類【第90図１・２】

Ⅱ－１類は、偏平な円礫の側辺部を利用して敲打している。形態的には、Ⅰ－２類に似るが、使用のされ方がより激しく側辺の全体に渡る。第90図の１・２がそれに当たる。

Ⅱ－２類【第90図４】

Ⅱ－２類は、自然礫をかなり乱暴に打ち欠いた破片礫を敲打に使用している。敲打痕は側面に一部残される。第90図の４がそれに当たる。これは場合によっては、他の石器を作成するのに利用されたのかもしれない。

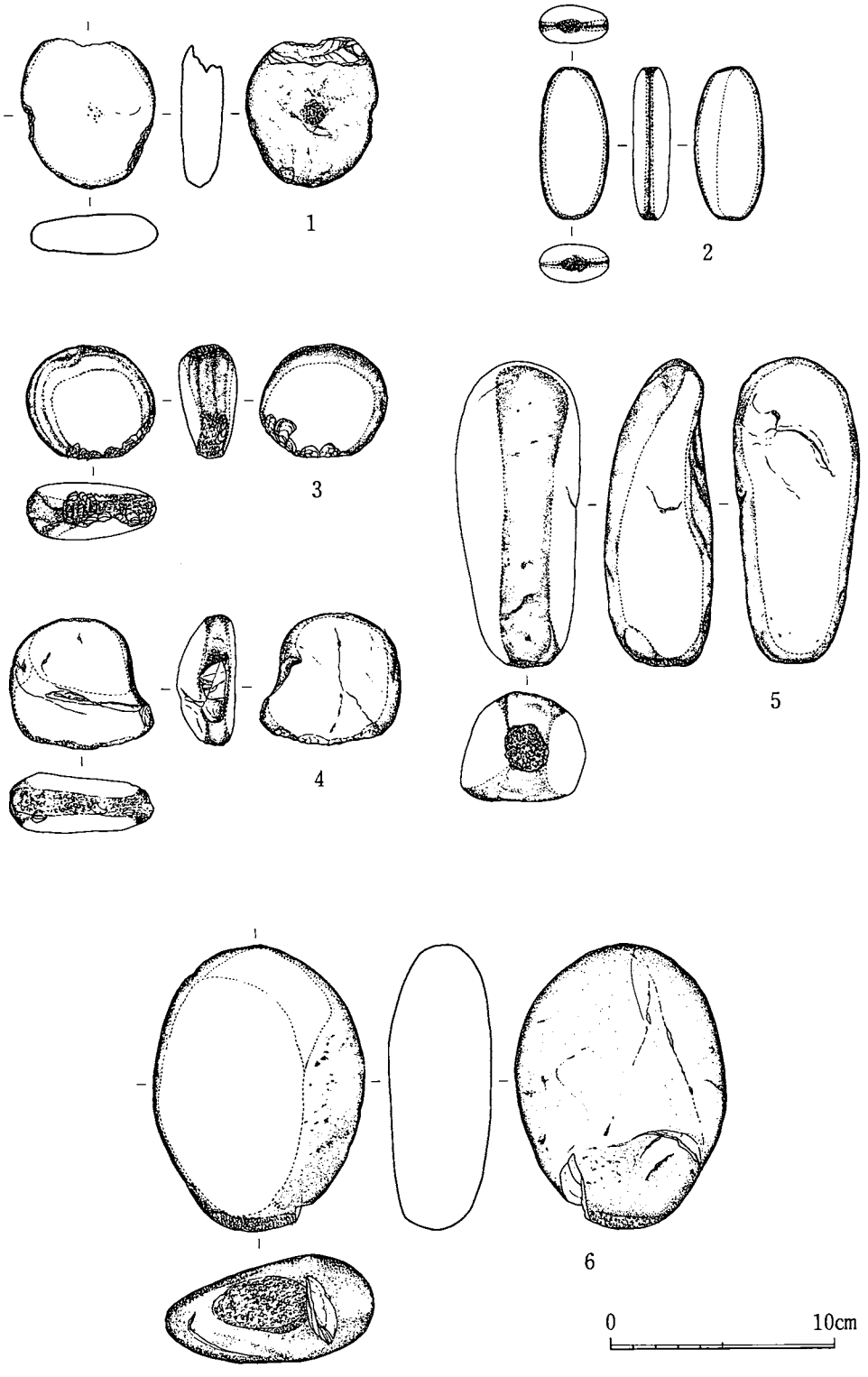
Ⅱ－３類【第90図５】

Ⅱ－３類は、自然礫をそのまま利用したものである。かなり大型の礫を敲打し、剝がれている。左右の側辺に細かい敲打痕が残る。第90図の５がそれに当たる。

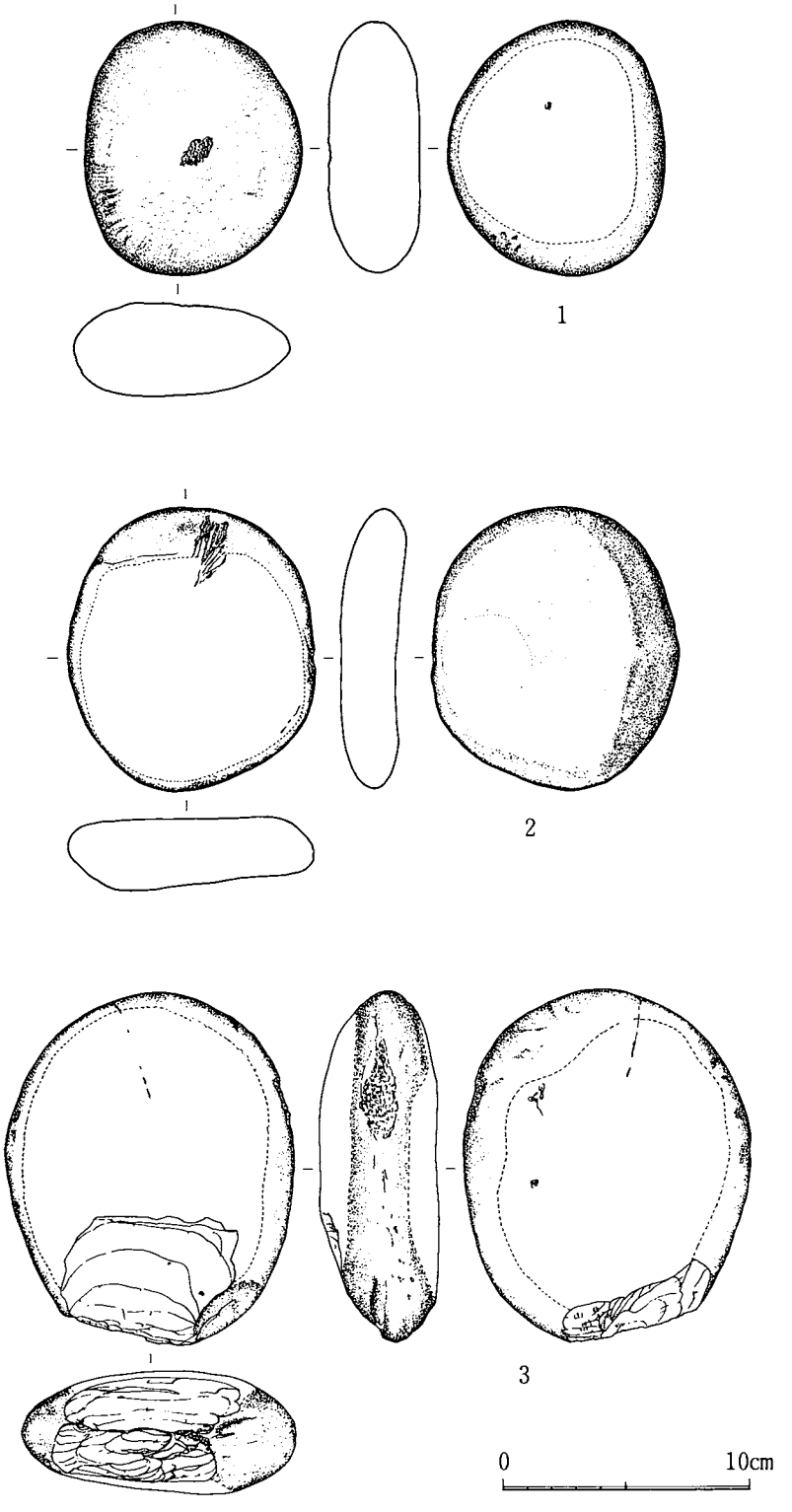
Ⅲ類【第91図・92図】

Ⅲ類は、大小の棒状の砂岩礫を敲打に利用したものである。第91図の１・３、第91図の６・７、第92図の１～３は明らかに敲打によって破損しているようである。いずれも手にもって使用するに手ごろな大きさである。第91図の２・４・５、第92図の４は明確な痕跡はみられないが、表面に磨痕があり何らかの使用が考えられる。

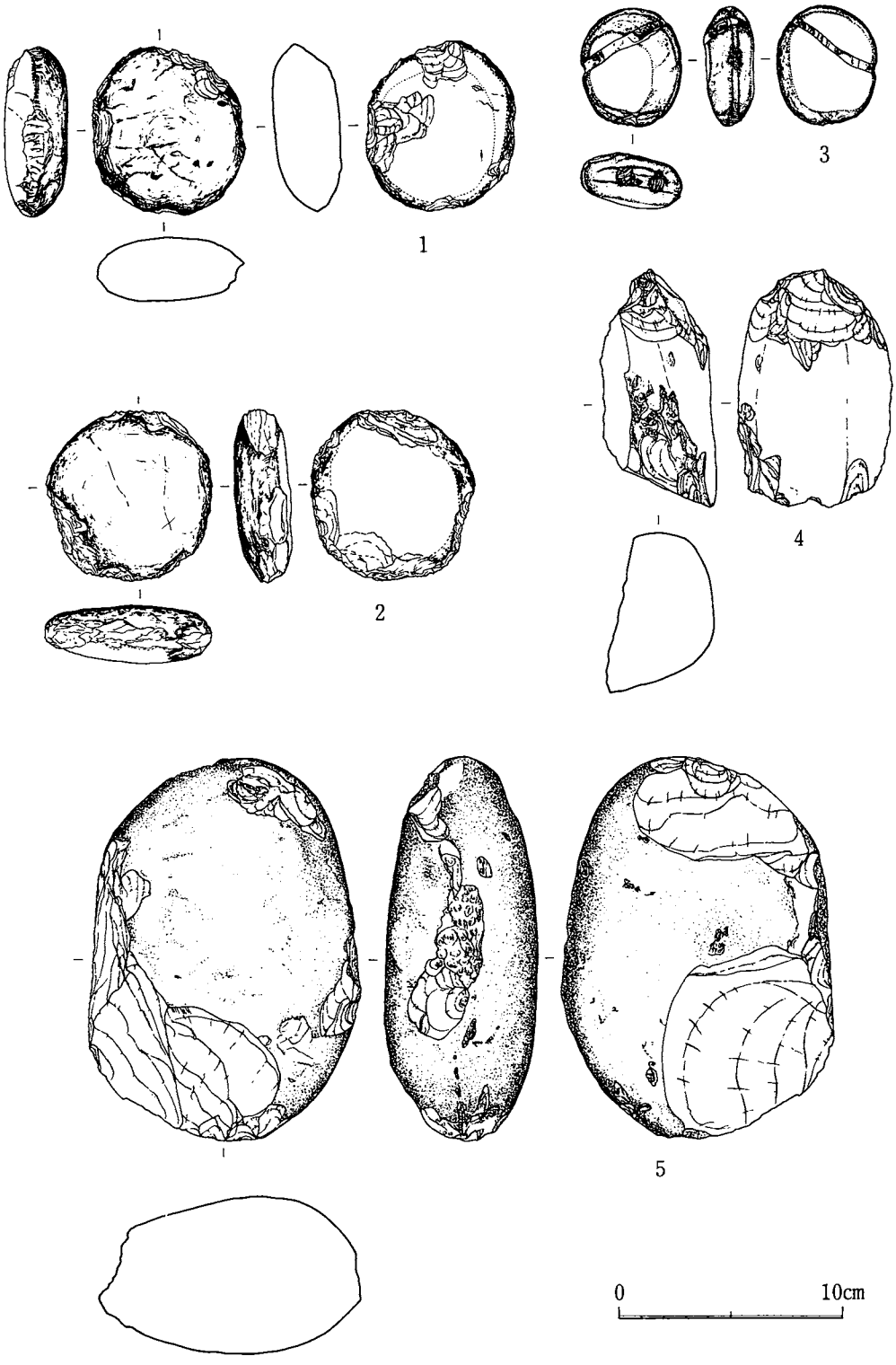
これらは、遺跡内に多く見られた砂岩の破片に関係があるのではないかと考えられる。他の石器の作成に利用されたのではなかろうか。



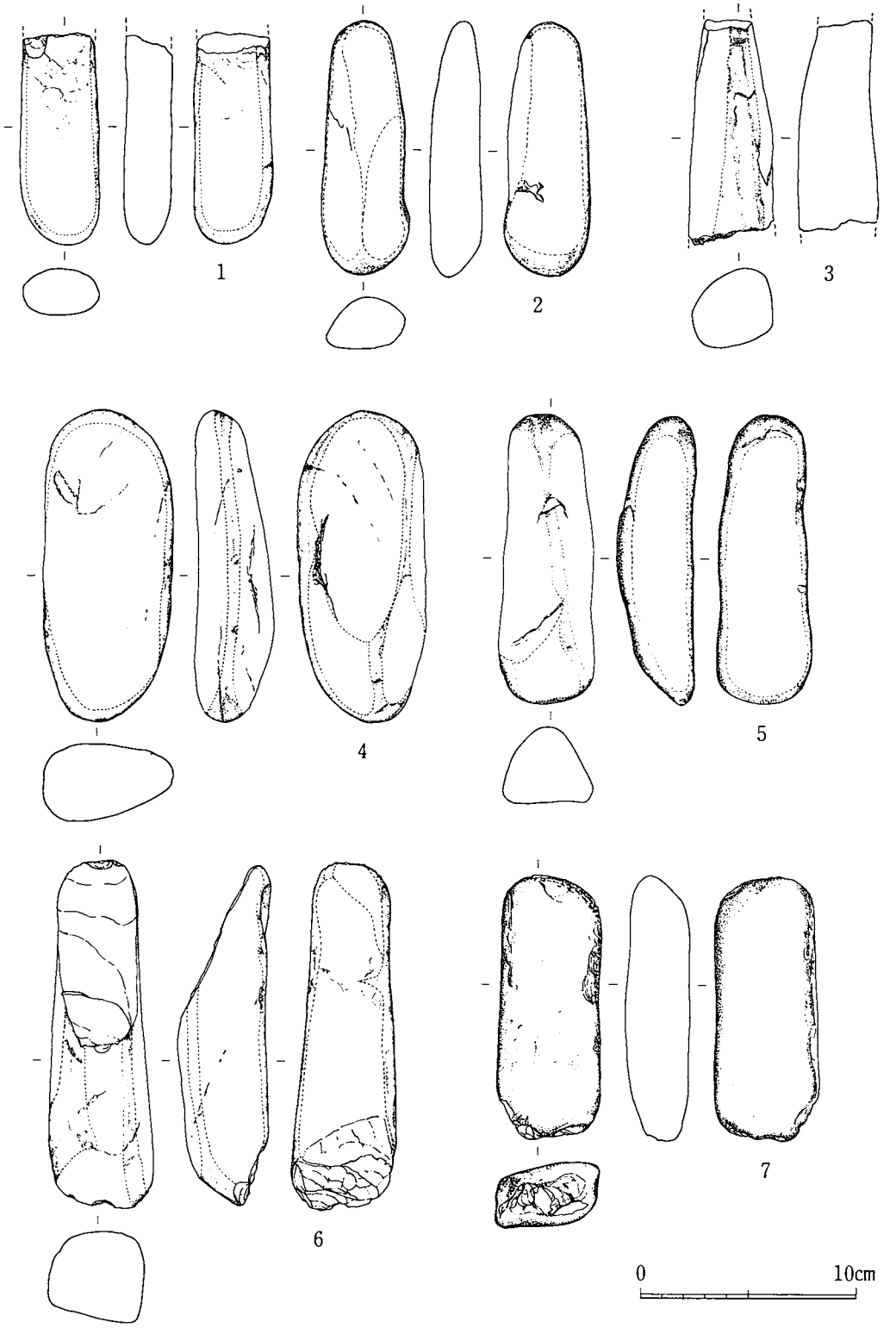
第88図　敲石実測図(1)



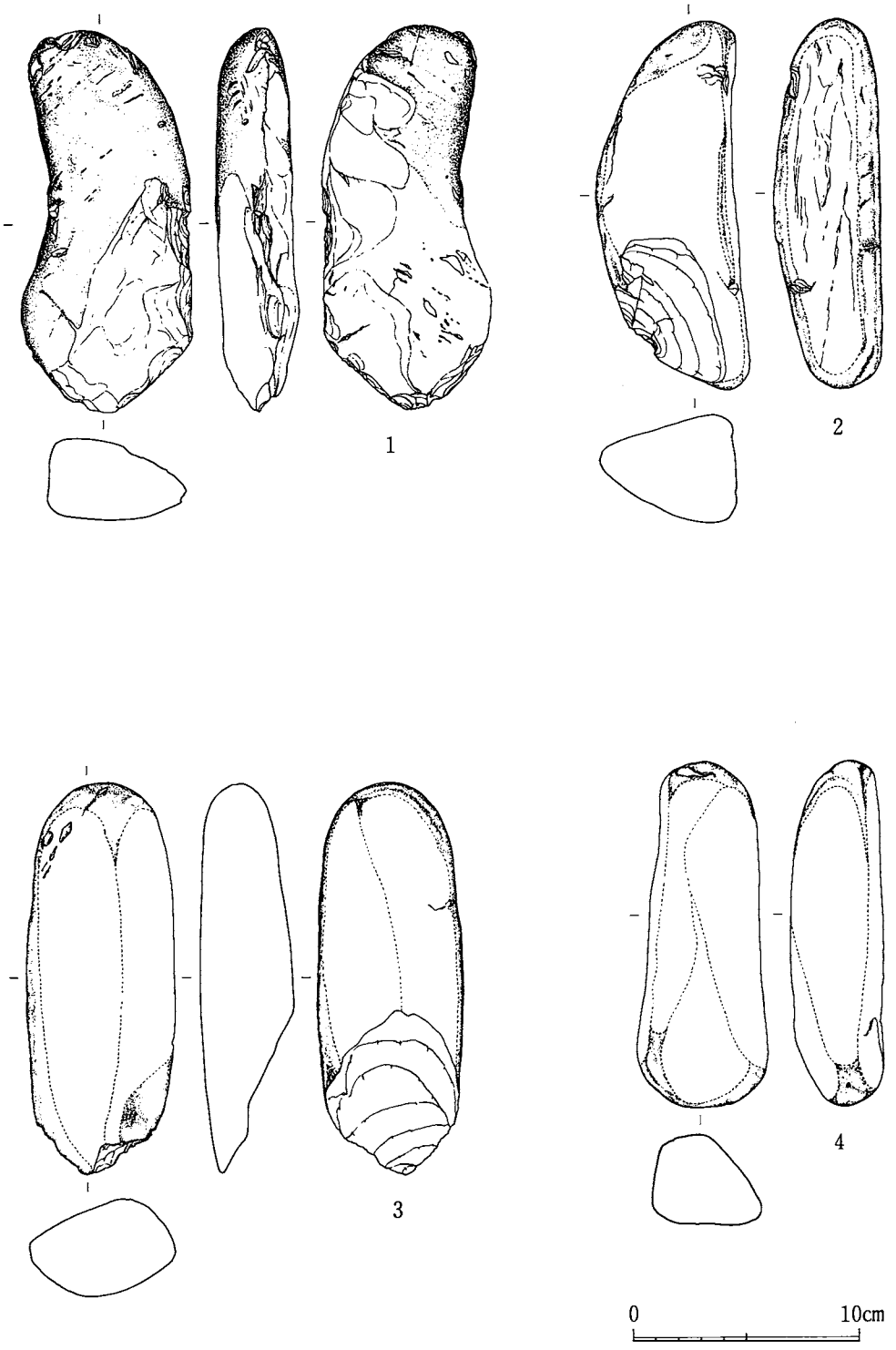
第89図　敲石実測図(2)



第90図　敲石実測図(3)



第91図　敲石実測図(4)



第92図　敲石実測図(5)

礫器

大きく２類に分けられる。いずれの礫器も使用による敲打のあとが残る。石材は、砂岩が多く、安山岩と思われるものもある。

Ⅰ類

Ⅰ類は、自然石をそのまま使用したものである。第93図３がそれにあたる。

Ⅱ類

Ⅱ類は、大型の礫片や剝片を利用したものである。さらにⅡ－Ａ類・Ⅱ－Ｂ類・Ⅱ－Ｃ類に分けられる。

Ⅱ－Ａ類【第93図１・２、第94図、第95図】

大型の礫片を利用したものである。割れた状態をそのまま加工せずに使用しているものが多い。使用した部分に打撃痕が残る。

Ⅱ－Ｂ類【第96図１・２・３】

大型の剝片を利用したものである。刃部にあたるあたりに少し加工を加え、刃部らしくしている。これは、見方によっては、打製石斧の一種とみることもできる。

Ⅱ－Ｃ類【第97図】

側辺全てに剝離を施すものである。

石錘

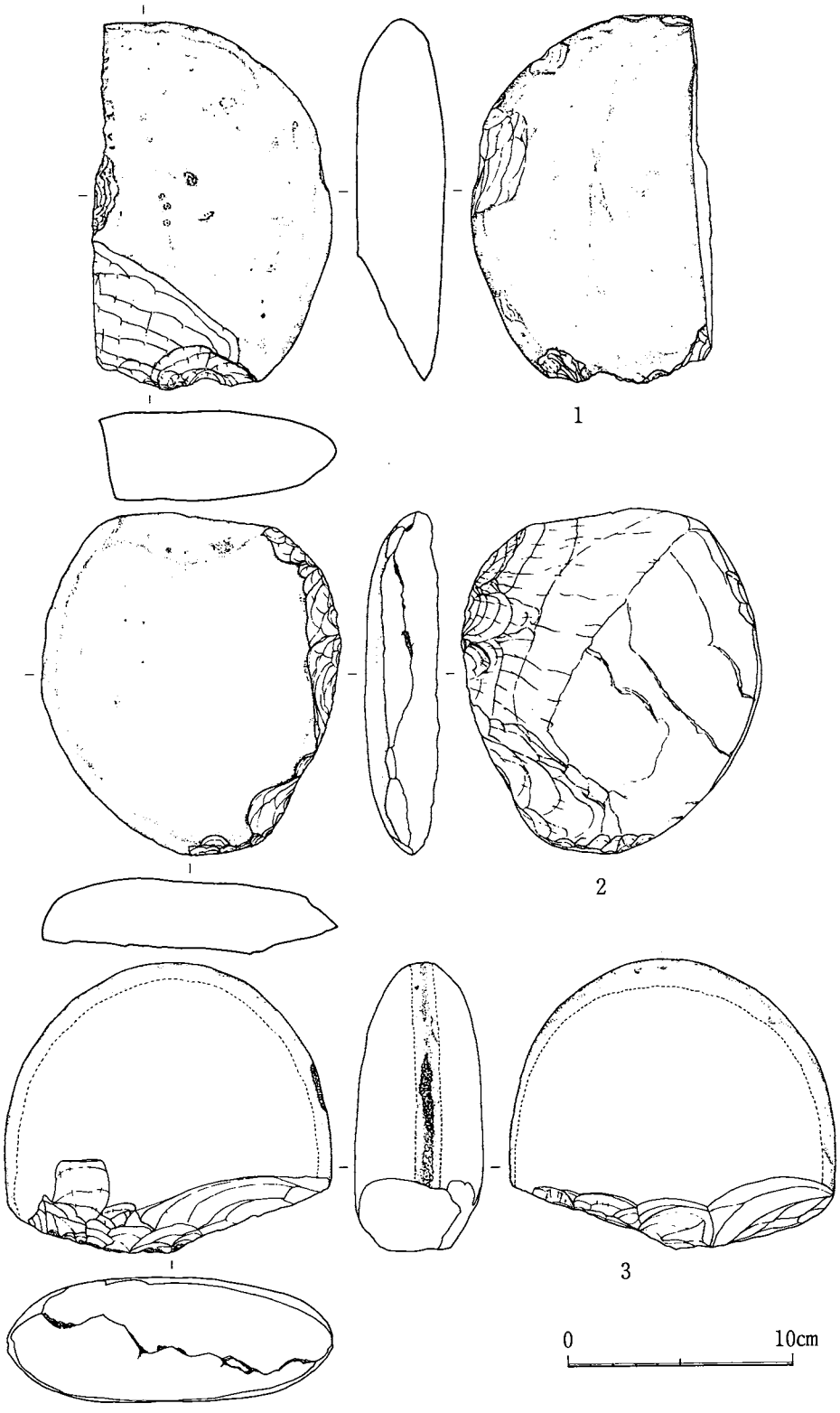
石錘ととらえた石器は、偏平な自然石の側面に打撃を加え、抉りを設けるものである。主に　区に出土している。13点出土した。石材は、砂岩と頁岩である。抉りのはいり方からⅠ類・Ⅱ類の二つに分けられる。

Ⅰ類

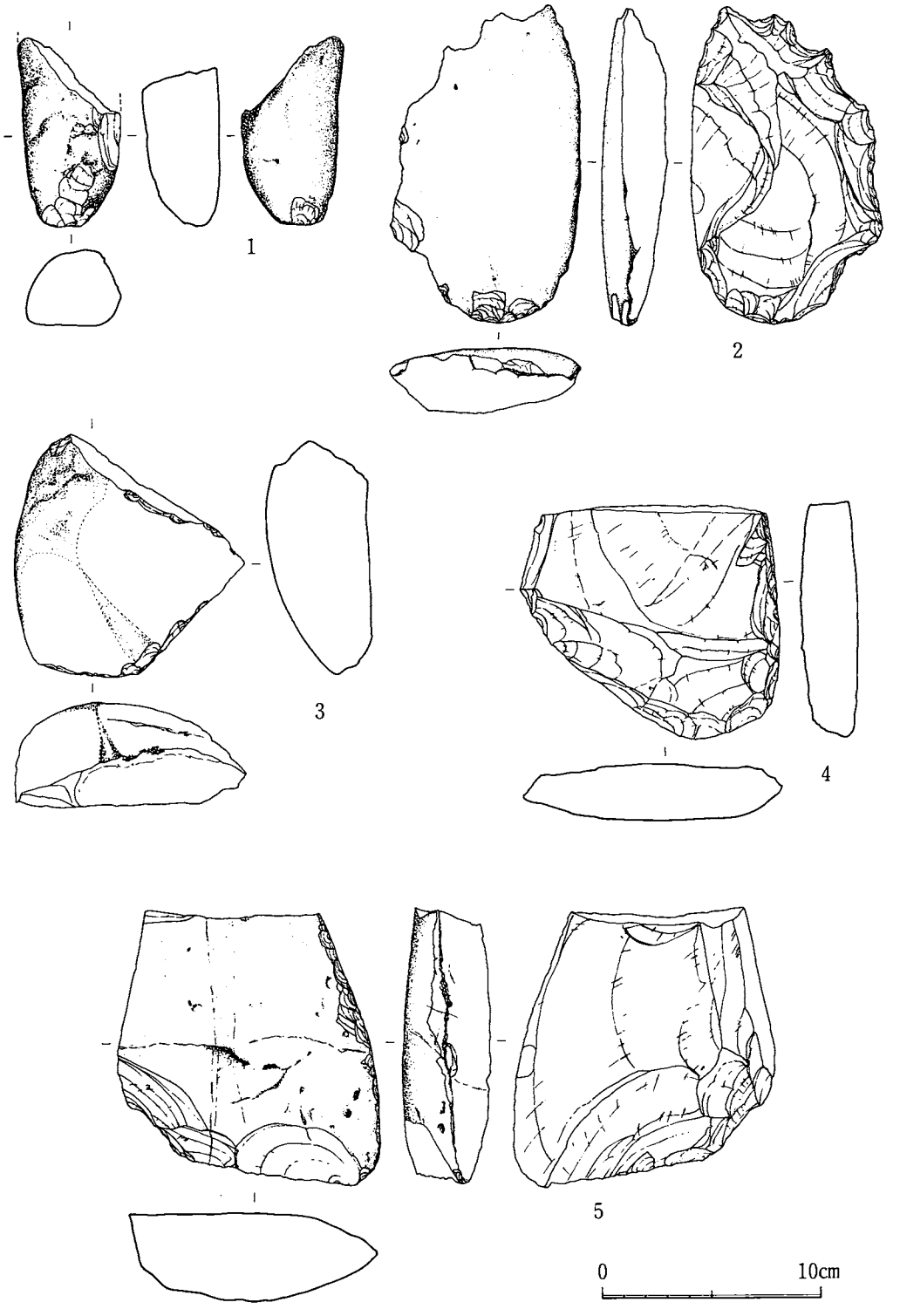
Ⅰ類は、２つの側面にのみ抉りを入れるものである。中には、砂岩の剝片を利用したり、自然石の形を利用し、抉りを片方だけに入れるものもある。第99図の１・２は、自然石の一部に抉りを少しいれただけのものである。これは、石錘とするには、やや難がある。第98図の１・２・４は、２側面に抉りを入れるものである。４は、頁岩を利用したもので、片面を磨石として利用していたようである。

Ⅱ類

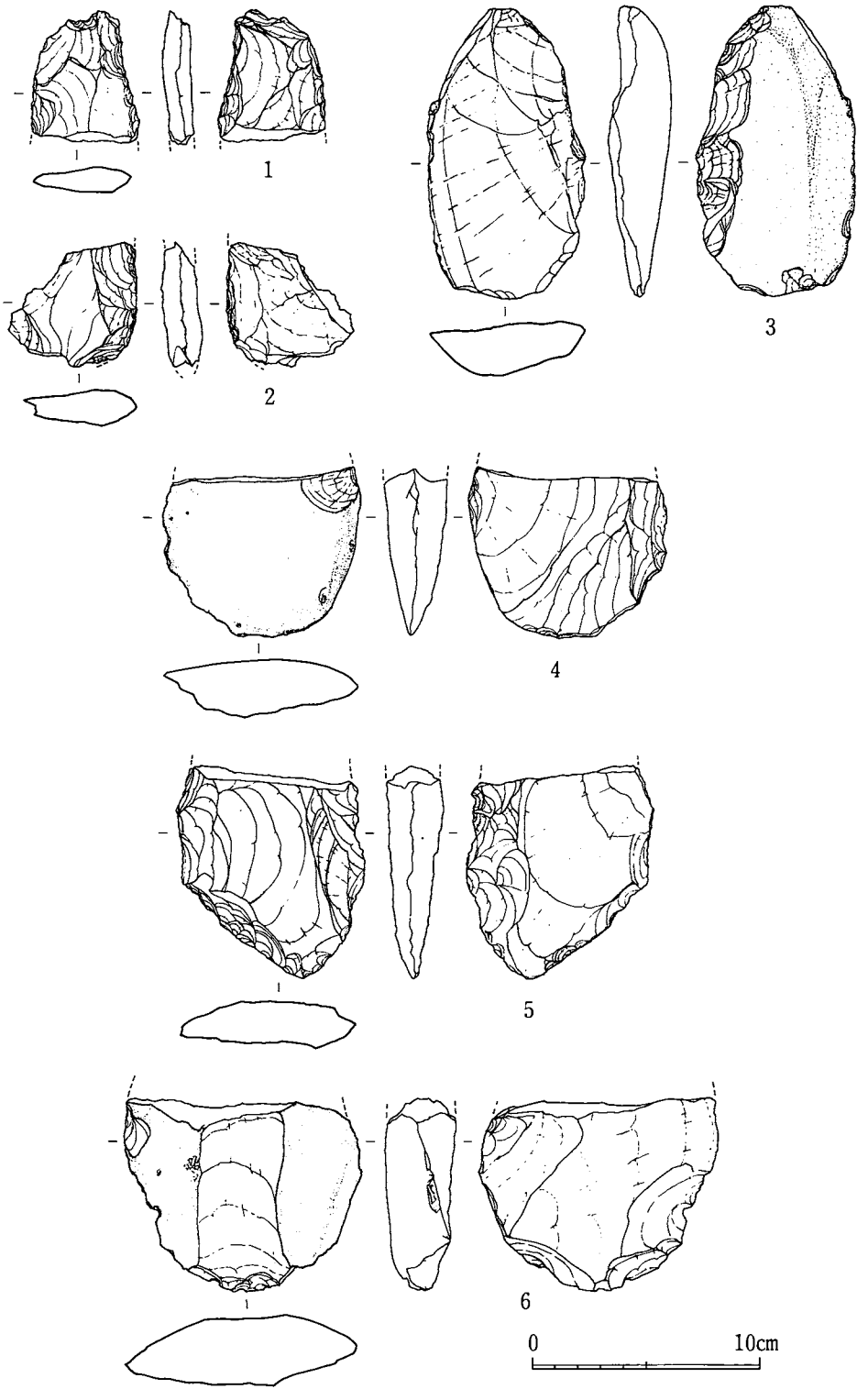
Ⅱ類は、２側面に加えて、上下にも入れるものである。その中には、自然石を利用したものが多い。中には、磨石として、利用したものを転用したと思われるものもある。第98図３は、抉りの入る位置が近く、入り方もおかしいが、自然の凹みを利用したものとしてここに入れる。５・６・７・９・第99図の３は、抉りを４方向から入れるように意図している。この他に第99図の５は、偏平な石を磨石として利用した後に石錘にしたものであろうか。６は、剝片を利用



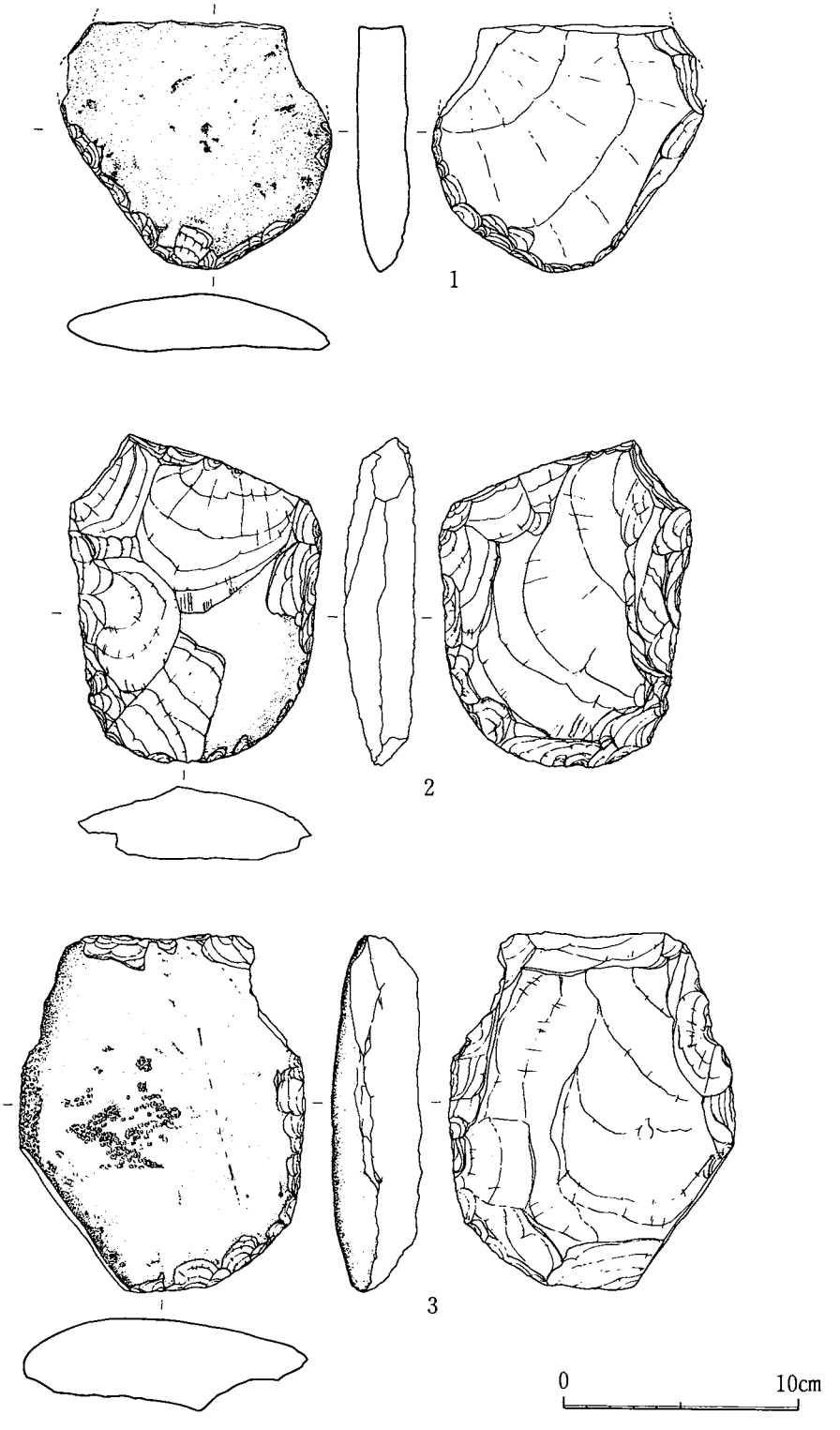
第93図　礫器実測図(1)



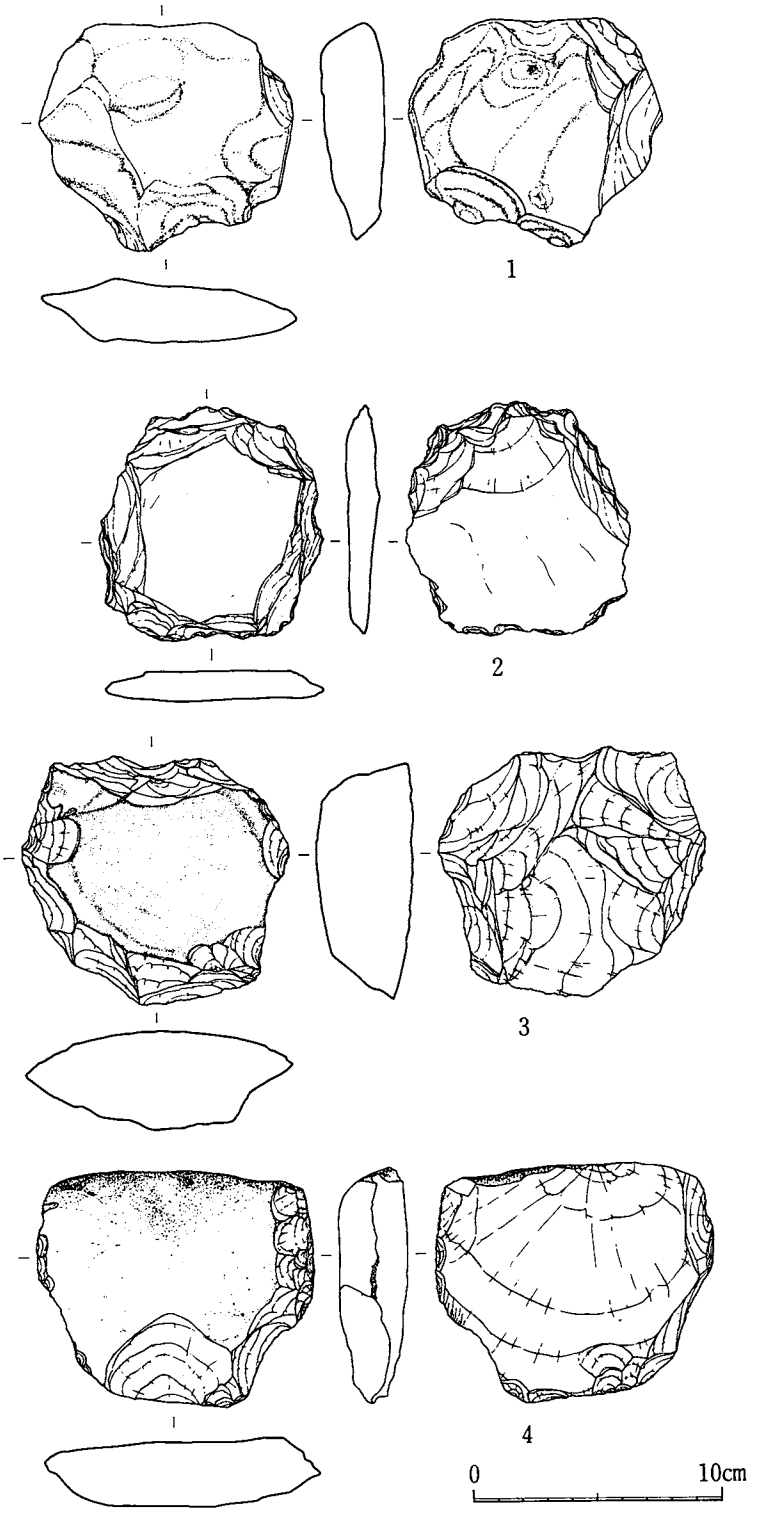
第94図　礫器実測図(2)



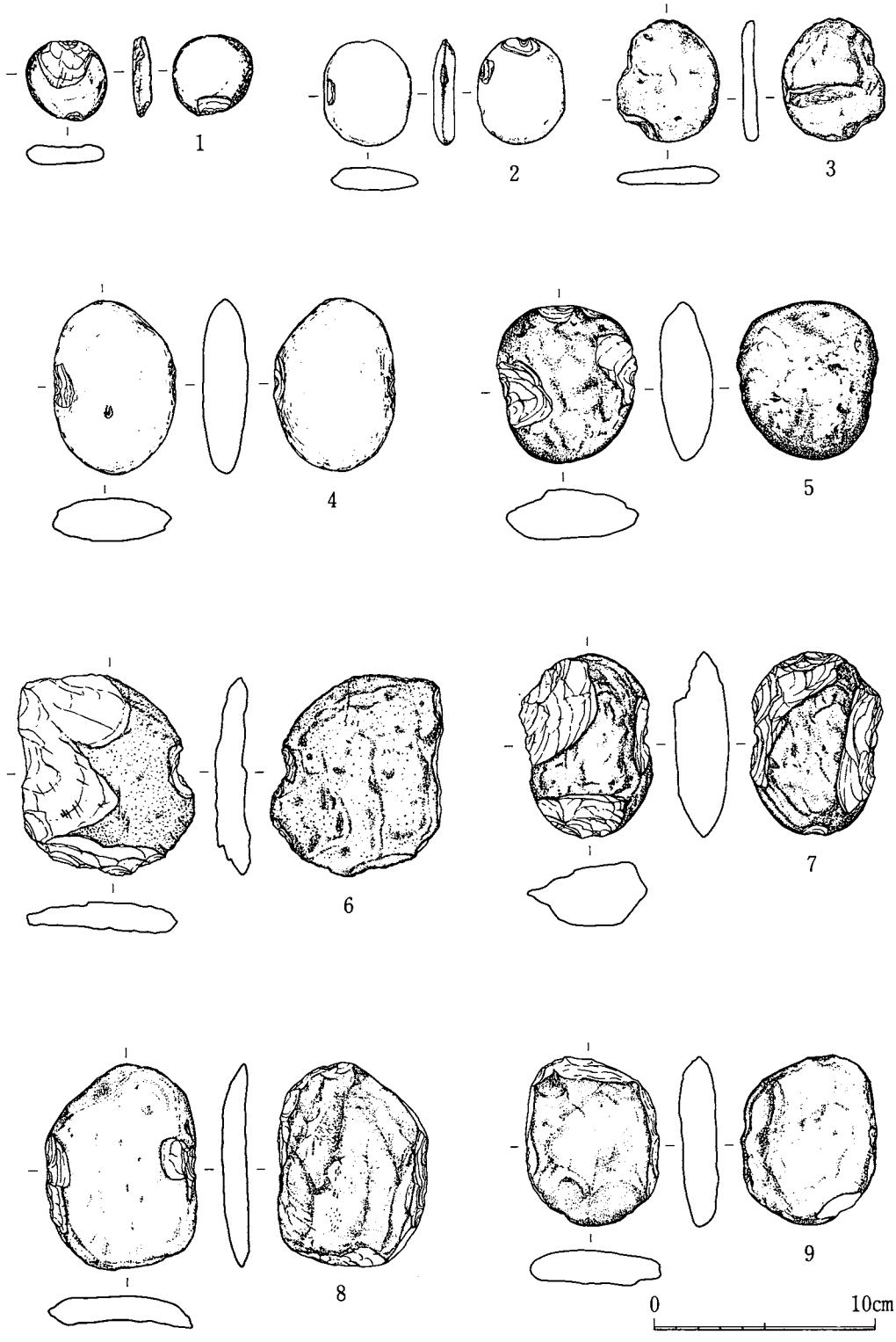
第95図　礫器実測図(3)



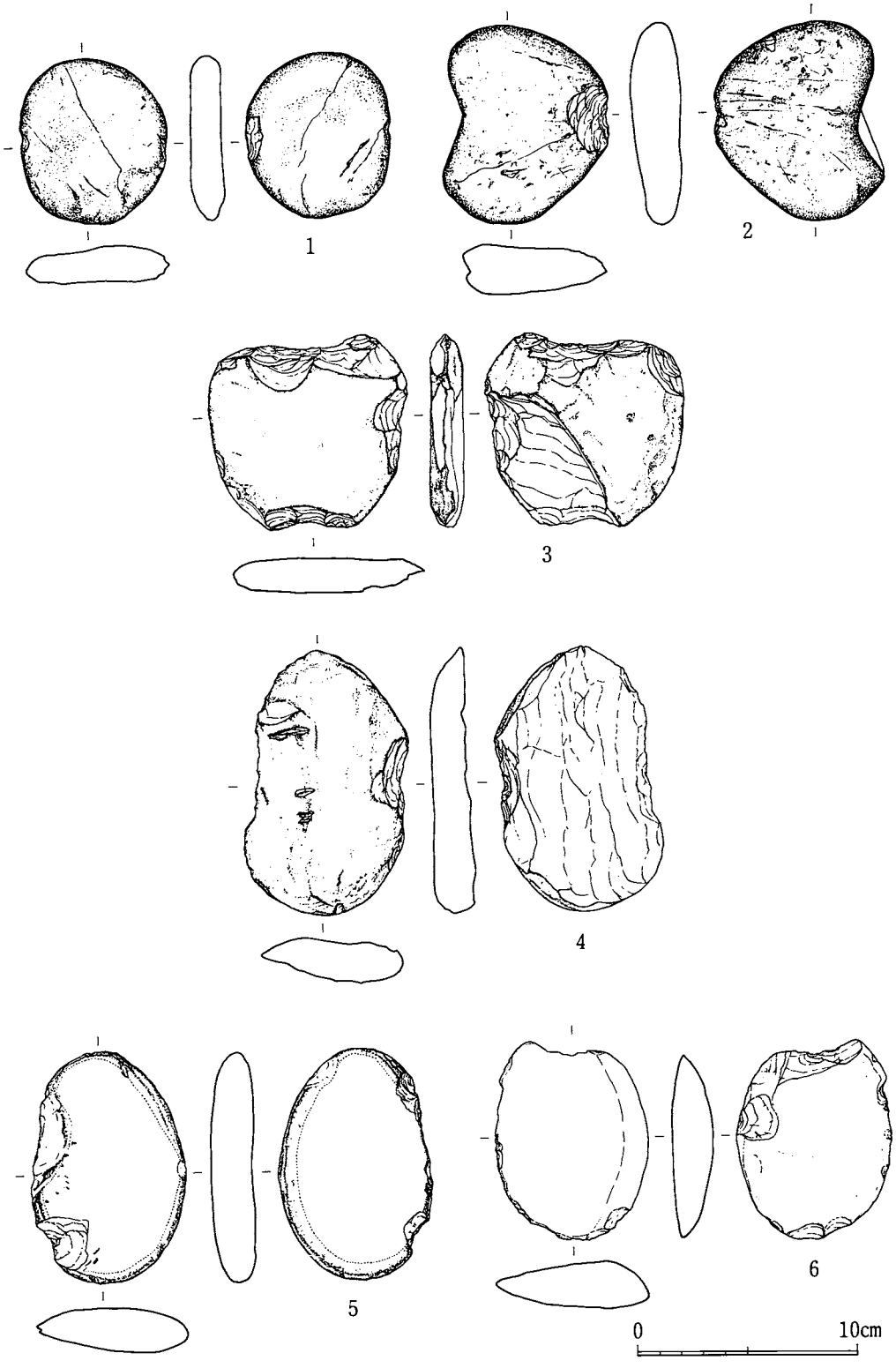
第96図　礫器実測図(4)



第97図　礫器実測図(5)



第98図　石錘実測図(1)



第99図　石錘実測図(2)

したものであるが、剝片を磨石として両面をよく利用しており、表面がつるつるしていた。この側面に抉りを入れている。ただ、あきらかに石錘とするには抉りの入り方などからややためらわれる。

石皿

従来の分類で明確に石皿と認識できるものは、３点である。外に表面に磨研の跡が残るもので、大きさから考えて磨石とするより、石皿とした方が良いものがある。先のものをＩ類、後者をII類とする。

Ｉ類

Ｉ類は、砂岩が使用され、かなり磨研される。第100図の１は、偏平な自然石の一面の平らな方を下にして片面を利用している。研磨の跡はかなり残る。２は、破片となっているが、楕円形のかなり空隙の入る凝灰岩を利用したものである。一面のみが利用されている。磨研された面は、よくなされているが平らである。その下面は、やや凸状である。第102図の１は、かなり大型のもので平らな面を下にして、かなり使い込まれており、凹みが大きい。砂岩製である。

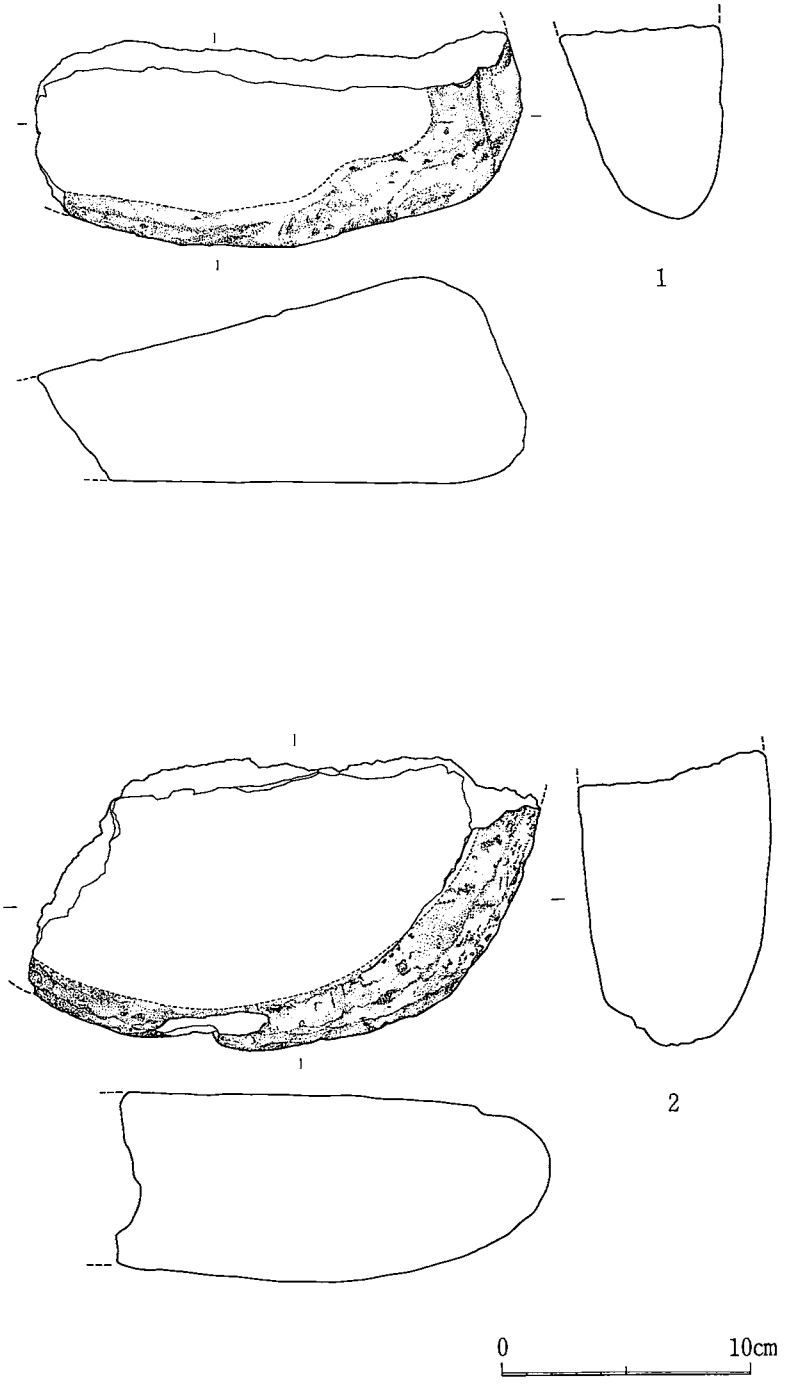
II類

II類は、Ｉ類に比べて小型のものである。いずれも平らな石を利用したもので、使用により表面が凹になるものがある。第101図の１は、小型の偏平な石を利用したもので、表面が両面磨研されている。２は、砥石かも知れないが、磨研に際しての角がみられる。表面の磨研はよくなされている。３は、両面使用されている。片面の使用が大きくよく磨研されている。その面の端の方には、人工かどうか分からないが、条痕が入る。４は、両面使用されたものである。使用はさほどよくはなされていない。第103図の１は、棒状の石の２面を使用している。砥石としての利用も考えられる。２は、平面形が細長い偏平な石を使用している。両面が利用されていたようである。３は、欠けているが、棒状なものであろうか。片面を利用しているようで、磨研されている。４は、角張った石を利用したもので、片面に磨研の跡が残る。これらの石は、いずれも砂岩を利用したものである。石皿とするより砥石としての利用があるようでもある。

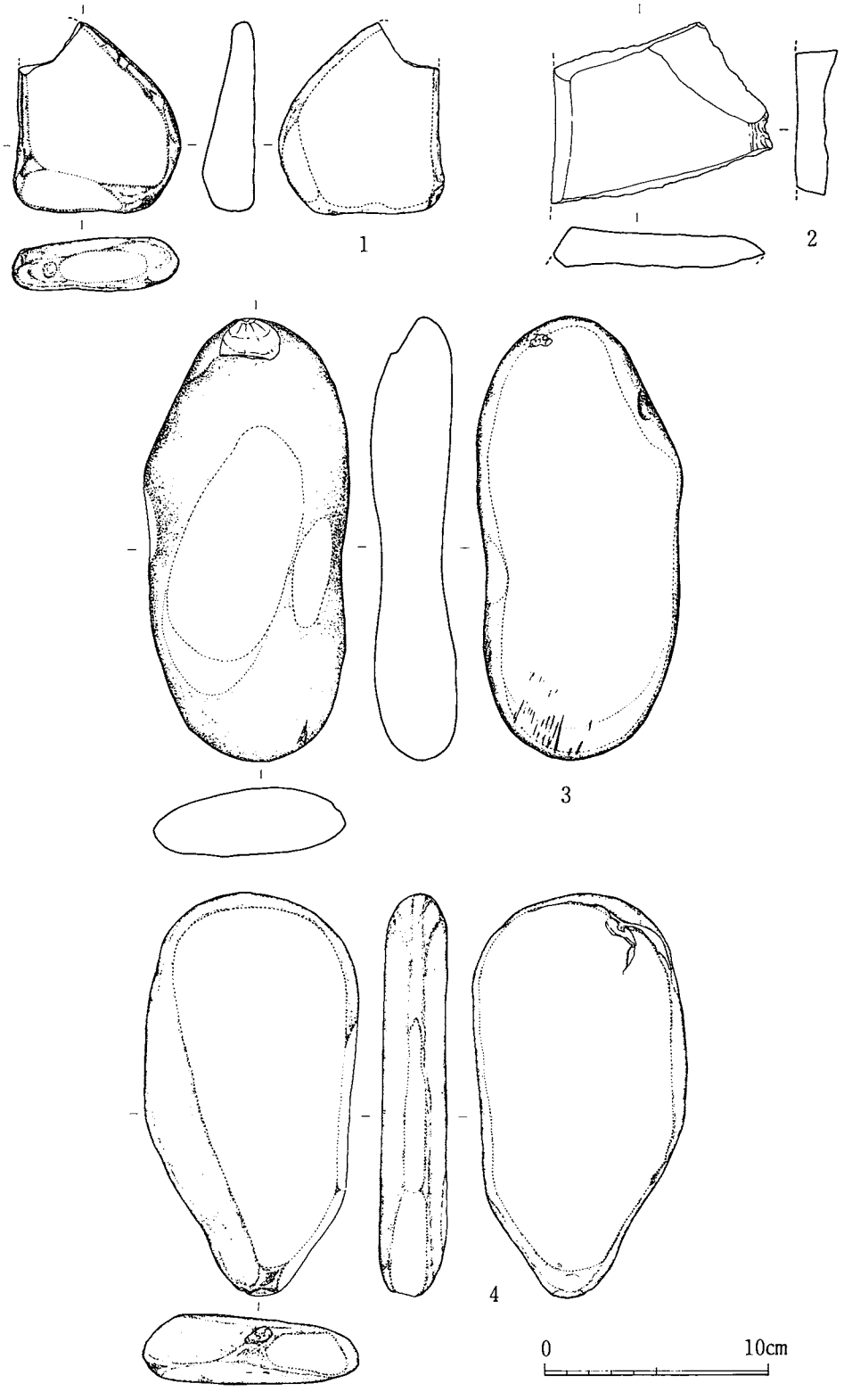
砥石【第102図３】

２つの面に0.50cm前後の線状痕跡を５、６本つけたものである。沈線らしきものから幅１cmほどのものまである。石材は、粗目の砂岩で、全体的に火を受けた様に赤くなり脆い。使用するには、この条痕の残る面を利用したものであろう。ただ、何を行ったのか不明である。

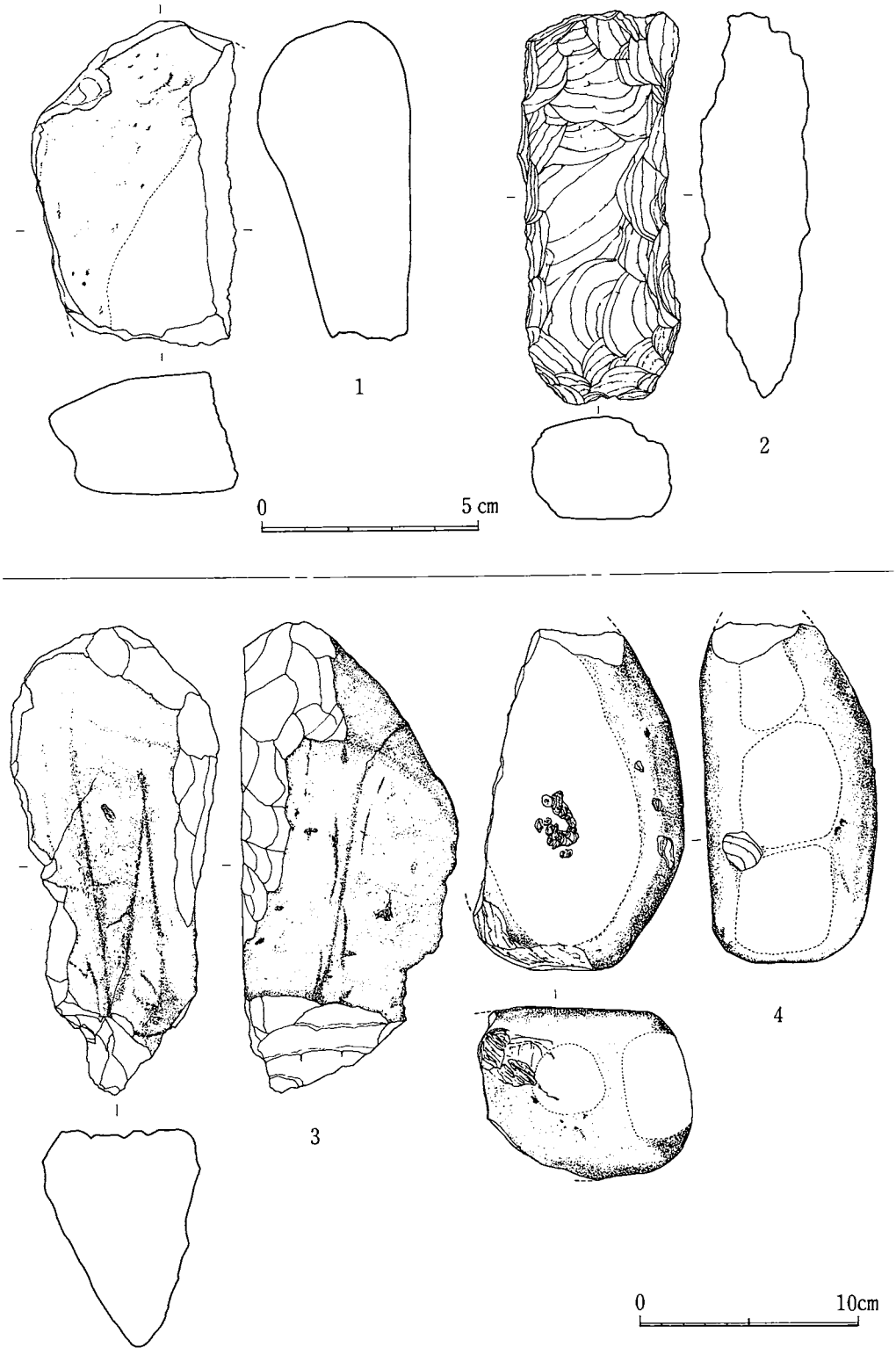
その他の石器



第100図　石皿実測図(1)

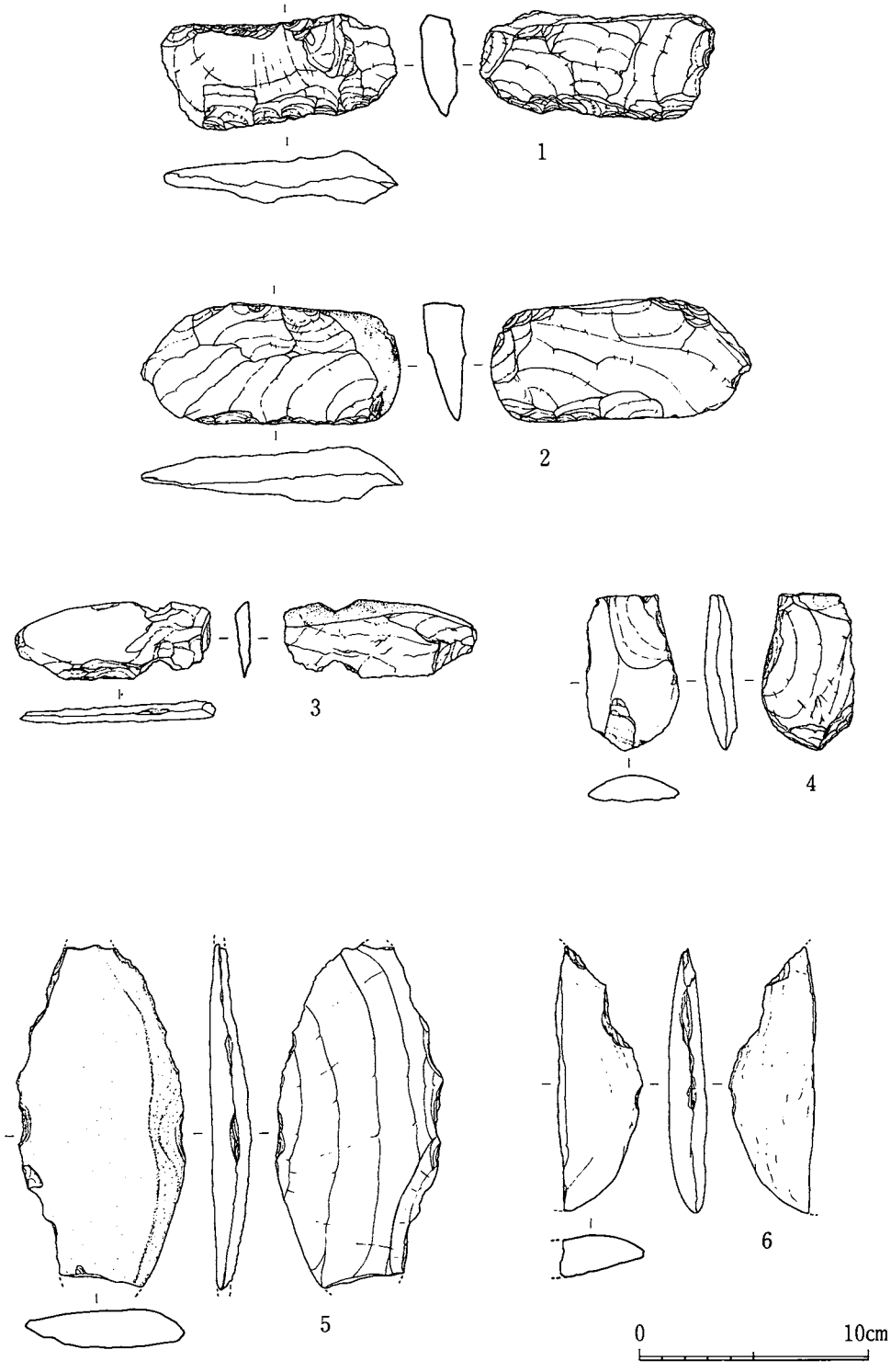


第101図　石皿実測図(2)

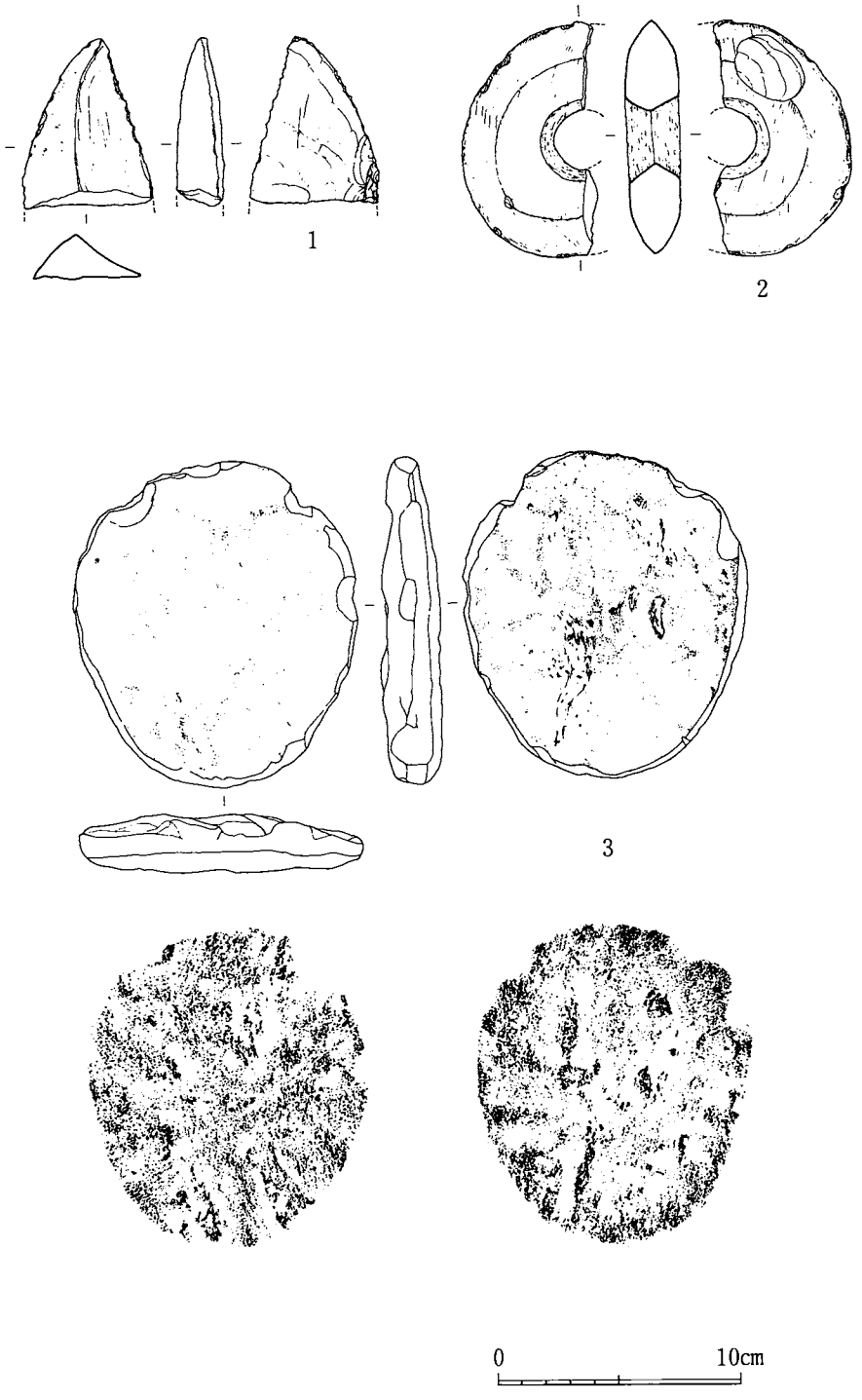


第102図　石皿・砥石・台石・不明石器実測図

第103図　石皿実測図(3)



第104図　その他の石器実測図(1)



第105図　その他の石器実測図(2)

その他に、石鎌・環状石斧・沈線の入った石などがある。

第104図の１～３は石鎌ととらえた。縦長の剝片の長側片を刃部と利用しているようである。１・２は柄の装着部はないが、３には両側から抉りを入れて、柄の装着部を作っている。第104図の４～６は加工を加えた跡があるが、利用が良く分からない。５は石錘であろうか。６は、石斧にしてはやや不安である。

第105図の２は環状石斧で、半分に欠けている。石材は砂岩である。本体と刃部を丁寧に研磨している。擦孔した部分は、両面から他の硬質の石材を回転させることによって穴をあけたようで、痕跡がそのまま残る。残存した部分で径を推定すると、約9.5cmである。刃部にやや欠けた跡があるが、使用によるものかどうか不明である。

第105図の３は、凝灰岩を加工した円板状の石である。両表面に凹凸があり、何かを表現したものと思われる。側面には、赤色顔料が塗布されており、両表面にも顔料が塗布されていた可能性がある。長径が約13cm、短径が11.5cm、厚さが約2.3cm前後である。図上では、上部より下部がやや厚い。

102図の２は、不明の石器である。大きな打製石斧のようであるが、表面は火をうけたのか赤化して、もろくなっている。石材は凝灰岩であろう。

第４節　弥生時代の遺物

弥生時代の遺物はごく僅かである。ここでは土器のみを取り上げる。

土器

口縁部のみの出土であるが、第106図の１・２がこの中にはいる。１は、甕形土器の口縁である。須玖式系統のものであろう。復元口径が28cmをはかり、やや小振りのものである。ナデ調整でかなり焼きのよいものである。２は、やはり甕形土器の一部であるが、非常に限られているため時期は、弥生時代後期のものと思われるが、明確ではない。口縁部にヨコナデの跡が残る。 この他にもこの時期の遺物があるかもしれないが特徴的なものはなく、不明である。特にこの遺跡では多量の丹塗りの土器片が出土しており、その中には、弥生時代のものも含まれている可能性がある。器形としては壷・甕・高坏などがある。しかし、完全に器形を復元できるものは僅かであり、それも古墳時代のものに限られていた。このため、弥生土器としてはこの２点のみにとどめる。

第５節　古墳時代の遺物

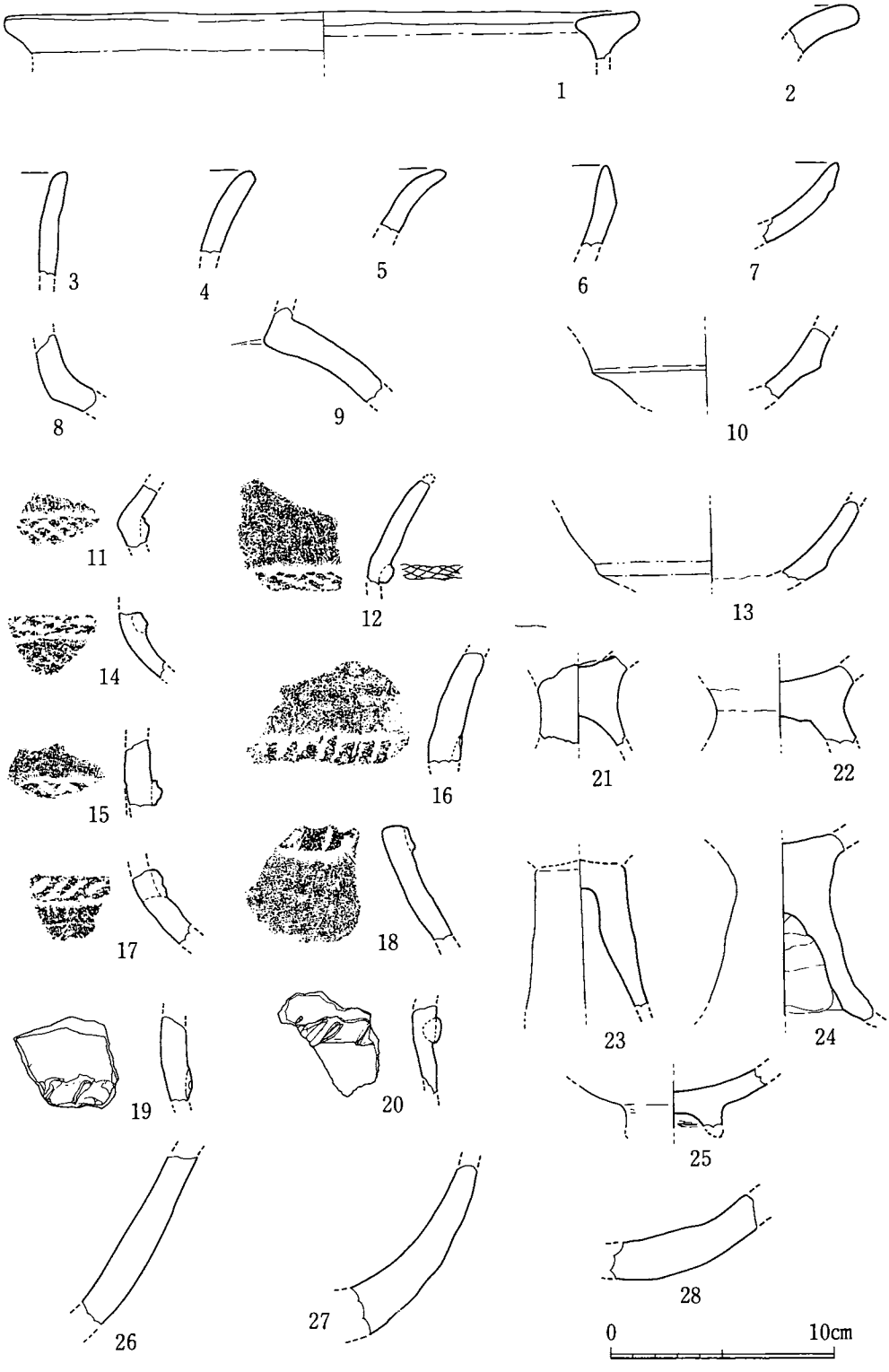
この時代の土器としては、須恵器と土師器がある。しかし、この遺跡で出土しているのは、須恵器と丹塗りの土器片である。数点それ以外の土師器もある。

土師器

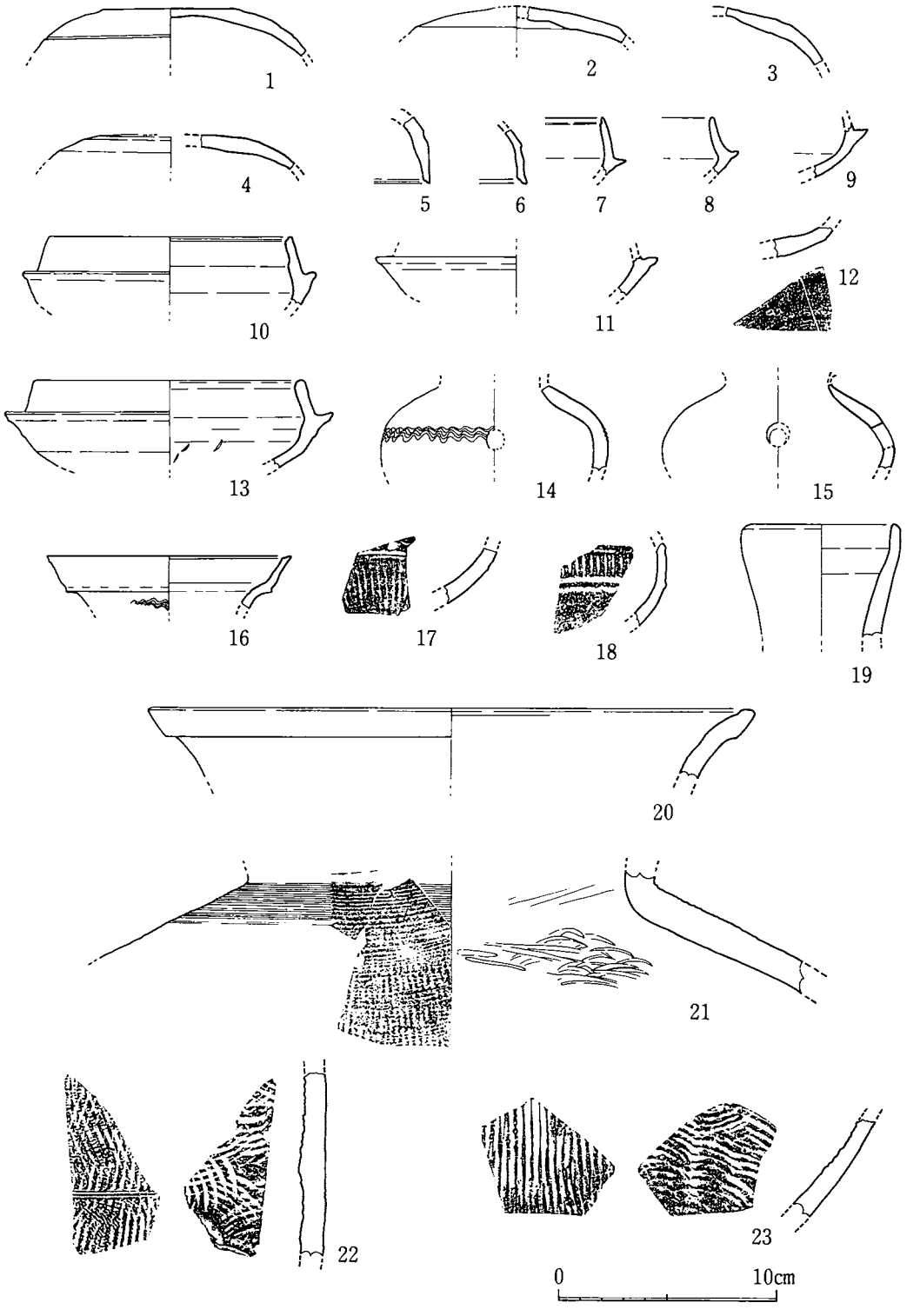
古墳時代の土師器として明確に特定はできないが、甕形土器と、高坏をあげられそうである。第106図の３～５・８・９・11・12・14・15・16・17・18・19・20・26・27・28が甕形土器の一部である。部分的なものが多く全体像を知るには程遠いが、頸部ないし胴部に張り付け突帯をもち、突帯には、斜めもしくは斜格子の刻みを入れるのが特徴である。器種のバリエーションがあるようであるが、実態が良くつかめない。口縁部は、ラッパ状に開くものが多い。頸部が締まるものも多い。

高坏も部分的なものが多い。第106図６・７・10・13・21・22・23・24・25などである。坏部の屈曲は明瞭で段をもって屈曲をなす。脚部は、坏と脚の繋ぎめでの破損が多い。脚の貼り付けたものが剝げているところから一つの製作技法がわかる。若干製作方法が異なるものもあり、時期差を示すものかも知れない。脚のばらつきも大きく、脚が大きく、付け根から大きく開いていくものと付け根から直気味に下り裾近くで急激に開くものがある。22は、前者の例であり、21・23は後者の例である。

これらの土器は、多くが丹塗りのもので特に高坏はほとんど塗られている。外にも丹塗りの土器片は多く、破片だけで　100点を越える。これは、通常の生活跡からの遺物としては異常であるように思える。



第106図　弥生時代及び古墳時代土器実測図



第107図　古墳時代須恵器実測図

須恵器

A・B－4・5・6に多く出土した。出土層は、かなり上部で表土もしくは、表土中の出土である。この出土層を調査の時点で詳細に検討していくと、実際の表土層より上部則ち客土であることがわかった。この土層は、分布が、斜面上部に限られることから調査地区より上部の丘陵部よりのものと思われる。現在この丘陵上は、牧草地として利用されている。伝聞であるが、この一帯は、昭和40年代に工事され、丘陵を削平し平坦化したものということである。とすれば、この丘陵上に古墳時代の遺構が存在した可能性がある。特に遺物のあり方からみて、生活跡というより、古墳などの埋葬跡存在が想定される。

出土した遺物はいずれも破片である。器種は、甕・瑤・坏・壷などがある。第107図1・2・3・4・5・6は、坏の蓋である。5・6からみると、かなり口縁が立ち、口唇部に明瞭な線がある。7～13は、坏の身である。10・13は、口径が復元され、10は、11cmを計り、13は、12.2cmを計る。7と10は、口唇部に稜が入りやや沈線気味になる。8と13は、口縁が丸まって終る。

14～18は、瑤である。14・15は、胴部で、一つの孔がみられる。14は、櫛描波状文が廻る。17・18は、胴部底部で17の上部に櫛描波状文が僅かに見える。18では、微隆起した線の間に櫛状工具による連続刺突が施される。16は、口縁で、復元径11.2cmを計る。下部に櫛描波状文が僅かに見える。

19は、壷の口縁部で、復元径6.5cmを計る。緩やかに立ち上がり、口唇部でほぼ直からやや内傾して終わる。

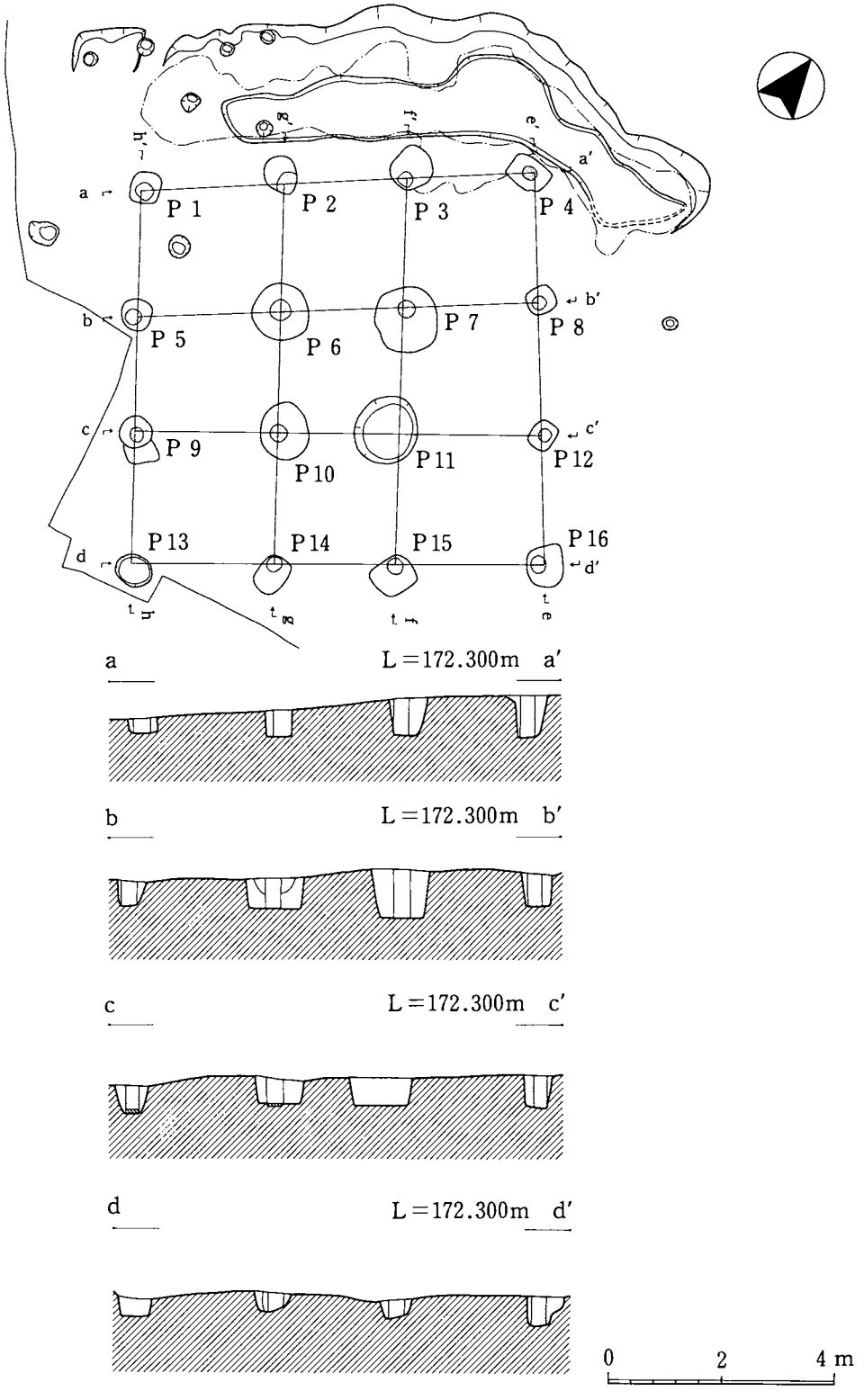
20～23は、大甕の破片である。20は、口縁部で、復元口径24.6cmを計る。ラッパ状に開き、外器面に帯状に肥厚する。21は、頸部付近である。外器面は、タタキを施した後カキメが施され、タタキをナデ消し、口縁部の調整へと続く。内器面には、同心円の宛て具の跡が薄く残る。22・23は、胴部片である。外器面に並行叩きを施し、内器面には平行もしくは同心円文の叩きが残る。22は、横方向カキメが走る。

これらの遺物は、陶邑1・2形式（？）に相当するようであるが、形態的な揺らぎがあり、実際にはこれより若干遅れそうである。

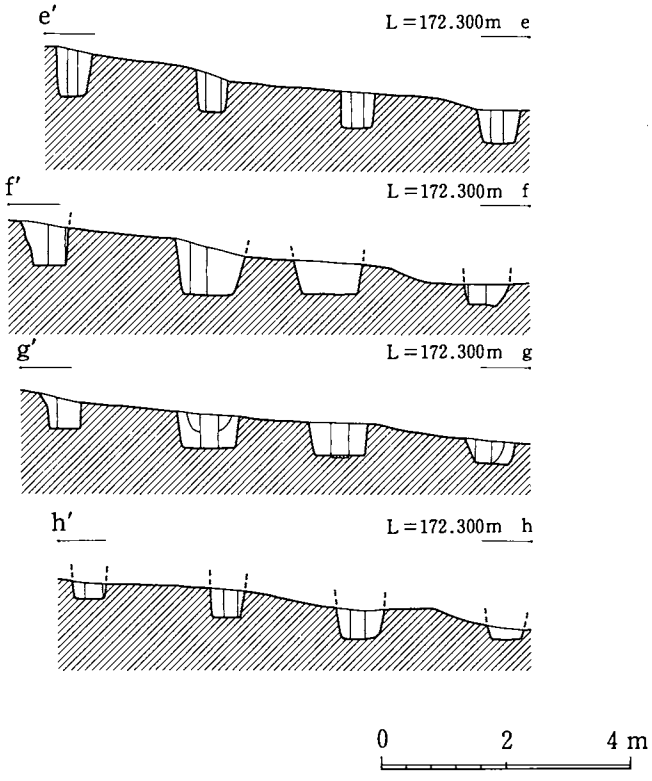
第6節　歴史時代の遺構と遺物

掘立柱建物跡【第108図・第109図】

調査終盤近くになって確認した遺構である。当初2つの柱の掘り方だけを確認していたが、他地域によく見られるイモ穴の類ととらえていた。埋土も黄褐色土のアカホヤを中心にしたあまりしまっていないものであった。しかし、調査を進めていくうちに硬化面を確認した。さらにその周囲に精査を重ねていくと、数個の柱跡が確認できた。その結果、三間×三間の掘立柱建物の遺構が判明した。



第108図　１号掘立柱建物跡実測図(1)

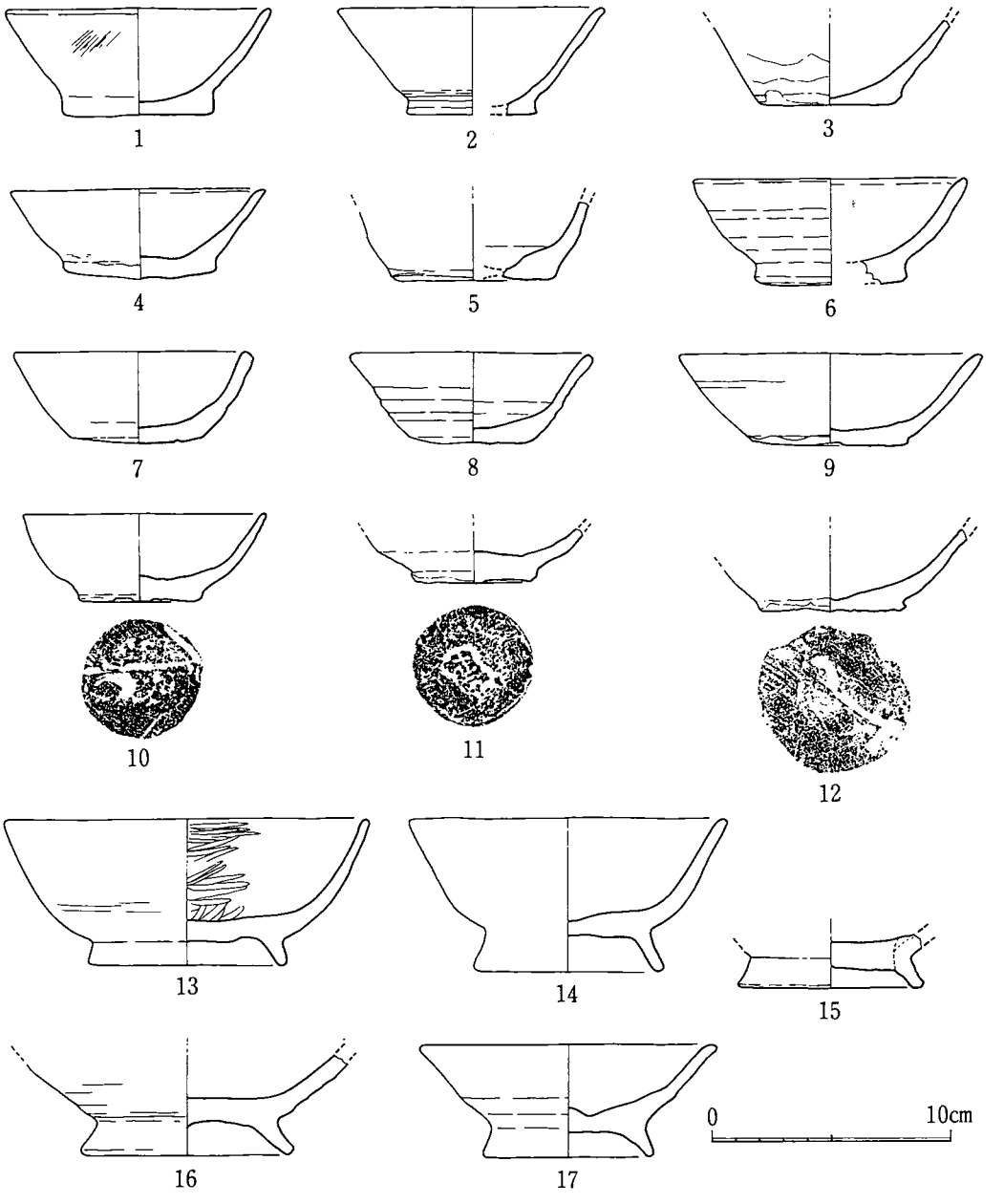


第109図　1号掘立柱建物跡実測図(2)

遺構は、遺跡のC－6・7区付近にあった。ここは、調査区北東の丘陵頂部から下ってきた斜面がやや緩やかに変化する地点に当たる。そこを標高172mほどに、約10m四方の平坦面に造成している。さらに建物の周囲を溝で囲っていた可能性がある。その溝を確認できたのは建物の北東側だけであったが、調査前の状況から考えると建物北西側にも溝が確かに存在していたからである。

この建物の規模は、南西方向を正面とみた場合、間口三間（7.20m）、奥行（6.60m～6.88m）三間を測り、柱間は等間隔ではない。尺に換算すれば、間口が約21.8尺、奥行が20尺～20.8尺あることになり、やや間口が横に広がるようである。柱穴を詳しく見ると、中央のP6・P7・P10・P11の4つの柱の掘り方が直径1m前後と大きく、他の周りにならぶ12の柱跡は掘り方が直径60cmと小さい。しかし、柱痕跡はすべてが直径約30cmで大差ない。建てる柱はそう変わりはないのに、中心の4穴だけ他より大きい理由は不明である。遺構の性格としては、平面形が方三間で平安時代後期に各地で見られるようになる仏堂に似ることから、この地方における仏堂ではないかと考えられる。

出土遺物は、柱内からは平安時代後期の土師器や縄文土器が出土した。仏堂の可能性があっ

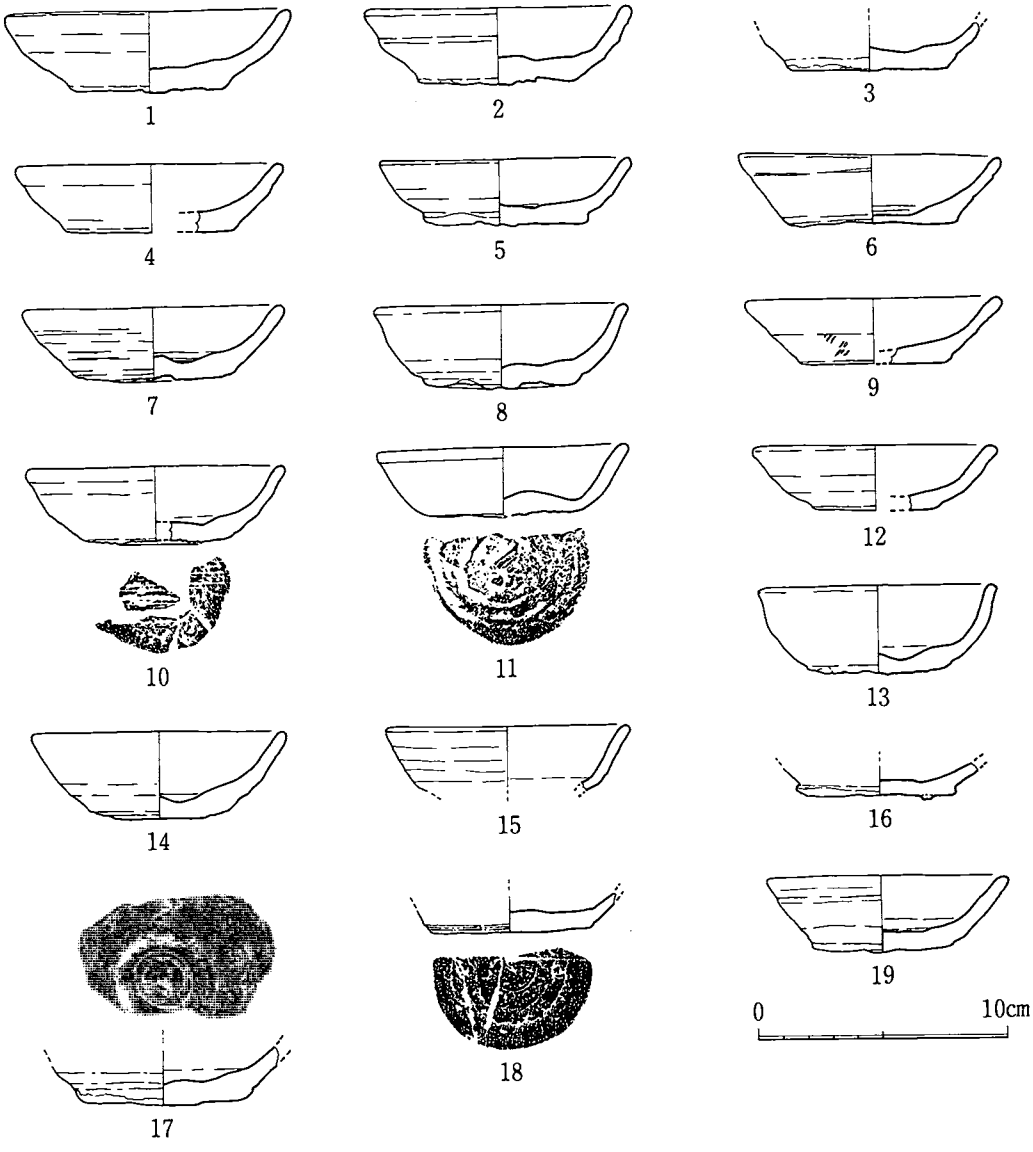


第110図　平安時代土師器実測図(1)

たので、柱跡を特に詳しく調査したが、仏教に関係する遺物の出土はなかった。出土遺物のうち、平安時代後期の土師器がこの建物に伴うものと考えられる。

遺物

柱痕跡の埋土や整地面上から出土した平安時代の遺物をこの遺構にともなうものとした。そ

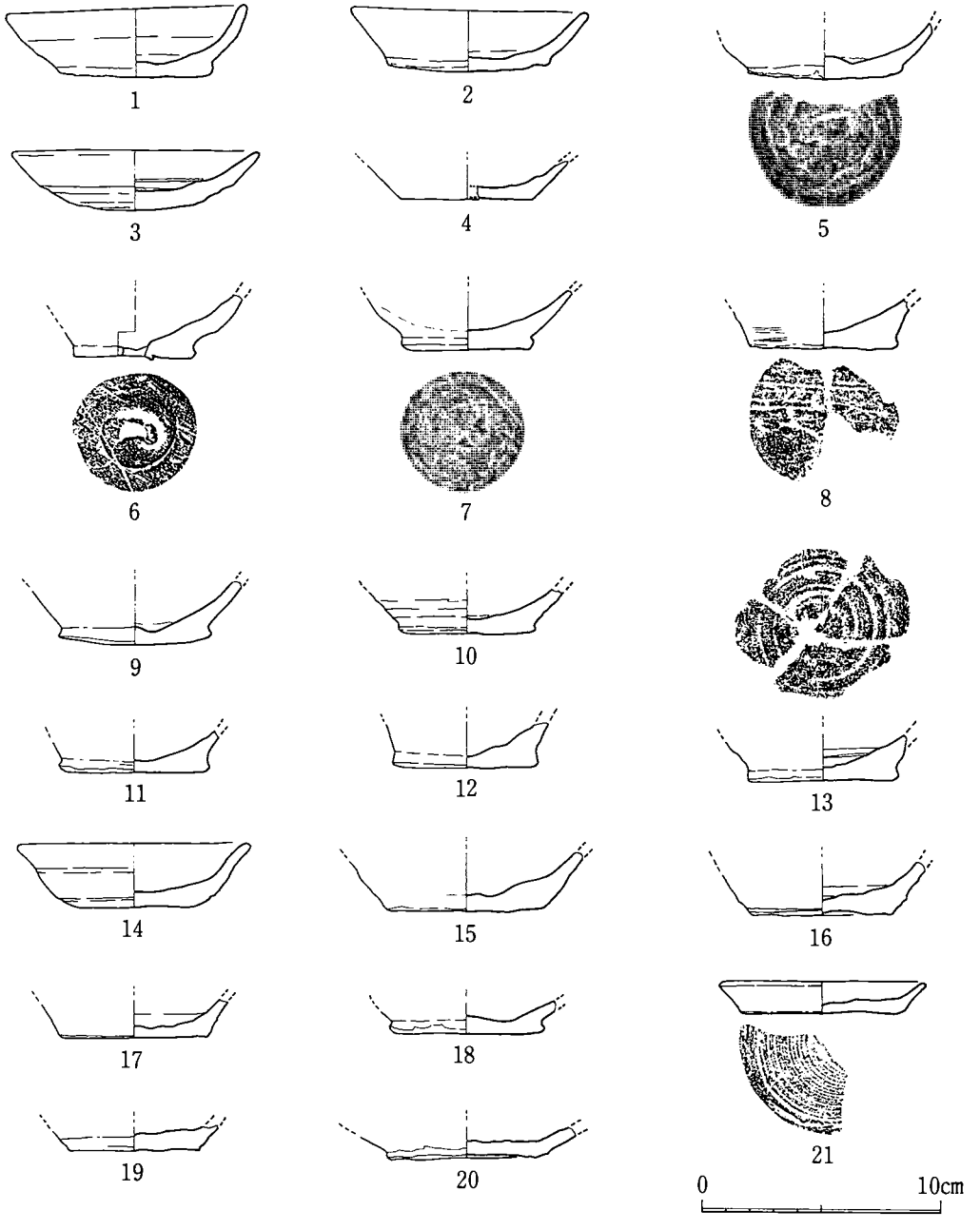


第111図　平安時代土師器実測図(2)

れは、遺物の分布を図化してみたところ、ほぼこの整地面上に水平に広がり、建物北東の硬化面に設置して出土したことによる。遺物は、いずれも先に述べたように土師器である。器種としては、坏・高台付埦・高台付皿・皿である。若干時期差があるようである。図化したものは、完形品や比較的よく残存していたものに限った。

坏

ここで坏としたものは、Ⅰ～Ⅲの３類に分けられる。



第112図　平安時代土師器実測図(3)

Ⅰ類

口径が11.0cm、高さ4.5cmを測る。底部から体部への立ち上がりが明確で、ほぼ直線的に口縁部へ伸びて口唇部にいたる。底部の外面はヘラ起こしの後にうすくなでている。第110図の１～３・６がそれに当たる。

Ⅱ類

口径が約10.0cm、高さ4.0cmを測る。底部から体部への立ち上がりがあまり明瞭でなく、やや胴張りし口唇部にいたる。底部の外面はヘラ起こしの後にうすくなで消している。第110図の4・5・7・8・10・11がそれに当たる。

Ⅲ類

口径が12.5cm、高さ4.0cmを測る。底部から体部への立ち上がりが明瞭でなく、緩やかに胴張りし口唇部にいたる。底部の外面はヘラ起こしの後にうすくなでているが、板目の圧痕が残るものもある。第110図の9・12がそれに当たる。

高台付埦【第110図13～16】

厳密にはいくつかに分類できるが、出土点数が少なかったので1点づつの説明にとどめる。13は、内黒のもので、内器面に磨きが施される。口径が15.0cm、坏部の高さ5.0cm、高台の高さ1.0cmを測る。高台から緩やかに外側にカーブを描きながら、口唇部にいたる。14は造りが13に似るが、やや小振りである。口径が13.0cm、坏部の高さ4.6cm、高台の高さ1.5cmを測る。15も内黒で、高台のみである。高台の高さ1.2cmを測る。16も高台と体部がやや残る。高台の高さ1.5cmを測り、体部の開き方からすると口径は13より広くなりそうである。

高台付皿【第110図17】

17は、口径が12.5cm、坏部の高さ3.5cm、高台の高さ1.2cmを測る。

皿

大きくⅠ類からⅣ類の4つに類別できる。胎土や焼成によりさらに類別可能かも知れないが、口径と高さによって大まかに分けるにとどめる。

Ⅰ類

口径が約10.0cm、坏部の高さ約3.0cmを測る。底部からやや胴張りしながら口唇部にいたるものと真っすぐにいたるものに分けられるかもしれない。第111図の1～12・19がこの類に入る。

Ⅱ類

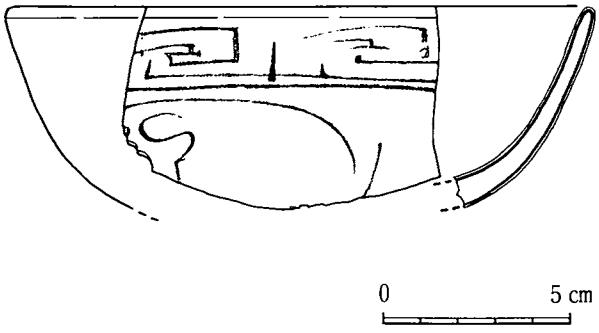
口径が約10.0cm、坏部の高さ約3.5cmを測る。底部からやや外に広がりながら、口唇部にいたる。第111図の13・14がこの中に入る。

Ⅲ類

口径が約10.0cm、坏部の高さ約2.5cmを測る。第59図の1～3・14がこの中にはいる。Ⅰ類がさらに小型化した印象を受ける。

Ⅳ類

第112図の21の1点のみの出土である。口径が8.5cm、坏部の高さ1.3cmを測る。底部外面には、糸切り痕が残る。明らかに中世まで下るものである。出土層は他の土師器よりやや上部であった。この土器は遺構の存在期間の下限を示すものと考えたい。



第113図　青磁実測図

青磁器【第113図】

本遺跡内のＢ－10区から表採に近い形で採集されたものである。遺跡の範囲拡大に際して、伐採途中に地表面で見付かったものである。青磁の碗で、胴部より上が径の４分の１ほど残っていた。器表面には、崩れかけた雷文帯が口縁部にみられ、体部外面には、草花文らしき文様がある。いずれも施釉前に引っ掻いて描いたものである。発色は、ややくすんだ緑色である。復元口径は、13.3cmを計る。14世紀後半～15世紀前半のものであろう。

第７節　小結

この地区で確認されたことを以下にまとめる。

(1)丘陵の斜面に形成された遺跡である。

(2)確認された遺構は、集石４基、縄文土器集中部２カ所、掘立柱建物１棟であった。

(3)集石遺構の内、４号は黒褐色土に掘り込まれ、出土した無文土器などより、縄文時代早期の可能性がある。

(4)掘立柱建物跡１棟は、確認した範囲では梁行三間・桁行三間の方形の建物跡である。その形態と遺構の周囲から出土した遺物より宗教的な建物であった可能性がある。存在期間は平安時代の前期から鎌倉時代初期までを想定できる。

(5)出土遺物は、旧石器時代から鎌倉時代までの幅広い時代の遺物が出土した。

(6)遺物の出土状況は、丘陵の斜面地に傾斜に沿って流れてきたと思われるものが多い。

(7)縄文時代の土器の内第Ⅴ類・第Ⅵ類・第Ⅶ類・第Ⅷ類・第Ⅹ類などは、いずれも遺跡内では比較的安定した第Ⅳｂ層と第Ⅴ層に含まれていた。そこでこれらの遺物は旧位置を保っていたものと思われる。

(8)掘立柱建物跡に伴うとみられる土師器は、時期差があり球磨郡内の土師器編年を考える上で一つの資料となろう。

第VI章　まとめ

この調査は広域農道にかかる調査であったため、道路とその法面幅のみの調査であった。その上丘陵地の傾斜面の調査であり、それほど大きな成果は期待できなかった。しかし、当初の予想に反して、旧石器時代から平安時代にかけての遺構・遺物が出土した。以下に調査の成果をまとめ、若干の考察を加えておきたい。

まず、本遺跡からは旧石器時代の遺物として、掻器と石核が出土した。前年度調査の小園遺跡からは細石刃が出土しており、本遺跡もさらに遺物の出土が期待されたものの、わずかに二点のみの出土であった。しかし、調査区の周囲に十分に旧石器時代の遺跡の存在が期待されよう。

縄文時代の遺物は、表面にすでに出土していた晩期だけでなく、早期・前期・中期・後期の遺物も出土した。それらの遺物は遺跡の形成場所から、どうしても散在的であったが、意義深いものがあった。特に前期と思われる「春日式土器」や「轟式土器」などの土器群の出土は球磨郡内の縄文文化の研究に新たな資料を提供するものとなろう。また、晩期の土器に加えてそれに伴うと思われる大量の打製石斧と廃棄された砂岩の剝片や石核は、ここが一つの石器を製作する場として利用されていた可能性がある。今後類例の増加を待ちたい。さらに、遺構として4つの集石が確認された。中でも4号集石は明らかに縄文時代早期のものと思われ、他の集石と異なり、掘り込みがあり石も焼けていた。ただ、時期を明確にできなかったのは残念である。

弥生時代後期の遺物も僅か2点であるが、出土した。付近に弥生時代の遺構の存在の可能性が考えられる。

古墳時代の遺構は、昨年度に続き小園遺跡の端で確認された。竪穴住居が4軒存在し、いずれも古墳時代前期のものと思われ、須恵器の出土はあったものの共伴したかどうかは不明瞭である。もし共伴するとすれば、5世紀末から6世紀前半ということになろうか。一方、斜面上の谷川遺跡においても古墳時代の遺物が多量に出土している。こちらは須恵器と器面に赤色顔料を塗布した高坏類を中心とするものである。何ら遺構を伴わないものであった。しかも出土層を詳細に観察すると、丘陵の上部から流出したものの中に混じるらしいことが分かった。したがって、これらの遺物は、丘陵頂部に存在した何らかの遺構（古墳の可能性が大きい）が破壊されたために、流出土とともにここに流れてきたものと判断した。

歴史時代の遺構として、緩斜面を整地して営まれた掘立柱建物跡がある。三間四方の建物跡で仏堂的な要素を持っていた。共伴する遺物も灯明皿として使用された痕跡を残す坏や皿類が主であった。仏堂として明確な証拠はなかったものの、生活跡としてよりも何か信仰に関連す

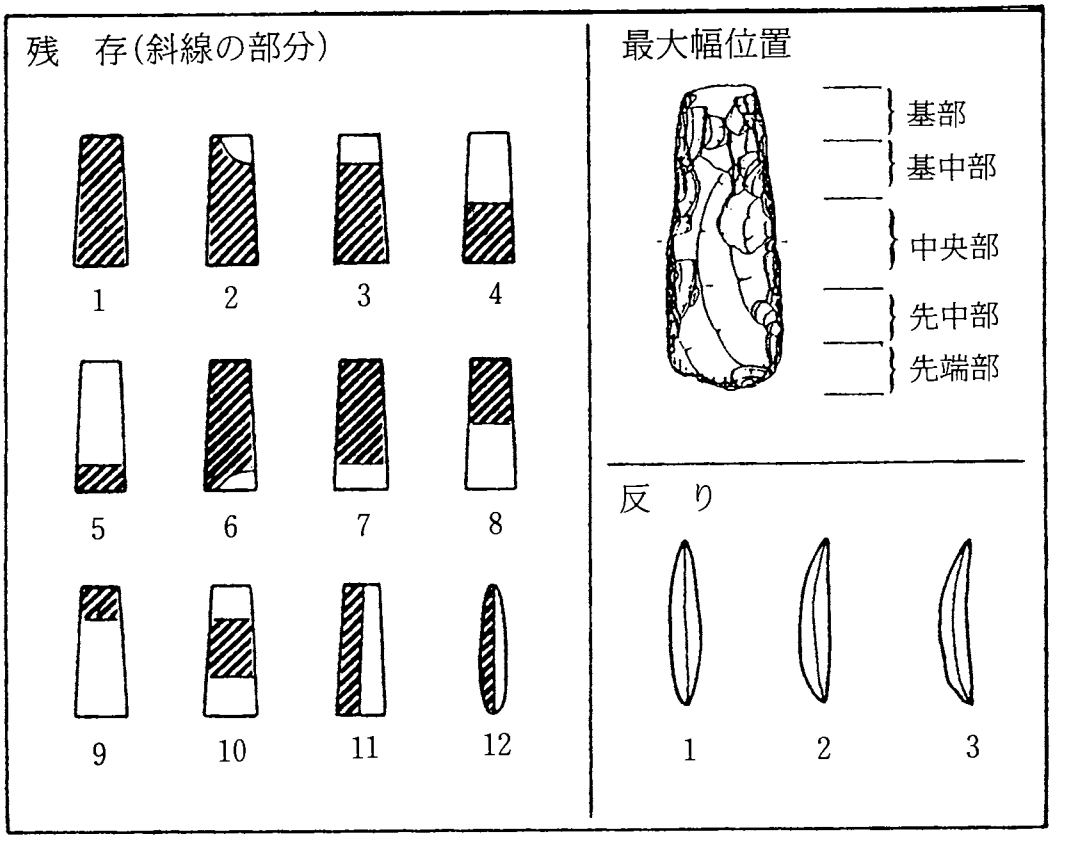
る遺構ではないかと思われる。時期としては、一応共伴すると思われる土師器を基準として、9世紀末から10世紀前半としておく。

土器・石器観察表
（図版掲載分）

〔観察表凡例〕

	破損部位		黒耀石	チャート	不明	計
完		完形品	5	4	0	9
A		先端部	1	1	0	2
B		両脚部	1	0	1	2
C		片脚部	2	0	0	2
D		先端部 片脚部	2	0	0	2
計			11	5	1	17

石鏃破損部位の分類



石斧残存部位・最大幅部位名称・反りの分類

【第７図】　１号住居跡内出土遺物

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	１号住居跡	高坏	坏部	口：(20.0)	外：淡黄褐色 一部淡赤褐色・黒褐色 内：黄橙色 一部黒褐色	石英・長石・角閃石を含む。	ヨコナデ	斜め方向のナデ	口唇部：ヨコナデ	良好	
2	１号住居跡	鉢？	口縁部	－	外内：黄褐色	微細な黒色・白色の砂粒、石英を多量に含む。	ヨコナデ	ヨコナデの後、粗いナデ	ヨコナデの後、粗いナデ	良好	
3	１号住居跡	浅鉢？	口縁部	－	外内：黒褐色	緻密。黒色の砂粒、白雲母片、(いずれも微細) を少量含む。	ヘラ削りの後、丁寧なヨコナデ。(ヘラ削りの段が僅かに残存)	丁寧なヨコナデ。平口縁である。		良好	
4	１号住居跡 Pit-7	鉢？	口縁部	－	外内：黒褐色 口唇部：暗黒褐色	緻密。微細な白雲母片、石英を少量含む。	丁寧なヨコナデ。	滑沢を有する。ヨコナデ。		良好	
5	１号住居跡	甕	口縁部～胴部	口：(24.5)	外：赤褐色及び黒褐色 内：赤褐色～黄褐色	白色・黒色の砂粒、石英砂粒を多量に含む	口縁～頸部：丁寧なヨコナデ 以下：煤付着で不明	口縁～頸部：丁寧なヨコナデ。 以下：ヘラ削り。		良好	

【第10図】　２号住居跡内出土遺物（１）

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	２号住居跡	高坏	坏部	口：(14.6)	外：黄褐色・一部黒褐色 内：黄橙色・暗黄褐色	長石・石英主。角閃石も若干混入。	ハケの後、横ナデ	横方向のヘラ磨き		良	
2	２号住居跡	高坏	坏部	口：(14.6)	外：黒褐色・橙色 黄褐色・煤付着 内：黒褐色・白橙色	角閃石・長石・石英を含む。	横ナデ	横ナデと不定方向のナデ。		良	
3	２号住居跡	高坏	口縁部～脚部	口：17.4 高：13.6 底：(13.2)	外：白橙色・暗黄褐色赤褐色 (赤色顔料塗布部分) 内：白橙色・黄褐色	長石・石英を含む。	坏部：横ナデ。脚部：ヘラの後、ハケ。	坏部：横ナデ。脚部：ヘラ削り。	脚部・口唇部は横ナデ。	良	赤色顔料が全面に塗布されていたようである。
4	２号住居跡	高坏	坏部	口：(18.0)	外：黄橙色・一部赤褐色 (赤色顔料の塗布？) 内：黄橙色・一部赤色顔料塗布か？。	石英・角閃石を含む。	横方向のナデ。	横ナデの後、磨き		良	
5	２号住居跡	高坏	坏部～脚部	－	外：黒褐色～黄褐色	黒色の砂粒。微細な白雲母片を多量に含む	坏部：横ナデ。脚部：不明。	坏部：ナデ。脚部：ヘラ削り。		良	
6	２号住居跡	高坏	坏部	－	外：赤褐色 内：鈍い黄褐色・黒色(煤付着)	白色・黒色の砂粒、石英を若干量含む。	横ナデ 接合部は指圧痕が残存。	不明			脚部は剥離し、接合痕が見られる
7	２号住居跡	高坏	坏部	－	黄褐色	角閃石・長石・石英を含む。	横ナデ	横方向のヘラ削りの後、横ナデ。		良	
8	２号住居跡	高坏	坏部	－	外：明黄褐色 内：明黄褐色・灰黒褐色	緻密。非常に微細な黒色の砂粒を少量含む	やや粗い横ナデ。	丁寧な横ナデ。		良	坏部と脚部との境界で剥離しており、接合痕が見られる。口縁部片にも接合痕らしき稜が見られるが、調整が非常に丁寧であるため、詳細不明

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
9	2号住居跡	高坏	坏部	口：(16.8)	外：黒色・黒褐色 内：明褐色	角閃石・石英・長石を含む。	横ナデ。 下部：横ナデ。	ヘラ磨き。		良	
10	2号住居跡	高坏	坏部	口：(18.6)	外：黄褐色～橙色 内：明黄褐色～明褐色	長石・角閃石・石英を含む。砂粒が多量に含まれ、中には径6㎜程の小石粒も含まれる。	横ナデ	横ナデ		良	
11	2号住居跡	高坏	坏部	－	外：黄褐色 一部赤褐色 内：黄褐色・黒褐色（煤付着）	緻密。白色の微細な砂粒を少量含む。	丁寧な横ナデ。	不明		良	脚部は剥離し、接合痕が見られる

【第11図】　2号住居跡内出土遺物（2）

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居跡	高坏	脚部	底：(16.0)	黄橙色～橙色	長石・石英の砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ		良好	
2	2号住居跡	高坏	脚部	底：(12.8)	外：黄褐色 内：赤褐色	白色・半透明の砂粒、赤褐色の粒子を多量に含む。	ヨコナデの後、ヘラ削り。下部は粗い横ナデ。	粗いヨコナデ。		良好	
3	2号住居跡	高坏	脚部	－	外：黄褐色 内：暗黒褐色	白色の砂粒、石英を多量に含む。	横方向のハケ。	ヘラ削り。 下部：粗いナデ。		良好	
4	2号住居跡	高坏	頸部	－	外：灰黄褐色 内：赤褐色	黒色・白色・半透明の砂粒、石英、白雲母片を多量に含む。	ナデ（?）	坏部：ヨコナデ。 脚部：不明。		良好	
5	2号住居跡	高坏	脚部	－	灰赤褐色	白色の砂粒を多量に含む。	ヨコナデ。薄いハケ	粗いヘラ削り。		良好	
6	2号住居跡	高坏	脚部	－	外：赤褐色・黒褐色 内：黒褐色	黒色・白色・赤褐色の砂粒、白雲母片を多量に含む。	タテナデ。ヘラ磨き	坏部：タテナデ。 脚部：ヘラ削り。		良好	
7	2号住居跡	高坏	頸部	－	灰黄褐色・赤褐色	黒色・白色の砂粒、石英、白雲母片を多量に含む。	ナデ	坏部：ヨコナデ。 脚部：不明。		良好	

【第12図】　2号住居跡内出土遺物（3）

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居	埦	口縁部～胴部	口：(13.5) 高：(6.1)	赤褐色	粘土質で、軟質。微細な白色の砂粒を若干量含む。もろい。	横方向の刷毛目。	ヨコナデ。胎土がもろい為、磨滅している。		良好	
2	2号住居	埦	口縁部	口：(13.8)	外：淡黄橙色（煤が若干、残存） 内：淡黄橙色	石英・長石・角閃石が含まれる。	ヨコナデ。 下位：ヘラナデ。	ヨコナデ。	下位に、やや斜めのヘラナデを施す。	良好	
3	2号住居	埦	口縁部～底部	口：(12.0) 高：(6.2)	外：黒褐色 内：赤橙色～黄褐色	径5㎜程の小石粒や長石・角閃石が見られる。	上位：ヨコナデ。 下位：粗いナデ。	ヨコナデ。		やや不良	2片接合で残存。反軽復元。
4	2号住居	埦	口縁部～底部	口：(14.9) 高：(6.8)	外：暗橙色 内：淡橙色～黒褐色	角閃石・長石・石英を含む。	中位：刷毛。 下位：刷毛の後ナデ	ヨコナデ。	口唇部：ヨコナデ	良好	
5	2号住居	埦	口縁部～胴部	口：(17.4)	暗黄褐色	角閃石・長石・石英を含む。	ヘラナデ。	横方向のヘラ削り	口唇部：ヨコナデ	良好	

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
6	2号住居	埦	完形	口：22.6 高：11.0	外：黒褐色 （煤付着による） 内：暗黄褐色・黒褐色	白雲母・角閃石・長石・石英の砂粒は微細かつ若干量含まれており、概ね緻密。	底部から口縁下約2～3mまで、刷毛目調整。口縁はヨコナデ。	胴部～口縁下約3cm、横及び右下がりのヘラ削り。		良好	
7	2号住居	埦	口縁部～胴部	口：10.1	外：黒褐色 （煤付着による）	白色・黒色の砂粒を少量含む。もろい感じを受ける。	丁寧なヨコナデ。	丁寧なヨコナデ。		良好	
8	2号住居	埦	口縁部	―	外：赤褐色・黒褐色 内：赤褐色	緻密。白色・黒色の砂粒若干量含む。	ナデの後、刷毛。	丁寧なヨコナデ。		良好	
9	2号住居	埦・	口縁部	―	外：赤褐色	緻密。白色・黒色の微細な砂粒を少量含む	縦方向のヘラ削り後、ナデ消す。	ヨコナデ。	口唇部：丁寧なヨコナデ。	良好	
10	2号住居	埦	口縁部	―	外：赤褐色	緻密。白色・黒色の微細な砂粒を小量含む。	ヨコナデ	ヨコナデ		良好	

【第13図】　2号住居跡内出土遺物（4）

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居	短頸壺	口縁部～胴部	口：(11.9)	外：暗黒褐色・灰黄褐色 （煤付着） 内：黄褐色	白色・黒色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含んでおり粗い。	丁寧なヨコナデ。	口縁部：丁寧なヨコナデ。		良好	
2	2号住居	短頸壺	口縁部	―	外：暗黄褐色 内：赤褐色	白色・黒色の砂粒を若干量含む。緻密。	ヨコナデ。	口縁部：ヨコナデ。 屈曲部以下：右下がり方向のヘラ削り		良好	
3	2号住居	壺	口縁部	口：(9.3)	赤褐色	緻密。白色の微細な砂粒を少量含む。	丁寧なヨコナデ。			良好	
4	2号住居	壺	口縁部	口：(8.9)	外：明赤褐色 内：黄褐色・灰黒褐色	白色・黄褐色の砂粒を多量に含む。	ヨコナデ。	ヨコナデ。		良好	かなり小ぶりで手づくね風であるが、薄手で調整も丁寧であることから実用のためのものか。
5	2号住居	坩	完形	口：5.8 高：7.9	外：黄橙色～淡黄橙色 内：淡黄橙色～赤橙色	角閃石・長石・石英を含む。	口～胴中部：ヨコナデ部分的な調整。横刷毛。 底部：ナデ。	ヨコナデ。		良好	赤色顔料を内外器面に塗付していた可能性あり。
6	2号住居	坩	頸部～底部	―	灰黄褐色	白色・半透明の微細な砂粒を若干量含む。	ヨコナデ。器面が磨滅し、調整は不明。	肩部までヘラ調整。　以下、粗いナデ上げ。		良好	
7	2号住居	坩　？	口縁部～頸部	口：(5.2)	灰黄褐色（煤付着）	黒色・白色の砂粒、黒雲母片を若干量含む	不明。指で押さえた痕が残存（指紋）	やや丁寧なヨコナデ		良好	
8	2号住居	坩	胴部	―	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	緻密。白色・黒色の微細な粒子を若干量含む。	ヨコナデ。屈曲部は粗い。	不明。		良好	全体的にかなりいびつで、器壁の厚さも不均一。
9	2号住居	小型鉢	完形	口：(16.0) 高：4.8	口縁部：黄褐色 胴部～底部：黒褐色 内器面：黄褐色～灰黄褐色	長石・角閃石・石英を含む。	ヨコナデ。 胴部下半に刷毛。	口縁部：ヨコナデ。	底部：ヘラ磨き。	良好	

【第14図】　2号住居跡内出土遺物（5）

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居	壺	口縁部～胴部	口：(12.8)	外：暗赤橙色～黄橙色 内：暗赤橙色～黄褐色	角閃石・長石・石英と各種粒が多量に入る	口縁部：ヨコナデ。 胴部：ハケの後、ヨコナデ。	上部：ヨコナデ。 胴部：指頭調整。	口唇部：ヨコナデ。	良好	赤色顔料塗布の可能性あり
2	2号住居	壺	口縁部～胴部	口：(16.6)	外：黒褐色 内：暗褐色	角閃石・石英・長石を含む。	口縁部：ナデ。 胴部：ハケ。	口縁部：ナデ。 胴部：ヘラ磨き。	口唇部：ナデ。	良好	
3	2号住居	壺	口縁部～胴部	口：(16.0)	白橙色～明黄褐色	石英・橙色の小石粒が多量に入る。	口縁部：ナデ。 胴部：ヨコナデの後縦ハケ。	口縁部：ヨコナデ。 胴部：指頭圧痕。		良好	
4	2号住居	椀？	口縁部	口：(13.7)	外：灰黄褐色 内：黄褐色	黒色・白色・赤褐色の砂粒、石英を多量に含む。もろい感じを受ける。	縦位のヘラ削りをヨコナデにより、ナデ消してある。	右下がり方向のヘラ削りをヨコナデにより、ナデ消してある		良好	
5	2号住居	壺	口縁部	口：(12.4)	黄褐色	長石・石英他、小石粒が混入。	口縁部：ヨコナデ。 胴部：斜めハケ。	口縁部：ヨコナデ。 胴部：ヘラ削り後、ナデ。		良好	
6	2号住居	壺	底部	底：4.4	胴：黒褐色 底：赤褐色 内：黄褐色～暗黄褐色	角閃石・長石・石英を含む。	ナデ？	ナデ		良好	

【第15図】　2号住居跡内出土遺物（6）

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居	甕	口縁部～底部	口：(16.3) 高：22.2	外：黒褐色・明褐色・明赤褐色 内：黒褐色・明褐色	角閃石・長石・石英を含む。	ハケ調整	ヘラ削りの後ナデ。	口唇部：ヨコナデ	良好	
2	2号住居	甕	口縁部～底部	口：(16.4)	外器面 口縁～胴部：暗黒褐色～赤褐色 内器面 口縁～胴部・下部：赤褐色～黒褐色	長石・石英・角閃石などの小砂粒を多く含む。	内口縁部：ヨコナデ 胴部：ヨコナデ後、粗い縦方向のヘラ磨き。条痕を有する部分もある。	横方向の粗いヘラ削り。	口唇部：ヨコナデ	良好	
3	2号住居	甕	胴部	—	外：黒色（煤？）黄橙色 内：黄褐色・黒褐色	長石・石英・角閃石が含まれる。	ハケ。 下位：ヘラ削り。	縦方向のヘラ削り	内：指頭による調整の後、ナデ。	良好	

【第16図】　2号住居跡内出土遺物（7）

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居	甕	口縁部	口：(18.2)	外：暗赤褐色。煤も付着しているようである。 内：黒褐色・赤褐色	長石・石英・角閃石が含まれる。	ヨコナデ	ヨコナデ	—	良	
2	2号住居	甕	口縁部	口：(17.9)	赤褐色	白色・黒色の砂粒を多量に含む。	ヨコナデ。	丁寧なヨコナデ	—	良	
3	2号住居	甕	口縁部	—	外：黄橙色 内：黄橙色・暗黄褐色（黒斑状）	石英の微細粒が多量に含まれる。角閃石や長石も若干見られる。一部、小石粒も見られる。気泡有。	ヨコナデ	上部：ヨコハケ。 下部：ナデ。		良	

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
4	2号住居	甕	口縁部	口：(19.2)	外：暗黄褐色 内：黄橙色	石英・長石が見られる。	ヨコナデ	ヨコナデ	―	良	
5	2号住居	甕	口縁部	口：(16.0)	外：灰黄褐色 ・暗黒褐色 (炭化物付着) 内：赤褐色 ・暗黒褐色 ・灰褐色	白色・黒色の砂粒を多量に含む。	丁寧なヨコナデ及び縦方向のハケ。	口縁：右下がり及び横方向のハケ目をナデ消してあるが不十分で粗い。	肩部：非常に粗いヨコナデで、成形の際の接合痕や凹凸が残存。	良	
6	2号住居	甕	口縁部	―	外：黒褐色 ・暗黄褐色 内：暗黄褐色	角閃石・石英・長石を含む。	ヨコナデ ～タテナデ	ハケ。	ヘラ削り、ヨコナデ	良	
7	2号住居	甕	口縁部	口：(17.4)	黒褐色	黒色・白色の砂粒、英、微細な白雲母片を若干量含む。	やや粗い横ナデ。	口縁部：粗いヨコナデ 以下：横方向のハケ		良	

【第17図】　2号住居跡内出土遺物（8）

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居	鉢	底部	底：(6.2)	外：黄橙色 内：黄褐色	石英・長石・角閃石を含む。	ヘラナデ	ナデ	底部外：ヘラナデ	良好	
2	2号住居	鉢？	底部	底：3.8	外：暗赤褐色・明黒褐色・暗黄褐色 内：暗赤褐色	長石の微細粒が多く石英粒、白色小石粒も含まれる。	不明	ナデの後、ヘラナデ。	底部外：不明	良好	
3	2号住居	甕	底部	―		石英・長石・角閃石を含む。	ハケ	ナデ？		良好	
4	2号住居	甕？	底部	―	外：暗褐色 内：褐色	長石・石英・他の小石粒が混入。	ヘラ磨き。	ヘラナデ	底部外：ヘラ削り	良好	
5	2号住居	甕	底部	底：3.3	外：暗赤橙色・黄橙色・黒褐色 内：黄橙色・暗黄橙色	角閃石・石英・長石粒も含まれる。	粗いヘラ磨き。	剝落し、不明。		良好	
6	2号住居	？	底部	底：(6.4)	外：暗赤橙色 内：赤褐色	石英粒が多く、白色石粒も含まれている。	横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラナデ。	摩耗し不明。		良好	
7	2号住居	甕？	底部	―	外：暗黄橙色 内：明黒褐色	石英の小砂粒・長石・角閃石が含まれる。	タテハケ	縦方向のヘラ削り。	外：ナデ。	良好	
8	2号住居	？	底部	―	黒褐色	白色・半透明の砂粒、黒雲母片を若干量含む。	丁寧なヘラ磨き。	指で押さえつけて成形。爪痕が顕著に残存。		良好	

【第18図】　2号住居跡内出土遺物（9）

No.	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号住居	弥生？甕	胴部～脚部	―	灰黄褐色	黒色・灰褐色の砂粒を僅かに含む。概ね、緻密。	胴：様々な方向のナデ。その後、ヨコナデ。 脚：ヨコナデ。(いずれも丁寧)	丁寧なヨコナデ。		良好	外器面・脚部に橙色の部分が僅かにある。顔料が塗布されていた可能性あり。
2	2号住居	須恵器	口縁部	―	灰黒色。 内器面がやや明るい。	緻密。粉末状の白雲母片を若干量含む。	ロクロ引きによる丁寧なヨコナデ。滑沢を有する凸帯が一条施文。	ロクロ引きによる丁寧なヨコナデ。		良好	

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
3	2号住居	須恵器	胴部	－	灰黒褐色	緻密。粉末状の白雲母片を少量含む。	ロクロ引きによる横ナデ。丁寧である。器面は滑択を有する	ロクロ引きによる丁寧なヨコナデ。		良好	外器面に櫛描波状文が施文される。
4	2号住居	土師器 坏	口縁部～底部	口：(10.0) 高：(6.6) 底：(2.2)	外：黄褐色 内：明赤褐色	緻密。非常に微細な白雲母片を少量含む。もろく、チョーク状の粉末が指先に付着する。	ロクロ引きによる丁寧なヨコナデ。	ロクロ引きによる丁寧なヨコナデ。	口縁部が若干、いびつに歪む。	良好	

【第20図】 5号住居跡内出土遺物

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	5号住居跡	高坏	ほぼ完形	口：18.8 高：14.3 底：14.2	外：黄灰色・黒褐色・赤褐色 (赤色顔料塗布) 内：黄灰色～橙色・黒褐色・灰黄色	長石・石英・角閃石・他、小石粒が混入。	坏部：刷毛の後、ヨコナデ。 脚部：ヨコナデの後指調整。	坏部：ヨコナデの後ヘラ削り。 脚部：横ヘラ削りの後、ナデ。		良好	
2	5号住居跡	高坏	口縁部	口：(18.2)	赤褐色・外に煤付着	緻密。白色の砂粒を少量含む。	丁寧なヨコナデ。	ヨコナデ		良好	
3	5号住居跡	壺？	頸部	－	黄褐色	緻密。微細な砂粒を少量含む。	丁寧なヨコナデ。	丁寧なヨコナデ。		良好	
4	5号住居跡	甕	頸部	－	橙色・黄橙色	石英・長石・白雲母を含む。粒子が径2～3mm (大きい)。	ヨコナデ。	摩耗のため、詳細不明。		不良	

【第21図】 包含層内出土遺物（土器）

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	一括	土師器 椀 ？	底部	底：(4.5)	灰赤褐色	白色・黒色の微細な砂粒を若干量含む。	器面が粗い為、不明。	不明	ヨコナデ後、周辺から中心に向かってのナデ。	良好	
2	一括	土師器	底部	－	赤褐色	白色・赤褐色の微細な砂粒を若干量含む。緻密。	丁寧なヨコナデ。ハケの後、ナデ消し	丁寧なヨコナデ。		良好	
3	一括	須恵器 甕	胴部	－	外：灰白色 内：暗灰白色	石英粒を主。白色粒の微粒と小石粒が含まれる。	格子目叩き	同心円叩き		良好	
4	一括	土師器 椀	口縁部	－	外：灰黒褐色・灰黄褐色 内：黒褐色	緻密。非常に微細な白雲母片を若干量含む。	丁寧なヨコナデ。	ヨコナデの後、丁寧なヘラ磨き。		良好	
5	一括	土師器 坏	底部	底：6.9	外：暗黄褐色 内：淡褐色	赤色砂を僅かに含む	ヨコナデ	ヨコナデ	底部：ヘラ切り離し	不良	
6	一括	土師器 坏	底部	底：(6.4)	外：黒褐色～灰黄褐色 内：淡黄褐色	赤色砂粒少量含む。	ヨコナデ	ヨコナデ	底部：ヘラ切り離しのナデ。	良好	外器面に煤付着

【第22図】　包含層中出土遺物（石器）

No	遺構名	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	残存	備　考
1	1号住居跡	打製石斧	粘板岩	10.0	5.2	1.07	70.9	3	刃部には、使用による磨耗が見られる。
2	2号住居跡	打製石斧	砂　岩	10.8	8.0	1.88	155.8	3	剝片より製作。刃部の調整は不十分である。片面に自然面残す。
3	2号住居跡	磨製石斧	凝灰岩	12.0	6.1	4.56	481.0	4	表面に啄調痕が残る。かなり風化し、剝離痕は不明確。刃部の剝離痕だけは新しく、破損した後に再利用した可能性がある。
4	2号住居跡	打製石斧	砂　岩	11.0	5.8	1.22	101.0	1	片面に自然面を残す剝片を利用。丁寧に敲打して作る。刃部に僅かに使用痕残る。
5	2号住居跡	打製石斧	粘板岩	7.8	3.4	1.1	29.9	3	天地不明。打製石斧の破片かどうかも不明。ただ、側辺部にタッチを施し、調整している。
6	2号住居跡	磨　石	砂　岩	16.5	7.8	4.5	397.8	1	非常によく使用され、もともと凹面であったと思われる部分は、さらに磨研され、よりへこんでいる。

【第26図】　旧石器時代石器

No	遺構区	石　材	重さ (g)	大きさ (cm)			色	備　考
				長さ	幅	厚さ		
1	A－6		3.0	3.45	1.64	0.66	淡緑灰色	縞状に石層が走る。
2	C－6	黒曜石	3.2	1.76	1.4	1.2	淡乳黒色	数回の剝離が成されるが、方向は必ずしも同方向ではない。

【第31図】　縄文土器（1）

No	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	一括	深鉢？	口縁部	－	外：暗淡黄褐色 内：淡褐色	砂粒をかなり含む。	口縁の残存する部分に径3㎜前後の円形の工具による刺突	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	
2	C－5	深鉢	口縁部	－	外：暗黄褐色 内：明黄褐色	長石・角閃石などの砂粒を多く含む。	ナデ	横ナデ	外器面に4本を単位とする貝殻の刺突文が二条連点様に施される。	不良 もろい	
3	B－6	深鉢	口縁部	－	鈍い黄褐色 口唇部は灰黄褐色	白色・灰褐色・赤褐色の砂粒、白雲母片を多量に含む。いずれも大粒である。	丁寧な横ナデ。貝殻による押引き文を二条施す。	横ナデ？		良好	
4	A－4	深鉢	口縁部	－	淡黄褐色	石英・長石・角閃石など砂粒を多く含む。	貝殻状工具による押引き、沈線。	ナデ？		やや不良	
5	4－7	？	口縁部	－	外：灰褐色 内：灰黄褐色	石英・長石・角閃石を含む。	貝殻押引文	横ナデ。	口縁に刻目?	良好	
6	C－6	？	口縁部	－	暗褐色	角閃石・長石を含む。	貝殻押引文と、その上に連点文。	不明		やや良好	
7	B－7	深鉢？	口縁部	－	外：暗褐色 内：暗黄褐色	石英・長石・角閃石など多数の砂粒含む。	条痕のあとナデ。	ナデ？	外部に貝殻による押引き。内部に稜。	不良	
8	B－7	深鉢？	口縁部	－	外：暗黄褐色 内：暗褐色	径1㎜程の角閃石・石英の砂粒かなり含む。	口縁上部は貝殻押引き文。4本組の押引き（貝殻か？）の下を横方向の同じ工具による沈線。	条痕から丁寧な磨き。		やや良好	
9	B－5	深鉢	口縁部	－	明褐色	長石・石英など多くの砂粒を含む。	貝殻押引き、沈線文による施文。	ナデ？		やや良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
10	B－6	深鉢	口縁部	口：(8.2)	外：鈍い赤褐色 内：黒褐色 （口唇部も）	白色・黒色・赤褐色の砂粒（多くは微細だが5mm前後のものもある）・石英・黒雲母片を多量に含む。	丁寧な横ナデ。口縁部には、縦位の押点文の後、5本単位の櫛状の工具により横位の沈線が施文。以下にも沈線があるので、5本単位以上の工具の可能性もある。	丁寧な横ナデ。		良好	
11	B－7 A－7 C－7	深鉢	口縁部	口：(23.8)	外：赤褐色・明灰褐色 内：赤橙色・黒褐色	石英・長石・角閃石を含む。	平行沈線、5本1単位。	貝殻による条痕の上から横ナデ。？	口縁に刻目。	良好	
12	A－6	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色 内：褐色～暗褐色	径2～3mm大の白砂、黒雲母片、長石などの砂粒を多量に含む。	風化のため不明。櫛状工具、もしくは細かい状の工具で沈線を描く。11～12条施文。	丁寧なナデ。		やや悪い	
13	A－5 B－6 B－6	深鉢	胴部		外：黄灰色 内：赤橙色	石英・長石を含む。	貝殻による横方向の平行沈線（5本単位）下部に縦方向の平行沈線	横ナデ？		良好	
14	A－4	深鉢	胴部	－	外：黄灰色 内：赤橙色	石英・長石を含む。	貝殻の平行沈線。	横方向のナデ。		良好	
15	C－7	深鉢？	口縁部	－	淡黄褐色	角閃石・長石などを多量に含む。	貝殻押引きを意図して引いたような沈線文入る。	横ナデ？		やや不良	

【第32図】　縄文土器（2）

No.	グリッド	器種	部位	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	焼成	備考
1	A－5	深鉢	口縁部～胴部	外：暗黄褐色、煤付着 内：暗灰褐色	石英・長石・白色粒・灰色粒など砂粒を多く含む。	ナデか。？ 押型文が横走。最初、上から2～3回施文し、逆に下から上へ施文している。	ナデ	やや良好	
2	B－7	深鉢	口縁部	外：赤橙色 内：灰黄色	石英・長石が主。角閃石も含む。	山形押型文（かなり細かい）。	横ナデ	良～不良	
3	一括	深鉢	胴部	外：淡褐色 内：淡黄褐色	石英・白砂・角閃石などの砂粒をかなり含む。	山形押型文。	ナデ	良好	
4	B－5	深鉢	胴部	淡黄褐色	長石などの砂粒をかなり含む。	山形押型文。 上斜行、下横走。	調整不明	良好	
5	A－5	深鉢	胴部	外：黄橙色 内：暗赤褐色	長石・角閃石・石英を含む。	山形押型文。	横ナデ？	良好	
6	A－4	深鉢	胴部	外：黄橙色 内：暗黄橙色	長石が主、石英も含む。	山形押型文。	ヘラ状工具で成形後、ナデ調整	良好	
7	A－4	深鉢	胴部	淡黄褐色	長石・石英・角閃石など多量の砂粒を含む。	格子押型文。単位不明。	調整不明	不良 もろい	
8	A－4	深鉢	胴部	外：赤橙色 内：灰黄色	石英・長石粒が多量に入る。	格子押型文？	横ナデ？	良好	
9	A－5	深鉢	胴部	外：淡黄褐色 内：暗淡黄褐色	径1mm～2mm大の砂粒、細砂粒を多量に含む。	格子押型文。単位不明。	ナデ	不良 もろい	
10	B－5	深鉢	胴部	外：明褐色～淡黄褐色 内：淡黄褐色	径1mm～3mm大の砂粒の他多量の砂粒を含む。	押型文が消えかかる。	調整不明。	不良 もろい	

No	グリッド	器種	部位	色調（外／内）	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	焼成	備考
11	一括	深鉢	胴部	外：黄灰色 内：灰黄色	長石・角閃石を多量に含む。	格子状の押型。	ヘラ状工具による横ナデ。	良好	
12	II層一括	深鉢	胴部	赤橙色	石英・長石含む。	格子押型文。	調整は不明	良好	
13	B－5	深鉢	胴部	外：淡黄色 内：淡黄褐色	角閃石・長石などの砂粒含む。	楕円押型（@5㎜×2㎜）	調整は不明。	不明（軟質）	
14	B－5	深鉢？	胴部	外：淡灰褐色 内：淡褐色	白砂粒含む。	楕円押型文（@5㎜×2～3㎜）	ナデ	良好	
15	B－5	深鉢	胴部	外：淡褐色 内：淡暗褐色	白雲母・長石・石英など砂粒を多量に含む。	短い沈線で、曽畑に類似した文様。	調整は不明。	やや良	
16	A－4	？	口縁部	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色 部分的に淡黒褐色	かなり精製され、細砂粒を僅かに含む。	張り付け突帯四条に、押引きによる刺突文。不規則。小さな刺突をもつ一つの乳房状突起があり、更に下に沈線の一部が見られる。	調整は不明。	不良 もろい	
17	B・C－5・6	？	口縁部	外：暗黄褐色 内：暗褐色	石英・白砂粒・黒色砂粒など多くの砂粒含む。	縦方向の縄文。単位不明。	口唇部に横方向の縄文。	良好	
18	A－5	深鉢？	胴部	外：暗褐色 内：淡暗褐色	細砂粒多く含む。	網目押型文。		やや良好	

【第33図】　縄文土器（3）

No	グリッド	器種	部位	色調（外／内）	胎土	調整 外器面	調整 内器面	焼成	備考
1	A－6 A－4	深鉢	口縁部～胴部	外：淡黄褐色～暗淡黄褐色 内：淡黄褐色 部分的に淡黒色	石英・長石・白砂粒・灰色砂粒（0.5㎜～2㎜大）を多量に含む。	風化のため不明。 口縁部に半截竹管様の工具による押引きが4条。2条を単位とし間に3本単位の櫛状工具による交鎖沈線。	丁寧なナデ。	やや不良	
2	A－6	深鉢	口縁部	外：暗淡黄褐色 内：淡黄褐色	長石・石英・白色砂・角閃石・淡褐色石を多量に含む。	風化のため不明。器面に半截竹管様の工具で押引き、2条単位（？）の櫛状工具による沈線の交鎖。	風化のため不明。	やや不良	
3	B－6	深鉢	口縁部	外：淡黄橙色 内：暗黄橙色 やや煤付着か	石英・長石・角閃石など多量の砂粒含む。	部分的にナデの痕跡。 半截竹管様の工具による4条の押引き文。2条を単位とする中に3条の櫛状工具による交鎖沈線。	風化で不明。	やや不良	
4	B－6	深鉢	胴部	赤橙色	石英・長石・角閃石混入	貝殻の押引きで斜めの沈線。	横ナデ。？	良好	
5	A－6	深鉢	胴部	外：淡黄褐色 内：淡黄橙色	長石・石英・泥質岩などの砂粒を多量に含む。	頸部は風化のため不明。 頸部に半截竹管様工具による押引き文、下部は区画沈線内を2～3本の櫛状工具による沈線文がうめる。	ナデか。	やや不良	
6	A－6	深鉢	頸部	外：暗赤褐色 内：赤褐色	石英・長石・角閃石含む	貝殻押引き。	横ナデ。	良好	
7	B－5	深鉢	胴部	暗赤橙色	石英・長石・角閃石多量に混入。	貝殻押引き。左→右	ヘラ状工具による粗い横ナデ。？	良好	

No.	グリッド	器種	部位	色調（外／内）	胎土	調整 外器面	調整 内器面	焼成	備考
8	A－6	深鉢	胴部	外：赤褐色 内：赤橙色	石英・長石・角閃石を含む。	ほぼ横方向の沈線が５本。	ヘラ状工具による横ナデ。	良好	
9	A－4	深鉢	胴部	赤橙色	石英・長石・角閃石混入		横方向のヘラ削り	良好	
10	A－4	深鉢	胴部	外：赤橙色 内：灰黄色	石英・長石・角閃石混入	貝殻条痕文。	横ナデ。	良好	
11	A－5	深鉢	胴部	赤褐色	石英・長石・角閃石を含む。	押引き（２条の平行沈線が不定方向にあり。）	横ナデ（ヘラ状工具による？）	良好	
12	C－5	深鉢	胴部	外：赤橙色 内：明赤橙色	石英・長石・角閃石混入	弱い貝殻押引き文。左→右	ヘラ状工具による横ナデ。	良好	
13	A－5	深鉢	胴部	外：赤橙色 内：赤橙色	長石多、石英・角閃石も混入。	貝殻の押引き文。	横ナデ。	良好	

【第34図】　縄文土器（４）

No.	グリッド	器種	部位	法量（cm）	色調（外／内）	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－6	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色～黒褐色 内：黒褐色	石英・長石などの砂粒を多量に含む。	上７㎜：横の貝殻条痕。 下方：縦の貝殻条痕	条痕の後、ヘラ削り。？	外：５㎜程の刻目。 内：ナデ。	不良 もろい	断面に煤付着。内器面に炭化物付着。
2	C－6	深鉢	口縁部	－	外：口縁：暗黒褐色 以下黒褐色 内：暗赤褐色	白色・黒色の微細な砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。黒雲母片が目立つ。	右下がり方向の粗いナデ。	右下がり方向の粗いナデ。	横ナデ。 口唇部に刻目。	良好	外器面：穿孔あり
3	C－6	深鉢	口縁部	－	外：鈍い黄褐色 内：黄褐色・黒褐色	砂粒や雲母片を多量に含み粗い。	やや丁寧な横ナデ	粗い横ナデ。条痕残存。	口唇部に刻目。	良好	横位の条痕文。山形の押型文が施文。
4	C－6	深鉢？	口縁部	－	黒褐色	角閃石・石英などの細砂粒多く含む。	条痕	横ナデ	口唇部と外器面に刺突文。	やや不良	外器面：煤と炭化物付着。
5	C－7	深鉢	口縁部	－	黒褐色	雲母・角閃石などの細砂粒が含まれる。	貝殻条痕。	ナデ	口唇部に刻目。	やや不良 もろい	
6	C－7	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色～黒褐色 内：黒褐色	石英・雲母・角閃石等の細砂粒を含む。	条痕をナデ消す。	条痕のあとナデ。	口唇部にナデと刻目。	良好	外器面：煤付着。
7	C－6	深鉢？	口縁部	－	外：黒褐色 内：暗黒褐色	白色・黒色の砂粒を多量に含む。	丁寧な横ナデ。口唇部に比較的明瞭な横位の沈線が二条、以下に縦及び右下がり方向の不明瞭な条痕文が施文。	やや粗いナデ上げ横位の条痕文。	丁寧な横ナデ。	良好	
8	C－7	深鉢	口縁部	－	外：茶褐色 内：鈍い黄褐色	白色・黒色・石英の砂粒を多量に含む。灰色の砂利（７㎜）も含む。	右上がり方向の凹帯施文。	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。刻目	良好	
9	C－6	深鉢	口縁部	口：(16.1)	外：赤褐色・灰黄褐色・黒褐色 内：赤褐色・黒褐色	黒色・白色・赤褐色の砂粒を多量に含む。	粗いナデ調整。方向不一。	横方向の粗いナデ調整の後、波状の文様を施文。	粗い横ナデ。刻目。粘土紐の状態みられる。	良好	
10	C－6	？	口縁部	－	黄褐色	白色・黒色の砂粒をやや多量に含む。	粗いヘラ削り。条痕が明瞭に残存	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。	良好	
11	C－6		口縁部	－	外：黒褐色 内：暗褐色～黒褐色	砂粒を多量に含む。	上：横位の貝殻条痕 下：縦位の条痕。	上：櫛描き波状文 下：ナデ	刻目	不良 もろい	内器面に炭化物付着。
12	C－6	深鉢	口縁部	－	外：赤褐色 （口唇部も） 内：暗黒褐色	白色・黒色の砂粒、黒雲母片を多量に含む	右下がり→右上がりの沈線が施文。	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。沈線のような条痕をつける。	良好	器面には凹凸が残存。

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
13	C－7	深鉢	口縁部	－	外：黒色 内：黒褐色	石英・長石などの砂粒かなり含む。	貝殻条痕。	横位の条痕に縦ナデ。		やや良好だがもろい	
14	C－6	深鉢	胴部	－	外：暗褐色～明褐色 内：暗褐色	石英・雲母・角閃石などの砂粒を含む。	上：7本単位の条痕 下：ナデ消し。	条痕のあと削り。		やや不良	
15	C－7	深鉢？	口縁部	－	外：暗黄橙色 内：明褐色	長石・石英・角閃石などの細砂粒を含む。	条痕のあとナデ消す。	ナデ	口唇部：浅い刺突。	良好 堅緻	
16	C－7	深鉢？	胴部	－	外：明褐色 内：暗褐色	長石・石英などの砂粒を含む。	ナデ、稜杉文。	ナデ？		やや不良	

【第35図】　縄文土器（5）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	C－7	深鉢	口径～胴部	口：(45.0)	外：赤褐色 内：黄褐色	白色粒子（径1～2㎜）を多量に含む。	貝殻条痕調整。細かい条線が入る。横方向の二条の刻目突帯。一組に縦方向の刻目突帯。	貝殻条痕。		良好 固く焼き締まっている。	5つの補修孔あり。

【第36図】　縄文土器（6）

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	C－7	深鉢	口縁～胴部	口：(24.4)	外：黒褐色 内：赤褐色	黒色の微細な砂粒、粉末状の白雲母片を若干量含む。概ね緻密。	横位の粗いヘラ削り。	横位の粗いヘラ削り。	口唇部：波状文。 口縁部：二又状の工具による押引き文施文。	良好	
2	C－6	深鉢？	口縁部	－	外：A：赤褐色 B：暗黒褐色 内：鈍い黄褐色	緻密。微細な黒雲母片を多量に含む。	丁寧な横ナデ。明瞭な押引文施文。	横方向の条痕を横ナデでナデ消す。	ほぼ等間隔の刻目	良好	
3	B－8	深鉢？	口縁部	－	A部：灰黒褐色 他：赤褐色	黒色・白色・赤褐色の微細な砂粒、粉末状の金雲母片をやや多量に含む。	一部に横位の丁寧なヘラ削り。他は丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。	口唇部：刻目。 口唇～屈曲部にかけて、押引き気味の沈線文及び非常に浅い沈線文が施文されている。	良好	
4	C－6	深鉢？	口縁部		外：口唇部：暗褐色 胴：黒褐色 内：淡褐色	よく精製され、僅かに砂粒を含む。	条痕残存	条痕残存	ナデ調整。連続の刺突文を四条施文。	良好	外器面：煤付着。
5	C－7 B－6	深鉢	口縁部	－	外：黒褐色 内：暗褐色	角閃石・長石などの砂粒を多く含む。	貝殻条痕	貝殻条痕	口縁部：連続刺突押引文、二条施文。 口唇部：波状文。	やや良好	
6	C－7	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色 内：黒褐色	僅かの砂粒・細砂粒を含む。かなり精製されている。	貝殻条痕の後、ナデ。	貝殻条痕	貝殻による押引き連点二条（内と外）	やや良好	外器面：煤付着。
7	B－5	深鉢？	口縁部	－	外：褐色～暗褐色 内：暗褐色	石英・長石・雲母などの砂粒を含む。	ナデ	ナデ	波状口縁。波頂部は突出。 口唇部：3本の沈線と二条の刺突文。	良好 堅緻	

No.	遺構名	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
8	C－6	?	口縁部	－	黄褐色	緻密。微細な白色の砂粒、石英を若干量含む。	粗い横ナデ。	右上がり方向の条痕調整。	薄い平口縁に粘土紐を貼った後に山形押引文施文。屈曲部：粘土紐を貼り、押引文施文。更に山形頂部直下にも円形の粘土を貼り押引文施文。	良好	
9	C－6	?	口縁部	－	外：赤褐色 内：黒褐色	白色・黒色の砂粒を若干量含み、やや粗い	右下がりのヘラ削りをナデ消し。	横位のヘラ削りを横ナデでナデ消す。ヘラ削り痕残存。	波状を呈し、粘土紐を貼る。口唇部に押点文施文。	良好	
10	C－5	深鉢?	口縁部	－	外：黄褐色・黒褐色（口唇部も） 内：鈍い黄褐色	白色の微細な砂粒、石英を多量に含む。	横ナデの後、粗いヘラ削り。	粗いヘラ削りの後、横ナデ。	丁寧な横ナデ。貼り付け突帯上に刺突文。	良好	内器面：右下がりのヘラ削り部分
11	C－6	深鉢?	口縁部	－	外：暗黒褐色（口唇部も） 内：黒褐色	白色の砂粒及び白雲母片を多量に含み、やや粗い。	やや粗い横及び右上がり方向のヘラ削り。	粗い横方向のヘラ削り。	口唇部：粘土紐を貼った後、刻目及び櫛目状の押引きを施文。	若干焼き締めに欠ける。	
12	C－5	深鉢?	口縁部	－	外：黒褐色～褐色 内：暗褐色	砂粒をかなり含む。	ナデ	ナデ	ナデ 口唇部：3本の沈線と2列の刺突文。	良好 堅緻	
13	C－7	?	口縁部	－	淡黄褐色	細砂粒を僅かに含む	ナデ 押引文	ナデ		やや不良	
14	B－7	深鉢?	口縁部	－	外：暗褐色(煤付着) 内：暗黄褐色	白砂粒・雲母・角閃石など多量の細砂粒含む。	貝殻条痕の後、ナデ。	貝殻条痕の後、ナデ。	幅1cm前後の波状刺突文、二条施文。	不良 もろい	
15	D－6	?	口縁部	－	暗黒褐色	白色の砂粒を若干量含む。滑石を含み、鈍い光沢を呈す。	横方向のヘラ削りを横ナデでナデ消す不規則な刺突文施文。	横方向のヘラ削りを横ナデでナデ消す。		良好	

【第37図】　縄文土器（7）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－6	深鉢	口縁～胴部	口：(31.4)	外：暗黄褐色 内：鈍い赤褐色	白色の砂粒・石英を少量含む。	横方向の丁寧なヘラ削り	横方向の丁寧なヘラ削り	口唇部は波状。 ナデ。	良好	
2	C－7	深鉢	口縁部	口：(22.9)	外：暗黒褐色 口唇・内：黄褐色	緻密。黒色・白色の微細な砂粒を少量含む	粗いヘラ削りの後、横方向のナデ消し。	粗いヘラ削り。	丁寧な横ナデで明確な稜を形成。	良好	口縁が波状気味
3	B－5	浅鉢?	口縁部	－	内・外とも暗褐色	滑石を多量に含む。	丁寧なナデ。	粗い条痕。横方向の条痕。	やや波状気味。	良好	外器面に煤付着
4	C－7	?	口縁部	－	外：暗褐色 内：褐色	砂粒僅かに含む（長石・石英など）。	横方向の条痕。	丁寧なナデ。		良好	
5	C－5	?	胴部	－	黒褐色	砂粒含む。	調整は不明。U字型に突帯を貼り付ける。	粗いナデ。櫛描波状文。		不良 もろい	
6	C－7	深鉢?	口縁部	－	外：明黒褐色 内：黄褐色	滑石を多量に含み、粒子状のものも多量に含む。器量面や割れ口は光沢を呈している。	横方向のヘラ削り	横方向の条痕	口唇部に竹管状の工具で刺突文を施す。	良好	
7	C－6 (SB－1) (Pit－10)	?	底部	－	外：暗淡褐色 内：淡灰褐色	滑石を異常に含み、滑石でできているようである。	不明	不明	上げ底に作る。	良好	
8	C－7	?	胴部	－	黒褐色	僅かに砂粒を含むが、よく精製される。	粗い条痕	粗い条痕		良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
9	C－5	?	底部	底：(8.0)	外：胴：暗黄褐色 底：淡黄褐色 ～暗黄褐色 白いもの付着 内：黒褐色	白砂粒を含む。	粗い条痕の後、ナデ。	粗い条痕の後、ナデ。	底部に条痕が残る。部分的にナデ。	やや不良	
10	B－6	?	底部	底：(8.4)	外：胴：暗褐色 底：黒褐色・白い粘土状のもの付着 内：淡黄褐色 ～暗褐色	角閃石・雲母などの細砂粒を多く含む。	条痕の後、ナデ。	条痕	底部ナデか。	良好	

【第38図】 縄文土器（8）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－6	深鉢	口縁部	口：(18.8)	外：暗赤褐色 内：赤褐色	白色・黒色・赤褐色の微細な砂粒を多量に含む。	横位・右下がり方向の粗いヘラ磨き。	横位の丁寧なヘラ磨き。		良好	
2	C－7	深鉢	口縁部	－	外：暗淡褐色 内：淡灰褐色	砂粒僅かに含む。	ナデ	条痕のあとナデ。	口唇部：波状。	良好	
3	B－4	深鉢	口縁部	－	明赤褐色	黒色・白色の砂粒（1～2mm）微細な白雲母片等を多量に含み、粗い。	粗い横ナデ。口縁部：斜め方向の沈線。右下がり方向の明瞭な沈線。右上がり方向のやや不明瞭な沈線。横方向の非常に細かい沈線が施文。	粗い横ナデ。		やや不良	
4	A－4	浅鉢	胴部	－	外：淡黄褐色 内：暗黄褐色・煤付着	砂粒かなり含む。	粗い条痕の後、少々ナデ消す。	粗い条痕が各方向に残る。		やや不良	
5	C－7	深鉢	胴部	－	外：暗褐色 内：暗黄褐色	雲母・石英・長石などの砂粒を含む。	条痕の後、ナデ。上部に円筒状の竹管文による刺突、地文として、縄文。	上：条痕の後、ナデ 下：ナデ。		良好	
6	B－7	深鉢	口縁～底部	口：(14.4) 底：5.8	外：淡赤褐色 内：淡赤橙色～暗褐色	角閃石・長石などの砂粒を多量に含む。	ナデ	ナデか？	突起あり。	やや不良	
7	A－7	?	底部	底：(4.8)	外：淡灰褐色 内：淡黄褐色	角閃石・長石などの砂粒を多量に含む。	磨研	ナデ？	底部はナデ。	良好	外器底部に白色の物付着。
8	C－7	深鉢	底部	底：(8.8)	外：赤褐色 ・灰黒褐色 内：灰黄褐色	白色・黒色の砂粒を若干量含む。	主に横ナデ。縦ナデもある。	ナデ	底部調整不明。	良好	
9	B－5	?	底部	底：9.4	外：暗黄褐色 内：淡暗黄褐色	角閃石・雲母・長石などの砂粒を多量に含む。	アンペラ圧痕？	不明	底部ナデ。	やや不良	
10	C－7	浅鉢	底部	底：(7.3)	外：鈍い赤褐色 内：灰赤褐色	黒色・白色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	ヘラによるナデ上げ。下部に非常に粗い横ナデ。	器面が粗く、調整不明。	底部ナデ。	良好	
11	B－5 C－5	深鉢	底部	底：1.5	外：黄褐色 ～黒褐色 内：黒褐色	雲母・石英・長石・角閃石などの砂粒を多く含む。	丁寧なナデ。	ナデ	底部調整不明。	良好	
12	C－7	深鉢？	底部	－	赤褐色	白色・赤褐色の砂粒、石英、粉末状の白雲母片を多量に含む。	横ナデの後、右下がり方向の粗いヘラ削り。	右上がり方向の丁寧なナデ。	底部調整不明。	良好	
13	C－7	深鉢？	底部	底：(6.0)	外：赤褐色 内：暗赤褐色	微細な白色・黒色の砂粒、石英、粉末状の白雲母片を若干量含む	丁寧な横ナデ。	丁寧なナデ。	底部調整不明	良好	

No	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
14	C－7	深鉢？	底部	底：(7.2)	黄褐色	黒色の砂粒・石英を若干量含む。	丁寧な横ナデ。下部にやや粗い横ナデ。	縦方向のヘラ削り	底部調整不明	良好	
15	A－6	深鉢？	底部	底：(7.2)	外：褐色 内：暗褐色	2～3やや大きい砂粒を含むが、全体的にはよく精製される。	よくナデ調整される。	ナデか？		良好	
16	B－5	深鉢	底部	底：(8.4)	外：赤褐色 内：黄褐色(底部も) 立ち上がり黒褐色	乳白色の砂粒（2～3㎜）、微細な雲母片多量に含み、粗い。	胴部～屈曲部：ヘラ状工具で粗い横ナデ。以下：粗いナデ上げ及び横ナデ。	ヘラ状工具による丁寧なナデ上げ。	底部：ヘラ状工具による粗い横ナデ	やや不良	割れ口に接合痕あり。
17	C－7	深鉢	底部	底：(10.4)	A部：黒褐色 他：赤褐色	白色・黒色・赤褐色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	丁寧な横ナデ。	調整不明。	底部横ナデ。(円周に沿った形)	やや良好	

【第39図】　縄文土器（9）

No	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－7	浅鉢	口縁部～胴部	口：(31.3)	外・内：灰黄褐色	白色灰褐色の微細な砂粒を多量に含む。やや、もろい。	丁寧なヘラ磨き。	丁寧なヘラ磨き。		良好	
2	A－6	浅鉢	口縁部～胴部	口：(29.4)	外：淡黄褐色 内：淡黄灰褐色	きめの細かいよく精製された土である。よくしまる。	ナデを丁寧に施す。磨研し、横ナデ。	磨研		やや不良	断面は黒褐色。
3	B－5	浅鉢	口縁部	口：(23.4)	淡灰色～黒色	よく精製され、よくしまる。	よく磨研され、炭素が吸着	磨研	口唇部にヒレ状の突起。	やや良	
4	AB－7	浅鉢	口縁部～胴部	－	外：淡黄褐色～暗褐色 内：黒褐色	長石・角閃石などの砂粒をかなり含む。	磨研	磨研		やや不良	
5	C－7	浅鉢	口縁部～胴部	口：(17.2)	黒褐色	非常によく精製され、砂粒を殆ど含まない。	丁寧に磨研される。口径部に三本の沈線	磨研		良好	外器面には赤色顔料を塗布。
6	B－6	浅鉢	口縁部	口：12.8	淡黒褐色	よく精製された土。	磨研	磨研 頸部の下に条痕とナデ。		良好	

【第40図】　縄文土器（10）

No	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	A－4	浅鉢	口縁部	－	外：淡黄色～暗褐色 内：淡黄色～暗褐色	角閃石・長石などの細砂粒含む。	磨研	磨研		やや不良	
2	B－5	浅鉢	口縁部～体部	口：(12.4)	内外両面とも淡黒褐色	細砂粒かなり含む。	磨研	磨研		やや不良	
3	C－7	－	口縁部	－	内外両面とも淡黄灰色	細砂粒かなり含む。	磨研。 横方向の沈線。	磨研。 横方向の沈線と縦方向の沈線。	口唇部にネクタイ状の突起。	やや不良	
4	B－6	浅鉢	口縁部	－	内外両面：黒褐色	よく精製されている	磨研	磨研		良好	
5	B－5	浅鉢	口縁部	－	内外器面： 赤橙色～暗灰色	かなりよく精製される	磨研	磨研	口唇部に突起あり。	やや不良	

No.	グリッド	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
6	B－	浅鉢	口縁部	－	暗褐色～黒褐色	長石等の砂粒含む。	磨研、風化により大部薄れる。外：沈線あり。	磨研		やや不良	
7	C－6	浅鉢	口縁部	－	淡器褐色～暗褐色	僅かに石英などの砂粒を含む。	磨研	磨研		やや良好	
8	C－7	浅鉢	胴部	－	外：淡灰黄褐色～暗灰色 内：淡灰褐色～暗灰褐色	細砂粒をかなり含む	磨研 屈曲部に沈線あり。	磨研		やや不良 やや不良	
9	C－7	浅鉢	口縁部	－	外：淡暗灰色 内：暗灰褐色	よく精製される。	磨研	磨研		やや不良	
10	C－7	浅鉢	口縁部	－	外：淡灰褐色 内：暗褐色	角閃石・長石など細砂粒含む。	磨研。	磨研	口縁部に斜格子の沈線。	良好	
11	一括	深鉢？	口縁部	－	全面黒色	混入物はほとんどない。	磨研	磨研		良好	
12	AB－7G	壺？	口縁部	－	外：暗黄褐色 内：黒色	よく精製されておりほとんど砂粒を含まない。	磨研。	磨研		やや良好	
13	B－5	浅鉢	胴部	－	外：黒色 内：黒灰色	細砂粒が含まれるが、かなり精製されている	磨研	磨研		やや不良	
14	C－7	浅鉢？	口縁部	－	外：暗黄褐色 内：黒褐色	長石・雲母などの砂粒を含む。	横方向の条痕。	磨研		良好	
15	C－7		底部	－	内・外器面：黒褐色	細砂粒かなり含む。	磨研。 二条の沈線。	ナデ		良好	

【第41図】　縄文土器（11）

No.	グリッド	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	B－5	深鉢	口縁部～体部	口：(45.8)	外： 口縁部：赤褐色 黒褐色～灰黄褐色 内：口縁部：黄褐色 以下：黒褐色	白色・赤褐色・黒色の砂粒を若干量含む（白色のものは、やや大粒で3～5㎜位）。	粗いヘラ削り。	横方向のヘラ削り横ナデ。		良好	
2	B－5	深鉢	口縁部～体部	口：(41.7)	外：暗黒褐色（煤）黄褐色 内：灰黄褐色 黒褐色（煤）	白色・赤褐色・黒灰色の砂粒（3～5㎜以上）や微細な白雲母片を多量に含む。	非常に粗い横方向のヘラ削り。屈曲部以外は特に粗い。	丁寧な横ナデ。		やや不良	

【第42図】　縄文土器（12）

No.	グリッド	器種	部位	法量(cm)	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	B－5	深鉢	口縁部	口：(45.8)	外：黄褐色 内：暗黒褐色	白色・赤褐色の砂粒（4～5㎜）を多量に含んでおり非常に粗い	丁寧なヘラ磨き。 下部は粗い横ナデ。	粗い横ナデ。		良好	
2	B－5 C－7	深鉢	口縁部	口：(50.1)	暗黄褐色	白色・黒色の微細な砂粒、石英を多量、黒雲母・白雲母片を若干量含む。各々微細。	条痕の後、粗いヘラ削り。	丁寧な横ナデ。		良好	
3	A－7	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色～黒褐色 内：暗褐色、上方にやや黒味を帯びる。	黒雲母、長石などのほか、1～2㎜大の砂粒を含む。	粗い条痕の後にナデか。	上部ナデ。 粗い貝殻条痕。		良好	外面には煤付着。

【第43図】　縄文土器（13）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	A－8	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色 内：暗黄褐色	石英・長石・角閃石などの砂粒多く含む。		丁寧な磨研。		やや不良	
2	C－7	深鉢	口縁～胴部	口：(35.9)	外：黄褐色・灰黒褐色 内：鈍い黄褐色	白色の砂粒、石英を多く含む。ややもろい	横位のヘラ削り。条痕残存	横位のヘラ削り。丁寧。		良好	
3	B－5	深鉢	口縁部	－	外：暗黄褐色・黒褐色 内：黒褐色	白色・赤褐色の砂粒を多量に含む。	やや粗い横ナデ。	粗い横ナデ。条痕多数残存。		良好	
4	B－6	深鉢	口縁～胴部	－	外：暗淡黄褐色 内：暗褐色	砂粒を多量に含む。	粗い条痕の後、ナデ。	粗い条痕。		不良風化している	
5	C－6	深鉢	口縁部	－	外：暗黒褐色 内：鈍い黄褐色	黒色・白色・灰褐色の非常に微細な砂粒若干。概ね緻密。	粗い条痕の後、ナデ。	丁寧な横ナデ。		良好	A：調整不明。小さな凹凸が残存 B：横位のヘラ削りの後、横ナデにより丁寧にナデ消してある。
6	C－6 C－7	深鉢	口縁～胴部	口：(33.3)	外：暗黒褐色・黄褐色 内：灰黄褐色	白色・黒色・赤褐色の微細な砂粒若干。	横位のやや丁寧なヘラ削り。右下がり方向もある。	横位のやや丁寧なヘラ削り。		良好	

【第44図】　縄文土器（14）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	B－6	深鉢	口縁部	口：(52.2)	(外) 暗赤褐色 鈍い黄褐色・黒褐色 (内) A部：赤褐色 以下：鈍い赤褐色	白色・黒色の砂粒、石英、黒雲母・白雲母片を多量に含む。	丁寧な横ナデ。	A部：横位のやや粗いヘラ磨き。 下部：丁寧な斜め方向のナデ。	口唇部（外器面）の接合痕付近には、ナデ上げが僅かにある。	良好	
2	B－6	深鉢	口縁部	口：(43.2)	外：鈍い黄褐色 灰黒褐色 内：灰黒褐色 （口唇部も）	黒色・灰褐色・赤褐色の砂粒を多量に、黒雲母片を少量含む。	丁寧な横方向のヘラ磨き。	粗い横方向のヘラ磨き。	口唇部に浅い沈線	良好	
3	C－5	深鉢	口縁部	－	外：黄褐色 内：灰黒褐色	黄褐色・白色の砂粒、白雲母片を多量に含む。	右下がり方向の条痕。A部は非常に雑	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。	良好	
4	C－6	深鉢	口縁部	－	外：鈍い黄褐色 内：黒褐色 （口唇部も）	白色・赤褐色の微細な砂粒、雲母片を若干量含む。概ね緻密。	やや粗い横位の条痕。横ナデ。	やや粗い横位のへヘラ削りの後、丁寧な横ナデ。	やや粗い横位のヘラ削りの後、丁寧な横ナデ。	良好	
5	C－6	深鉢	口縁部	－	外：A：暗黒褐色 B：赤褐色 内：赤褐色	白色・黒色・赤褐色の砂粒、黒雲母片を多量に含む。	丁寧な横及び上右がり方向のナデ。	横方向の条痕後、横ナデ。表面が剥離している為、詳細不明。	丁寧な横及び右上がり方向のナデ。	良好	
6	C－6	深鉢	口縁部	－	外：鈍い灰黄褐色 内：灰黒褐色	白色・黄褐色・灰黒褐色の砂粒を多量に含み、非常に粗い。	粗い横位の条痕。	丁寧な横位の条痕	丁寧な横位のヘラ削り。口縁は波状を呈する。	良好	
7	C－6	深鉢	口縁部	－	黄褐色	白色・黒色の砂粒をやや多量に含む。	粗い条痕。条痕が明確に残存。	丁寧な横ナデ。	口唇部：丁寧な横ナデ。	良好	
8	B－6	胴部	口縁部	－	外：鈍い赤褐色 内：灰黒褐色	白色・黒色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	条痕	ナデ		良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
9	C－6	深鉢	口縁部	口：(13.4)	外：暗黒褐色 (口唇部も) 内：黄褐色	白色・黒色・半透明の砂粒、微細な白雲母片を多量に含む。	横位のやや粗いヘラ削りを横ナデでナデ消してある。ヘラ削り痕も残存するが概ね丁寧。	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ	良好	
10	C－6	深鉢？	口縁部	－	外：灰・黄褐色 鈍い黄褐色 内：鈍い黄褐色	白色・黒色の砂粒、白雲母片を多量に含む	粗い横ナデ。	粗い横ナデ。	口唇部：丁寧な横ナデ。	良好	
11	B－6	深鉢	口縁部	－	外：灰黒褐色 鈍い黄褐色 内：灰黒褐色 (口唇部も)	白色・黄褐色の砂粒を多量に含む。	横位のヘラ磨き。粗く条痕が多数残存	横位のヘラ磨き	横位のヘラ磨き。	良好	
12	C－6	深鉢？	口縁部	－	外：鈍い黄褐色 灰黒褐色 内：灰黒褐色	白色・黒色・赤褐色の微細な砂粒を多量に含む。	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。	特に丁寧な横ナデ胎土が外器面にはみ出す。	良好	

【第45図】 縄文土器 (15)

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	B－5	深鉢	口縁部	口：(41.5)	外：黄褐色・黒褐色 内：灰黒褐色	緻密。白色・黒色の微細な砂粒を若干量含む。	ヘラ削りの後、ナデ消し。	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。	良好	
2	C－7	浅鉢	口縁部	口：(48.3)	外：暗黒褐色 鈍い赤褐色 内：鈍い黄褐色 暗黒褐色	緻密。白色の砂粒を若干量含む。	条痕のあと、横位の粗いヘラ削り。	横方向の非常に丁寧なヘラ磨き。滑沢を有する。	丁寧な横ナデ。	良好	
3	A－7	浅鉢	口縁部	口：(48.4)	外：赤褐色 暗黒褐色（煤？） 内：赤褐色 ・鈍い黄褐色 ・暗黒褐色	白色・黒色・黄褐色の微細な砂粒を多量に含む。	横方向の粗いヘラ磨き。器面の大部分に気孔のこる。	横方向の丁寧なヘラ磨き。器面は滑らか。	丁寧な横ナデ。	良好	口縁部には穿孔痕が一ケ所見られる。

【第46図】 縄文土器 (16)

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	A・B－7	浅鉢	口縁～胴部	口：(35.4)	黒褐色	細砂粒を含む。	粗い条痕の後、軽いナデ。	丁寧な磨研。		良好	
2	B－5	浅鉢	口縁～胴部	口：(35.4)	外：黒褐色 内：褐色～暗褐色	砂粒をいくらか含むが、わりと精製されている。	粗い条痕の後、軽く磨研。	丁寧な磨研。		良好	外器面：炭化物とスス付着。
3	1・2	浅鉢	口縁～胴部	口：(39.7)	外：鈍い黄褐色 (口唇部も) 内：鈍い赤褐色 黒褐色	白色・黒色・灰褐色の砂粒、微細な白雲母片を若干量含む。	非常に粗い横位のヘラ削り。条痕多数残存。	やや丁寧な横位のヘラ磨き。	非常に粗い横位のヘラ削り。条痕多数残存。	良好	口縁下：外・内両器面より穿たれたと思われる孔あり。
4	B－8	浅鉢胴部	口縁～	－	外：灰黒褐色 内：明赤褐色	白色・黒色の砂粒、石英、黒雲母片（いずれも微細）を多量に含む。	横位のヘラ磨き。粗く、凹凸が残存。	横位のヘラ磨き。丁寧で、A部は滑沢を有する。		良好	
5	B－5	浅鉢	口縁～胴部	口：(37.2)	外：黒褐色 内：鈍い赤褐色 (口唇部も)	白色・黒色の砂粒、石英、白・黒雲母片（いずれも微細）を多量に含む。	丁寧な横位のヘラ磨き。	横位の貝殻条痕。		良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
6	B－6	浅鉢	口縁部	口：(17.8)	外：暗黒褐色 (口唇部も) 内：赤褐色	黒色・赤褐色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	横位のヘラ磨き。やや粗い。	横位のヘラ磨き。		良好	
7	B－6	浅鉢	口縁部	口：(27.8)	外：黒褐色 内：暗赤褐色 (口唇部も)	黒色・白色・赤褐色の砂粒を若干量含む。概ね緻密。	横位のヘラ磨き。やや粗く、条痕が若干残存。	横位のヘラ磨き。		良好	

【第47図】 縄文土器 (17)

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	B－6	鉢		口：12.0 高：9.3 底：14.0	(外) 口縁～胴部：暗黒褐色 底部：赤褐色 (内) 暗赤褐色 底部：黒褐色	微細な白色・黒色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	横方向のヘラ削りとナデ。	ヘラ磨き。		良好	
2	A－5	鉢？	口縁部	－	外：暗褐色 内：黒褐色	2mm大の砂粒を含むが、他は細砂粒が多い	条痕の後ナデか。煤付着。	磨研される。		良好	補修孔あり。
3	B－6	鉢	口縁部	－	外：灰黒褐色 鈍い赤褐色 内：明赤褐色	黒色・赤褐色の砂粒を若干量含む。概ね緻密。	やや粗い。横位のヘラ磨き。沈線が2条施文。	丁寧な横位のヘラ磨き。調整の際出来たと思われる凹線が、2ケ所に渡って認められる。		良好	
4	一括	浅鉢	口縁部	－	外：鈍い黄褐色 内：赤褐色	白色・黒色・赤褐色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	横位のヘラ磨き。粗く条痕残存。	丁寧な横位のヘラ磨き。		良好	口唇部：櫛状工具によると思われる右上がり方向の沈線文とアンペラ圧痕が施文
5	B－6	浅鉢	口縁部	－	A部：暗黒褐色 B部：やや鈍い赤褐色	白色・黒色・赤褐色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	やや粗い。横位のヘラ磨き。	横位のヘラ磨き。口縁部付近には条痕が残存。	非常に粗い。	良好	
6	B－6	浅鉢	口縁部	－	外：暗黒褐色、赤褐色 内：鈍い赤褐色 灰黒褐色 (口唇部も)	黒色の砂粒、粉末状の白雲母片を多量に含む。	横位のヘラ磨き。粗く条痕残存。	横位のヘラ磨き。		良好	外器面：煤付着か？
7	A－5	浅鉢？	口縁部	口：18.2	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色～淡灰褐色	長石・角閃石など細砂粒多く含む。	ヘラ磨き。	ヘラ磨き。		やや良好	
8	B－5	浅鉢？	口縁部	－	外：黒褐色 内：赤褐色	微細な白色・黒色の砂粒、白雲母片を多量に含み、粗い。若干、もろい感じを受ける。	横ナデ。粗く条痕がある。	横ナデ。やや丁寧	やや丁寧。	良好	
9	B－7	浅鉢？	口縁部	口：14.9	外：暗黒褐色 内：黒褐色	白色の微細な砂粒、黒雲母片を若干量含む概ね緻密。	横位のヘラ磨き。	横位のヘラ磨き。丁寧で滑沢を呈する		良好	外器面：滑沢を呈する部分があるが、やや粗く、部分的にあばた状を呈する。
10	B－6	浅鉢	口縁部	口：13.3	外：黒褐色 内：暗赤褐色 (口唇部も)	黒色の微細な砂粒、粉末状の白雲母片を多量に含む。	横位のヘラ磨き。非常に粗い。	横位のヘラ磨き。丁寧で滑沢を有する		良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
11	C－6 C－7	浅鉢	口縁部	口：14.8	外：暗黄褐色 内：灰黄褐色	白色・黄褐色の砂粒を多量に含み粗い。	横位の粗いヘラ磨き。	横位の粗いヘラ磨き。外器面より粗い		良好	
12	C－6	浅鉢？	底部	底：6.6	外：黒褐色～暗褐色 内：黒灰褐色	白砂粒をかなり含む	ナデ？	磨研	底部・外器面は磨耗している。	良好	
13	C－5	浅鉢？	底部	底：10.8	外：暗黄褐色 内：暗黄灰褐色 断面：暗灰色	よく精製されている僅かに細砂粒含む。	縦に条痕か。沈線が入り、磨研している。	磨研		良好 堅緻	

【第48図】　縄文土器（18）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－	深鉢	口縁部～体部	口：(26.4)	外：暗褐色・黒褐色～赤褐色 内：黒褐色	白色・黒褐色の砂粒・黒雲母片を多量に含み、粗である。	上部、横ナデ、中部より以下圧痕。	中位まで丁寧なヘラ磨き。下位は不明	口唇部にアンペラ状の圧痕。	良好	屈曲部より下部は、器壁の厚さが薄くなり、編み籠状の圧痕が残る。色調も異なる。屈曲部には接合痕が認められる。
2	C－7	浅鉢	口縁部	口：(29.8)	全面：黄褐色～・鈍い黄褐色	白色・黒色・黄褐色の砂粒を多量に含む。	に編籠状の条痕の後、粗い横方向のヘラ削り。	横方向のヘラ削り。		良好	
3	C－6	浅鉢	口縁部	口：(25.0)	外：赤褐色 内：灰黒褐色	白色・黒色の微細な砂粒を多量に含む。	粗いヘラ削り。	粗いヘラ削りとナデ消し。		良好	
4	C－7	浅鉢	口縁部	－	外：黒褐色～暗褐色 内：暗灰褐色	石英・長石・雲母など、多量の細砂粒含む	横方向の条痕。	条痕をナデ消す。	口唇部：ナデ。	良好	
5	B－5	浅鉢	口縁部	－	外：暗黒褐色・赤褐色 内：黄褐色～灰黒褐色	白色・赤褐色の大粒の砂粒、微細な白雲母片を多量に含む。	両面粗い横ナデ。条痕がかなり残存			やや不良	

【第49図】　縄文土器（19）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－7	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色～黒褐色 内：暗褐色～黒褐色	石英・長石・雲母などの細砂粒をかなり含む。	横ナデ。口唇部近くに一条の刻目突帯文。	条痕をナデ消す。	ナデ	良好	刻目突帯は非常に雑な作りで粗く貼り付けている。刻目も不揃いである
2	C－7	深鉢	口縁部	－	外：暗褐色 内：暗褐色	角閃石などの細砂粒、赤砂・白砂など砂粒を含む。	ナデ 口唇部に刻目突帯文が一条。	横ナデ		不良	
3	C－6	深鉢	口縁部	－	外：黄褐色 内：暗黄褐色 口唇部は暗黒褐色	白色・灰褐色の砂粒、白雲母片を多量に含む。	丁寧な横ナデ。口唇部は刺突文。ほぼ等間隔で明瞭な押引き文。下部は、粘土紐を貼り付け、浅い押点文が施文。屈曲部に刻目突帯文を一条貼り付ける。	丁寧な横ナデ。一部刷毛目のような横方向のナデ。ナデ上もある。		良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
4	C－7	深鉢	口縁部	－	外：黄褐色～黒褐色 内：黄褐色	石英・角閃石などの細砂粒を含む。	ナデ。屈曲部に一条の刻目突帯文。	ナデ？	口唇部に刻目か。	やや不良	外器面：煤付着
5	A・B－7	深鉢	口縁部	－	外：黒褐色～暗褐色 内：黄褐色	雲母・長石・角閃石などの砂粒を多く含む	ナデ。沈線。波状口縁になり始める所。沈線が上昇しつつある。	ナデ		やや良好	
6	B－6	深鉢	口縁部	口：(27.8)	外：暗黒褐色 内：鈍い黄褐色（口縁部も）	黒色・白色・赤褐色の微細な砂粒、粉末状の白雲母片を若干量含む。概ね緻密。	右下がり方向及び横ナデ。	丁寧な横ナデ。		良好	
7	C－6	深鉢？	口縁部	－	外：灰黄褐色～鈍い黄褐色 内：鈍い黄褐色	白色・黒色の砂粒、白雲母片を多量に含む	粗い横ナデ。	粗い横ナデ。	口縁は波状を呈し、丁寧な横ナデ。	良好	
8	C－6・7	深鉢？	口縁部	－	外：暗黄褐色 内：暗褐色	白砂粒・石英・長石の砂粒を多く含む。	条痕の後ナデ	ナデ	口縁にネクタイ状突起がつく。	良好	
9	A－7	深鉢？	口縁部	－	外：灰褐色～黄褐色 内：黄褐色	砂粒を僅かに含む。	ナデ、横方向の沈線。	ケズリ？		不良	
10	A・B－7	深鉢	口縁部	－	外：淡褐色～黒褐色 内：黒褐色	石英・長石・角閃石・雲母などの砂粒を多く含む。	ナデ、浅い沈線。	ヘラナデ、上部はナデ。		やや良好	
11	C－5	深鉢	口縁部	－	外：黒褐色 内：鈍い黄褐色	白色・赤褐色の砂粒、石英を多量に含む	丁寧な横ナデ。X字状の貼り付け隆帯。	粗い横ナデ。		良好	
12	C－7	浅鉢？	口縁部	－	外：鈍い赤褐色 内：暗黄褐色・暗黒褐色	白色・灰褐色の砂粒（5㎜前後の大粒を含む）、石英、黒雲母片を多量に含み非常に粗い。	粗いナデ。	ナデ？	底部・外器面にアンペラ状圧痕。	良好	
13	C－7	浅鉢？	口縁部	－	外：鈍い黄褐色～灰黒褐色 内：暗黒褐色	白色・赤褐色の砂粒、微細な石英、白雲母片を多量に含む。	ヘラ削り及びナデ	丁寧な横ナデ。	底部・外器面にアンペラ状圧痕。	良好	

【第50図】 縄文土器（20）

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	焼成	備考
1	B－6	浅鉢？	底部	－	外：暗褐色 内：暗黄褐色	長石・角閃石・黒雲母の細砂粒を含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
2	一括	浅鉢？	底部	－	外：黄褐色 内：淡黄褐色	石英・黒雲母などを含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
3	C－5	浅鉢？	底部	－	外：暗褐色 内：暗褐色	長石・角閃石などの細砂粒を含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
4	C－6	浅鉢？	底部	－	外：暗黒褐色 内：暗褐色	角閃石・長石・石英などの細砂粒を含む。	アンペラ状の圧痕	横ナデ	良好	
5	C－5・6	浅鉢？	底部	－	外：暗褐色 内：黄褐色	黒雲母・角閃石・石英などを含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
6	C－7	浅鉢？	底部	－	外：暗褐色 内：暗褐色	黒雲母・長石などを含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
7	B－5	浅鉢？	底部	－	外：灰褐色 内：黒褐色	黒雲母・長石などの細砂粒を含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
8	B－5	浅鉢？	底部	－	外：褐色～暗褐色 内：黒褐色	角閃石・長石などの細砂粒を含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	7と同一個体か

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	焼成	備考
9	B－6	浅鉢？	底部	－	外：褐色 内：淡褐色～暗褐色	長石・石英などの砂粒を多く含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
10	A・B－7	浅鉢？	底部	－	外：暗黒褐色 内：暗黒褐色	長石・角閃石などを含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	
11	B－6	浅鉢？	底部	－	外：暗褐色 内：褐色	角閃石・長石・石英などの細砂粒を含む。	アンペラ状の圧痕	ナデ	良好	と同一個体か

【第51図】 縄文土器（21）

No.	グリッド	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 底部	焼成	備考
1	B－5	底部	底：(9.6)	外：明褐色 内：黒褐色	角閃石・石英・長石などの砂粒を多く含む。	ナデ	条痕の後、ナデ。		良好	
2	AB－7	底部	底：(11.0)	外：明褐色 内：暗褐色	砂粒を多く含む。	ナデ	条痕？		良好	
3	B－5	底部	底：(9.0)	外：淡明褐色 内：淡暗褐色	石英・角閃石・長石など多くの砂粒含む。	ナデ	不明	底部：薄い圧痕。	良好	
4	B－6	底部	底：(8.0)	外：赤褐色 内：暗褐色	砂粒を多く含む。	ナデ	ナデ	底部：薄い圧痕。	やや良好	
5	B－5	底部	底：(10.6)	外：淡褐色～黄褐色 内：黄褐色	砂粒を多く含む。	条痕の上をナデ。	不明	底部：ナデ。薄い圧痕。	やや良好	底外器面には、薄い白色の膜がつく。
6	B－6	底部	底：(10.0)	外：胴：淡黄褐色 底部：淡褐色～淡黄褐色 内：黒褐色 底部：淡褐色～淡黄褐色	径1㎜大の砂粒と細砂粒をかなり多く含む。	胴部：指による調整？	粗い条痕。	底部：網代状の圧痕	やや良好	断面には製作時の粘土の輪積み状態を示す部分がある。
7	B－7	底部	底：10.3	外：黄褐色 内：鈍い赤褐色	白い黄褐色の砂粒、透明の石英を多量に含む。	やや粗い横ナデ。胴部の方が粗い。	粗いヘラ削りをナデ消している。		やや不良	
8	B－5	底部	底：(11.4)	外：褐色～暗褐色 内：褐色	径1㎜大の砂粒かなり含む。	ナデ？	不明	底部：薄い圧痕か。	不良 もろい	
9	C－6	底部	底：9.9	外：黒褐色 内：灰黄褐色	赤褐色・雲母・長石・角閃石などの砂粒を含む。	ナデ	ナデ		不良	
10	B－6	底部	底：不明	外：鈍い赤褐色 灰黒褐色（煤） 内：灰黄褐色 灰黒褐色（煤）	白色・黄褐色・黒褐色・赤褐色の砂粒、白雲母片を多量に含み、粗い。	粗いヘラ削り。	不明	底部：ナデ。	良好	底部は整った円形をしているが、立ち上がり部分から歪んだ形を呈している。
11	B－6	底部	底：(10.0)	外：明褐色 内：黒褐色	白色・赤褐色のやや大粒の砂粒、白雲母片を多量に含む。	横ナデ	不明	底部：不明。	良好	
12	A－4	底部	底：(11.0)	外：淡褐色 内：黒褐色	石英・長石・角閃石などの細砂粒をかなり含む。	ナデ	ナデ		やや良好	
13	C－7	底部	底：(8.8)	外：赤褐色～灰黒褐色 内：鈍い黒褐色	黒色・白色の砂粒、石英、黒雲母片を多量に含む。	粗い横ナデ。	不明	ナデ	良好	
14	B－4	底部	底：(10.0)	赤褐色	緻密。白色の砂粒を若干量含む。	粗い横ナデ。	ナデ	ナデ	良好	
15	C－7	底部	底：(10.4)	外：明褐色 内：黒褐色	白色の砂粒、黒雲母片を多量に含む。ややもろい。	横ナデ	不明	底部：不明。	良好	
16	C－9	底部	底：(11.2)	明黄褐色	白色・黒色の砂粒を多量に含む。	横ナデ	ナデ	器面が粗い為、不明。	良好	
17	B－6	底部	底：(8.4)	赤褐色・灰黒褐色	黒色・白色の砂粒、石英を多量に含み、粗いややもろい。	横ナデ？	横ナデ？	横ナデ	良好	

No	グリッド	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 底部	焼成	備考
18	一括	底部	底:不明	外：淡褐色 内：黄褐色	石英・長石・角閃石などの砂粒多く含む。	ナデ	ナデ		やや良好	
19	B－5	底部	底： 9.2	外：黄褐色～明褐色 内：暗灰色	長石などの砂粒をかなり含む。	ナデ	ナデ	薄い圧痕。	やや不良	底径の3／4残る。

【第52図】 縄文土器（22）

No	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－6	?	胴部	－	外：淡黄褐色 内：暗褐色	砂粒を多量に含む。	風化が激しく、調整は不明	風化激しく、調整は不明。		不良	焼成悪く、器面が崩れて落ちる。
2	C－6	?	胴部	－	外：明褐色 ・暗褐色 内：暗褐色 ・黒褐色	角閃石・石英・長石な器面がど多量の砂粒含む。	条痕？	風化し不明。		不良	炭化物僅かに付着。焼成悪く、非常にもろい。
3	A－4	?	底部	底：(14.0)	褐色	白砂粒・石英・角閃石・長石など多くの砂粒含む。	ナデ	ナデ	底部の外器面に木の葉圧痕。	良	

【第53図】 土製品

No	グリッド	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	焼成	備考
1	B－5	不明	直径 1.6～1.7	淡黄褐色	石英・角閃石・長石などの砂粒を含む。	ナデ	——	やや良好	土偶の一部か？
2	B－5	土玉	縦径：2.9 横径：2.0	灰黄褐色	石英・角閃石などの細砂粒含む	ナデ	——	良好	穿孔は両側より。
3	A－4	メンコ形	直径 5.6～5.8	外：暗黒褐色 内：暗赤褐色	微細な黒色・白色の砂粒、雲母片、赤褐色の粒子を若干量含むが、緻密。	粗い横ナデ。 条痕あり。	比較的丁寧な横ナデ。	良好	縄文土器を利用。
4	C－7	メンコ形	直径 3.6～3.5	外：黒褐色 内：黄橙色	角閃石・長石・石英粒を含む。	弱い刷毛調整。	弱いハケ調整。	やや不良	縄文土器を利用。
5	B－6	メンコ形	直径 4.9～4.8	外：黒褐色 内：黄褐色～黒褐色	角閃石・白砂粒など多数の細砂粒含む。	不明	不明	やや不良	縄文土器を利用。
6	C－7	メンコ形	直径 7.5～6.3	黒褐色	よく精製される。	磨研 焼成が悪く粗くなる	磨研	やや不良	縄文土器を利用。 外器面：炭化物が付着。

【第54図】 石鏃

No	遺構区	石材	破損部位	重さ (g)	大きさ (cm) 長さ	大きさ (cm) 幅	大きさ (cm) 厚さ	抉り (cm) 深度	抉り (cm) 幅	先端角度	色	備考
1	B－4	黒曜石	完	0.3	1.16	1.27	0.3	0.32	1.16	70°	黒	
2	B－5	黒曜石	完	0.4	1.48	1.3	0.3	0.2	0.97	50°	乳白	
3	B－7	黒曜石	D	0.3	2.45	1.15	0.3	0.2	0.58	50°	淡乳黒	透明度高い。
4	B－5	黒曜石	完	0.6	1.85	1.61	0.35	0.58	0.53	50°	淡黒	ガラス成分の結成が良く微かに透けて見える。
5	B－5	黒曜石	完	1.0	2.42	1.55	0.25	0.52	0.67	40°	黒	丁寧な作り。刃こぼれなし。

No	遺構区	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(cm)			抉り(cm)		先端角度	色	備考
					長さ	幅	厚さ	深度	幅			
6	6 G	チャート	完	0.7	2.3	1.37	0.3	0.35	0.5	55°	黒	
7	C－6	黒曜石	完	1.2	2.58	1.87	0.29	0.49	1.39	50°	淡 黒	刃こぼれなし。
8	C－6	チャート	完	0.7	2.39	1.36	0.33	0.2	(1.04)	50°	黒	基部を少し欠く。
9	C－7	黒曜石	D	0.7	1.6	1.69	0.38	0.5	1.08	〈40°〉	黒	余り質が良くない。
10	C－7	黒曜石	C	1.0	2.68	1.87	0.3	0.5	(1.39)	45°	乳 黒	刃が極端に深くえぐられている。
11	C－7	チャート	完	1.9	2.53	2.12	0.52	0.6	1.26	65°	淡緑灰	微かに自然面作り。
12	A－5	黒曜石	B	1.2	2.15	1.89	0.46	－	－	60°	黒	不純物含む。
13	C－6	黒曜石	A	0.8	1.67	1.73	0.31	0.37	1.02	〈25°〉	黒	切先を欠く。
14	一 括	黒曜石	C	0.7	1.88	1.28	0.38	－	－	－	淡 黒	透明度高い。
15	C－6	?	B	1.8	1.75	2.18	0.43	－	－	70°	淡乳灰	黒の縞有り。
16	B－6	チャート	完	1.8	2.65	1.6	0.52	0.28	0.88	50°	淡乳灰	黒の縞（縞の滲み有り）
17	A－7	チャート	A	1.7	2.20	1.80	0.49	0.2	1.43	〈25°〉	淡乳灰	

【第55図】 磨製石斧

No	出土区	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	残存	備考
1	C－5	磨製石斧	頁岩	12.16	6.0	2.5	237.5	1	
2	A・B－7	磨製石斧	頁岩	9.5	5.2	1.99	148.0	1	
3	C－7	磨製石斧	砂岩	15.0	6.4	3.9	492.5	7	敲打痕を明瞭に残す部分と丁寧な研磨を行った部分が分かる。装柄痕と思われる部分が僅かに見られる。
4	C－6	磨製石斧	頁岩	9.2	5.3	2.66	161.7	3	
5	B－6	磨製石斧	頁岩	8.85	4.2	1.8	76.2	7	磨製石斧と思われるが、かなりひどく破砕されており、欠けたものをさらに加工していたものかもしれない。表面には擦痕が残る。
6	一括	磨製石斧	蛇紋岩	3.3	4.3	0.73	8.7	5	やや片刃気味か。破片のため全体は不明。

【第56図】 打製石斧（1）

No	出土区	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	最大幅位置	残存	反り	備考
1	C－6	砂岩	9.8	3.9	1.15	58.5	中央	1	3	
2	一括	砂岩	10.1	4.5	1.58	91.2	先端	1	3	
3	B－6	砂岩	11.7	5.2	2.0	137.7	中央	1	1	天地不明。ただ、図化したように下部の方がより磨耗が強い様である。
4	A－9	砂岩	11.5	4.9	1.18	81.7	中央	1	2	天地不明。多分、擦痕のある方が刃部かと思われる。
5	C－6	砂岩	12.3	5.0	1.26	93.0	中央	1	2	偏平に剝離した石片を簡単に調整したもの装柄部と思われる部分が少々エグレている。
6	A・B－7	砂岩	12.3	4.7	1.08	79.5	先中	1	2	天地不明。
7	C－6	凝灰岩	11.6	5.1	1.68	125.0	先端	1	1	
8	A－5	砂岩	11.8	5.2	1.19	89.0	先端	1	2	

【第57図】　打製石斧（2）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	C－7	砂　岩	11.6	4.9	1.36	89.0	中　央	1	3	
2	A・B－7	粘板岩	9.35	4.08	1.27	60.0	先　端	1	1	
3	B－7	粘板岩？	11.9	4.59	1.79	139.5	中　央	1	3	
4	C－7	砂　岩	11.9	4.3	1.72	111.3	先　中	1	2	作りが丁寧で、良く遺存している。刃部の使用痕もかなり残る。装柄部は明確でない。
5	C－6	砂　岩	10.0	4.1	1.59	65.2	先　中	1	2	
6	一括	砂　岩	10.9	4.4	1.14	63.5	先　中	1	1	
7	一括	砂　岩	11.2	4.5	1.17	74.0	中　央	1	1	
8	A－9	粘板岩？	10.2	4.4	1.18	66.0	先　中	1	1	

【第58図】　打製石斧（3）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	一　括	砂　岩	12.2	5.5	2.1	128.2	先　中	1	1	かなり使用されていたらしく、刃部の磨耗が激しい。又、紐づれした痕も表面に僅かに残る。
2	A－6	砂　岩	10.9	5.6	1.88	122.8	先　端	1	1	片面に自然面。刃部に軽い使用痕。
3	C－6	砂　岩	10.4	5.3	1.75	100.5	先　端	3	1	
4	一　括	砂　岩	9.3	5.4	1.55	102.3	先　中	3	2	非常に丁寧な作りで、片面に自然面使用痕有り。
5	C　S	砂　岩	8.3	4.7	2.14	103.5	中　央	8	2	
6	A・B－7	砂　岩	7.6	4.7	1.57	77.3	基　中	8	1	
7	A・B－7	砂　岩	13.3	5.6	1.89	150.4	先　中	2	1	上下不明。側面に少し潰れた後有り。
8	C－6・7	砂　岩	11.9	5.6	1.51	122.8	先　端	3	1	

【第59図】　打製石斧（4）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	A－4	砂　岩？	6.2	3.79	1.25	38.0	基　中	8	3	
2	B－6	粘板岩	6.9	6.5	1.41	57.5	基　部	9	2	
3	B－8	砂　岩	6.6	4.5	1.55	52.2	中　央	8	2	器面に少々煤が付着。火を受けたか。？
4	B－8	砂　岩	5.0	5.6	1.2	46.0	中　央	9	1	
5	A－8	砂　岩	8.5	5.5	1.43	67.7	基　中	8	2	装柄痕らしきもの少々あり。
6	C－7	砂　岩	8.1	5.5	2.03	117.5	先　端	4	1	
7	6	砂　岩	10.5	5.6	1.84	146.0	先　中	7	1	刃部欠ける。
8	B－8	砂　岩	12.1	6.6	2.0	180.7	先　中	7	1	かなり大きな粒子含む。大型の物の一部。
9	B－4	砂　岩	9.9	6.17	1.48	104.0	基　部	7	3	

【第60図】　打製石斧（5）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	A－8	砂　岩	9.7	5.5	1.3	90.0	中　央	3	2	片面に自然面残す。使用によると思われる磨耗残る。基部の装柄部分で折れたか。？
2	C－6	砂　岩	8.9	5.0	1.6	66.5	先　中	4	2	打製石斧の刃部とは思われるが、もしかすると石包丁の可能性もある。
3	C－6	砂　岩	8.4	6.1	2.24	124.7	先　端	4	1	
4	B－5	砂　岩	9.9	7.6	2.8	203.0	先　端	4	1	
5	B－8	砂　岩	16.9	7.32	2.64	321.0	先　端	1	1	側面に潰れたような跡がある。しかし、刃部はさほど使用している様には見えない。
6	C－7	砂　岩	12.9	4.6	2.31	160.8	中　央	7	2	天地不明。側面に稜の潰した所がある為、使用による破損があり、捨てたものか。？
7	A・B－7	砂　岩？	8.9	4.3	2.18	86.3	中　央	7	3	かなり風化している。
8	一　括	砂　岩	9.1	5.0	2.04	107.5	先　中	10	1	装柄部が少し認められる。

【第61図】　打製石斧（6）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	B－6	砂　岩	8.3	6.5	1.5	107.5	先　中	4	1	
2	C－7	砂　岩	10.0	6.0	1.07	57.5	先　中	4	1	
3	C－6	砂　岩	8.0	6.1	1.7	103.3	先　端	4	1	
4	C－6	砂　岩	8.4	7.2	2.32	170.6	先　中	4	2	
5	小園地区 第2トレ	砂　岩	9.6	7.2	1.78	130.6	先　端	4	2	刃部はよく使用されている様で、磨耗している。
6	8	砂　岩	8.6	5.8	1.68	110.8	先　中	4	2	
7	C－6	砂　岩	12.2	8.0	1.61	198.0	先　端	1	1	
8	C－6	砂　岩	10.2	5.8	1.67	130.0	先　中	3	2	

【第62図】　打製石斧（7）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	B－6	砂　岩	4.4	5.7	2.08	58.5	基　中	9	1	
2	B－6	砂　岩	7.6	6.1	2.2	100.8	先　端	4	1	磨耗痕あり。
3	B－8	砂　岩	4.8	6.1	1.72	66.5	先　端	5	1	刃部全体かなり磨耗している。
4	C－6	粘板岩	8.5	4.6	1.56	87.4	基　部	7	3	
5	B－5	頁　岩	10.7	6.3	2.4	191.0	先　端	12	2	
6	A・B－7	砂　岩	10.6	5.4	1.75	129.8	先　端	1	2	
7	一　括	砂　岩	9.8	6.0	2.25	148.4	中　央	8	2	
8	B－8	砂　岩	12.0	6.1	1.99	192.0	先　中	6	1	刃部が少々欠ける。使用によるものか。？
9	一　括	砂　岩	12.3	6.4	1.83	164.5	先　端	1	1	片面に自然面残す。使用によるものと思われる磨耗が見られる。

【第63図】　打製石斧（8）

No	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	C－6	片　岩	7.6	5.0	1.12	58.5	先　中	10	1	
2	B－8	砂　岩	6.6	4.7	1.0	46.6	中　央	8	1	
3	C－5	砂　岩	5.5	4.7	1.05	38.5	中　央	8	1	
4	B－8	砂　岩	5.3	4.8	1.52	43.3	基　中	8	2	
5	C－6	砂　岩	7.6	5.0	1.16	58.7	中　央	10	1	作りは丁寧である。
6	B－5	砂　岩	6.3	5.0	1.37	57.3	先　中	8	1	装着の後はない。
7	A－7	砂　岩	12.9	7.8	1.72	170.0	基　中	6	2	刃部が斜めに欠ける。くびれ部に装柄痕がある。
8	C－6	砂　岩	11.5	7.2	2.18	176.0	中　央	11	2	エグリ部は装柄のためか。かなり敲打されている。刃部の使用痕については余り認められず。
9	C－6	砂　岩	7.7	5.6	1.4	68.0	中　央	8	2	柄を付ける部分を作り出す。
10	B－6	砂　岩	7.7	4.5	1.28	55.3	中　央	8	1	もしかすると十字形石器の可能性もある。柄の装着部と思われる所はよく潰している。

【第64図】　打製石斧（9）

No	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	C－5・6	粘板岩	6.7	4.0	1.05	26.7	基　部	8	1	打製石斧のエグリにしては少々長い。十字形石器の一部か。
2	6	粘板岩	6.3	4.2	1.14	44.0	中　央	8	1	弱干の潰れがある。
3	A－3	凝灰岩	8.8	5.92	2.3	133.3	先　端	3	2	かなり大きい緑色の結晶含む。
4	B－6	砂　岩	7.0	5.1	1.68	72.7	基　中	8	2	
5	B－5	粘板岩	9.5	5.8	1.37	82.3	先　中	6	1	頭部はやや欠ける。
6	A－9	砂　岩	10.2	6.3	2.19	166.7	先　中	10	1	
7	A－4	砂　岩	9.2	7.4	1.05	84.1	基　中	3	2	頸部は欠ける。
8	C－5・6	安山岩	12.3	7.2	1.33	132.5	中　央	7	2	

【第65図】　打製石斧（10）

No	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	C－7	砂　岩	12.1	6.9	1.07	94.0	先　中	7	2	偏平でエグリがある。
2	A－4	砂　岩	13.6	7.0	1.83	187.8	先　中	2	1	装着用のエグリを作る。刃部に使用によると思われる磨耗が見られる。
3	8－E	砂　岩	12.4	6.9	1.68	168.3	中　央	3	2	明確に使用痕となるものがない。刃頂部が僅かに破損している。
4	6	砂　岩	10.4	6.33	1.73	158.0	先　中	10	1	
5	A－4	砂　岩	10.2	5.82	1.42	107.0	先　端	?	2	使用痕は見られず。
6	B－5	砂　岩	10.2	8.2	1.98	191.2	先　中	5	2	使用痕余り認められず。

【第66図】　打製石斧（11）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	B－6	砂　岩	4.9	5.2	1.25	42.5	中　央	10	2	柄装着部もしくは、上下逆で頭部か。？
2	C－5	砂　岩	6.7	5.0	1.67	65.0	中　央	9	1	片面に自然面あり。作りは丁寧。
3	A－5	砂　岩	11.3	5.7	1.84	116.0	先　端	1	2	
4	C－6・7	砂　岩	9.1	4.3	1.4		中　央	9	2	
5	A・B－7	砂　岩	10.2	6.2	2.83	151.0	中　央	2	2	かなり雑。
6	B－7	砂　岩	10.6	5.5	1.72	115.7	先　中	7	2	かなり加工する。
7	A・B－7	片麻岩？	8.7	5.6	2.21	101.8	中　央	8	2	
8	A・B－7	砂　岩	10.0	6.2	1.81	124.2	先　中	7	3	側面に潰れあり。側面やや湾曲。
9	A－6	砂　岩	10.3	7.63	2.85	289.3	先　中	10	1	

【第67図】　打製石斧（12）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	B－6	粘板岩	11.1	4.5	0.85	45.5	先　端	1	1	かなり薄手であるが、少しばかり使用痕が刃部に認められる。
2	B－5	粘板岩	5.2	4.5	1.0	27.5	基　中	9	1	かなり丁寧に作られている。
3	C－5・6	砂　岩	9.7	5.7	2.04	113.5	先　端	3	2	
4	C－6	砂　岩	14.7	6.5	2.1	192.8	先　端	1	2	自然を一部に残す。
5	A－9	砂　岩	17.4	7.0	2.75	323.2	先　端	1	2	刃部かなり使用している。磨耗している。装着のためのエグリはなさそうである。きちんと作成している。
6	A・B－7	砂　岩	12.2	6.9	1.7	149.5	先　端	6	2	片面に自然面あり。
7	一括	砂　岩	10.8	6.5	1.25	97.3	中　央	7	1	場合によっては、石包丁の可能性もある。その時は、側面図を示した方が刃部か。？

【第68図】　打製石斧（13）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	B－5	砂　岩	11.3	8.1	2.16	194.0	先　中	1	1	刃部と思われる方は、余り刃溢れしていない。部分によっては、刃がすでに欠けてしまったものか。？
2	C－5・6	砂　岩	10.5	6.7	1.3	101.6	先　中	1	2	縁部の調整は丁寧。
3	A－6	砂　岩	10.3	6.5	1.41	105.5	先　中	1	2	
4	C－7	砂　岩	9.3	5.0	2.85	131.0	中　央	8	2	装着柄部と思われる潰れがある。刃部の方は、かなり大きくなる様である。
5	6	砂　岩	10.0	7.4	2.11	149.8	先　端	4	1	片面に自然面残す。
6	8	砂　岩	11.7	6.3	2.09	147.3	先　中	6	2	使用痕は明確でない。
7	8	粘板岩	9.8	7.2	1.12	92.5	先　端	4	1	刃部に弱干の磨耗が認められる。
8	C－7	砂　岩	5.7	5.4	1.8	77.0	中　央	9	1	

【第69図】　打製石斧（14）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	B－6	砂　岩	17.5	9.7	2.34	446.2	中　央	8	2	バチ形になるものと思われる。
2	B－5	砂　岩	9.05	9.25	3.25	349.6	中　央	10	2	
3	A・B－7	砂　岩	16.3	9.49	3.11	479.7	先　中	1	1	

【第70図】　打製石斧（15）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	A－4	砂　岩	11.7	9.9	4.18	450.2	先　端	5	1	
2	B－7	チャート？	9.6	11.3	2.81	341.8	先　端	5	1	かなり大形の石斧片である。片方にかなり使用痕残る。
3	A・B－7	砂　岩	15.6	10.6	2.61	532.3	先　端	4	2	

【第71図】　打製石斧（16）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	最大幅位置	残存	反り	備　　考
1	A・B－7	ハンレイ岩？	10.9	4.94	1.22	83.5	中　央	7	3	
2	C－6	砂　岩	7.6	8.2	1.95	141.6	先　中	4	1	
3	B－6	砂　岩	7.3	5.8	2.36	65.2	先　端	4？	1	刃部かどうかも不明。
4	B－6	砂　岩	5.5	7.3	2.47	91.3	先　中	4？	1	
5	C－5	砂　岩	6.4	8.5	1.85	94.7	先　端	5	1	
6	C－7	砂　岩	7.2	6.4	1.52	80.6	先　中	10	1	
7	B－4	砂　岩	6.2	7.8	1.5	86.2	先　端	10	1	
8	A－5	砂　岩	6.0	8.0	1.5	73.5	先　端	5	3	
9	B－6	砂　岩	9.5	7.15	1.79	132.5	先　中	10	2	装柄部痕と思われる部分あり。

【第72図】　磨石（1）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	残存	備　　考
1	B－6	楕　円	砂　岩	12.3	9.0	4.7	879.3	完	表裏面ともよく使用され、磨研による平坦部が形成される。側面にも多少の敲打痕と使用痕がある。
2	C－5・6	円	細粒砂岩	6.7	10.8	5.38	578.7	1／2位	非常によく使用される。側面に敲打痕あり。余りよく分からない。側面の僅かを除き、ほぼ全面的に磨研される。
3	B－7	円	黒雲母角閃石ヒン岩（市房山産）	10.3	9.3	4.18	645.5	完	表面は風化が著しく、撫でるだけで砂粒となって落ちる。塙打痕は確認できない。

【第73図】　磨石（2）

No.	出土区	器　形	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	C－7	円	砂　岩	2.5	2.2	2.0	37.6	完	敲打痕あり。
2	A・B－6	楕　円	砂　岩	4.4	2.7	2.4	37.6	完	自然礫をそのまま利用したとは言い難いが、部分的に磨耗した所がある。
3	C－7	円	砂　岩	3.7	3.5	3.5	57.3	完	局部的に利用。やや平坦になる部分がある。
4	B－6	円	砂　岩	5.1	4.0	2.6	64.3	完	自然礫を使用。又、敲打痕も僅かにあり、敲石としても利用か。？
5	B－5	円	砂　岩	6.0	5.6	4.4	211.3	完	かなり使用により磨耗している。
6	C－5	楕　円	砂　岩	7.0	5.4	3.58	198.0	完	かなり使用され、平坦面が形成される。一部、火を受けたような跡がある。
7	C－6	円	砂　岩	6.7	5.9	4.4	235.7	完	あまり使用されてはいない様であるが、局部的に磨耗している。
8	C－7	円	砂　岩	8.3	6.6	3.98	317.0	完	数カ所が局部的に磨耗している。
9	A－7	円	砂　岩	7.0	7.0	4.5	285.2	完	明らかに磨痕があり、典型的な磨石である。敲打によると思われないヒビがあり、火を受けているかもしれない。

【第74図】　磨石（3）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	A・B－7	長楕円	砂　岩	6.1	11.3	6.3	583.7	2/3位	かなり使用の後が見られる。破損は打撃が横方向から加わったことによる。
2	B－5	楕　円	砂　岩	12.7	7.1	6.1	654.5	1/2位	破損しているが、磨石片と思われる。
3	A－5	楕　円	砂　岩	9.8	8.4	4.7	536.7	2/3位	薄く使用痕が残り、敲打痕も部分的に見られる。又、破損はその敲打によるものであろう。
4	B－5	円	砂　岩	7.8	7.4	3.65	237.6	完	礫石の破片を磨石として利用。軽く使用され、剝離面も磨耗している。
5	B－6	円	砂　岩	11.3	9.2	7.7	1135.2	完	自然礫をそのまま使用している。裏面に打痕らしきものがあるが、はっきりしない。

【第75図】　磨石（4）

No.	出土区	器　形	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	B－5	円	砂　岩	10.5	8.8	4.08	553.5	完	凸面側はよく使用されており、つるつるしている。又、一側面に敲打の跡がある。
2	B－6	四　角	砂　岩	9.1	8.6	4.4	515.5	完	はっきりとした磨痕はないが、片面に少し磨痕らしきものが見られる。火を受けたか、少なからずヒビが入る。
3	C－7	楕　円	砂　岩？	9.4	7.1	3.8	562.5	完	片面はかなり使用されているが、裏面は余り使用されていない様である。
4	B－5	円	砂　岩	9.9	8.2	4.6	527.5	完	局部的によく使用されている。
5	A－4	円	砂　岩	10.2	10.2	5.1	792.5	完	かなりの磨研痕あり。

【第76図】　磨石（5）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	S－2	円　形	砂　岩	9.7	8.7	3.9	463.0	側部には、ずっと敲打痕が残る。一面に少し、敲打痕あり。又、磨研も全面に有り。 表面は本来の自然の凹凸に加えて、敲打のによる凹が
2	C－6	円　形	砂　岩	11.8	9.4	4.88	597.7	有り、まるでアバタの様になる。かなりの敲打が行われたのであろう。一応、表面は火にあったような痕跡も有り、磨石としての利用もあったようである。
3	C－8	楕　円	砂　岩	16.	3 11.2	5.5	1482.0	磨痕もあるにはあるが、より以上に敲打痕があるので、敲石とした方がよいかもしれない。

【第77図】 磨石（6）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	残存	備　　考
1	A・B－9	円	砂　岩	9.7	8.4	4.8	590.4	完	かなり使用されたらしく、磨耗した使用痕が明瞭に残る。敲打などは見られない。
2	C－7	円	砂　岩	7.3	9.4	4.9	432.4	1／2位	敲打中に破損か？。使用による磨耗痕が残る。
3	A・B－7	円	角閃石・リュウモン岩	12.6	10.3	5.18	1080.7	(接合で)完	非常によく磨耗痕が残る。2片に割れて出土。

【第78図】 石匙

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	C－6	横　型	頁　岩	3.37	7.12	1.31	23.4	完	刃部、両面剝離による。
2	D－7	横　型	チャート	2.65	3.42	6.74	4.5	完	薄い小振りの剝片の上部に両側よりノッチを入れ下部を両面から剝離して仕上げる。かなり雑な作り。
3	B－6	縦　型	サヌカイト	6.5	2.82	0.82	33.4	完	
4	C－7	菱　型	赤　色 チャート	5.63	4.49	0.93	18.4	完	色調、赤褐色。
5	C－7	縦　型	？	7.78	5.63	1.13	38.6		

【第79図】 石錐

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	C－6	チャート？	2.74	2.33	0.74	3.4	
2	A－6	硅質粘板岩	3.71	2.77	0.62	7.0	頭部に調整痕有り。下部はエグリが有り、やや磨耗する。
3	C－7	チャート	4.88	2.8	1.23	14.1	頂部を使用している様である。
4	B－6	チャート	4.26	2.3	0.88	7.2	頂部が僅かに欠損し、使用しているか。？
5	A・B－7	サヌカイト	4.83	3.04	0.81	10.5	ほぼ、両面に調整と思われる痕跡がある。
6	B－6	チャート	4.34	1.89	0.81	6.3	調整痕ある剝片。

【第80図】 石核（1）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	第2トレ	凝灰岩	2.59	2.89	1.32	9.8	
2	B－5	黒曜石	2.75	3.16	1.91	11.0	小片
3	A・B－10	黒曜石	1.47	4.67	0.81	6.3	小石材より2片ほどの剝離片をとっている。
4	B－7	黒曜石	3.22	3.13	1.67	18.7	気泡をかなり含み、自然面が多い。
5	B－5	黒曜石	2.88	4.71	1.45	16.8	気泡をかなり含み、自然面が多い。
6	B－6	チャート	3.63	4.71	1.92	38.9	主要剝離面を中心に各方向から剝ぎ取っている。

【第81図】 石核（2）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	C－7	チャート	5.8	5.6	4.12	176.5	各面から打撃を加え、剝片を剝ぎ取るもの。打撃方向は一定方向ではない。
2	一　括	チャート	7.4	8.4	2.75	196.4	主要剝離を取り、その片面を中心に各方向から剝ぎ取る。主に凸面から剝いでいる。
3	一　括	チャート	9.3	5.8	2.8	130.5	

【第82図】　石核（3）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	C－7	チャート	6.8	4.8	3.27	94.8	
2	一　括	チャート	10.4	7.2	5.27	379.0	自然面を多く残し、それほどの剝ぎ取りはされていないようである。
3	一　括	チャート	7.5	5.3	4.02	152.6	片面は自然面を残す。余り剝ぎ取っていないようである。

【第83図】　加工痕のある剝片

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	A－5	黒曜石	2.03	1.4	0.39	1.4	石鏃の未製品の可能性もある。
2	C－5	黒曜石	1.79	2.07	0.5	1.8	
3	C－6	チャート	2.96	1.78	0.52	2.2	両面から丁寧な剝離がある。石鏃の製作途中のものか。
4	C－7	黒曜石	2.35	1.63	0.35	1.5	石鏃の未製品か。？
5	B－5	黒曜石	2.65	1.7	0.6		
6	A－4	黒曜石	2.28	2.5	0.64	4.1	
7	C－7	黒曜石	2.4	1.09	0.66	1.5	
8	A・B－7	黒曜石	2.35	3.28	1.07	5.5	
9	B－8	黒曜石	4.3	2.29	1.09	10.5	気泡を多く含む石材使用。側面を大ざっぱに打調整し、刃部を片面から微調整。
10	C－6	チャート	3.08	2.53	0.89	7.0	細かい加工痕があり、刃部としたものか。？

【第84図】　使用痕のある剝片（1）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	A－7	チャート	3.16	4.22	1.08	14.9	
2	一　括	チャート	2.79	4.13	1.12	13.5	
3	B－7	チャート	3.07	3.97	1.13	9.8	二次加工のある剝片。
4	A－4	凝灰岩	3.11	4.26	1.55	14.3	
5	C－7	チャート	3.44	4.32	0.97	16.8	うまく剝いだ剝片を利用している。
6	C－7		6.7	3.6	0.88	14.1	
7	B－5	チャート	4.83	4.2	1.24	24.8	二次加工のある剝片。
8	B－6	チャート	6.9	9.4	2.34	117.5	簡単な調整をし、削器として利用。

【第85図】　使用痕のある剝片（2）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	一　括	黒曜石	3.2	1.54	0.8	3.2	
2	C－7	凝灰岩	2.96	1.96	0.36	2.2	
3	A－6	チャート	2.69	2.82	0.62	3.4	
4	C－6・7	乳白色の黒曜石	2.72	1.8	0.45	2.2	剝片を加工も加えずに使用している様である。
5	B－6	？	3.2	3.07	1.15	10.0	
6	A・B・C－5	チャート	3.2	2.44	1.0	6.0	

【第86図】　使用痕のある剝片（3）

No	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	B－5	チャート	3.46	4.89	0.96	10.7	使用によると思われる刃コボレが鋭利な部分にある。
2	A－4	チャート	4.0	4.12	0.84	13.4	器形は、石匙に似る。
3	C－7	チャート	4.36	3.2	0.7	9.7	調整ある剝片。
4	C－6	チャート	3.72	4.25	1.07	10.0	
5	C－6	チャート	4.01	5.68	1.19	16.3	使用痕・調整痕のある剝片。
6	C－7	チャート	5.03	3.11	1.25	18.9	調整痕のある剝片。
7	SB－1	頁　岩	5.49	5.2	2.05	50.7	
8	A・B－7	チャート	6.27	4.0	1.05	26.6	ほとんど全ての鋭角部を刃としている様である。
9	A－4	チャート	8.2	8.8	2.8	165.2	剝片をそのまま利用か。？

【第87図】　使用痕のある剝片（4）

No	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	A・B－6	黒曜石	1.66	1.96	0.5	1.4	
2	B－5	黒曜石	1.8	2.7	0.59	2.5	
3	C－7	黒曜石	2.7	2.73	0.4	2.8	
4	一　括	黒曜石	2.45	1.61	0.4	1.3	
5	C－6・7	黒曜石	2.88	2.57	1.2	7.1	
6	C－6	チャート	3.61	2.55	0.72	6.5	鋭利な部分が刃部として使用されたものか。刃コボレを起こしている。
7	C－7	黒曜石	3.26	2.31	0.6	4.0	
8	A－9	黒曜石	3.74	2.58	0.97	7.5	チョボチョボの多く入っている石材。打ち剝いだ石片を使用。
9	B－7	チャート	3.75	2.55	0.69	4.9	薄い剝片の側片を利用。刃コボレがある。
10	一　括	黒曜石	3.91	1.89	1.05	5.8	調整痕のある剝片。

【第88図】　敲石（1）

No	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	一　括	円	粘板岩	6.7	6.9	1.83	101.0	側部に敲打痕が見られる。また、石錘に形は似るが、敲石と見とみる。
2	A－8	楕円（小）	砂　岩	6.7	3.1	1.7	53.5	表面は丁寧に磨研されている。それぞれ頂部が敲打部分として作業に使用されたようである。
3	一　括	円（小）	砂　岩	5.0	5.7	2.58	100.3	表面には磨研された跡もあるが、大きいのは敲打痕の方である。
4	一　括	円（小）	砂　岩	5.8	6.4	2.6	129.8	表面はかなり滑らかで、磨石としての利用もあるようである。敲打のあとから叩き石のような利用がされたと思われる。
5	A・B－7	長楕円	砂　岩	13.4	5.6	4.85	515.1	側面の2ケ所は磨痕がある。底部に敲打の跡がある。
6	C－5・6	円	砂　岩	12.6	9.4	4.68	787.7	一面がよく使用され磨かれる。下部に敲打の跡。

【第89図】　敲石（2）

No	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1		円	砂　岩	10.2	8.9	3.8	525.8	
2	B－6	円	砂　岩	11.5	10.5	2.3	478.0	片面に弱いながらも磨痕が残る。また、敲打等による痕跡がある。側面に弱い打痕あり。
3	B－5	円	砂　岩	14.2	11.8	5.0	1163.0	敲打痕は部分的にあり、特に下部は特に多い。1号集石中出土。

【第90図】　敲石（3）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	B－5	円	輝緑凝灰岩	7.3	6.7	2.86	228.4	一応、石錘らしい形を呈するが、側部には、鋭角になったものを叩いた様な跡がほぼ、全周に渡って見られる。右側の方では、磨耗して平らになる。磨石的利用と叩き石的利用がなされたようである。
2	G－6	円	輝緑凝灰岩	7.7	7.4	2.38	209.2	石錘というよりも側面にかなりの敲打痕が見られ、叩き石等として利用されていたのではないか。？
3	B－6	円	砂　岩	5.3	4.5	2.28	68.7	敲打痕が数ケ所に入る。石器等の調整などに使用されたか。？
4	C－7	楕　円	砂　岩	10.5	5.0	6.9	479.6	かなり研磨された後に破砕されている。敲打によって、打ち割ったものの様である。
5	B－6	楕　円	砂　岩	16.9	12.2	7.04	1796.8	いくつもの箇所に敲打痕が見られ、かなり使用されている様である。又、敲打によって剝離している部分もある。この石材と同程度か、さらに硬度のものに対する工作具であろうか。？

【第91図】　敲石（4）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	A－5	長楕円	砂　岩	9.8	3.6	2.25	130.9	2/3 位	余り磨痕は見られない。破損したのちに火を受けたか、かなり煤が付着している。
2	B－8	長楕円	砂　岩	11.2	4.1	2.38	166.2	完	自然の礫であるが、磨石として用されている。部分的に磨痕が見られる。
3	B－5	長楕円	砂　岩	10.4	3.9	3.36	217.0	2/3 位	破損が何によるか不明。火を受けた様な痕跡がある。部分的に磨研されている。
4	A－8	長楕円	砂　岩	14.4	6.0	3.65	442.5	完	自然石をそのまま磨石として利用か。片面がかなり使用されている。
5	B－7	長楕円	砂　岩	13.4	4.4	3.54	289.1	完	敲打によると思われる強い痕跡が下部に見られる。また、部分的に上方にも敲打痕がある。
6	A・B－7	長楕円	砂　岩	16.1	4.9	4.16	425.7	完	磨痕も残るが、一方で敲打による破損も大きい。
7	A・B－7	長楕円	流斑岩	12.2	5.0	2.88	312.0	完	頂部及び側部に敲打痕あり。

【第92図】　敲石（5）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	残存	備　　考
1	B－8	敲　石	砂　岩	16.7	7.5	3.45	593.5	完	側面は、ほとんどが敲打のために使用されており、破損の特に著しい部分もある。一側面だけは磨研のために使用されたのか、ツルツルしている。
2	C－6	敲　石	砂　岩	16.0	6.6	4.53	591.1	完	十分に磨研していると見なせるのは側面部である。また、敲打も行っている。
3	A・B－7	敲　石	砂　岩	17.2	6.5	4.33	595.3	完	局部的に磨痕があり、磨石としての利用。また、下部が破損しているが、これは敲打によるものであろう。
4	A・B－8	敲　石	砂　岩	15.1	5.8	3.99	502.7	完	自然礫であるが、やや磨研されている。磨石としての使用も考えられるが、確証はない。

【第93図】　礫器（1）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	S－4	円　形	砂　岩	10.7	10.7	3.9	968.4	自然礫の破滓片かもしれない表面に僅かに敲打された跡がある。又、礫器としての利用も考えられる。
2	A－6	大　形	砂　岩	13.4	13.4	3.16	919.0	大形の礫から剝片を剝いで、その側片を敲打のために、もしくは礫器として利用。
3	B－6	半　円	砂　岩	14.5	14.5	5.7	1511.2	両面とも磨痕があるが、破損している部分の陵部分には敲打によると思われる刃溢れ有り。側面に敲打痕。

【第94図】　礫器（2）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	A・B－7	長楕円	砂　岩	8.6	4.7	3.5	166.3	側面部は磨石として使用。又、敲石としても使用。
2	B－5	長　形	砂　岩	14.5	8.8	2.79	424.1	大きい礫から剝いだ剝片を少し打ち欠き、それを敲石様のものとして利用したか。？
3	B－5	不　定	砂　岩	11.0	10.6	4.82	583.0	
4	B－6		砂　岩	10.8	11.9	2.4	453.4	側部及び下部にかなりの使用痕あり、自然面の残る方はかなり磨耗している様である。大形打製石斧の刃部か？
5	B－6	四　角	砂　岩	12.6	12.1	4.1	813.5	大形の剝片の側部に敲打を行った跡がある。一片のみである。他はもとのままの剝離痕。

【第95図】　礫器（3）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	C－7	不　定	砂　岩	5.7	5.7	1.21	36.3	石斧かどうかは不明。
2	B－6	不　定	砂　岩	5.4	5.6	1.75	44.5	上下・左右ともに不明。又、打製石斧かどうかも不明。側片に使用痕かと思われる陵線の潰れた部分有り。
3	C－5・6	楕　円	砂　岩	12.6	7.0	2.03	209.5	刃部に使用痕と思われる磨耗あり。余り加工してはなくはたして石斧かどうかよく分からない。
4	A－6	不　定	砂　岩	7.5	8.7	2.75	175.0	片面に自然面有り。
5	C－7	不　定	砂　岩	9.3	8.3	2.3	166.6	少しばかり磨耗しているようである。
6	A－8	不　定	砂　岩	8.5	10.5	2.95	310.7	

【第96図】　礫器（4）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	B－8	不　定	砂　岩	10.5	11.6	2.15	386.0	打製石斧の刃部であると思われる。かなり大形のものか？刃の部分にはかなりの回数の打撃により磨耗している
2	B－6	不　定	砂　岩	13.8	10.82	2.82	568.0	石鍬。
3	B－6	大　形	砂　岩	15.2	12.3	3.27	877.0	表面に敲打痕があるが、より大きいものと小さいものに分けられる。

【第97図】　礫器（5）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	C－7		片　岩？ 火成岩？	9.1	10.2	2.66	276.0	かなり風化が進み、剝離痕が曖昧である。
2	C－6		粘板岩	9.3	9.1	1.33	135.3	各方面からの剝離によって円盤状になっている。成器なのか、調整途中か不明。？
3	B－6	角	砂　岩	10.0	10.8	3.68	488.5	礫塊より剝ぎ取った礫片からさらに剝離を行っている。もしかすると打製石斧の本製品か。？
4	C－7		砂　岩	9.5	11.2	2.66	409.3	薄く剝いだ一枚の剝片を打ち欠いた後、鋭角部を敲打のために使用。

【第98図】　石錘（1）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	C－7	安山岩	3.7	3.6	0.85	15.5	完	
2	B－5	砂　岩	4.8	4.4	1.01	29.6	完	
3	C－6	粘板岩	5.6	4.6	0.76	24.4	完	板状剝離をする石板。エグリと思われる部分が数ケ所にある。ただ、重さがやや軽いようである。
4	C－7	輝緑凝灰岩	7.8	5.6	1.97	132.7	完	自然の偏平な礫の側面に打撃を加えて紐かけにしたものか。？
5	一　括	砂　岩	7.7	6.2	1.64	102.6	完	余り加工してはいないようであるが、弱いエグリがあり、紐かけにしたものか。？
6	B－6	砂　岩	9.1	8.0	1.34	105.3	完	かなり風化しており、またかなり粗な石材のため、石錘かどうか不明である。
7	C－7	砂　岩	7.2	6.5	2.24	132.5	完	自然な偏平礫の側面にエグリを入れ、紐かけとする頭部の打痕は、側部よりも古い。
8	C－6	頁　岩	9.3	6.9	1.26	124.4	完	偏平な石の側部にエグリを敲打によって入れている。表面は敲打中に剝離した様である。
9	C－5	粘板岩	8.3	6.1	2.52	146.4	完	かなり打痕が大きいが、側部・頂部にそれぞれエグリと見られる部分があり、石錘かと思われる。

【第99図】　石錘（2）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	C－6	砂　岩	7.4	6.7	1.61	126.3	完	自然の偏平な小石に簡単に側片に敲打でエグリを作り、ひっかけとしている。他に加工はない。
2	B－5	砂　岩	7.7	9.0	2.24	221.7	完	ハート形の自然石の下部を打ち欠いただけのもの。他に加工痕はない。
3	C－5・6	砂　岩	8.7	9.1	1.63	204.5	完	敲打して器形を作っているが、その他、自然面の部分にも弱い打痕が見られ、石垂としてだけでなく、他の用途にも利用されたか。？
4	A－4	頁　岩？ 粘板岩	11.9	7.6	1.72	216.7	完	一側面にはエグリがあるが、もう一方にはそれらしいものは余りない。若干それらしいものはある。
5	C－7	粘板岩	10.5	7.1	2.0	201.8	完	偏平な礫を磨研用に使用か。？又、部分的には敲打も行っている。その打痕が僅かに残る。
6	B－8	砂　岩	9.0	7.1	2.0	149.8	完	両面とも磨研されている。普通の剝片を利用している。

【第100図】　石皿（1）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	C－7	砂　岩	19.7	8.5	6.5	1625.5	両面とも使用されている様である。若干、正面が使用回数が多いか。？
2		砂　岩	20.8	11.7	7.6	2255.5	片面だけをよく使用しており、表面が滑らかになっている。火を受けているらしく、表面が薄く赤変している。かなり粒子が粗く、表面の凹凸が激しい中には泥岩質の小礫も混じる。

【第101図】　石皿（2）

No.	出土区	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	A－7	砂　岩	8.6	7.5	2.4	214.2	自然の偏平な石の一面に筋条のへこみが形成されるほど磨研が行われる。一応砥石にしたが、必ずしもそれだけでなく磨石としても利用されている様である。
2	B－5	砂　岩	8.0	9.9	1.6	160.0	全体が砂砕後に火を受けている様で、赤く変色している。 表面に磨研の後がある。
3	AB－7	砂　岩	19.7	9.2	3.7	1002.5	かなりの使用痕が見られる。使用痕は分からないが、両手でもって台石か石皿の上で何かを擦るものか、もっと小形の磨石で、この上に物を乗せてするもののどちらかであろう。又、極部的に残る破損痕はよく分からない。
4	B－8	砂　岩	18.0	9.7	3.1	804.8	側面も使用している様である。

【第102図】　石皿・砥石・台石・不明石器

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	B－6	石　皿	砂　岩	29.9	16.0	15.1	8.32	石皿の破片であり、図化した平面に磨研された跡が残る。裏側は使用されておらず、自然石のままである。破損因については、よく分からない。破損後、火を受けた様な形跡がある。
2	B－5	不明　石器	凝灰岩					加工痕があり、大型の石斧に見える。
3	B－8	砥　石	砂　岩	21.3	9.5	7.9	1670.3	正面にしたものに4条ほどのスジがある。側面に2条、何か硬いものを研いだものと思われる。又、石皿代わりとしても使用されている様で、磨耗し、凹む所がある。
4	C－6	小皿石皿	砂　岩	15.4	9.9	7.8	1456.0	敲石としても利用か。？かなり重いので、石皿としての利用も可能であろう。

【第103図】　石皿（3）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	残存	備　　考
1	A－9	敲　石	砂　岩	15.0	6.0	4.5	630.3	完	3面のうち2面が、かなり使用されている様である。下部と上部で、やや敲打が行われている様でもある。
2	B－7	敲　石	砂　岩	15.6	6.8	4.16	613.7	完	部分的に磨研が施されている。
3	B－5	敲　石	砂　岩	15.2	6.3	5.4	722.8	不明	表面に磨研が施されている。
4	B－6	敲　石	砂　岩	12.3	8.5	4.44	814.0	不明	明確な磨研は認められないが、僅かに磨研している痕跡がある。

【第104図】　その他の石器（1）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
1	一　括	石　鏃	砂　岩	10.4	4.8	1.92	91.3	打製石斧の可能性もある。
2	A・B－7	石　鏃	砂　岩	5.3	11.4	2.13	125.7	剝片を利用し、一方の側辺を刃部として調整される。
3	C－6	石　鏃	粘板岩	8.46	3.26	0.67	23.0	エグリを入れ、柄の装着部としている。
4	一　括	加工痕のある石器	砂　岩	6.7	4.0	1.05	36.0	石斧の可能性もある。
5	一　括	石錘？	砂　岩	14.9	7.4	1.68	203.0	天地不明。中部分の左右にエグリを入れる。
6	一　括	打製石斧？	粘板岩	11.5	3.8	1.64	73.0	偏平な石の側辺にエグリを入れる。打製石斧に似るがやや異なる。

【第105図】　その他の石器（2）

No.	出土区	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	C－7	使用痕のある石器	安山岩	6.90	5.30	1.80		側辺部に使用痕がある。両平坦面に磨研された跡がみられ用途は不明確。
2	A－5	環状石斧	砂　岩	9.61	4.11	2.13	130.0	表面は丁寧な磨研。刃部は一部刃こぼれしている。
3	C－7	盤状石斧	凝灰岩	13.4	11.7	2.30	234.5	側面に赤色顔料を塗布した痕跡が見られる。表面の凹凸は加工されたものか。

【第106図】　弥生時代及び古墳時代土器

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	A－6	甕	口縁部	口：(27.8)	外：暗褐色 内：淡赤褐色～淡灰色	よく精製され、小砂粒が含まれるのみ。	丁寧なナデ。	丁寧なナデ。	口唇部：丁寧なナデ	良好	内器面：化粧土があったかも。
2	B－6	甕？	口縁部	－	赤橙色	石英・長石など多量の砂粒含む。	横ナデ	横ナデ		良好	
3	C－6	鉢	口縁部	口：(13.1)	鈍い黄褐色	白色・黒色の砂粒、石英、を多く含む。	横ナデ	横ナデ		良好	
4	A－5	甕？	口縁部	－	外：暗赤褐色 内：赤褐色	石英・白砂粒など砂粒が多い。	横ナデ。 一部ヘラ磨き。	磨研		良好	外器面：煤付着か？
5	A－5	？	口縁部	－	赤褐色	かなり大きい粒子が入る粗い。	磨研	磨研		良好	赤色顔料を塗布
6	B－5	鉢？	口縁部	－	明黄褐色	黒色の粒子、白雲母片（いずれも微細）、石英を若干量含む。	丁寧な横ナデ。	丁寧な横ナデ。 鈍い滑沢を有する部分あり。		良好	高坏の可能性あり。
7	B－6	高坏	口縁部	－	外：赤褐色～褐色 内：黄褐色	長石・石英などの砂粒含む。	丁寧な磨研。 赤色顔料塗布。	磨研。 赤色顔料塗布。		良好	
8	C－5	壺	頸部	－	外：赤褐色 内：赤褐色～黄褐色	石英・角閃石・白砂粒などの砂粒含む。	磨研。 赤色顔料塗布。	頸部より上は赤色磨研。 下部はナデ～削り		良好	
9	B－6	壺	頸部	－	外：赤褐色～黄褐色 内：黄赤褐色	長石・石英などの砂粒多く含む。	磨研。 赤色顔料塗布。	頸部より上は磨研赤色顔料塗布。 下部はヘラ削りの後、ナデ。		不良 もろい	
10	C－5・6	高坏	坏部	－	暗赤褐色	雲母・長石・石英などの砂粒含む。	磨研。 赤色顔料塗布。	磨研。 赤色顔料塗布。		良好	
11	B－6	壺？	頸部	－	外：淡黄褐色 内：淡褐色	石英・雲母など多量の砂粒含む。	ナデ？ 突帯を貼り付け、斜格子の沈線。	ナデ 不明瞭		不良	
12	A－5	壺？	頸部	－	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色 ～淡灰褐色	よく精製され、あまり砂粒を含まない。	ナデ 不明瞭 屈曲部に貼り付け突帯。 斜格子の沈線。	ナデ 不明瞭		やや不良	
13	B－6	高坏	坏部	－	赤褐色	石英・長石・角閃石などの砂粒多く含む。	磨研。 赤色顔料塗布。	磨研。 赤色顔料塗布。		やや良好	
14	A・B－7	壺？	頸部	－	明褐色	石英・長石などの砂粒含む。	不明 突帯に斜格子沈線	不明		やや良好	
15	B－7	壺？	胴部	－	外：褐色～黄褐色 内：赤褐色	石英・雲母などの細砂粒含む。	ナデ 赤色顔料塗布。 突帯に刻目。	ナデ 赤色顔料塗布。		やや良好	内・外器面：丹塗り。
16	B－6	壺？	頸部	－	明赤褐色	石英・長石など多量の砂粒含む。	ナデ あまり明解ではない。	ナデ あまり明解ではない。		やや不良	
17	A－8	壺？	頸部	－	赤褐色	石英・長石・角閃石などの砂粒多く含む。	ナデ 赤色顔料塗布。 貼り付け突帯に刻目。	ナデ 赤色顔料塗布。		やや良好	内・外器面：赤色顔料塗布。
18	A－9	壺？	頸部	－	外：暗褐色 内：淡黄褐色	石英・長石など多くの砂粒含む	ナデ	ナデ？		やや不良	
19	B－5	壺？	頸部	－	赤褐色	石英・白砂など砂粒含む。	磨研 赤色顔料塗布。	磨研 赤色顔料塗布。		良好	
20	B－5	壺？	胴部？	－	外：暗灰黄色 内：明褐色	石英・長石などを混入。	ナデ？ 赤色顔料塗布。	ナデ？		やや良好	
21	B－6	高坏	脚部	－	外：明褐色 内：上：明褐色 下：明黄褐色	白砂粒・角閃石などの砂粒入る。	丁寧なナデ。 赤色顔料塗布。	坏部：ナデ。 赤色顔料塗布。 脚部：ヘラ削り		良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
22	C－5	高坏	脚部	－	外：明褐色 内：暗褐色～褐色	φ1㎜大の砂粒、石英・長石などの砂粒多く含む。	ナデ	坏部：ナデ。 脚部：ヘラ削りナデ。		やや良好	
23	B－5	高坏	脚部	－	外：明赤褐色 内：明黄褐色	乳白色の砂粒、石英、赤褐色の粒子を多量に含み粗い。ややもろい。	縦ナデ	丁寧な縦ナデ。坏部との境界には、ヘラによる斜めの押痕がある。		良好	
24	A・B－7	高坏	脚部	－	外：赤褐色 内：脚：淡黄褐色 坏：黄赤褐色	長石・石英・白砂・角閃石などの砂粒を多く含む。	丁寧なナデ。赤色顔料塗布。	坏部：丁寧なナデ。 坏内部に赤色顔料塗布するが、外器面より薄い。 脚部：横位のヘラ削		やや良好	
25	B－8	高坏	坏部	－	明赤褐色	白色の砂粒・石英・黒雲母片を多量に含む。かなりもろい感じを受ける。	横ナデ？ 器面が粗い為、不明。	横ナデ？ 器面が粗い為、不明。		良好	
26	C－5	壺？	胴部	－	外：赤褐色 内：淡赤褐色	白色砂粒・石英・雲母片など砂粒含む。	縦方向の磨研。赤色顔料塗布。	ヘラ削りの後、磨きかナデ。		やや良好	
27	A－9	壺	胴部	－	外：暗赤褐色 内：浪褐色～褐色	石英・長石・白砂などの砂粒多く含む。	磨研？ 部分的に赤色顔料残る。	ナデ		やや不良	
28	C－5	壺	底部	－	外：黄褐色 内：明褐色	石英・長石など砂粒を多く含む。	ナデ？ 赤色顔料塗布。	ヘラ磨き。		やや不良	外器面：赤色顔料残る。

【第107図】　古墳時代須恵器

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面・内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	B－5	坏蓋？	体部	厚：0.6	青灰色	白色砂粒を含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。		良好	
2	C－5	坏蓋？	体部	厚：0.75	灰色	白色砂粒を含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。		良好	
3	A・B－8	坏蓋	体部	厚：0.7	外：茶灰色(自然釉) 内：灰色	白色砂粒を含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。		良好	
4	B－6	坏蓋？	体部	厚：0.7	外：暗緑黄色(自然釉) 内：灰色	白色砂粒を含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。		良好	
5	6	坏蓋	口縁部	厚：0.69 口：(12.0)	灰黄褐色	白色・黒色砂粒を含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。	口唇部：内側に稜が入る。	良好	
6	A・B－8	坏蓋	口縁部	厚：0.4 口：(13.0)	外：黄褐色～灰青色 内：灰青色	白色・黒色砂粒を含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。自然釉。	口唇部：内側に稜が入る。	良好	
7	A－4	坏	口縁部	厚：0.43 口：(12.9)	灰黄褐色	緻密。黒色の非常に微細な砂粒を少量含む	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。	口唇部：内側に沈線が入る。	良好	
8	C－5	坏	口縁部	口：(11.7)	灰黄褐色	緻密。黒色の粉末状の砂粒を極く少量含む	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。	口唇部：端部は丸くまとめる。	良好	
9	A－5	坏	体部	－	灰黒褐色	緻密。黒色の微細な砂粒を若干量含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。		良好	
10	A－7	坏	口縁部	口：(10.8)	灰黄褐色	緻密。白色の非常に微細な砂粒を少量含む	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。	口唇部：弱い稜線。	良好	
11	AB－8	坏	体部	－	外：明灰黒褐色 内：灰黄褐色	緻密。粉末状の粒子を極く少量含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。		良好	
12	B－8	坏	底部	－	灰白色	白色砂粒含む。	ロクロ引きの横ナデ。		良好	外器面にヘラ記号あり。
13	B－6	坏	口縁部	口：(12.0)	灰黄褐色	緻密。白色の砂粒を若干量含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。内器面には、爪による圧痕が残存。	口唇部：ほぼ丸めており、弱い稜線入る	良好	

No.	グリッド	器種	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
14	B－8	ハソウ	体部	－	灰黄色	白色砂粒を多量に含む	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。外器面注口部に調整後、櫛描き波状文めぐる。			良好	注口部一部残る。
15	B－6	ハソウ	体部	－	背灰色	白色・黒色砂粒を含む	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。？自然釉。			良好	注口部一部残る。
16	A－6	ハソウ	口縁部	口：(11.2)	外：背灰色～黒色 内：明灰黄褐色～黄褐色	白色砂粒を含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。櫛描き波状文が一部見られる。		口唇内に稜線入る。	良好	
17	B－6	ハソウ	体部	－	灰黄色	白色・黒色砂粒を含む。	ロクロ引きの丁寧な横ナデ。細い沈線による区画。その中に櫛描き波状文か。叩きによる調整痕あり。			良好	
18	A－6	ハソウ	体部	－	外：灰黄色・釉がかかる 内：灰黄褐色	白色砂粒を含む。	ロクロ調整。微隆起線で区画している。間に櫛状工具による連続刺突文を施す。			良好	
19	C－5	長径壺	(口)縁部	口：(7.2)	灰黄褐色	緻密。白色の微細な砂粒を少量含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。		端部やや内側にまげる。	良好	
20	B－6	大甕	口縁部	口：(28.0)	外：黒色～灰黒褐色 内：灰黄褐色	緻密。白色の微細な砂粒を少量含む。	ロクロ引きによる丁寧な横ナデ。自然釉が部分的にある。表面の剥離多い。		二段に口唇部をつくる。内面に弱い稜線が入る。	良好	
21	A－8 A－9	大甕	頸部	－	外：灰黄褐色 内：灰黒褐色	緻密。黒色・赤褐色の微細な砂粒を若干量含む	外：頸部はロクロ引きによる横ナデ。肩は叩き後、ロクロ引きによる横ナデ成形。 内：胴部に同心円叩き。頸部は丁寧な横ナデ。			良好	
22	A－7	大甕	体部	－	外：黒褐色 内：灰色	白色・黒色砂粒を含む	外：平行叩き。横ナデ一部あり。 内：同心円叩き。			良好	
23	C－7	大甕	体部	－	外：黒褐色 内：灰黒色	白色砂粒を含む。	外：平行叩き。 内：同心円叩き。			良好	

【第110図】　平安時代土師器（1）

No.	遺構or グリッド	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	SB－1 Pit15	坏	口：10.8 高：4.5 底：16.4	明赤褐色 (外器面1／3程黄赤褐色)	緻密。レンガ色の粘土質の粒子(1㎜足らず)を若干量含む。全体的にもろい感じ。	回転横ナデの後、縦及び斜めにナデ。	回転横ナデの後、縦及び斜めにナデ。	底部：ヘラ切りの後横ナデ。	やや弱い	
2	B－4	〃	口：11.1 高：4.4 底：5.6	灰黄褐色	緻密。黒色の非常に微細な粒子。0.5㎜以下の白雲母片を多量に含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	ヘラ切り？	良好	炭化物付着。
3	SB－1 Pit13	〃	底：5.6	外：淡黄褐色～暗褐色 内：淡黄褐色～黒褐色	赤色砂粒を少し含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	板目圧痕	やや不良	煤大きく付着。
4	C－6	〃	口：10.5 高：3.6	黄赤褐色	緻密。微細な雲母片、砂粒を若干量含む。全体的にもろい。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ削りにより、立ち上り部に盛り上る。	やや弱い	
5	C－6・7	〃	底：(6.6)	淡黄褐色	僅かに微砂粒を含む。	――	回転横ナデ	ヘラ削り	やや不良	
6	C－5	〃	口：(11.1) 高：(4.4) 底：(6.0)	灰黄褐色	緻密。黒色の微細な粒子を少量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	ヘラ削り	良好	
7	A－8	〃	口：9.4 高：3.8 底：5.4	灰黄褐色	半透明・黒色の砂粒(1㎜以内)、黒・白雲母片等を多く含む。	回転横ナデ	不明	不明	良好	僅かに煤付着。
8	B－7	〃	口：9.9 高：3.7 底：5.2	灰黄褐色	黒色の微細な粒子(1㎜足らず)、白雲母片を非常に多く含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。煤付着痕あり。 内器面：ろくろ引き後、横ナデ。	良好	

No.	遺構or グリッド	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
9	C－6	坏	口：(12.4) 高：(3.7) 底：(6.5)	明黄褐色	緻密。微細な黒色の粒子(0.5㎜以下)を多く含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。(胎土はみ出す)	良好	
10	B－5	〃	口：10.0 高：3.7 底：5.1	灰黄褐色	緻密。黒色・乳白色の微細な砂粒(1㎜足らず)を多く含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。(胎土はみ出す)	やや良好	内器面：炭化物付着痕・黒い煤痕あり。
11	C－6	〃	底：4.8	外：淡黄灰褐色 内：淡黄褐色～黒褐色	微細砂粒僅かに含む。	不明	回転横ナデ。	底部：回転ヘラ切り板目圧痕？	不良 もろい	煤付着
12	C－6	〃	底：5.8	暗黄褐色	石英・長石・角閃石などの砂粒を多く含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。 ナデ。	良好 堅緻	
13	B－6	高台付坏	口：15.1 高：6.1 底：8.0	外：灰黄褐色 (口縁は黒) 内：黒色	緻密。赤褐色の粘土質粒子(3～5㎜)を若干量含む。	回転横ナデ。	ヘラ磨き。 口縁部：横 胴部：右上がり 底部：縦		良好	
14	B－4	高台付坏	口：13.2 高：6.3 底：13.2	灰黄褐色	黒色・白色の砂粒、赤褐色の粘土質粒子を多く含む	粗い回転横ナデ。	粗い回転横ナデ。		良好	
15	C－6	〃	底：7.8	外：淡黄褐色～淡褐色 内：黒褐色	赤色の砂粒僅かに含む。	回転横ナデ	磨研	底部：ナデ。	やや不良	
16	C－6 C－5	〃	底：(8.3)	明黄褐色	緻密。赤褐色の粘土質粒子を若干量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。		良好	高台の調整は丁寧。
17	C－5	〃	口：(12.3) 高：4.7 底：(6.9)	明黄褐色	黒色の微細な粒子、赤褐色の粘土質粒子(1～2㎜)を多量に含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。		良好	部分的に煤が付着。

【第111図】 平安時代土師器（2）

No.	遺構or グリッド	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－6	坏	口：11.1 高：3.2 底：6.4	灰黄褐色	緻密。赤褐色の粘土質。粒子を僅かに含む。	回転横ナデ。立ち上りにハケ部分あり。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	良好	内器面：炭化物の付着で灰色・黒色を呈する。
2	C－6	〃	口：10.4 高：3.0 底：6.5	灰黄褐色	緻密。赤褐色の粘土質。粒子を僅かに含む。	非常に粗い回転横ナデ。	非常に粗い回転横ナデ。	非常に粗いヘラ切り、胎土はみ出す。	良好	
3	一括	〃	底：6.2	淡黄褐色	赤色の砂粒僅かに含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：回転ヘラ切りのちナデ消し。	不良 軟質	内器面：煤少し付着。
4	C－6	〃	口：10.2 高：2.7 底：(6.8)	灰黄褐色	非常に細かい黒色の砂粒・白雲母片を若干量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り後、横ナデ。	良好	
5	C－6	〃	口：10.1 高：2.7 底：6.7	灰黄褐色	緻密。赤褐色の粘土質。粒子を僅かに含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。 胎土はみ出す。	良好	
6	一括	〃	口：10.3 高：2.3 底：6.8	明黄褐色 赤褐色の顔料が残存	緻密。微細なレンガ色の粘土質粒子を少量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	やや良好	
7	A・B－7	〃	口：10.2 高：2.8 底：6.1	灰黄褐色	黒色・半透明の砂粒若干量、白雲母片を少量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	良好	外器面底部・内器面は炭化物付着により黒色を呈する。

No.	遺構or グリッド	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
8	C－5	坏	口： 9.8 高： 3.3 底： (6.2)	外：灰黄褐色 (底部:灰黒褐色) 内：黒色	緻密。赤褐色の粘土質の粒子を僅かに含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	良好	内器面は全面炭化物の付着で黒色を呈する。口縁部は剝離し灰黄褐色を呈する部分がある。
9	SB－1 C－5	〃	口：(9.9) 高： 2.6 底：(5.8)	灰黄褐色	緻密。黒色の微細な砂粒(0.5㎜)を若干量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	良好	
10	C－6	〃	口：(10.0) 高： 2.9 底：(5.8)	灰黄褐色	緻密。微細な白雲母片を僅かに含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切りによる横位の条痕	良好	内器面は煤付着により黒色。
11	C－6	〃	口：(9.9) 高： 2.7 底：(5.8)	外：灰黄褐色 ・一部灰色 内：灰色	緻密。赤褐色の粘土質。粒子を僅かに含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	良好	内器面底部には煤で黒色を呈する部分が僅かにある。
12	C－6	〃	口：(9.4) 高： 2.6 底：(5.0)	灰黄褐色	緻密。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	良好	内器面には煤や炭化物が付着し、黒灰色・黒褐色を呈する部分がある。
13	C－6	〃	口：(9.0) 高： 3.5 底：(5.8)	明黄褐色	緻密。非常に微細な白雲母片を若干量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。 非常に粗い。	良好	内器面の一部には煤が付着し、暗黒褐色を呈する。
14	C－5	〃	口：(9.8) 高：(3.4) (5.6) 底：(3.4)	灰黄褐色	緻密。黒色の微細な粒子（1㎜足らず）を若干量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。(内器面はハケ使用？)	やや良好	
15	C－6	〃	口：(9.6)	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色～黒褐色	微細砂粒僅かに含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	――	やや不良 軟質	
16	C－6	〃	底：(5.9)	淡黄褐色	砂粒僅かに含む。	回転横ナデ。	回転ナデ？	底部：ナデ？	不良 軟質	内器面：少し煤付着。
17	B－6	〃	底：(6.2)	外：灰褐色～黒褐色 内：淡黄褐色～黒褐色	細砂粒を少々含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ	底部：ヘラ切り後、ナデ。	やや良好	内器面：煤付着。
18	A・B－7	〃	底：(6.4)	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色～暗褐色	黒色砂粒を僅かに含む。	回転横ナデ？	回転横ナデ	底部：ヘラ切り後、ナデ。	やや不良	内器面：煤付着。
19	B－6	〃	口：9.5 高：3.1 底：5.6	明黄褐色	緻密。レンガ色の粘土質。粒子(1㎜位)砂粒を少量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り後、横ナデ（胎土はみ出す）。	やや弱い	内器面：部分的に炭化物付着により黒色。

【第112図】　平安時代土師器（3）

No	遺構or グリッド	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	C－6	坏	口：9.8 高：2.8 底：6.4	灰黄褐色	緻密。黒色・乳白色の非常に微細な砂粒(0.5㎜以内)を多く含む。全体にもろい。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。	やや良好	
2	C－6	〃	口：9.8 高：2.6 底：6.9	明黄褐色	緻密。乳白色・半透明の砂粒を多量に、赤褐色の粘土質粒子を少量含む。ややもろい。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。（胎土はみ出す）	やや良好	
3	C－5	〃	口：10.2 高：2.5 底：5.4	灰黄褐色	緻密。赤褐色の粘土質粒子を若干量含む。もろい。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：不明。	良好	布状のもので押さえたような痕3ケ所あり
4	C－5	〃	底：(5.6)	淡黄褐色	赤砂・黒砂を僅かに含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：ナデ	やや不良	内器面：煤付着。
5	C－6	〃	底：6.5	淡黄褐色	微細砂粒を多く含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：ヘラおこし後薄くナデ。	不良	内器面：煤が付着し、細い布痕を残す。
6	B－5	〃	底：4.9	淡黄褐色	微細砂粒を僅かに含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：回転ヘラ切り穴があく。	やや不良	
7	C－7	〃	底：5.2	外:淡褐色 内:淡褐色～淡暗褐色	僅かの砂粒を含む。	回転横ナデ？	回転横ナデ	底部：回転ヘラ切り	やや不良	内器面底部：煤付着。
8	6	〃	底：6.1	灰黄褐色	赤褐色の粘土質粒子（3～4㎜）、微細な黒雲母・白雲母片、黒色の砂粒等を若干量含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：ヘラ切り。横方向の条痕あり	良好	
9	C－5	〃	底：6.0	淡黄褐色	赤砂粒僅かに含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：ヘラ切り？	不良	
10	C－5	〃	底：5.8	明黄褐色	緻密。黒色の微細な砂粒を僅かに含む。	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：丁寧なヘラ切り。	良好	
11	C－5	〃	底：(6.4)	赤褐色～明褐色	赤色砂粒をかなり含み、角閃石・長石・雲母砂粒も混じる。	回転横ナデか？	回転横ナデ	底部：横ナデ。丁寧なナデ。	やや良好	
12	B－6	〃	底：5.8	明褐色	赤色砂・黒色砂など多く含む。	回転横ナデ	回転横ナデ？	底部：ナデ?	不良	
13	SB－1 Pit 6	坏	底：6.0	明褐色	赤砂粒をかなり含む。白砂粒も少し含む。	回転横ナデ	沈線による渦巻状の文様が入る。		不良	
14	6－B	〃	口：9.4 高：2.6 底：4.6	黄褐色	緻密	回転横ナデ。	回転横ナデ。	底部：内器面は凹凸があり粗い。	良好	
15	A・B－7	〃	底：6.4	淡黄褐色～灰褐色	赤色砂、少砂粒を含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：回転ヘラ切り後ナデ消し。	やや不良	
16	6	〃	底：5.8	外：黄褐色～灰褐色 内：黄褐色	赤砂の他、微細砂粒を含む。	回転横ナデ	回転横ナデ		良好	
17	A－4	〃	底：6.1	外：淡褐色 内：淡黄褐色	石英・黒砂・赤砂などの砂粒を含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：ナデ?	不良	もろい。
18	C－6	〃	底：6.4	外：暗褐色～黄褐色 内：黄褐色～黒褐色	角閃石・石英・長石などの砂粒をかなり含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：ナデ消し。	良好	内器面：煤付着。
				外：淡黄褐色～黒褐色 内：淡黄褐色	微細砂粒を含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：ナデ。	やや不良	内器面：赤色顔料塗布
20	C－6	〃	底：6.2	外：暗黄褐色～暗灰褐色 内：暗灰褐色	長石・石英の砂粒、白砂粒を僅かに含む。	回転横ナデ	回転横ナデ	底部：ナデ。	良好	
21	A・B－7	皿	口：(8.5) 高：1.3 低：(6.4)	淡黄灰色	微細砂粒を含む。	回転横ナデ	回転ナデ	底部：回転糸切り。	やや不良	

写真図版

PL 1

遺跡遠景(南より)

PL 2

遺跡遠景(東より)

PL 3

深水谷川地区近景(調査前)

PL 4

深水谷川地区近景(調査後)

PL 5

深水谷川地区調査風景

PL 6

深水谷川地区５－Ｂ区縄文土器集中部調査風景

PL 7

深水谷川地区５－Ｂ区縄文土器集中部出土状態

PL 8

深水谷川地区５－Ｂ区縄文土器集中部出土状態

PL 9

深水谷川地区 9 - A 区縄文晩期土器出土状態

PL 10

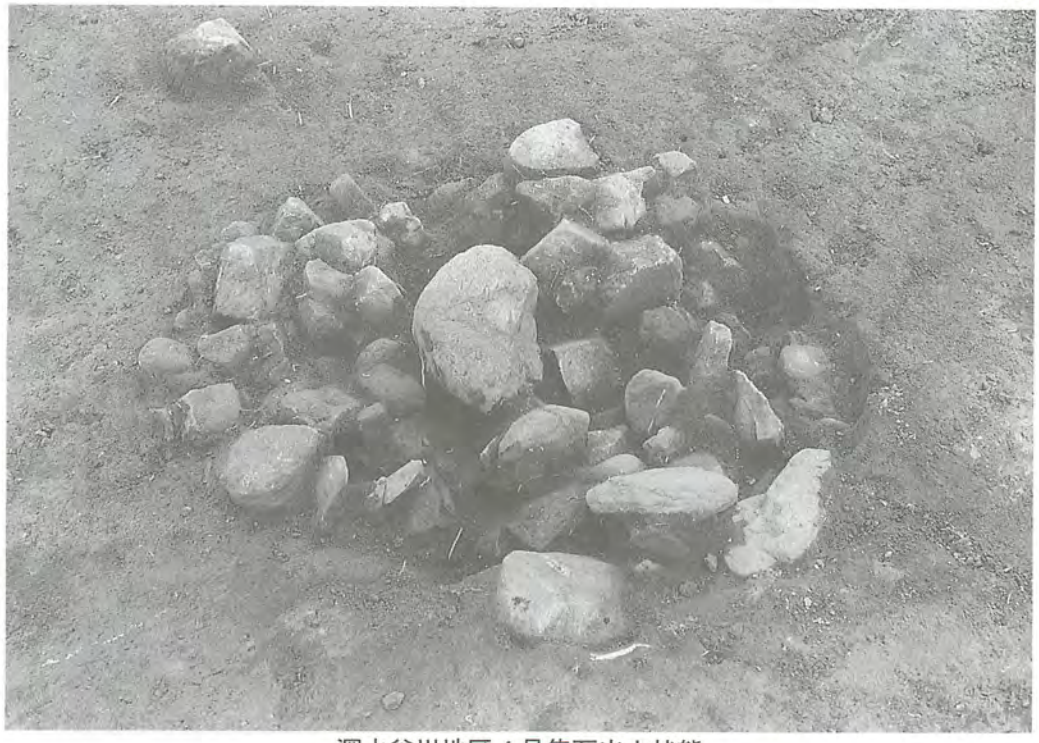
深水谷川地区 1 号集石出土状態(北より)

PL 11

深水谷川地区 1 号集石出土状態(西より)

PL 12

深水谷川地区 3 号集石出土状態



深水谷川地区 4 号集石出土状態

小園遺跡谷川地区全景(調査後西より)

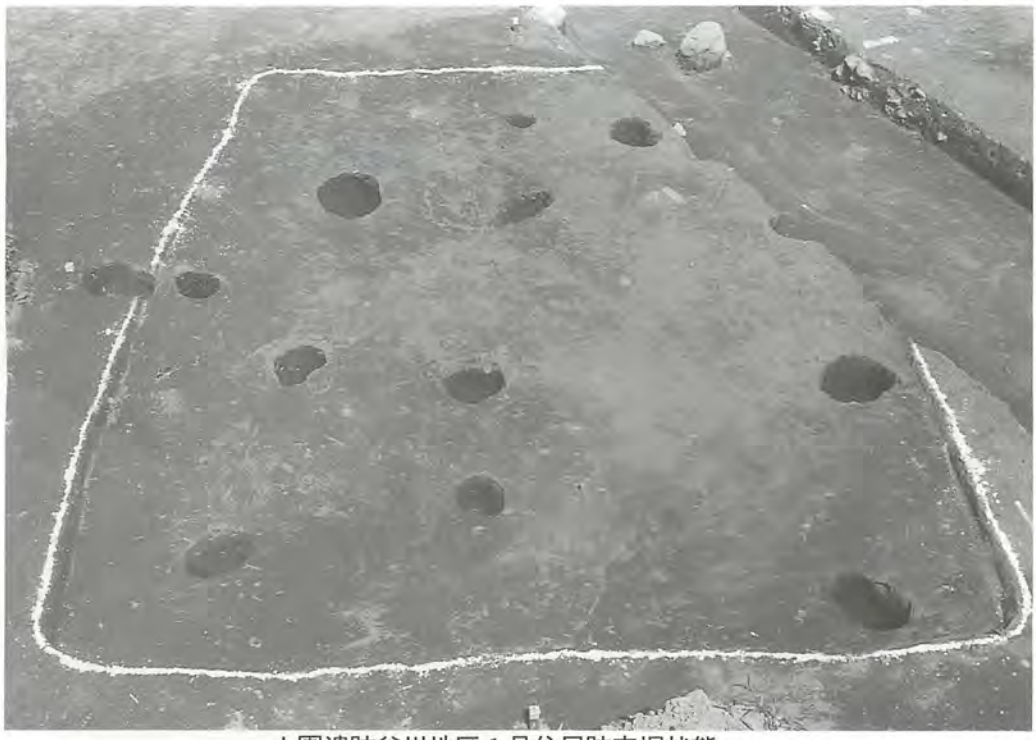
PL 15

小園遺跡谷川地区全景(調査後東より)

PL 16

小園遺跡谷川地区 1 号住居跡遺物出土状態

PL 17



小園遺跡谷川地区１号住居跡完掘状態

PL 18

小園遺跡谷川地区１号住居跡炉跡検出状況

PL 19

小園遺跡谷川地区 2 号住居跡(調査前)

PL 20

小園遺跡谷川地区 2 号住居跡遺物出土状態

小園遺跡谷川地区 2 号住居跡完掘状態

小園遺跡谷川地区 2 号住居跡遺物出土状態

PL 23

小園遺跡谷川地区 2 号住居跡遺物出土状態

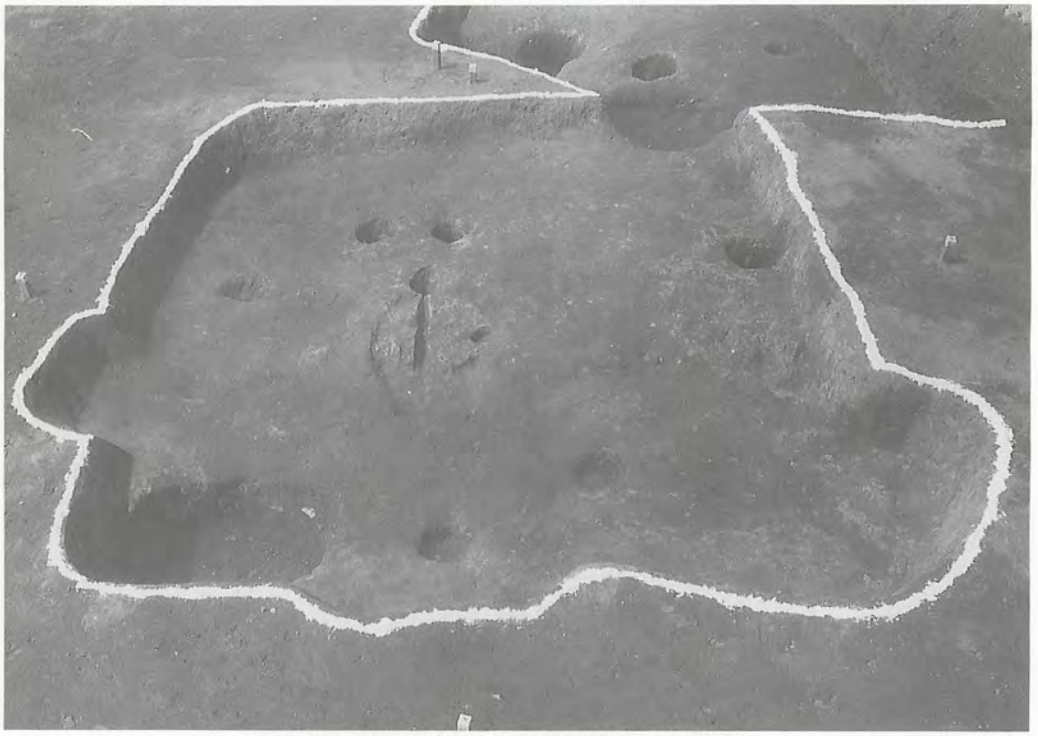
PL 24

小園遺跡谷川地区 2 号住居跡遺物出土状態

小園遺跡谷川地区 4・5 号住居遺物出土状態

小園遺跡谷川地区 4 号住居完掘状態

PL 27



小園遺跡谷川地区 5 号住居跡完掘状態

PL 28

深水谷川地区 1 号掘立柱建物検出状況

深水谷川地区１号掘立柱建物完掘状態（東より）

深水谷川地区１号掘立柱建物完掘状態（南より）

熊本県文化財調査報告　第141集

深水谷川遺跡

発行日　平成5年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　印刷協業組合　サン・カラー

０５　教委・教文

②　００３

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 141 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：深水谷川遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日